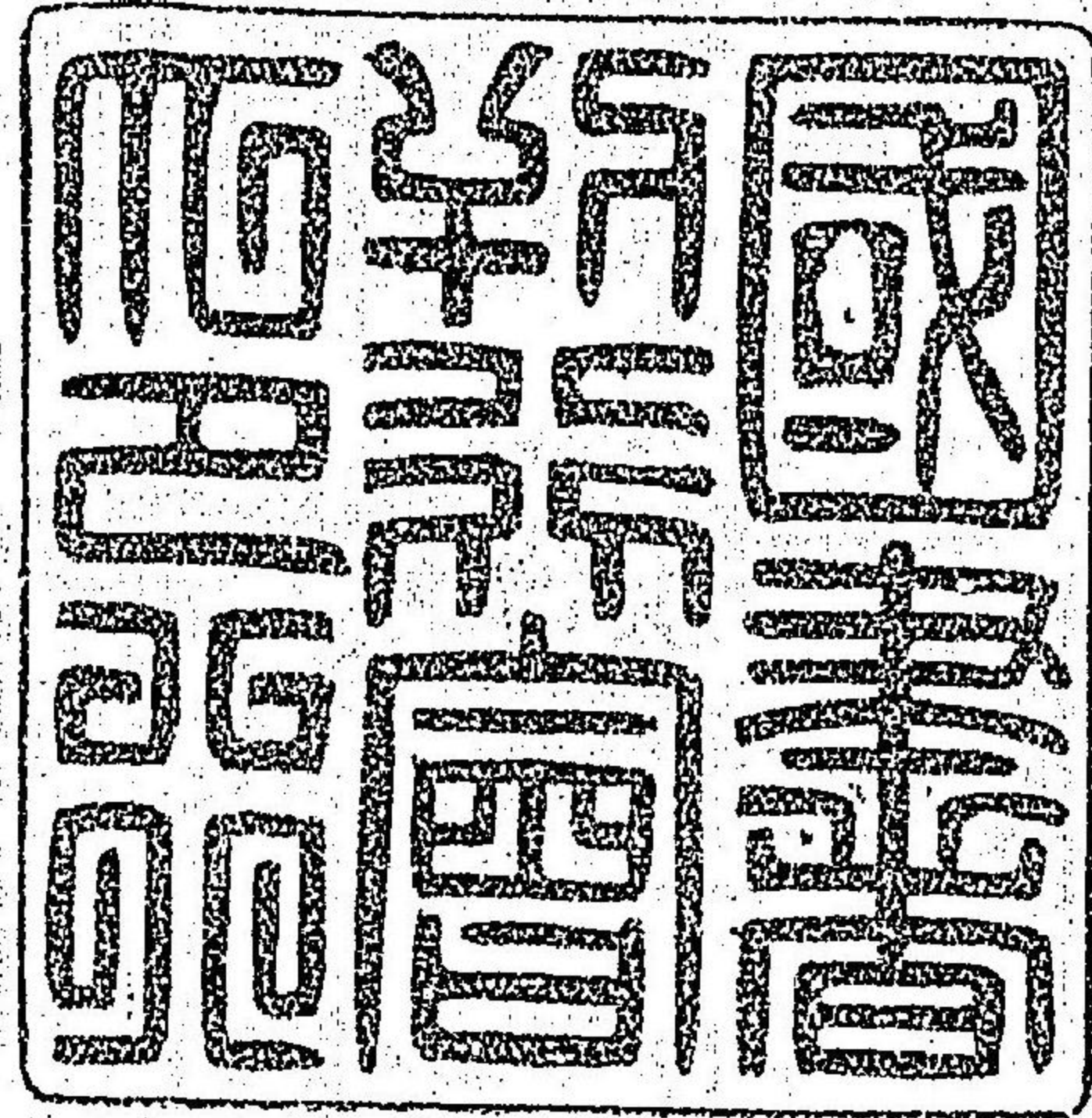
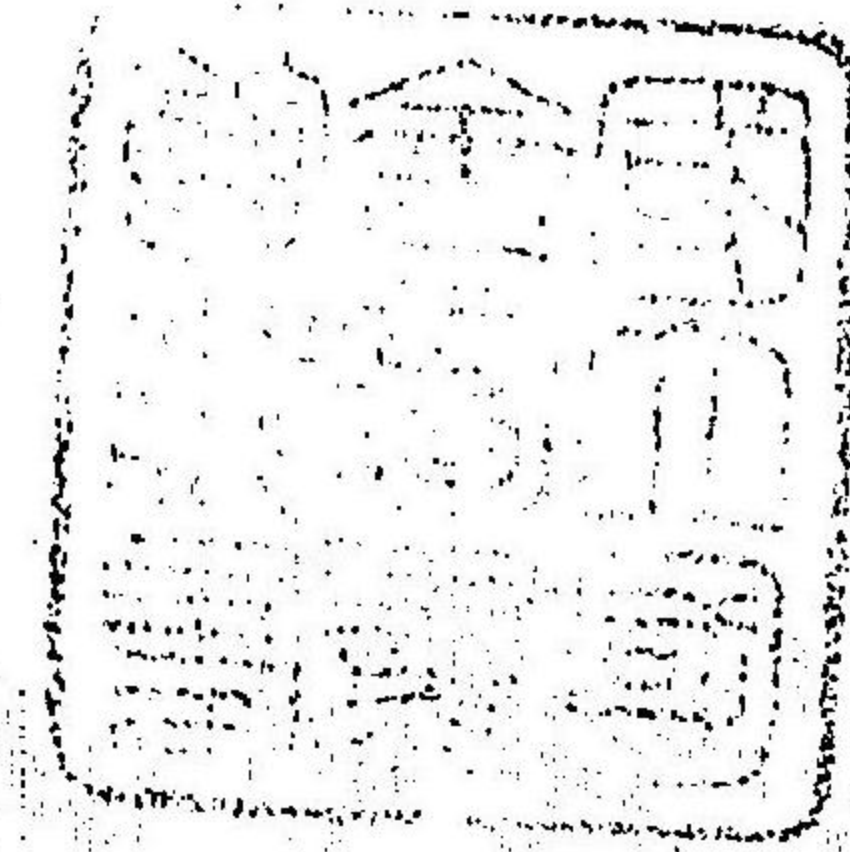


IL9E22

燕石十種
第二

081.5E83I

081.5
E83
I



213505

燕石十種第二

例言

本冊には燕石十種第三輯及び第四輯合せて二十種を收む。編者活東子の自記によれば、安政五年三月より文久元年三月迄に、此兩輯を編纂したるものゝ如し。

一 獨寐一卷 柳澤淇園の著なるよし活東子の序文に見ゆ。卷中淫靡なる瑣談多きを以て、今故らに字句を削除したる所あり。

一 神代餘波三卷 弘化四年著者齋藤彦麿八十歳の自序あり。彦麿鈴の舍翁に就きて古典を研鑽し、述作十數編あり。本書は彦麿の餘業とも見るべく、當時見聞のまゝ、風俗時勢の變遷を優雅なる筆にて記述したり。

一 俗耳鼓吹一卷 太田南畝の卑近なる隨筆にして、天明八年の自

例言

序あり。此書俚謠俗曲を評釋したるもの特に多きを以て、俗耳鼓吹の名を下し、なるべし。

一 鞞淨瑠理譜二卷 原名を諸事聞書往來と云ひ、著者を詳にせず。享和元年太田南畝西遊の節之を浪花に得て題名を改む。上卷竹本芝居、下卷豊竹芝居に分ち、淨瑠理の外題に懸けて、義太夫節並に操芝居の沿革を叙述せり。

一 平賀實記五卷 平賀鳩溪一代の言行を敷衍したるものにして、天明年間樸齋老人の著なり。

一 無名翁隨筆二卷 一名續浮世繪類考と稱するによりて、其内容を推知するに足れり。浮世繪師溪齋英泉(池田義信)の書留にして、細大羅列したるも杜撰の嫌あるを免れ難し。

一 新吉原略説一卷 山崎美成の著にして、新吉原は元吉原に對せる名稱なりとて、淺草千束村に移轉以來の沿革を略記せるもの

なり。附録せる遊女玉菊の墳記、遊女玉菊傳、遊女玉菊考の三篇は本會藏本のみ之を收め、他の諸本に見えざるを以て、誤脱少からざれども對比是正するに由なし。

遊女玉菊の墳記は梅塢居士の著にして、墳墓は淺草光感寺にありとて、其あらましを記せるものなり。

遊女玉菊傳は山崎美成の著なり。玉菊全盛を極めし事より、死後廓中のものに慕はれ、三週忌于蘭盆に其追善として、仲の町軒先に提燈を掲げしが、今の燈籠の始なりし事等を記せる者なり。

遊女玉菊考は著者の名を詳にせず。前書よりも一層詳密にして、玉菊の墓所は光感寺と淺草永見寺との兩所に在り、後者は二代目玉菊のならんと考證せり。

一 劇場新話二卷 劇場及び俳優の起原を始めとして、劇界の慣例故實を詳記せるもの、所謂劇道の虎の巻なり。思ふに狂言作者な

どの著なるべし。

一 當世武野俗談一卷 馬場文耕の著にして、當時人口に膾炙せし俠客奇人遊女等の異聞を輯めたるものなり。書名は木村某の武野燭談に因みてしか名づけたりと、寶曆七年の自序に見えたり。

一 藻屑物語一卷 櫻川侍從に寵せられたる美少年伊丹右京が、藩中の士二人に懸想せられて一場の波瀾を生じ、遂に刺違へて身を果すと云ふ筋の物語なり。原本は淺草慶養寺の什物なれども、作者を知らず。思ふに文章を能くせざる人が、事實を潤飾せんとしたるものらしく、不通の章句、文字の誤脱少しとせず、今曲亭馬琴の自筆本を以て對校し、其總評をも附載せり。

一 夢の浮橋二卷 文化四年八月十九日深川富岡八幡宮祭禮の時、永代橋墜落して死傷無數なりし事、今猶人の知る所なり。太田南畝此珍事に關する諸家の書留を蒐集し、兼て富岡八幡宮の由來

を諸書より摘記せるもの即ち此書なり。

一 江戸節根元由來記一卷 又江戸節根元記とも江戸節根元集とも稱す。主として河東節の事を詳記し、併せて東派諸流の大要を略叙せり。著者を可柳と云ひ、三代目十寸見藤十郎の門人なるよし書中に記したれども、其姓名を知らず。此書數本を對校したるに、差異甚しきを以て、今専ら故河默阿彌翁藏本に據れり。

一 三座家狂言由緒一卷 編者詳ならず。中村座家狂言猿若、新發意太鼓、市村座家狂言街道下り、森田座家狂言佛舍利の本文を掲げ、次に江戸三芝居始書上寫及び家狂言の略圖を収む。

一 中古戲場說二卷 是も芝居に關する隨筆にして、著者の名傳はらず。芝居及び役者に關する傳説を書集めたるものなり。

一 近世江都著聞集十一卷 當世武野俗談と同じく馬場文耕の著にして、性質も類似し、八百屋於七、白木屋於熊遊女、薄雲、同勝山、其

他十餘人の傳を記したるもの、書名近世江都著聞集といへるは、古今著聞集續著聞集に因みたりと、寶曆七年の自序に見えたり。一相撲傳書一卷 享保中木村柳悅守直の著に係り。古書に散見せる相撲の由來を蒐録し相撲の手合等を圖解せり。一吾妻めぐり二卷 一名色音論といひ、奥州信夫より江戸見物に上り、寛永二十年の春歸國せりといふ見聞記にして、當時に於る江戸の景況を知るに便なり。假名文なれども七五調にて讀み易し。近時の考證によれば筑後柳川の人徳永種久の著なりといふ。一葛飾記二卷 寛延二年青山某の手に成れる下總國葛飾郡の名所記なり。

一駿河臺志一卷 著者未詳。江戸神田駿河臺の沿革を記したるものなり。

明治四十年十二月

燕石十種第二

目次

三輯	頁
ひとり寝	一
神代餘波	四四
俗耳鼓吹	八二
竹本淨瑠璃譜	一一二
豊竹	一一二
平賀實記	一四五
无名翁隨筆	一七九
新吉原略説 附玉菊考	二三五
劇場新話	二五七
江戸眞砂六十帖廣本	三〇六

當世武野俗談……………三四二

四輯

燕石十種第四輯序……………三七七

藻屑物語……………三七八

夢の浮橋……………三九六

江戸節根元由來記……………四四一

三座家狂言并由緒書……………四八二

中古戲場説……………五一八

近世江都著聞集……………五六九

相撲傳書……………六一五

吾妻めぐり……………六三九

葛飾記……………六六二

駿河臺志……………七二二

燕石十種第二

獨寢序

是書は 大和國郡山の君に仕へし同姓の柳澤權太夫 (名里恭字公美號淇園一號玉桂) のしの所作也此人文學武術を始めて人の師たるに足れる藝十六に及ぶを佛學さへこゝろえて俱舍論を聞し僧も有けるとかや中にも書に長すと時人傳に見え又亡友雲烟子が書畫談に柳里恭は風流韻事洒を落々たる名家にしてひごり寢と云へる隨筆あり其中に書法を論せらるゝ辯などは人意の表に出で神に通すと云へし此ひごり寢といふ隨筆甚まれ也しを勢州四日市の驛の西村氏といへるが秘藏せり文の發端に奈良の京春日の里に若草といふ女郎ありと書出し終には生涯の學文を妓婦の帶一筋にかへんと分て洒落なる文法ながら一部の文力格別の論にして披群の隨筆なりと近き頃愚雜組といふ書に見えたりと記し未彼書はしらすと語れりしは己幼き頃なりき其ころより希書等を集むる性あ

りていかで其をも得まほしく年月探索しかど三十年以來靜に無くて思ひ止みぬるを今歳の春我師無物老人(雅名花ノ屋蛙磨俗稱達磨屋五二)の不意購ひ給ひしを強に請得たる此書よ尋常の書舖にはいかでか有らむ師も古へ今の奇書を會ひて生業とし猶好事の癖ありて所謂馬骨を若干の金に換けんやうに無用なる事ども多かりければ斯在珍書をもト給へり實に價なき寶にして彼處と此處と天の下に唯二本の書なるを我ひとりム物に秘藏おかんも邪がましう思へばおなじこゝろの人たちにも見せまほしくて例の十種の中に收めて如是公さまになしたる也

安政五年三月 書あき人 活東子しるす
洒を落々是をしやくらくくごよむはわろししやくらくく也されごこはしやくらくにてよし曾々毛々と書てそもくとよむそももといはぬにて知るべし○詞とゝのはぬを見過しがたくていさゝかひきなほしつれごのちく傳ひ寫さん人は猶本書のまゝにしたゝむこそよけれ
活東子識

ひとり寝

○奈良の町に若草と云女郎を女房にせし男有江戸にくだる折節尋てかの妻にも逢たりしに萬のかぎを腰につけて中々昔の全盛の姿ありとも見え余不審をたて、今も色ありやさりとて琴など雨の夜なども引かけたのしきば面白からんといふにかの人の日惣じて色はくるわぎりの物也廓より出ぬれば琴よりも算盤を弾じさする事第一也御まへの御年若にていろこそあらめと思召は尤もなれども成程一通りよのすがたのやうにもなう存ますれど今はすつきりご其氣もつかぬものよし秋田屋の彦六と云ふもの源氏といふ女郎を請しといふも今はいろもなうくらすといふ光の事成にこそさる人のいひしには奈良の色里を(木つじといふよし也)見るに女郎もすべて手を書算盤たつしやにまなぶよし多く町人のかたへ有付にいと心やすしといふもさも有べし余十八歳の時に折岡といふ女郎を女房にしたるもの有此人しごく心安うする人ゆゑによくねをおして女郎をもつた心も

ちはいかやうのものぞといふにもつまでは氣なる程つよし女房にもちてからは氣がほそうなるといへり又女房にさだめて引とりてより半年ばかりは男のかたより意地わるくふかい男が有、であらふそれをかくして置くそふなつ、ますいやれいやれとめつたど聞もの也そして其の上にも迎もの事にあの女房は人のほだふれぬ手まへばかりなじんだものならばよからんといふ心ができるもの也是は女郎にて人のほだふれたといふ事は三ツ子でもしるのみかそれがすきで女房にして置てからに女房にもつてからははいやでも干話のあまりには毎晩それをいへば女はそれはしれてゐるのにむごひ事をいはんす事じやせつかく引取て秋風がたつたやらさりとてはうらめしいは此身を捨てた事は何故ぞつとめの女になつたゆゑぞと身をかこちて毎晩涙をながす事也それも半年までにてそれからはめつたに深うなりてはなる、事ないものといふは女郎の事なりとかやすべて古人も富貴成人の娘は女房に持事なけれなせといふに、ちよりも娘のかたに威ありて夫をいやしむる氣あり貧なる娘はほこる事なく威なし夫につかふる物にてよしといふ女

郎といふものは貧も貧大切な子を賣に出すほどの事なればしごく貧なるによりてひとたび妻にしてからは其夫に見捨られてはならぬといふ心が有なれば心底ふかしといふ夫も引とる程にはまりたるいろといひ引とる程の事はいろのみにかざらずふびんなりと思ふ心底が専一なるにより我見捨てはごうもならぬとおもふよりひとしほふびんをかゝることふかしといふにさる人の語しは女郎といふ女郎を女房にして人づかひのよきものなしけんごんなるものといへりそれも成程いふて見ればきつうむごくせがまれしよめが年寄姑になるとおもひとりして嫁をかはゆがる心底はなくむかしおれが姑にいちられしはかうしたものではないご一倍よめをせぶる格をしつて見れば手ひごくむごくあいそうもなく親方にせぶられしものなればそれを格にして人づかひもわるからんもしれねどもそれさうばかりにもないはづ人々の氣質でなぞやかにうるはしきも有又はげしきも有べしまづ女郎はすいてかはいらしく氣に入る事多く氣にいらぬ事はすくなきものと心得べし

○人世七十古へよりまれなりといふ事尤のこと也今更に改ていふはをかしからねどもさりて遊ぶといふ事をしらの人世に多し人の十歳までは心もなしはや二十三歳に成りては書をも是非をわきまふるうへからは人はいかやうにしてをほるといふ事に氣のつくべき事なるにかしらは樂罐髪は三輪そうめん鶴の様なる年になるまで世におもしろいといふ事しらす親さへ結びてあてがへばいきもはりもなき顔はかすがの、鹿を見る様成女房より外かあゆひものなしご合點して棺に入事こそいご口惜けれいでや此世に生れて銀もつて遣はざらんは佛になりて通力のならぬがごとしさりてうらめしきはかねした、かもつて手代きびしく目を見ひらきすこしも此若むすこにつかわせずんばごへばじばん文内があたまに紙をはられしといふ事をまめ男にかきしごごくならむかし

○うつるといふ事世の常ながら色里はごうつりやすくかはりやすきものはなしと青樓夜話にかきしごごといふはくだなれごうらめしきものは有まじゆくするはたごへば命にかけて成ごも此大夫より外はと神にちかひし佛にいのりて慰にゆく心はうせてた、あ

け暮此大夫ゆゑに瘦はつるやうになりゆげど内外のしゆび心に任せでたび／＼通ふ事ありては行末のちぎりにははる事よとおもひしめてたがたより求て太夫がよすがいよ／＼さかりにくらすや又は心あしうもおはするにやと聞ばさりしなさはあわ雪になりて全盛のひかりにめでかよはぬ千鳥のおごせでおしつけ従良の有よしむかしむかし吉野といへる太夫にほれし男吉野ねびきにあひしと聞て一日の内に三人まで亂心に成けりといふ事戀路には誠にさも有たきもの也去ものは日々とうとしといふは地女の事也それも男の心にもよるべきものなれどすべて此里へはまらで通ふ人ご色にて通ひうはきならぬ人ごは二ツ似たやうにて似ぬ事ちがひの成事也よく／＼思へば地女の戀路はうすく色里の戀路はふかしと云事心得られぬ事也地女はしんじつも眞實も赤な眞實なるべき女郎は夜毎にかはり日毎にかはる色を商ふ人にさうして戀路は深きぞと初手からしれてゐる事を問ふ人有れど成程一通り女郎さまがたご地女との思ひ入のちがふ事見えがたかるべしそも／＼物にたごへていは／＼薬といふものは病を癒し神をたすくる功あれ

ど平生食事成物にあらず皆それ／＼の病ある時には其病に應ずる功ありて病なきに用る事は毒なり食は平生くふ物なれどいか成太夫さまがたでも口一ツばいにあきてきこし召上られねば御つとめも口舌もならぬ事正直なる證據にあらずやそして其食といふものいか成味ぞといふて詮義して見た時あまり甘いなり薬にはしごく甘き辛き酸き苦きのすがた有てさうぶん口に應ずる味有て其病を治する事もあまいのすいのと云事よりおこる事也そんならば猶には五味はないかといふて本草を目を見はつてくつて御覽なされ五味のすがたが何の味のない所によくこもりて有事也すべて餘の味はあく事あれども何の事もなき稻の味ばかりは楢に入る時に至るまではあくといふ事ないもしつこからぬ故なりすべて戀路は扱も／＼むごらしいとおもふふびんの心ごかはゆらしいとの二ツが先おほねになる事なり／＼さまにもかはゆいといふ事は先其女郎にしごくほめてゐて其上その女郎の親里のやうすを聞ばむかしはよし有武士の娘のよしそれを手前の身に引くらべて世の中のうつつりゆ

く事までおはれをかけかはいやむかしの世にも有ならば歴々の奥様といはれん姿かゝる淺ましきつごめさこそ心のうちはづかしからむといふ眞實の泪を流しそしては床に入てもかくまでこゝろをつくしてかはゆおおもふ心底の男は有まじきにあの太夫はこちの思ふ半分にも思はぬさうなうちわめて見せられぬ心と心ごをくるしみ神かけて書し誓紙も實かうそかとうたがふは初心の至也大根ごうしてこちごらぐやうなやくごに誓紙を書きて本の心で書物じやあらふにさだめてうそではあらふけれどもといふ其の字ほださるゝ戀路になりてもしや眞實にてあらふもしれぬいつぞやかう太夫がいふた所が忝じあゝいふた所が眞じやあらふと思ひ直しほんのくぼの毛の随分ぬけた狐がいつ何日にわなにかゝりて命をさるゝといふ事をしりながら油あげの鼠をやむる事ならぬがごごし虚といふ事しりつゝ其の字にはだされごごに物うたがはしくこゝろたご／＼しきもすべてせんごするではよけれごはら立ごやらいふ世の中の言の葉にてこちもよほご随分自慢する男が客吟味して帳に付させて床をさがすも尤のごにて女郎ごて其

身神にもあらずいかなる學者すいなる人といへども其身金銀にあらずればにくいのかはゆいのかふびんのうらめしいのといふ五味をそなへし大夫成によりて一サ陣に敗北し軍法秘術もきえはつるは口惜き戀慕の闇といふもの也智慧のある人發明成人程此道はたはけに成もの也去大臣しごく世間にかくして色里へかよはれけるに随分ご其身も人にしらるゝ事をかくしながらしかもむすばぬ糸やらんにてみしりの有自筆にて太夫かたへ三島ごよみのやうなるやくにもたたぬ愚智成文したゝめてやらるゝ事それを太夫はほうばい女郎ご寄合て笑ひものにもしたり又ふかき男にこれ見さんせのいつぞやいふた客めがごふした文をくれをりましたと客へのしんじつづくすためにすん／＼に引きさきこよりになひて行燈の火にあてゝ火繩となして夜ふけのたばこのかはいや一煙とうちのぼりぬ此大臣いとしや随分ご眞實つくして人目を忍びてきたゝめられしもの其折からはあれ御覽せよあさましやといふ淺間山かくに其文の煙のうちにづくくりと立さうな物なれごもゆうれい下地のない故やらそれなしといふて此大臣随分ぬかつたやうな人

にもなしさういはる、事も知りつゝした、か女郎に
はれらるゝ事にてありし也尤成かなく、人たるもの
いかにしてあの姿のにくかるべきや學才ある人程色
の道ふかし

○五雜俎に愚人の女房をこわがる事は威におそる、
也智人の女房をこはがるは愛におほる、ゆゑ也貧乏
るものの女房をこわがるはすりこ木をもつて鍋釜を
打こわさるゝによりて也富貴の人女房をこわがる事
は勃雉をはいかりて也といふ事尤の事也日本も唐も
同じ事也惣して女房をもつておそるゝ事文盲無頼の
事也笠原玄蕃といふ人常にいひしは女房さすげ笠さ
は一年切の物也といひしはむごしそれは地女にてこ
ごにうるさくりんきふかき女ならば半年とは置まじ
きにや婦に七の去法ありといふもおゝねは夫にもむ
なだか成くり出しあゆみにして大政所の關白の前に
ても横すちかひに居給ふ御すがたを御了簡なきゆゑ
と覺ゆるもおかし惣じてはれた女房持は神代のなら
はしなんぞや穴なる格を直段するとやらむにて面を
も見す心だてもしらすめつたむしやうに女房と定む
るゆゑ三下り半のたね誰がまくにかはさありとてま

かせぬ世の中うらめしき事也是はごおかしき事はあ
らじ大明神よしよめ取よしといふ日に色好の若むす
こへへんばにてわきがねぎをあざむきふどりじしに
て色黒く聲はさねもり同然の坂東女をやりたらば一
年と中よく居べしや日ごりはしかの悪日にもせよご
こやらに居たまふやうなる年かつかう廿計すがたや
せずふとらず顔ちいさく目もとかわゆらしい女を遣
しなばむす子御感なゝめならずいくとせか白雪の髪
になるまで夫婦のゑにし淺ましきにとて齒をくひし
ばつて獨胸をこがされて「落文」柑州といふもので
君しらす、齊の桓公はといはせもはてすいふない
ふな無鹽君といふいかず女房をもたれた事書傳へて
烈女傳を見たものに知らぬものない事をいふ事文盲
文盲又そちが學文たらぬといふ也大根は無鹽君が十
萬兩のしき金持て來た物ゆゑといふもおかし
○此頃江口の君の所持のたばこ入といふて殊の外秘
藏して置人ありそれは合點のいかぬ事也多葉粉とい
ふ物は慶長年中に初めて日本につたへしものゝごう
して西行さへかりのやごりをめいわくせられし江口
の太夫が多葉粉のむものぞといふにさればこそ世に

珍敷物なれといよ、秘藏して置けり惣じて世には
ごりちがへ多し行平中納言さまの浦より御所持なさ
れて御覽なされし物とて秘藏するは何ぞといふに松
風のつねにむすばれし帯なりとさも大はゝなる黒じ
ゆす長さ九尺計も有べしいかにしても松風村雨の結
びしむなだか帯心もとなしことに結ばれしにもせよ
殊の外あたらしく見ゆるうへ中に折目の見へぬは不
審と念を入れ穿鑿して見れば松風は松風なれど江戸
の關相撲松風潮平がふんどし成よし此人の覺へそこ
ないはせひもなしさる茶湯者の村雨といへるかた付
の茶入の袋に所望せられて夏中の一會有しと也きた
なやきたなや

○枕ぞうしに春は明ぼのやう、さかきしもいかさ
まにくからねごからすの聲は何方にもいやなるは
づ也しかし高野山の夕暮の鳥こそ一入おもしろけれ
○思ふ人の名を百遍書時は必たより有といふ事いか
成人のいひしにや夜るゝ机に向ひて二三百字ほど
づ、書つくしぬれど文もこすたよりもなし
○松風丁字こまはゆびの太う成物也とかや昔もはや
りし物にや

○男も髻有はにくらしきもの也髻はなきがよし齒は
こまかにていかに白きよし女もからにては白くす
する事也爪は赤銅のごとく齒は貝をふくめるがごと
しと有りてすがたを見たらばいかゝあらむ爪を見た
らば戀はさむべし
(この間一節七十二行畧す)

○元結は江戸もどゆひ也きやらの油も大好庵五十嵐
などよりうへなし京がた甚だあしきもの也すべて大
好庵よりよきはなしといへりさも有事にこそ余も今
に江戸より取寄てつかふといふ
○きのふ髪ゆふごてみすやもどゆいといふたれば小
僧が笑たんすればなせ笑ふ事ぞといふにみすやは針
の事也元結はみそや也といふよし也子が髪いわする
ものゝいふには此頃かみがたより色々取寄たるが用
ひらるゝは一ツもなしと吉原の髪のにほひはかわり
し艶なるにほひあるなりすべて女も鳥田ほごよきも
のはなしあらひ髪はすきやめきて嬉し卯吉此甲いふ
たには油付る髪はいやしきもの也むかしは此油とい
ふ物なかりしもの也さればにや卯吉が髪は淺草の人
形も人形土にて作りし色青々とした顔に其儘なりと

いふにはらたつもおかし
 ○今宵もつくくりとひとり硯に向ひてかはせし人の
 よすがも聞たふそなたのかねのひきくるにまして
 軒の風鈴松にこたふるに付て何やらかやらの内は
 色々さま／＼扱も／＼心の内程おかしき物はなし思
 ふ人もありにくい人もありうらめしいものも有くや
 しい事も有筆の事すみの事書物の事今江戸の事思へ
 ば桑名の七里の渡しはや石山寺此おかし石のすが
 たもはや宇治の川霧などおもひおれば源氏が心中し
 てかはいやと思ひそしていつともなふむかし聞なれ
 し桐といふ伽羅のほひいやは東といふうら西に
 かはるもひとり寝のたのしみ雲のたすまひも今ま
 で龍のやうに見へしものをとふにまかせて小僧あ
 の雲は今何に似たといへば火燧のやぐらに似ました
 いふも少しすぎぬればこたつやぐらも龍もきへて
 扇のやうなものも有たばこ入のやうなものありてい
 どもなふうせぬげにや唐杜工部が詩に天上の浮雲白
 衣のことし須臾に改變して蒼狗と成と今見し姿も昔
 もなさけさあわれさ同じ事なりすて錦江春色追人
 來巫歎秋煙萬壑哀なごいひ又感時花渡涙恨別鳥驚心

といふに同じ戀しく物うたがはしく見る月の姿もど
 こやらみづくさく見へゆかしくおもふ折ふし嬉しき
 便開時は鐘のひびきも物思は世に時めきいきほひ
 さかりなる時には成程人もしたひ人も付まといぬれ
 ご春も一入ふかく見へぬべし世くたり時うつりいき
 ほひよりぬればしたしき人も來らず門にはすゞめを
 さる網をほりぬべきものになり行なば秋の姿も一入
 秋ふかく物かなしかるべしなご思ひつ付けてるう
 ちにいづねいるともなう夢にならばさりてH頭心
 におもふ事を見るといふからはせめて思ふ人にもあ
 ふ夢にてもみるかはあられもなき人ご物いひかはし
 おそのしき峯より落る夢など見或はたま／＼戀しき
 すがたなごにあひでも一聞嬉しきまゝなる顔もせず
 あちらむくごこちらむくやう成すねた姿にあひてひ
 よつご其姿が男になりたり硯箱のやうにもなりて夢
 程かはりしものはあらじ
 ○女郎中間にてこよひの客はよい客じやあしき客じ
 やなごいひて物語に花音にていひたきもの也といひ
 し也長崎にては内にはしや此頃はこちらのおもはくは
 何してじややらすつきりおとづれさへなくさりて

は權平ごんにやくしんごがりじややらひやうあごな
 ひはなしにてすまして置けりかういふもあまり／＼
 ゆきたる事のよしたごへはあまりふかくあんど入て
 打ツ恭にはひよつご船相な手まへの一目をつけてな
 への事もなきむかふの五十年も先をあんじているや
 う也或は歌がるた取にもむかふ方計り目をくばつ
 て手前の下の句をさられてさりとては花より外にし
 る人もなき女郎さま方の心底やはり／＼志賀崎此人
 に少しは思ひ付てゐるもしれぬといふてわらへばそ
 れもやはりゆき過といふもの也かくいへば物事／＼
 にさきへさきへごあんどやくにたぬ事也さる大
 臣のいひしは破れたる小袖を着て七十五兩の太夫に
 おそれざるはそれ勇かご古人よりつたへ給ふなれば
 うそでも實でもすこしも女郎にかまふ事なした
 たいこちからほれてさるべしといふ事尤の事也女郎
 さまがた客のまへにて用ひ給ふてよき唐音のかたは
 ししるして爰におく

敬盃 敬をこころたべて
 領盃 敬をこころたべて
 大東西 是ははばなる人
 荆棘林 是ははくつわの事
 看看 是ははくつわの事
 煙草 是ははくつわの事
 煙筒 是ははくつわの事
 喫茶 茶を飲む事
 請看 是ははくつわの事
 朝三暮四 是ははくつわの事
 門子 若菜の事をいふ
 弁火來 火をいふ事
 大夫 是ははくつわの事
 足下 是ははくつわの事
 乖巧 是ははくつわの事
 老总管 是ははくつわの事
 嫖子 是ははくつわの事
 面的不好 是ははくつわの事
 弁茶來 是ははくつわの事
 酒兒 是ははくつわの事
 煙盆 是ははくつわの事
 七顛八倒 是ははくつわの事
 恍惚惚々 是ははくつわの事
 半斤八兩 是ははくつわの事
 七女人 是ははくつわの事
 至更 是ははくつわの事
 說山說水 是ははくつわの事
 晉罵 是ははくつわの事

不好 是ははくつわの事也
 大好 是ははくつわの事也

はいせのはまおぎさきばしる世の人江戸のよたか
 上がたの宗嫁惣右衛門も有にいぶきもぐさといふ事
 は近江の伊吹山の事にあらす袖中抄にかくさだにえ
 やはいぶきのさしもぐさよめる伊吹山の事は下野
 の國のいぶき山の事也坤元義にも見へたり枕草紙に
 曰まことや下野の國にくだりといふ人に思ひかゝら
 ぬ山のささたれば伊吹の里はつけしぞとありさ
 れば最勝院の拾遺の説によりて見れば八雲御抄玄旨
 のことによりてやはり近江の國のいぶき山と心得よ
 といへり過し頃おひ美濃國と近江の國とに秀るいふ
 き山のもとを過て見れば虎屋龜屋などの店ありて製
 法もぐさといひて紙袋に入れてあきなふ里人のいへる
 は龜屋といへる店の方きわめてよしといふ龜屋とや
 らん名有店もいく店も有やうに乗物の内より見なし
 てありきある人のいひしも市川團十郎が製法のいぶ
 きもぐさの狂言よりひとしほさかりに是も世にもて
 はやして三舛の紋付しもぐさでなければ人も灸を
 せぬよふに成て惣じて戲場は中華にも有てさかりな
 る事いふにもあらん今三ヶ津勘彌竹之丞勘三郎都萬
 蛭子早雲あらし鹽屋萩野松本の風流すべて野良の盛

衰榮枯昨日は八ッ橋のかきつばたを妬み八百屋お七
 が物ごしなりしが夕アのあらしにいつともなふかせ
 て油屋九郎右衛門もかわりおみつにむたいな戀慕し
 かくるかたきやくとなりて人間萬事塞翁が馬の足に
 なつて見へし男も今見れば黒文字の上々といふ評判
 にのりてたんと花をやりぬれば過し三條勘太郎が生
 れのまゝにて娘の子のごとくなり國性爺の錦舎にな
 りし姿も佐野川萬菊が油屋お染となりしと指折て
 かぞゆればいかさまよほど久松なることゝもいかに
 人をばしらしはりと思ひても三十八に成男がふり
 袖はづかしからず十九年の客に向ひて今からわたし
 事をしんじつの弟と思召て被下度なごゝいはれた詮
 義有には寺も宮も法よりは先世をだます工面にふけ
 りぬ淺草の觀音にて見れば寺の談義のといふ所には
 老人なんごこそ多かるべきにおほかたは廿チばか
 りより三十迄の卷羽織の輩多く悉北里の中かきの場
 なりいかさまにもおなじ佛のうちにも此觀音ほど
 すい成觀音はあらじといふに世間一統ともに芝居物
 見せのなき所にははやらぬことゝなりて先法力より
 此法力を頼みけるこそ此頃江戸の友だちよりふみし

ていろいろかきしたゝめて送りけるに成田の不動開
 帳のよし市川團十郎まかり出て取持けるよし群集袖
 をかさぬるといふは前かたの事也いつその事に人に
 てふきしごとく三舛の紋付し女中さぞさぞ思ひやら
 るゝいかさまにも江戸繁花の土地いふもくだなれど
 も地女に豪傑のともがら多し余が十七の時に中尾主
 膳といへる友だちと去おつきの事にゆきけるに御酒
 なんと給りけるにおくよりさむふもけふしはあるほ
 どに一つ二つはすぐしさふらへかし色のあかふて親
 などの叱りなば宜しくさたしてやらむとありお
 どり子など見へし女中がたおほく三すじ弾てしい
 かけらるゝにかの主膳は廿にてありし故に何より嬉
 しそふ成姿にてありしが余は殊の外はづかしく穴あ
 らば盤のうちにも入たきほどに赤面すればわるじや
 れのかうへし女中いよゝなぐさみになぶる今の心
 ならば忝かるべきにおいろといふ女中其折十九計も
 やならん大勢見る中にてむりむたひに〇〇〇〇〇〇
 をいかひたわけかなと其折殊の外はら立しも残念よ
 くゝきけば御前様よりもわざとかくはなぶりてめ
 いわくするを御らんじてわらはせ給ひけるにこそさ

りとて人の見る前にて〇〇〇〇〇やらんといふ心ざ
 しかみがたへんにはあまりゝならむおいろなどは
 どうつくしき地女はすくなかりしなれどもどうやら
 物ごしにいやなる氣味ある女にてありしといふに中
 尾主膳がいふにはおしつけさる方へよめ入するよし
 其折からには久しく成ゆくまゝ今はいづくに行しや
 しらすすべて女にも酒のみておそぶと色にてたのし
 むとの二ツあり太鼓女郎によびて酒なり座さばけて
 はてなるはずべし太夫などはいふもくだなると淺
 倉茂入神田道伴に見せても大名道具といふ札付にし
 て置たし地女もそれ也大名高家の娘はさらにもいは
 じいか成かたの娘にもそこゝの斟酌あらん事也と
 いふに去ル人のいひしはそれは貞徳立甫の付合にし
 て古しゝ太夫は太鼓女郎の風をうつし太鼓女郎は
 太夫の風にしてよしといふ説あれども是は異端のお
 しへにて行過といふもの也我儒酒水の學にあらず正
 風ていにしてやはりゝ太夫は太夫と見へ天職は天
 職を見へるやうにするこそ嬉しけれと師説侍しとか
 や

○人のうまれも所によりて各別成物にぞ日本にても

かに其おぼへがきともにおずれてありけるにこそ今日さいわひと飯田菜我を尋來りけるによりてさていつぞやそなたがたのみしあられ酒の詩をつくる事はさておきてとんと其覺書をつくしげに打こみてもゆふべ見出したるぞや近日作りてやらんといふにもはや讃岐屋身代盤提ちんとなりて詩の歌のといふ所におらず何もいらぬ仕合といふにかはいやきのふまでりつばなるけわいの男なるよしやあすか川ふちせげに定めなき事なれどもあまりくむごし／＼よし野屋惣左衛門も此ころ上がたにてたゝみてうちんといふに世にはくつぶるればつぶるゝものかなといふに町人などほくづれやすきものはあらじ河村隨見が余がとくさまにかたりけるは人はひいづるはしれぬもの也人の下るはしるゝもの也といひしよし是は古人のいふた事にて三ツ子までもしつてゐる事なれども其知てゐるといふ目の前の事が通明握得せねばくらしとなり大富といひておゝきなる富をなす事は天にありすこしき富はなせばなるもの也といへり邵康節がものみな數ありといひて數のいくつといふかぎりはなふてかなはねばつぶるゝもひいづるも天

にあり佛教の因果／＼といふものゝごとしすべて人其身のいけもせぬおごりもきわめたのしむ心よりたためてうちんになる事にては有し也此讃岐屋兵助はみちのくと云女郎にあふともきゝ又雛ざりといふ女郎にもあふともきゝさだめて／＼あひかたの女郎身代のよいうちらうまくし給ひ今はさぞ／＼あらしはげしく吹給ふらむと菜我がいふなれどもそれは女郎の心底のしれぬ事也いか程かはゆふおもふて今にあひたまはんも身あがりはまたどうした事もしらぬか玄々の青樓といへり

○幹何遠が春説紀聞(卷四にあり)にかきのせしは鹽龍といふ物蠻人の養ふ所のもの也此龍は長サ一尺ばかりあり銀の盤の中に置玉の筋をそへて鹽をかひける也此龍きわめて鹽をすきて喰ふ也鹽をよくかひすましてしばらくありて鱗の中より鹽を出す也其白さ雪のごとし此鹽を貯へて○○○○○○○○前に酒にて一錢目吞陽をおこす甚妙也とかや蔡元慶といふ唐人あまりの事に龍をねぶりけるに龍は死したり其後かの龍を鹽につけておき其鹽をとりて用ひたると見へたり此説本草綱目にも見へたり三才圖繪にも

あり今は蠻國よりもあまりわたらぬ物にや人のあまりに物語りせぬことゆへ爰にかきつく

○娘の○○○○○○○○ものゝよし也鈴龍といふ友のかたりけるは新枕の時には殊の外男も氣づまり成ものゝよし其夜のみならず三十日計も○○○○○○とかくにおもしろふなしといふ余なんどが心から其やうにおもしろくなくせば成ものならば女もふつゝりといやがるべきによくもなふて毎晩毎晩その夫のいふやうになるわけはどふした事などいふに鈴龍がかたりけるはされば夫程にいや成ものにてはなしくるしくせつなきものなれどもどこやら男がかわゆふなりていやにもなしといへりいかさまそふのうてはかなはぬはづの事也すべていまだ男に一度もまじわらぬは幾年になりてもしるゝものによ焦弱侯筆乘に(卷三十の四丁め)かきしは益善總といふ娘はもと金陵の淮清橋の人也十二にて母をうしなひ姉一人父ばかりあり姉はすでにわきへよめ入して父のみ線香といふものをこしらへてすぎわいとせり數年へて父も死たりかの益善總ひとり女にして名を張勝といひ線香をあきなへり是もわきより來りて

線香をあきないなどする人に李英といふものありいまだ其女なるといふ事をしらす此張勝が所へ來りて火伴のあきんどゝて寢臥する事數年也張勝病ありといひて小袖をぬく所をも見せず小便などするにもひそかに夜々する程にかくしたり弘治の辛亥の正月李英をつれだち嫁入せし姉のかたへ尋ければ姉不審をたてゝいわくわれに一人の妹はありしかど弟はもたすいかにして今爰に來る事あらんやといふ其時張勝が曰我こそ誠は善總也人のはづかしめあらん事を耻てかく名をもあらためなをして男の姿となりたりといふ其時姉はなはだ怒りて曰男女群亂して我をおざむきはづかしむる事はなはだしなんち手前計明なりといへども誰か是を實とせんといひて拒て對面せず善總いきどふりかつ誓て曰妹もし此身いやしくも男のはだふれしぞならば此所にて命をすて申べし明白にためしまいらせんとして近きほとりに穩婆のありしをよびに遣し是も驗るに果して處女なりといひしゆへ姉もかの石のごときの貞心をかんに手を取りくみて泣てみづから男子の小袖をとりて女の小袖に引かへさせたり明朝李英來て同じく旅にゆかんとする

に張勝にはかに變じて女となりたるを見て大に驚きたりとかやさて又李英歸りて其事をかたりければ李英が母大に是を感じて李英がいまだ妻をもたぬにまかせて何とぞ、李英が妻にもらひたきよしをこの姉がたへいひつかはしけれども善總がいはいく李英に嫁しなば人のそしりをもまぬかれがたしといひていかほど其所の人も大勢より取持けれども中々李英とてはゆくまじとかたくこばみてありけるとかやかやうの事などを見ればまた穩婆などに見せてもいくつになりても古きとあたらしきしるゝ事ありけるにや煎燈余話にも是に引合する事の見へしなりあの娘は春日野の鹿也あの娘は富士の鹿なりといひし物語もうそけで有まじといふに去ル人のいひしは男にあひし女は尻形にて知るゝもの也といへり神代卷をよみて見ればあなうましやおとこにあひぬと女神はじめの床の時御感ありしを見ればすと昔はふるいのあたらしのといふ事のなかりし物ならんと合點する人あれどもそふいふたものにてなしと云に後室すきの某といひ深町の古鞍といふ末社のかたりけるは後室にて十年とたちたるを○○○○○○○○○○

○○○○○○○○物のよしいふにむかし白雲が點にて百韻せしはいかひの中に火燧にもゑてして猫の戀心といふ句に雪の日ほどにほこる古疵とかやうに付しも下心おもひ出しておかしきに兎角世には其道にすまじありて古物すくありあたらしいものをすくありあたらしくもなく古ふもないをすく人あり余などが心から見れば床などに心をつくることいやしき事也とおもひとかく女も若衆もかほうちこそわすられぬとおもひぬれば卯古がいふにはおまへの余から九年も十年も過て御覽なきゆへの事也三十になりてからは食物に世話あり地女がすきに成といふとかく其時にあらずば知れまじきと思ふ余が友だち鈴の左の大のといふものどもはむかしから若衆嫌ひ殊に吉原にもゆかず堺町をも狂言より外しらすにくらし傾城といふものは順が和名鈔のことばでのみよみなし遊女の夜發のと物むさそうにのゝしるうまれ是もやまひにていかほど療治をしてもなをらぬことなるべし

○雪見酒十三がねねざめどり(小歌の名也)などを聞にいかさまやさしきふしにておもしろし聲よくはり

あけてうとふはあはれなるまでおもしろししかし文句に文盲なる事ありていやなる事どもありなくねするといふたもいやなりきませとつけのもさますはつけのといひたし其外多し爰にのせすねざめとりは庭鳥の事也名と心と違ありといふいかさまそれはわるい所もあらんやと吟味するは文盲のいたりめつたるがよしいつぞやさる友の來りて紙に木つじの女郎の名をよせて書付しものを出して是にて一篇をついて河東かたへおくれといふに任せてさつそく賦して遣しけり其名を姿繪と名付く爰に書つくすがた繪「三千とせになるてふ花とよみしこそつきぬ祝ひを雛さきの姿に咲や梅がえのいろ香になくやうぐひすの千さとの關のあづま地はくもでにものを八橋のかゝるべきかはかねこと過しりんきのきへもせず床にもつるゝ黒髪のアインノ手世をうつ蟬のから衣きつゝもあわで陸奥のけふの細布いつまでかむねあひがたき夕ざりをはらひもあへずむすぶ手のさすや江口のみなれ掉さらでもくしのおもはゆくござんしたかにほださるゝいつの伊織のかふし日におちくるあらしほつれ雪いづれおもひの妻ならぬ

○夕部なぐさみに此春より合てせし百韻とり出して見ればおもしろき句もありすまふすきから歎はとりおくといふ句に人の竹稀にも澁のぬけ堺と付し句にて十五點に成しが又宇治橋にけふも三文入佛事といふ句にこちの太郎は髪さきでしといふ句有十點がかりたり又寺庵の奉加に三達があれといふ句に卯の花に山家のゆもじはづかしくと付て十五點に成し也又きぬゝに小原の雪のふかい中といふ句に好色隠居いつれ入王將と付てありし也すべて思ひ出るにも趣句にもあれ其一句のつけはたといふ事申々いたりがたし沾徳がいふにはおもしろふて古く淺くして新しきなどの句有ていかさま連歌をなしなんよりはいかいのかたおもしろし如牛とも日外物語し沾洲にも此事をかたりて笑ひけるに連歌にて用る季ははいかゝるにも用るといふうち一轉して阿蘭陀をいふて春に遣ふなど新らしき姿なるにこそ小鳥わたるといはずして小鳥とばかりもちひてうけとりがたけれども鶯水などはいかゞ丁箇しけるなりかみがたの淡々仙鶴などが點を見れば百點の二百點のといひかゝる事もまづ點をするといふは歌より事起り長ばかり引て

置べき事なるにめつたむしやうに點をかけちらしぬるは見るしくむさしといふにかみかたにては點とりにて博奕にするといふ也余がいふには勿論それを口すぎにして居るなればそれを人のすくやうにするはづなれどもいかにしてもはいかゝるも和歌の引くすにして勸善懲惡のものなるによしや其點をとりて點とるものは博奕にもするにせよかし點する人のあやまりなるはいふもあまりありことに其卷づらも見ぐるしく感にもならぬなればさりとは百點二百點のといふ事いやなる事也

○骨子はさいの事也骰子ともかく也長崎杯にて見ればことのふ唐人もすきなるもの也又かるたは牌子といひて日本とあまりちがいなきものもある古ばくちうちのかたりけるは三つほよりも四つほあり四つほはありめを引によりて「ひきや」「引じく」「引な」などの名あり三つほはたゞひりはちどふなどといふこと葉ありて引ても本のごとし簡目なり目などありて此引をつくるといふ事もと數學よりいで、中々王夫し出しかたき事也此引といふによりて面白きわけ有といふ牌子に三枚にてするを一寸二寸とかぞふる

といへり八ツあるを「ヨイテウ」といひ九ツ有を「カブ」とするよし也是は三つほよりいでし物といへり十づにあまりて目のなきを「ブタ」と名付といふよし也カブにもいろ／＼の名ありて品あり筒とる人の三枚そろひしをあらしとかやいふよし也むづかしき事どもありといふ合せかるたといふものあり武者がるたといふものありやしがるたといふもの有るひは常うつかぞへかるたといふものにもいろ／＼の名有事也といひし也樽蒲經をよみて見れば諸國の樽甫をのせたれども此道しらねば通じにくき間古博奕うちにみせたれども日本にて用るとはちがひあるといひし也吉田圭朴

をたしけん 甲斐に 日本にてもこのごとく
をとこが
かわりし

便用一覽にも賽の剛あり中々むづかしき事ともと見へていたらし名あり番の會の時もちふるは十六粒にて用るなり通話に猜一猜とよぶ時はなんこをせよと也なんこといふものもあると見へたり博奕といふ時は碁を打事也日本にては賽なぐる事ばかりいふと覺

へて居たるは文盲ならずや

○むかし西施といへるはうつくしきむすめ生れのまの額目口もとどふもいわれぬと評判町中の若者どもはいふにおよばず手に水晶の珠數つまぐり鳩の杖にすがりて主馬の判官もり久が御夢想にたち給ひし老僧のごとき八旬たける談義参りする隠居迄が腰をぬかして此娘が噂すればそこらの女房寄合てこなたの亭主もそうじやときいた私が所の権平ごんにやぐも西施とやらの姿にうちこみいかな／＼此ころは床入のなんのといふ事はとつておきにして朝食の箸もつて目もとの感心あのやうに町中そろふてうかれいづるといふはりんきのなにのといふ所にあらすとかくその娘がきめうな人の○○○○粉薬でも所持していると見へたりそうしてあのやうに女房がいやになりなばおし付物の見事にぬしある後家といふものに成べしいかさまにも西施が宿に行て化容をとつくと見ならふべしといふに同じむれの女房ども口唇をそらして一味しすでに西施が寝間に行て窺聞いたる折ふし西施ゆふべより瘡氣にてことにむねのつよふいたむにまかせて白無垢のゑりをもたげ眉に皺

をよせていたるをかの女房どうなづきあふてひたいの所へしわさへよすれば男といふものはうれしかると心得夫がよそから歸るとはや何事をやめて皺をよせてかゝれば町中男たる者あきれはてなんの事はない生形の面のはげしがごとく身振してかけ出しけるといふ事濫園仙がかきのこしければ誠に女郎さまを地女めがぞんじよりに賣女のげせんのと物きたなひやうにいふも一通り職がたきといふにて尤成事なれどもてうど西施が瘡と地女房との鑿のごとしさりとてはちがひといふもくだ也それ木町の女房のごとくすいにして亭主の事を太夫に文してたのむなどといふ事ならばまだしも也さりとて職かたきをいふ女はにくらしうてたまらぬもの也或書に曰いつそに地女はケセンのバイクのとわるふいふがよしおよばずばそれといふ古言もあれば切ば彌堅く仰げば彌高くといふ太夫には及ぶ事ならぬゆへあたまたちも恐をあらはして職がたきをいふがよし太夫もこちもも○○よまれて歸られんとわるふすいにて

りて夫にりんきせず居る女あり是は半といふものにしてさりとてはいやなる事也といへり成程尤なり
く此里へは眉毛をよまれにゆく所なるにわるふさ
かしく立まはるはもんもうなる事にして女人の身と
してかゝるわるすいにまはりぬるはいやなるもの也
惣じて世にまゝならぬ事は太夫にはりんきしてもら
ひたき物地女にはにくまれたき物ぞといふに一生を
野良くるひと揚屋酒のまぬ生れ地の臭いといへる男
のいわくそれはおまへの偏學といふもの也地女すき
は地女のりんきをすくうまれなり太夫のりんきをす
く人あり蓼くふ虫もすきくといふ三ツ子も知て居
る一句に詰られさりとてはく是も尤しかし山にのぼ
らねば天の高き事をしらす谷にくだらねば地のあつ
き事をしらすぬためしなればしれぬ事也揚屋であまり
地女をわるくいひければさる太夫の仰出されしはも
し桂さまわしも押付地女なるぞへとさりとてはさり
とは此頃の素人は儒者に手をつかねさするに是も尤
くいかさま女郎とて塔利天よりふりしものにもあ
らず地女とて下界の龍神のおとしたねにてもなしそ
もそも傾城は生前もしらす宿もなしといふ山姥の謠

の格にしてどなたのたねといふもしらす人買の手よ
り此里に來り山賤の松露にふすびたる娘の子をみが
きたて、柳はみどり花はくれなるの新造となりし也
月もろともに全盛の事こそ地女あれば女郎あり女郎
あれば地女はきたなく術はかなはぬはづのつもり
うるはしく拵へたてし物なれば世に死もせぬ親父を
書入一倍といふ金をかりて太夫を談合するは不孝と
いひてさりとて上なき事なれども色といふ所にして
他のつみよりもすかるべきにや此女郎を買て慰に
三十以上の人はよけれといひしもにくからぬ事年若
き人は命にかへてもほれぬくゆへにそこつふるま
ひ多しといへりそれもかた一そくに聞にくし三十以
上の人に此里にて水のみしものども多し地からいは
ばつるがやとやらんいひし男南部の源氏といふ女郎
にうちこみ女房もつて子三一本二人一本四人までもちて大鳥居の際
にて命をすてしうへは色といふにはかわれる所ある
と見へしよし此を聞に此女房もたぬまへからのなじ
みにてありしが内々は引取女房にせんといふやくそ
くにてありけれども世の中は何かたもまゝならぬと
いふわけはせひのなきといふ香の物にて此女房をよ

びてあてがわれけるにされども此つるがや源氏を見
すてすとかく此女房を三下り半にして源氏を引取
めんの心中なりしが花にあらし月に村雲帯解の何某
といきはりせひなふ命を棒にふりていかひたわけの
様にいわれて今は土に成て有ける前にもいひしごと
くとかく色といふものは人の本といふ本にして足の
爪さきからつむりのうへまで爺さまとかゝさまとが
嬉しがりにてこしらへられたるものなれば古郷忘じか
たしといふものにてよくく鼻毛はしらす物いひ
ならひかなぞうし一二冊よめるものは此道をわする
るといふはないはづなればつるが屋の心底去とは去
とはかわゆふ身はしみくとおもふ事也心中して死
だ跡ではなんのかのと評判も付べし其死るといふ心
はあの人さまならば命もほしうないあの女ならば此
世のおもひであらじと一トすじに思ひ入る所が信
の一字にしてうまれ得たる所の人も有がたき所
也此信といふものは親につかへ主に忠をあらはし友
だちの交り兄弟の道屬家のよしみまでも此一字がは
づれてはなんの役にたぬくさびのはづれたる車の
ごとし是此信といふ字さへ喪すばいかやうにも平生

はたのしむがよきなりこのつるが屋はよくその信と
いふ字をもちて生れたれども色にふけりて母をのこ
し心中といふものにやくたいもなふなりしうへに女
房をあてがわれてとてもよく源氏に思ひ込しならば
いかに母のいはるゝ通に其女房を引取さて其女房
に向ひて今度せひなふそなたを迎しは母の心をむ
かずして一ト通りよびはしたれども私は源氏といふ
女郎と二世三世夫婦のけいやくをいたしぬればそな
たへも疵を付てわるひといふもの私もせつかくい
ひかわした女郎の事なれば見すて、は一分がたゝ
ぬ程に此わけを聞わけてくりやれとうちわりて心底
をいひきかせひとつ床にはいかなくゆびでもさゝ
ぬやうにすればつい首尾好三くだり半に成てきて是
ほどに心中たつるうへからは母が合點して源氏を女
房にしてやれば世間の人もうつくしう聞てつるがや
も源氏も一生のたのしみをきわめてすむ事成に此つ
るがや信の字はもちて生れたれども文盲なると極弱
にして堪忍する事ならず當分女房とひとつにねてこ
らへせひなきゆへに心にもはからず○○○○○○○○
○○○○○○證據二人まで子といふものゝ生じるけ

はさりとは愚陋にして腰のぬけしやつ也成ほど色はさわるに煩惱とやらいへば無分別の出たがる物なれどもそこをかぎりをしてこたへくすれば後に手前のおもふやうにたのしまるゝといふ事氣の付べき事を未練なる心より信の道をと失ふ事也世にはかやう成事少しもちがはず有るやうなものなれば女にも男にも能合點して信の一字はなるべからず信の一字をわすれし人は友ともする事なけれ夫婦となりてもたのもしからず

○交からず譬ば一旦はれて女房にもちてもおし付脇にうつくしい娘があればそれに心うつりて前の戀し心もうせて其前の妻をまきたがるものなり勿論おとこのならひなればわきぐるひもせまじき物にもあらねども余が大きらひ物有妻有ものゝ其女房にかくして下女腰元に手を付る事いやなりくゝ妾ならば天下はれていやともいはず下屋敷にすへ置敷手前に引取かして世間ひろくとしてたのしみたし何ぞや下女腰元が女房の目を盗で戯るゝなど下卑たる心底ならずや若其腰元に氣に入たるあらば随分見がき立て妾といふ論旨を遣しとりかけぬまへにさづけて手を

つくべし少しもくゝ人にかくしなどする事いやなる事也或は戀は忍ぶが樂しみといふ故事有からばかすがおもしうしといふ事文盲の至也そもくゝ此忍ぶといふに島原に通ふ若武者親父の手前かなしく手代の目をぬすみて身を雨露にしほたれ或はにほんづゝみのなにしゝいの木のしげき人の口をいとひ編笠いやしく引かたむけて二挺の聲にくれ三浦山口の三筋の色にうかるゝは晴て行より樂み深し何ぞや下女腰元に手を付て夜もぬき足して驚の魚とることくさまよひ女房にかくしておもしろがる事筆に書さへいやらしいといふもくだ也人のすまじき事第一後家ぐるひ、腰元ぐるひ、比丘尼すき、床すき、

○余が大嫌ひものといふ下の説公美が通家にはおもしろからず此説此書の玉に疵なりさればとて下卑たる心底がよきといふにあらすかくの如き品々のうちに色事の面白き味ひも有べし此書は公美が二十一歳の時書しものなれば三十歳にいたりては雌黄をぬるべき所々あるべし

高き木すへの花も折ならひなればぬしさへなき娘なれば翠帳紅圍とはいふもくだ也いかなるかたの箱入

娘子にも思ひかけぬはづはなしそれはその人の手がら次第にすべきもの也後家ぐるひなどする事いやしいやし何事も信の一字を取はづしてはならぬはづなり源氏も敦賀屋も同じ事のやうにて秤にかけて見た時には源氏がなさはふかじといふ人もあれどもしれにくき事の手がたあらん物也かわゆひといふ事はたゞ敦賀屋の文盲で貧なると女房に目のくれしとの三ツ也此三ツさへ能明らかならば仕あふせて源氏と白髪までもたのしむべきに去とはくゝ殘念なる事也惣じて若氣とはいひながら敦賀屋などが身代にて五百貫目遣ひこみしなどいへどもうそ成べし奈良などの町人に一年にそれ程つかひすつる者しも見へず年々につかひこみしにもそれは有べしと塵部の星様といへるものゝかたりける也枕久などもそれがすきにてあのやうになりしを見れば狂人の太夫がよひなれどもよく根をおして見れば松山にうち込し物ならば松山を根引にして樂しみたき物なるに一度にばたばたと勘氣までうけしも文盲なりといへり勿論金銀をまひて遊ぶ事第一の所也とはいふにもおよばず金銀まかねば大臣ならねどもはじめ大臣といはれし人

に女郎を引取人は十の内にて三ツ四ツのみありて多くは勘當の山にのぼりて丹波ごへする物也尤女郎のふかうくるといふは丹波ごへして勘當にあわんとする二ヶ月前あたりが身にこたへておもしろく成ゆへにむしやうにのぼりて丹波ごへもするものなれども三個三個といふ傳授をせぬゆへに傾城のおもしろみにあわずとあざける人有太夫三個一個の傳授とあたらしき事ぞと精出してゆるしおくりて見れば何の手もなき事也秘事はまつげとやらむ世話のごとくさりとは珍らしき傳授也其ことばに曰三萬兩つかふ人は二萬兩つかふべし以上かくのごとく下卑たる算盤づくの太夫かひにて遊びには面白かるまじきといふに此里にても一度につかひさかるは此客ははやくきるゝ古ひ女房もつた客は床をもつてしるゝ軍法の楠女郎諸葛孔明がかほしていふも尤ながら能々味ふるにははれし女を人の花にする事口惜き事とさへ合點すれば此儀すみやすし董策にいへるは臨淵羨魚不如退而結網といふごとく也いかさま魚などの大ぶん集りたる所にのぞみてあの魚は眞ぞおびたゝしひ事じやたゝ一網でとれる物をとゆびさしをして羨まんより

は魚の咄しを聞も見もせず宿に歸りて網をこしらへて持てゆきたる時には朝の六からうか／＼立ていたる者よりも一だんおそく其咄ばかり聞て網をこしらへもちゆける人が魚をば手に入るといふ事尤の事也三百六十日あげづめにして根引をせぬも同じ事ならば首尾よく二三年あひて其女郎の心だてすなほにほれたるかたならば根引にしたるがよしいつまで遊びていか程金を遣ひても此里に是はよいといふよひ程はなき所なればあひし女郎を一旦根引にしてさへおけばあまりふか入はなき物也といへりすべて若氣けつきにつのりて後のわきまへもなく太夫を請出す段に成て手づかゆる人多しといふこれゆへに三個一をばかく分しもの也一萬兩は神軍に一手とさだめ其太夫の足代あそびのけはひとさだめ二の手の一萬騎は悉眞實手づめの勝負として本かうそかの秘術をあらはし三の手の一萬騎は伏兵となして太夫根引の後詰にする事山本勘助入道が秘みつものよし也余おもふに成程小より大をはかる事なれば千里の行も一足の向よふにて始るなれば女郎がひかゝるとはや合點の入べき事なれども思慮分別なく此里へつかふがよし

此里には工夫のつく程あしきとおもふが秘事もいへり三説何れも理あり老若にもよるべからんやさりとて三ヶ一の傳授は百萬貫の山吹も同じ事のつもりといへり
○すみよし物がたりに甲斐のしらねはおもひこそやれどもありて雪ふかくつもるさむき高き峯也古今集大歌所の御歌甲斐がねはさやにも見しがげ／＼れなくよこをりふせるさやの中山後拾遺に紀伊式部いづかたとかひのしらねはしらねども雪ふるごとにおもひこそやれ新拾遺に寂眞法師かいはねはなほいかばかり積ならんはや雪ふかしさやの中山などよみて神無月となれば白銀のごとくなりてあり富士とならびて白し余が座敷より見れば西のかたにそびへて高く秀す東のかたは富士雲に接す風雅たぐひなかりき
○甲斐の國に團子あらひといふ所あり此村の山にだんご山といふあり此山皆だんご也昔より傳ふ弘法大師此所を通りて越られたり一人の姥だんごをこしらへていたる有弘法此團子を所望ありしにあはへず弘法怒て印を結び加持するに此だんごごとくく石のごとく成たり姥是を後の山に棄しによりて今に至り

て如此といふ余此ものを見るに大き鶏卵のごとく人の手にてまろむとも中々かくのごとくにはあるまじ白き雪のごとくにてすべ／＼として割て見れば中ごとくとく赤して米のごとし一山ごとく／＼是也いかさまかはりし物也すべて日本にてもかやう成ものには弘法の所爲といひ傳ふならひ多し此山もさだめて神代よりかくのごとくならんかなれど弘法に附會したるものなるべし余所の古きものに聞て薬にもなるやといふに此ものを粉にして痘瘡に附ればいゆるといへり余が工夫して水干して繪の具に用ひたり妙なる色あり此ものに膠は合がたし或は余が書し岩などのあひしらの色鳥などの毛色のうちにも此繪の具を用ひたる多し氣を付て見よかし
○信濃より出る木の葉石ありいくつに割ても木の葉のありありと見ゆるあり日本にても石などに爪などあり／＼と見ゆる有是を聖德太子の蹄の跡頼朝の蹄などいふ是も附會の説なりもろこしにても石の生れによりて人の手の跡などあり／＼と見ゆる石あり足の跡ある石などありて奇妙に人作よりなせるにあらす俗説辨に幡籠子がとりあつめてかやうのたぐひを

かきおきたりこれらあやまりなし尤の事も引けり
○血の池といふものあり甲斐にも東屋の西のかたに血の池あり是は辰砂井なるべし辰砂井の説本草に委く出たりよりて略す土人のたぐひは目をあらひ亂心したる者に吞するにいゆるなどいふによりて見ればさもあらんか六一居士が本論にかきしごとく沈酣骨に通じたる世の中の人なればかやうの物を見て物をおこすも口おし(佛法にて女人は罪のおもきといふ事笑ふべし女人も男も人にもがひはあるまじ女は心のひがむもの多しといふ心にてかくはしめしたるものならんや)
○下の關の海に石塔あり是は太閤秀吉の船頭にてありしがわけありて爰にて殺されたり此石塔を此里の女郎がのこらず寄合て立しと見へたり女郎の名のごとく膨付てあり
○張華が博物志に田鼠に巴豆を飼て養ひぬれば三年にして重さ三十斤とかけりいかさまにも鼠もかはりし物也家に住なる獸にて夜出て晝はかくれあるく齒有て牙なし心うたがひ多して穴より出んとする時半分計出ては又入などして果つかぬもの也是によりて

人にては兩端をもちてかふしやうかあせうかと分別の極らぬものを首鼠といふなり又鼠は殊の外懼るる性の物也と云故に鼠愛を以て是を名付すべて慰に余が聞見し鼠の説を書つて格物論にいづく鼠はよく盜を好むもの也其族頭が多しはつかちいさくして害も又少なからず鼠はよく土の中を行なり水に住鼠あり魚をとりて喰ふ竹留鼠あり竹の根を喰ふ火鼠あり火の中にすみかをなす此毛をもつて織たる布を火浣布といふ火にて焼ば垢おつる也古今經列子杯に見へたり神靈經に見へしは北方氷の厚サ百丈なる所あり其氷の下に鼠あり但氷を喰ふ毛の長さ百尺布に織べし鼯鼠といふものあり毛のやう豹の紋のごとし昔賢俊と云人爾雅の學に深し或時禁裏にて豹の皮のごとく成鼠を得たり人皆何といふものをしらす賢俊が曰是は鼯といへる鼠也といひしとかや鴛鳥も鼠に成禮記に曰八月鴛鼠なるもあれば也葛雅川が抱朴子に曰鼠の命は三百歳より毛ごとく白し名付て仲能といふ一年中の吉凶を知又千里の外事をしる鼠は孕事一月にして子を生酉陽雜俎に曰魚は巴豆を食して死し鼠は巴豆を喰ひて肥大也運斗樞に書しは玉

星の精散じて鼠に成とかや鼯鼠と云もの有齊東野語の内にも見へたり(本草にも見へたり)契丹文河に此物あり身ごとく鬼にして足は鼠にて前の足はやうく一寸ばかり跡足は一尺尾も又長し鼯は鼯也といひてつまづくことによせたり此物走り歩む事ならずつまづきころぶによりて鼯といふにや陰鼠といふ物有熨斗のごとく全株は鼠也此もの出る時には炎ありといへり晋書に曰宣城より隱鼠を出す大サ牛の如し爪は馬の如しといへり金樓子に見へしは晋軍縣に大なる鼠あり大サ牛のごとし里人は是を假牛といふ此鼠の毛田間に落ぬれば皆ふき鼠となりて稻を損ずとも見へたり梁書に曰日本國より鼠を出す大サ牛のごとしと見へたり(日本にて出しといふ事いまに聞なれぬ也)爾雅に曰鼯は鼠にて馬の蹄あり秦人は小鼯といふよしあれば世にはかはりし鼠も有物にこそ鼯鼠といふ鼠あり紅夷にて(荅刺不花といふなり)此鼠土に窠を作り住窟の如しといふ夷人は是を食物とす其皮をとりて小袖にすれば甚暖にして濕をとをさすとかや又此鼠はあたまをとりて小兒の枕もとに置ば夜啼をする事なし貂鼠(りすなり)栗鼠とも

松狗とも許慎が説文にも丁零國より出杯見へたり本草にも委し唐の書譜にも此圖あり此毛にて布を織ぬれば風におふ時ひとしほ温也とかや水に付てもぬれず雪を得てもぬる事なし色白を銀貂といふ黄色を黃貂といふ也甲州勝沼といふ所よりも其物出る也葡萄の棚につくをさらゆる也鐵の網を張たる籠に入て進ずしからざれば破るさいふ尾は一尺計の毛也人の目のうちに塵埃など入たるに其毛にて織たる布に拭ひぬればたちまち出る也鼯鼠は地俟とも鼯鼠とも黃鼠狼ともいふ也廣雅に曰鼠をくらひ蛇虻をくふものなり此物甚だなまぐさし此毛尾筆にゆふべし黒く大なるありふとく赤き有莊子が麒麟も鼠を取事は狸鼯にしかずといひしも此物也食蛇鼠唐書に書しは屬竇國よりも蛇くふ鼠を買したり尾赤くして口尖りたり或は人の蛇などにさされたる者有て其鼠にかのさへれたる所を見すれば鼠其蛇のさしたる取にのほりて舐るに忽いゆるといへり甘口鼠といふものあり(ハツカキツミ)ともいふ也人を喫ば瘡となるあり或は此もの牛馬にも付もの也鼯といふもの有此ものよく猛虎の耳の内に入て虎を殺す鵲にあひぬればみづ

から仰て殺さるると云委しく本草及び書々にあれば是を略すすべて白鼠は別に種ありと見へたり或は黒き鼠おのづから變じて白きに成者は其子は白しと見へたり後魏書に昆苑に白き鼠を得たり是を割は腹の内三ツの子ありことごとく白しと見へたるゆへ也酉陽雜俎に鼠を土藏に入ぬ法術をのむたり詩經には誰か鼠牙なしと何をもつてか我家をうがつなごともへたり是はごむかしよりも人の邪魔に成ものはあらじ或は鼠が人杯を喰ひそむるとはなれぬもの也といふ秘法あり鼠にくはれし所には熊膽をぬるべしいたみすみやかにいゆる也牛馬などの鼠の付たるには確黄をぬるべし粟をくひたる鼠を毒ありといふなれどもそれにもよらぬものにや回春のうちに鼠の毒にあたりたる人に猫の尿を以て療じたる事あり余が庭にて蛇の鼠をのみしを見たりすべてかやうなるたぐひ蛇をくふ鼠ねづみをくふ蛇ははかりがたし世間にて痘疹の藥也といひて小兒に鼠を食する人多し余が見しうちにて七八人も食滞せし兒ありよくよくあきらめて用ふべしみだりに用により俗醫の口を信じて害を求る事多し鼠を以て媚藥とする事あり南

宮從崎嶇神書(說郭に出しは止本にあらす)にいはいは
 く十一月十二日或は正月五日七月七日正月元日子の
 時北の方に向ひ鼠の雄なるを取てはらさきて陰干
 に(男は左女は右)尤陰干にする物は鼠の腎の臟也
 (鼠の腎の臟は腹をさきて見ればしるものなり)
 右の如く男は左の袖女は右の袖のうちにさへ入て置
 ばことの外女も男を思ひつかるゝとありいか成藥也
 とも狐臭つよく目もと口もとあしく物いひふとく
 しき生れながら(此末脱文なるべし)
 ○いもりのしるしとは歌にも讀ならはしたれども説
 たしかならぬ事あり博物志にいもりに朱を食しむれ
 ば後にはいもりことくあかふ成て死ける也それ
 を取て陰干にして女の身に文字にても何にても印を
 書ておくなり此印はいかやうに洗ひてもおつる事な
 しもし其女煙事をなしぬればおつる也それによりて
 是を印にして女の貞節不貞節を見わくる事也共あり
 又俗説に守官の交たるを引はなしで竹の筒に節をこ
 めて兩方に入置は中のふしをくひぬきて又交む物也
 それを引はなしで山を隔てやきぬれば煙り山を隔て
 も交るとかや此いもりの黒くなりたるを我思ふ女に

一ツはもたせ一ツ我持てゐる時は必ず後には其女と
 男が夫婦に成ともいへり本草に守宮の説なごあり法
 花經嘉祥大師の疏に守宮の血を取て女の臂にぬる時
 には若其女が不心中なる事有時には洗へどもおちず
 と見へたり博物志の説とうらはらの事なりされば歌
 にも「忘るなよたぶさに付し虫の色のあせなばいか
 い人にこたへん(あせなばうせなばといふ事なり)
 是は法華經の疏の心を用ひたり又「あせぬともわれ
 ぬりかへんもろこしのいもりも守るかきりこそあれ
 此歌は博物志の心を用ひたり
 ○手習するつくゑはいかにも長くは廣きがよし毛
 氈を一枚敷て習ふべし(羅紗にてもよし但其机のは
 いに切て用るがよし)手習するむかふは日のあたら
 ぬがよし北のかたに窓をあけたるがよし日のあたら
 加成かたはわるし氣がうきて心にそまぬやうに覺る
 也それも人のすきくも有らんなり
 ○墨は油煙よりも松煙にてよくこしらへたるがよし
 日本にて南都坏にても五六十年以前は各別其外三十
 年以來の墨は唐紙にあわぬ也(五六十年の間の墨は
 よしなごも古人は論じたる事あれども)油煙にて

も中華よりわたる古墨はちがひ有日本一と一口にて
 いふべからずとも云人あり大字をかくにはいかにも
 水を念の入てそれにて松煙のよくすり壺に入て土に
 理置へし寒中の水よしといふ
 松花堂の繪の墨は牧溪の墨を傳てかく牧溪の墨は色
 あひかわりし所あり
 ○荻生惣右衛門が和語の内には通じにくき程かわり
 し言葉遣ひあり是は田舎にてそだちたるもの故にか
 やうに有也
 ○大潮は二十五の時より出家したりいかさまにもよ
 く華音に通じたるうまれなり
 ○岡島援之は長崎にては長左衛門といひし者也華音
 には奇なる生れ也服元喬がいふには和中の華客也と
 いひしも尤也學才はあまりなしとかや
 ○橡の木は木曾などの内におびたいしくありもしほ
 草に大和の人橡をこのて柏といふとあり大和にて側
 柏をこのてがしはと云なら坂やこのてがしはのとい
 ふも側柏をいふ也橡の事をばいはぬにこそ大和本草
 にはたい側柏のみをこのてがしはとのみ引おけり
 (篤信此事をのせり)橡はいちい也橡はとち也檉はく

ぬぎ也檉はかしの木也
 杜若のかきつばたと覺て燕子花のかきつばた成をし
 らぬが如し杜若はかきつばたにあらす
 ○ゆすら(櫻桃のたぐひ)をばあまりに小兒などに
 食する事をいむ中華にても血を吐し人有銀杏もあま
 り食する事なけれ卒死するものといへり
 ○甲斐には揚梅なし柑佛手柑の類なし袖はあり白色
 の南燭あり松は黒松なしもし庭などにこのみて植る
 には駿河よりも取寄て植る也甘草あり五味子あり肉
 菘菘あり寒竹なし紫竹多し水仙すくなく蘭なし余江
 戸より母のかたへおくりたりしに一年すぎぬれば枯
 てなくなりしといふて文を遣しけり蘭はそたぬに
 や鳳尾蕉(ソテツ也)駿州府中の城のそてつはよく實
 をむすぶ甲斐のは實なし
 ○海棠は東國に多し西國には少し大和にもあまり多
 からず葡萄は日本の内にては甲州より上こすなし長
 サ三尺五六寸程のふさあり實も甚大なり此物古大漢
 の張鷟といふ人大宛國に使として行きかの國よりも
 種を求て歸りしといへり是も異國にてもよき葡萄は
 少しと見へたり酉陽雜俎に見へしは一名馬乳又黒水

品ともいふ天竺にては是にて酒をつくる富人はこれにて造り酒千斛に至る十歳迄かはらずといへり魏の文帝の群臣にの給ひしは葡萄にて酒の酔を醒す物也若酔ても醒やすしとも見へたり古へは蒲桃とも書しなり物類相感志にのせしは此ものよく香しからんと思はし麝香の皮のうちに一所に入べし實なりてことくく芳しとも見へたり武備志の夷考の内にも鎮衛の事をのせたり又本草發明に震重がいわく東南の人はくらひて病を發し西北の人は是を喰ぬれどもつがなしといふ是は文旨也波斯より出しものゆへに理に取つきて云成べし關東のうちにては武都甲州の人七八月に至りて是を飪び食品の第一のやうにすれどもいまだ其毒有といふ事を聞ず牛房の毒草の部に入たれども人々是を蔬としてあたる事なく茄子も人々くひぬれども冷のさわりたるといふ事をもしらすケ様のたぐひ誤り多し甲斐にて余が家に黄蘗山の悦峯禪師を招待しける時に菓子に葡萄を出して扱余が是を談問しけるに禪師のいはれけるは中華にて悦峯の親なども此葡萄をば植られけれども日本の如く成葡萄はあらず勿論所々より出るなれども甲州のごとく

成ぶごうは中華にても多くは得がたしとはなされし也大和本草にも此事をばくわしくのせぬ也三才圖會にもこのせし事説少し薩摩などにては士衆の家杯に植おける人あれども味よからぬといへり甲斐にては勝沼といふ所より出る此所に梨柿葡萄出る也棚を二三十間程にかきつらねてかやう成棚を百棚といひて所持しいるものなり或は此架の下に毛氈を敷酒杯をくみ詩を賦し歌をうたひ坐しながら是をくらひて會をもふくる也女中杯は是を鬼灯として吹也(音少しもほうづきにたがふ事なし)古人も此櫃の下にて宴しける事にや葡萄棚の下にて酒をのむ事なけれ杯とも南都新書六帖左太仲賦北齊書津逮書詩などにのせ文にのするたぐひ多し續漢書に松風の子羅といふ葡萄酒をもつて一斗を張讓に贈りて涼州の刺史となりし故事も見へたり今南蠻よりもチンタといふ酒わたる也是も葡萄の汁にて造りたる酒也一種菓實といふ物あり(エビスイパト云モノナリ)是にて酒を造る也

○大和人推をおとして慰むおもひつき面白し余が句に手を打て櫛に聲あり推の露この思ひ付至極よし

○沾徳が句に兩國橋に至りて涼船を見て直に召興しけり其前書は(益帝をはじめ船の作者おし)風も江の作者の人数すいみ船これらはやさしく面白じ當意即妙にや余がいつぞや去るかたを通じにきれたる編笠をかより手に扇子をもちてべつの事なき色三味線にかきし傾城買の藝人形を見るやうなる男法師くは木のはしとおもふはやばよわけしらぬといふ一中ぶしをうたひながら門にたすむ扱こそきやつは物もらひにてこそあわれや此男もむかしは大臣といはれし事もあらんがかる花子の姿と成し事色ゆへなるものならんと心にて色々かんがへて歸りぬ物さびしさのまゝに此男を繪にかきて小林喜内といふものによりたり喜内がいふには上に一句讚をして給われといふにまかせて前書に此沾徳が前書をうけて(わん久をはじめてこの作者おし)一中にたしく鵲のおはれなり

○女郎買て慰は水遊びの上もり世界たのしみの極意にして銀座九郎右衛門がいひしごとくに女郎をかふて慰む心からは買はれて慰みたるがよし女郎にかはれてゐる心からは買て慰めといひよし也渠もおも

しろふしりたる人物也昔東坡がいひしごとく人墨を磨するにあらず墨が人を磨するといふた心にて女郎を買て遊ぶといふうち女郎にかはるゝ人になるもにぐからぬにや昔はもろこしに狙公といひて猿飼ありしが猿を多く飼是に二度ツ、食物に粟をくはする也さて此粟をくはするは猿一疋に粟七ツツ、のつもり也さればかの猿に向ひて今日はまづ朝三ツツ、くれて晩には四ツツ、くれんといふ時は猿ども殊の外腹を立ていかる也さらば今日は朝四ツツ、あたへ晩には三ツツ、あたへんと云時には猿ども悦び嬉しがるなり女郎も其ごとくはじめ五節句よくつとめてやりあたまでばたばたぐるをわびておもひ付ている事なれどさやうの客は鋸ぎわになりて引出して女房にするほどの客にはなぶて當座の慰に買ふてもてゆく客也はじめは随分とをくしく身請の段になりてせひあらはしける客あり此三ツツ、今の猿飼のごとく同じ事に同じ七ツツ、の敷なれどもわけよぶにて猿どもが嬉しがると腹立のごとし女郎もよくく、此心をくみしり給へといふを聞て此程につかみたがるものは女郎と地口といふ人もあれど結句猿がしこひといふものにてにくし

にくし去程に此女郎の心のうちは入組たるものにて金つかふ人にもよからぬといふ人あれどいづれも福引の繩をもちしごとく大根ふんごんはどの男に付ている事やらしれぬもの成にいていふもぐち也不立文字教外別傳といふて文字は乾屎橛のごとく皆やくにたぬ文字のうへになきこそ禪家の無乗の法なりなごいふもよく合點して見ればみなむだ事なり麻三斤といふごとく文字を取扱ふ所に大極はありと知るべし遊ぶ内に懸路はありといふ事孔子の取て置の大事の説なり

○過し頃去人のもとに尋て有しに床に石の花生あり此石は白く黒赤黄の色々の石のひとつにかたまりたる物の中に穴をあけて花生にしたる物也能く見るに是なん本草にのせたる所の禹餘糧ならんとおもひければごもいまだ慥成事をもしらねばかのあるじにとふていはく此石はいづくより求め給ふぞと問ふかのあるじこたへていふやうは此石は伊駒山よりも出る也かわれる石にてありて此中に益なる水ありておびただしくいづるも有又は麵のやうなる物の出るもありこれ穴をあくるには灸をして雖もみするといふさて

かわれる粉あり名付てこれを禹餘糧と云或は紫或は黒き或は黄なる或は白き種々の小石ありてかたまり粘なごにてねり合せしがごとく成此内にかの粉はありと見へたり登真隱鐵といふ書に太一禹餘糧を以こしらゆる四鐘丸の法あり其ことばにいわく禹餘糧六腑をさだめ五臟をしづむといへり謝在抗五雜俎にいわく泰山に大乙餘糧あり是を見れば石也石の上に甲あり甲のうちに白あり白のうちに益あり相傳ふ繪の圃太一是を呑てあまりをすつ此ゆへに此名ありと又かたまらずして水有にはとりの□□のごとく成ものあり石中益子といふ會稽山に石有て粉を出す是も同じ物としるせり抱朴子三才圖繪本草博物志(この中には草と書しはあやまりなり)別錄其外本草集解なごに委しく見へたり見るべし)女人の崩漏帶下子もつ事なくくるしむに用ゆと張文仲が備急方に見へたり産後の煩躁を治し癩病を治し傷寒の後痢となるを治し其外功あけて盡しがたし聖濟錄に書しは禹餘糧と半夏と等分にして鶏の卵にてときて癩痕につくれば十年過しものもいゆるといへり誠に生駒山は神仙のすむといふ山なればにやかゝる珍らしきもの

こそうたがふ所もなき禹餘糧にて有なめりとおもひて大和本草杯を取出し見れども生駒山より出るといふ事をのせず扱は貝原篤信もこれはしらぬにこそあるらめとおもひしても寶山寺の明堂比丘にあひてとひければ明堂のいはるゝには禹餘糧と申やらん何と申やらんそれはしらす成程此石山より出る也大雨のうちは十も或は二十計も所々にとりあつめて出る也禹餘糧とは此山にては申さず行基皿と申のよしよりて明堂に所望してひとつふたつもらひてもつにうたがひもなき禹餘糧にて有誠に此禹餘糧といふものをもろこしにてもことこのふめづらしく秘藏するものにして禹餘糧にも三品あり禹餘糧といふて太一禹餘糧となり和名山のから石といふ其いまだかたまらず水をいだすを石中益子といふ本草に曰太一といふは夏禹王の師なり此薬を呑て仙す故に太一の名あり此石會稽山にあれども鬼神まもりて人の取事あたはず或はその里人幾數といふさだめありて取事一つの石に餅をつきて一ツつ引かへにするといふ也さあざれば取事あたはずとかや林名譜に書しは新開山(昆州のうち也)に石あり石のうちに黄なるも又白きも

も出けるにぞ醫者などは心付べき物成に郡山の醫師杯に尋ければしらぬといふ人多しはづかしき心也といふべし
○花も草もけわひによりてなさけ深きありにくらしきありおそろしく見ゆるあり花はけにもうるはしければ其るだぶり葉のすがたいとふとくしふてにはひはなけれご海棠のいまだ開かぬ前の姿は花のあるじ成べし牡丹はすがたもよふて富貴成ものなれどもにはひいやらし姫百合はすがたもやさしく花もうきやかにて見るたびに心もうきくするに朝鮮ゆり鬼百合杯はすがたにがくしくまして色なごもしつこらしく見るもつらし紫微花はおもしろふやさしくこにさかり久しくけはひもさら也牽牛は花のうちにていばらもきごふなるまでに見へておもしろし櫻もひとへなるよし多くはひがん櫻にうへなしわしの尾といふ櫻はしろふて花大く見ゆれば白鷺の尾に似たるゆへによりてわしの尾と名付るこやとおもひたるに此程伊駒の山にする人ありて尋けるに折ふし此人もるす成に内なる男にいづくへおわしたるぞととひければわしの尾山へと答ふや、有て其人歸りたれ

ば日くるゝまではなしして鷺尾山といふはいつく
 ありてゆき給ふにやといふにかの人のいはく生駒山
 よりも二町ばかり奥なり小キ山の此所櫻の木ありて
 白ふして世にめつらかなる種なりよし人々聞傳へ
 てもてあそぶ其山の名によりて鷺の尾といふよしを
 かたりぬ扱はわしの尾の櫻は此山より出るにこそ伊
 勢の白子といふ所に不斷櫻あり世に不斷櫻とよびて
 もてはやす事也今見れば調杯につくりて内百番の
 うちにやみへし此白子にて能なきをする事あり是も
 あまりおもしろからぬ花也もみちなどもいろゝあ
 りて三十六種の歌仙もみちがりあり楓と書はあやま
 り也楓はもみちにあらずもみちはおもしろきもの也
 菊は隠逸成ものにておのれゝのすがたのまゝ也霜
 にならひ秀をぬきんでゝひらきぬべきにいつの頃よ
 り菊合などいひて一りんづゝ開かせ其大サ物さしを
 あつるよふになりたるそれもおろゝによるべきに
 ませがきをゆひまはしにしきの日おゝひをなしあや
 の幕打まはしてもてはやししたるは菊の心にさぞい
 やらしかるべしこれらの俗口にもうしきくは岩
 間などのすねふりたらんにほのゝ咲たてたらんこ

ころもいさましかるべし橋木にかきゆひまはす世の
 中なればそれもましなるにかは一ト本菊といふて一
 本にて數々花のよびちぐも心ありてよろこばしから
 ず松などもあまりつくりたるは見る目もつらし野邊
 の小松の若ゝとして峯の松の年ふりたるは松のお
 のづからにて引るはし枯槎などもわざゝまきたら
 んよりも野邊にひとりさきいづるはしあやめ
 は余このふまきて庭に多く植てたのしむかきつば
 たはあまりおびたゝしくありなんは心うしすゝきも
 あわれなる物也ゆふがほの花もなさげふかし敷子花
 はしつこらしみほくといふ木あり三才圖會などにも
 見べたり見てもいやらしきもの也其外數々つくしか
 たしあだゝとしてうつくしきよし
 ◎墨は李庭桂がすみよしされど中華にてさへ半挺さ
 へありがたしと見へたり奈良墨の古きよし中々もろ
 こしもおよびがたし中國の墨も漱金子藏といふすみ
 すべてよしこのころのわたり墨也吳天常が此墨よし
 程君貞十二龍寶もよし是も此ころわたるはあしき也
 江戸にて遺跡といふものあり余が十五才の時かきあ
 つめし文寶雜譜といふものをこのふ見せよと望む

に任せて過し夏の頃あたへぬ是には長崎にて聞し墨
 法をのせ又余がよみし程の書のうちにて墨の事ある
 ほゞは書のせたり
 墨を用る事よくゝ心をつくべし墨のよしあしあり
 中にも用ひ様にてよき墨もあしく成ぬべし水入に一
 夜を過ぬる水を置てそれにてする事あしき也すみの
 色をぞんづる也水は成らば朝々くみて用ゆべし用る
 時にはぶたへにてこしてよき也いかに静にするが
 よしちからを入れてする事なれすゝりにもよるなれ
 ども大かた端溪に上墨のごときはなきもの也余も四
 十一面すゝりをもちたれども手前の氣に入て用る
 は土屋相州君より給りしすゝりのみすりごゝろよふ
 おぼゆるゆへつねに手なれて用る也都て硯はあつか
 らぬ湯にて折々あらふがよしまた墨はするたびにふ
 きで置がよしいにしへより古墨古硯はうへなき寶と
 したるものなればいかに秘藏すべし紙筆すみ水と
 四ツがよふ揃はねば物よふかゝれぬ事也能書筆をら
 ばすといふわけ有事なり墨におゝする硯といふはな
 らひ有事也硯に耳かきをそへて墨によりて泡のたつ
 時耳の垢を少しおとしぬれば泡たゝぬといふ事にや

古も銅にて水入をしぬれども是はあやまり成べしす
 心おじきなり水に毒あり
 ◎女は男の手を習ふべし女の手をまなびたらんはあ
 がる事かたかるべし男女の手をしたひて書べし物か
 らにうつくしくかゝんごおもふべからず
 ◎繪は唐繪を學ぶべしいかにいふに日本にて名
 畫と云程の繪人はこそゝく中國を學びたるもの也
 本朝畫史を見べし今古法眼元信も何を學びしにや馬
 遠夏珪牧溪などを學びしといふ其外巨勢金岡小野篁
 明兆典などをはじめかすなき名畫とよばるゝ人すべ
 て中國よりまなぶにありいつの程にや専門ならで養
 扑探幽などはじめ草卒をの墨姿を好みて一休あはく書
 出したれども墨畫はまだ也彩色に至りてはらちもな
 き事ともなり其もとをしらねば其はづの事といひ
 ながら淺ましき事なり長崎の畫師笹山喜内は畫學あ
 りて畫才なきうまれ也と萩生惣右衛門もすまじもい
 ひしなり今京都に世繼柳只(俗名太神)といふもの
 畫才すぐれてよし世に用ひられなば名あらんもの大
 坂にて橋有税(宗兵衛といふ)といふもの畫きはめ
 て美なる所多し吉田秀雪といふもの繪はすぐれてよ

し彩色に妙有ども今はいづくにゆきたらんにかしらぬ也此秀雪は文盲成によりて少しづつ誤り有し也彩色は上手にてあり狩野如水にあひて物語し扱繪をこのみてかゝするに氣が繪よりかちていたゆへにつたなくなりたる也洞林は繪はまだ初心なる所多し又中右近といふもの繪をかきといふはいまだ見ず惣じて世に井の内なる蛙多し梁唐宋元明までの名ある畫をも見る事なきゆへに繪の力少しすべて奈良の源四郎が驚の繪といへば日本に二幅ともなきと覺へていひしよしにて此驚の繪は奈良の源四郎驚よりもたごへていはゞ二位も出來もの也と極めし物なるをも見たり千里の行も爪さきのむけやうにてはじまるものなれば何事もくく目のつけやうこそ大事成物なれよき所に目をつけてまなぶ人ははやく其よき事をうる也あしきかたに目をつくる人は老にいたるまで其よき事をしらすたとへば蠅といふ虫は一丁か二丁より外随分せいでしてあるきそれより外はどうもならぬ程のものなれど馬の脊などにひよつとごまひぬれば一日のうち十里もゆくがごとしまつ繪も唐繪より

學ぶべし繪をかく人の常に見るべきは芥子園畫傳也宣化畫譜(津逮秘書のうちなる全篇也說郛にあるはぬきものなり)畫錄畫品畫繼後畫錄名畫錄八種畫譜畫叢圖繪寶鑑續圖繪寶鑑畫史丹青志南村先生字儀秘訣(天子善釋か法也南村是を傳ふ)のたくひ也日本此頃畫室といふ書物出たりやくにたぬもの也繪はあさましき程也又浮世繪にて英一蝶などよし與村政信鳥井清信羽川珍重懷月堂などあれども繪の名人といふは西川祐信より外なし西川祐信はうき世繪の聖手也

○びいごろといふもの鼠璞といふ書にて見れば中國にてもこしらへやうを昔はしらぬよし也又此もの波斯國より出たりとあり世間にて糯米にてこしらゆるといふほごあやまりはなしそれはびいごろふくものに何にてこしらゆるぞといふに其法秘していはぬ時其そばに白き粉をおくによりて是は何ぞといふ時あざむきでもちごめの粉といふもの也と答へしを誠とおもひてかくはいふにこそこれは白石をまきてくすりを入れてこしらゆるもの也びいごろのとくりなご口かけたるは蠟燭をたて、其火へあて、なをす俗語に

硝子といふ吹つぼは攝州小づまよりいづる長崎今魚町にあきなふ店あり

○群芳譜に見へしは木芙蓉の花のつぼみたる時べにならば紅粉藍ならばあいを筆に付て花のうちへそぎいるゝに花の開きし色々のすがたにかわるごあり是も面白し

○女郎ごもすべてつかふ事也大かた其客の目前にてしたゝかわるくいふに此大臣文盲なればしごく何やらあの女郎のかたじけない事をいふそやうなごおもふもの也惣じて女郎ご女郎ご云合て文をとりやりして客をかくる事有たごへば志賀崎といふ女郎がいやらしいゝとつねにいふ客あれば其客がひよつとごきた時にはよしとらといふ女郎ご談合しておきやがてよしとらかたより志賀崎かたへ文をやる事なりたごへば其文言にてなれば今霄はおもひのまゝなりし御入せにて御心の内すもじりゝわれらこそはすておぶね身振ひたつる客さまいかにせむなればごてあまりなる御事ごふせいなごいふやうなある事にては御座なく候誠に御床しく御うらやましくぞんじりゝたれやらさまのこなたも御こしならばかふま

では心もくるしむまじきにまゝならぬ世の中ゝくわしくは明日御めもじご書認ておくれば志賀崎は其文を床にじさんし客のまへにて披見すれば此客殊の外うそをしたるはなげにて扱は志賀崎はこちをおもふて眞實にしてくれるそやうでほうばい女郎ごからもちが來た事を悦びて文をくれしものぞ大悦かざりなくいたしける也かの文うらはらの事をかきつかはしたるもの也よしとらにはこよひ思ひ入の客にあへごもこなたはさりごておもはくの客に付きゆへにさぞゝ身振ひなされん事といふ引くりかへしていふたにてそしてそのあした寄合て何をいふぞご聞に夕部御やくそくの通り文下されうまゝと客めをかけたましたころりごさせましたかたじけなふおもひます夕部よしとらさまの御床のたのしみがほんにあやかるやうにして二三日

此末に彼愚雜俎に記し、生涯の學文を妓婦の帯一筋に代んといへるがあるべし殘欠せしならむ

獨 寢 終 活 東 子

神代餘波

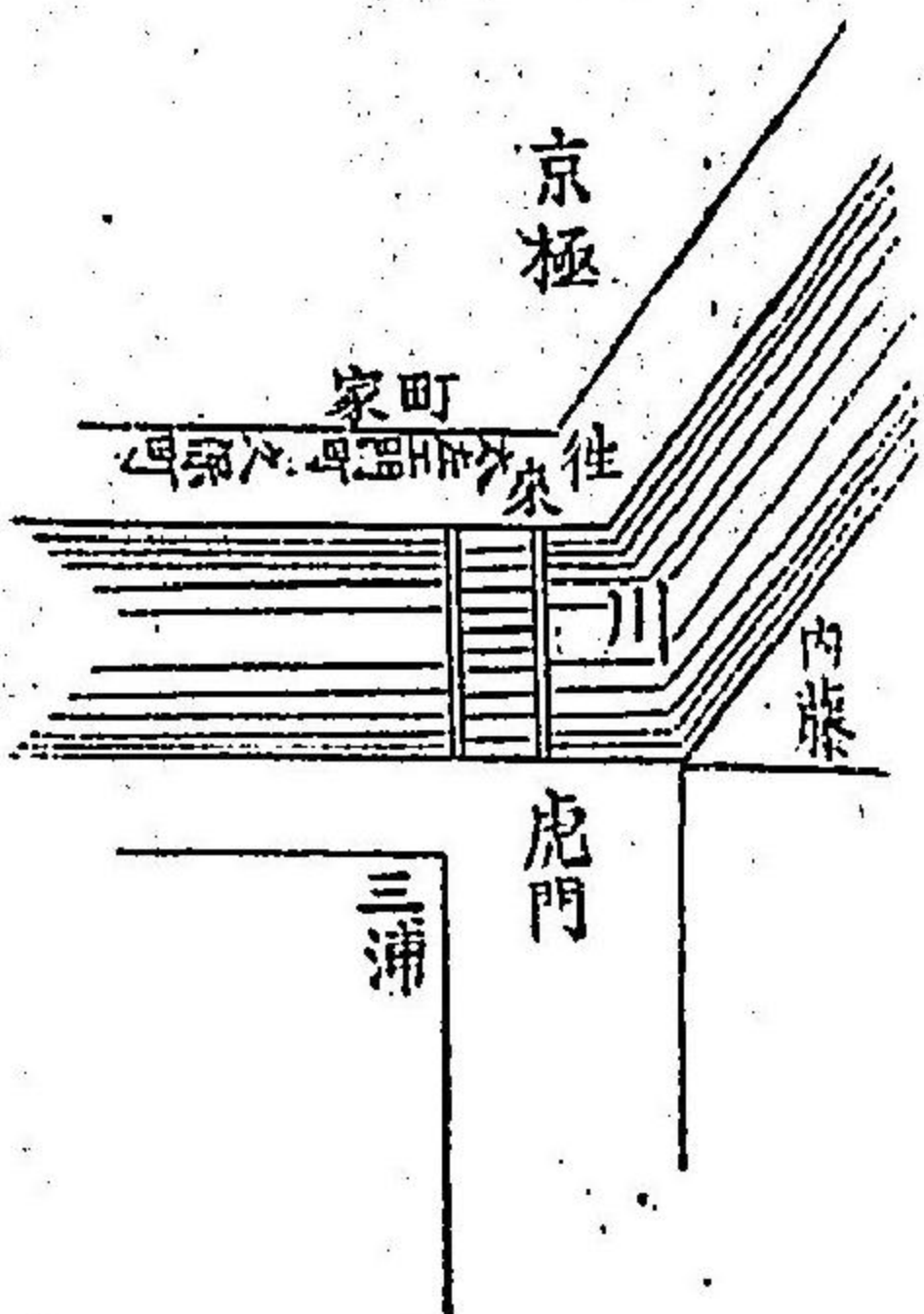
ちはやぶる神代にはくすくたへなる事のおほかり
 じはあめつちの始の時といひ神の御わざといひ人の
 さざりもてはかりしるべきかきりならぬを小ざかし
 き人々ばまのあたり見聞せざる事の正しくありしを
 いつはりともみたり言ともいひくたせるはから國人
 のいひし井の内の蛙が大うみをしらす短き釣繩もて
 深き井に水なしと思へるにひとしきおろか人也おの
 れ若かりし頃年老たる人の昔物語を聞いていかでさる
 事あらんと諾はざりしを年月の來經のまに物皆
 のうつりかはれるを思へばかの翁が昔物語も偽にて
 はあらざりけらしと思ひなりぬるまじて神代のく
 すし妙なるをいかでうたがはんかしこくもたふと
 くも天つ日つぎしろしめすめらみことのとほつみ
 おやの正しき傳へふみぞかし今いふ所のくさたも
 おのれまのあたり見もし聞もしつる事どもなればう
 きたる事にはあらずおのづからうつるひかはり行時
 代のいきほひはこれも神代のなごりならずや
 弘化四年の秋 八十老人彦麿

神代餘波上卷

齋藤 彦麿

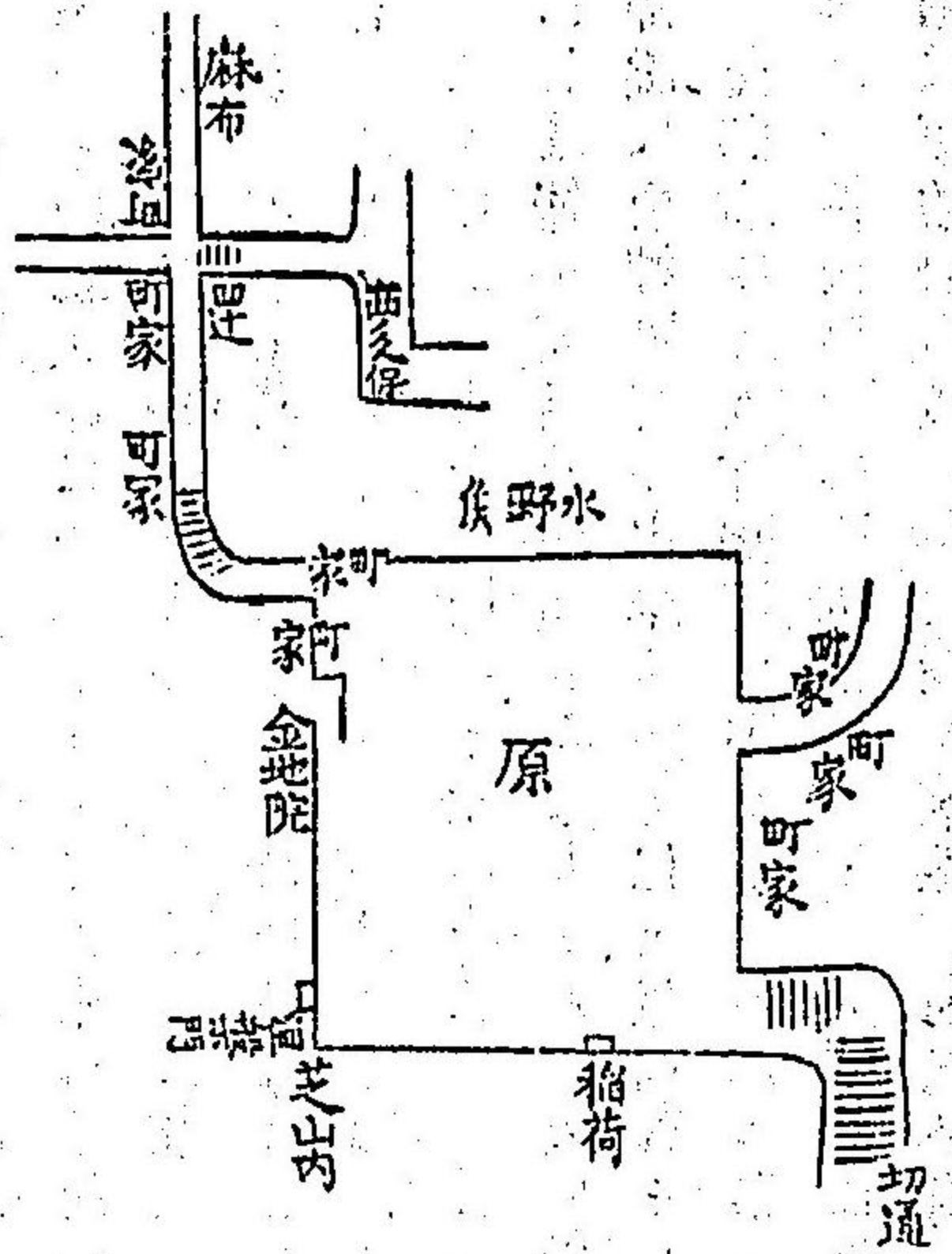
言に出で申奉るも恐き事ながら東照大神君天下一統
 し給ひて後に大江戸の大御城築かせ給ひしより六合
 不双の大都會となりて諸國の御大名衆參勤につきて
 は下が下の農工商にいたるまで集り來つる故に日々
 の繁榮に隨ひて物皆のうつろひかはれる事水の流る
 が如し古き事はしらねどおのれをさなきころの事
 を思へば今の姿はこよなくかはりて夢にやとた
 ざらるゝばかり也その頃は安永の末にて（おのれう
 まれしは智子天皇の明和五年なりこの 天皇崩御後
 の御謚は後櫻町院と申奉る）英仁天皇崩御まし
 て（後御謚は 後桃園院と申奉る）兼仁天皇（後の
 御謚は光格天皇）御即位まし〜て天明と改元あり
 其頃は家治公（後の御謚俊明院殿）萬民撫育し給ひ
 て天の下のこるくまなくあふぎかしこみ奉るに隨ひ
 て御府内御府外寸地もなく家並繁く立つゝ賑ひ榮
 ゆる事唐土天竺は更にもいはす一天四海中に又とあ

るべからざる大都會なれば春夏秋冬の移ひかはれる
 が如くきのふ帷子の肩ねき裾かゝけて汗流しつるが
 けふは厚衾いくへもかさねて埋火のもとにかゝまれ
 るが如くなるをしらね人はそら言と思ふめりおのれ
 若かりし時と今いたくかはりぬる事どもをいさゝか
 書しるせり猶忘れたる事又始より見聞しながら心に
 さめざる事などあまたあるべし思ひ出るふしあらば
 後に書加ふる事もやあらん
 ○虎御門外川岸つゝき土橋外までは町家にて御門前
 向は金毘羅酒屋と異名して毎月十日京極侯御屋敷金



毘羅へ備る神酒の小樽數千山の如くつみ置て目に立
 り其わたり今は火除明地になれり

○芝切通しは廣き原にて軍談師賣卜者淨瑠璃かたり博奕師豆藏新師酒賣菓子賣などありて賑ひしを今は増上寺山内へ圍ひこまれたり又涅槃門は切通坂の



半にありて通りぬけみだりにならず屈曲の細道なりしを今は上の方へうつして新坂廣くなりて通行自由なり金地院も入口の門は町家の並びにありし也稻荷も切通上り口にありし也

○麻布まみ穴は細く曲りたる道にて片方は小竹草なご生茂り片方は御家人衆の家にて道二三にわかれた

○芝赤羽根橋のこなたの草村に二三人の魚商人休らひしよりおこりて魚店立つべき又取はらはれし事土橋と同心趣なり

○八町堀本多侯御門前は廣き原にて諸商人賣卜者見せもの豆藏などありて賑はしく蜷川岸は倡家軒を並べたりしを今は絶果て原も狭くなりたり

○木挽町四丁目の東の方も廣き原にて南北に通じたる馬場ありて借馬師あまた居て雜人遊興のために價受て乗らしむる事常也又賣卜者よみうりみせもの諸商人博奕師豆藏など居て賑ひしを今は原も狭くなりて改て馬場を東西に通じ豆藏小屋淨瑠璃小屋のみ残り

○下谷黒門前邊こゝかしこ又市谷八幡平川天神其外社内々々又町々裏通新道などの裏屋に安賣女あまたありしをつぎへに絶はて、今はひと所もなし下谷邊には尼賣女もありし也

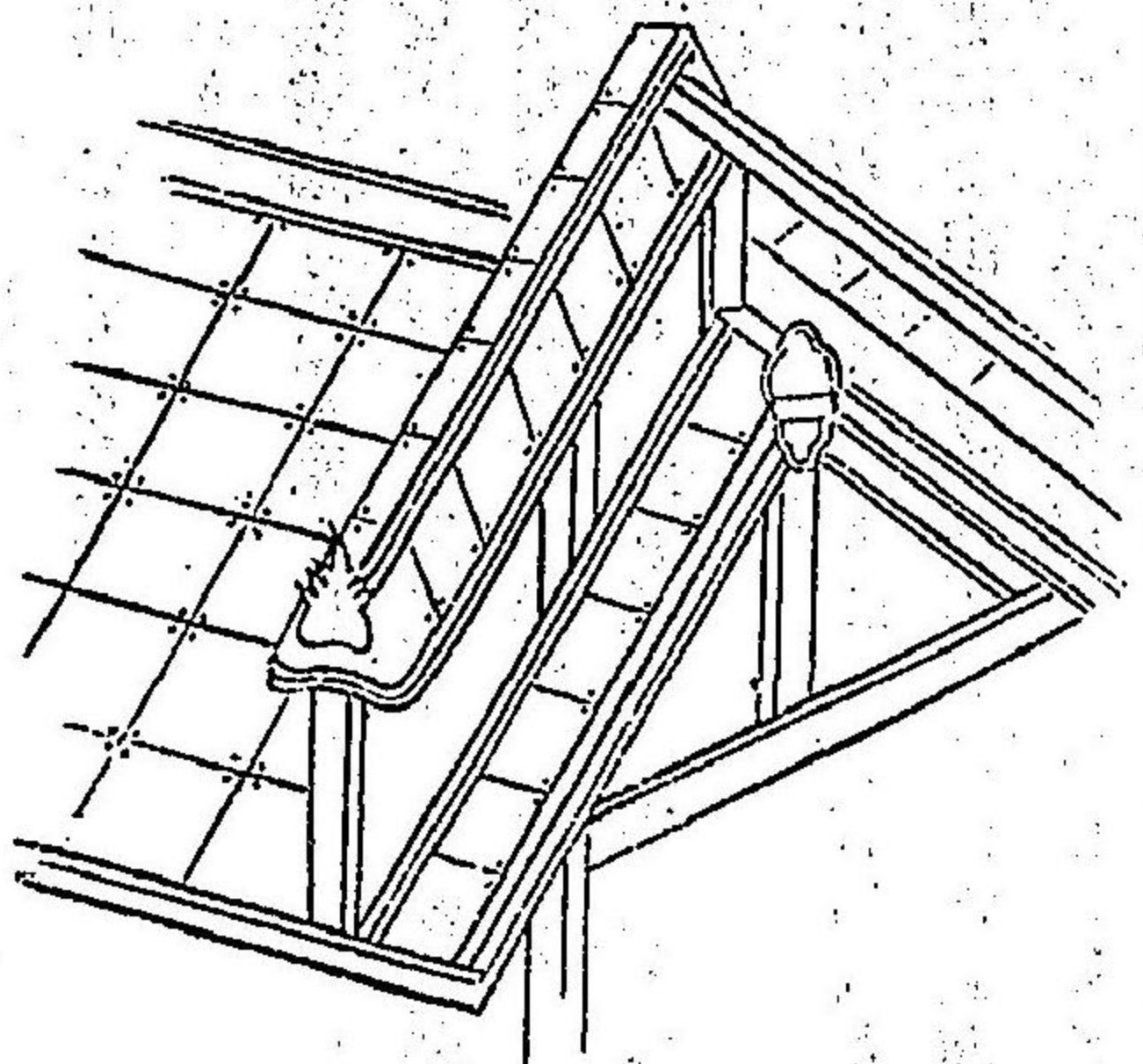
○大傳馬町一丁目の兩側木綿問屋にて他商賣の家はなしいづれも銅瓦にて霧除といふ物あり遠三より上にはあれど江戸にては此一町に限れり類焼して小屋にも霧除ありしを今は大方絶て三四

りしを今は一筋の廣道となりて紛るゝ事なし
○目黒不動の邊にはむねくしき茶屋はなかりし也農家にてあやしげなる酒食商へれど廿七八日の外は何もなかりしを今は都會に等しき酒店あまた出來たり

○堀の内雜司ヶ谷なども霞張の危畧なる茶屋なりしを今は目黒と等し並になりたり
○安永二年の頃濱町酒井侯（當時は安藤侯）御屋敷前大川へ新地築出して中洲と號く夏の納涼花火などの頃はいとも更にてかくし賣女ありし故に冬も繁花なりしを寛政二年の頃取はらはれてもこの海となりしかど其名残渚となりて今は霞菰のみ繁茂せり

○芝神明社内本社の方（向ひて左なり）遊女町也増上寺大門前より見れば倡家奥座敷樓の格子並び見えし也

○土橋外いさゝか廣き所に魚商人兩三人荷をおろして商ひしつるが日々ならはしとなりてこゝをさして買に来る人多くなりし程に所々に小屋がけしつるを後にはいかめしき魚店立並びにまた取はらはれたり



家はのこれり

○安永の頃までは男の躰月代大きく髪短く元結多く巻て衣袴も羽織もゆきたけみじかく帯巾狭かりしを天明の頃より月代ちひさく髪長く高く鶴首の如く結ひ衣羽織たけ長く帯幅廣く鼻紙入も小菊紙二折にして入べく廣くしていふ詞も言を略きて聞取がたきを通言といひさる人々を通人とも大通ともいへり安永以前の姿なる人を昔風とも野暮ともいひていやしめそしりたりしを近き頃は又むかしの野暮がはやり

出て當世風となり大通が古風となりたり時代のうつりかはりのすみやかなる事三伏の炎天に寒風を忘れ

天明頃の通人



天明頃の野暮人

嚴冬の雪霜に暑熱をしらざるがごとし
○新吉原むかしは京橋住町柳町の邊にありしよし我はしらす其後大門通へうつされしよし夫もしらす今の所にめなれてはむかしの事偽にやと思はるゝ也傳へきくかの廓御免ありて立置るゝは御評定所にて御役人方御酒飯を御頂戴御給仕のために日々遊女三つづゝ出て勤仕せしと也今の趣にてはいかにいにしへならんからにさる事あるべくもおもほへずされど

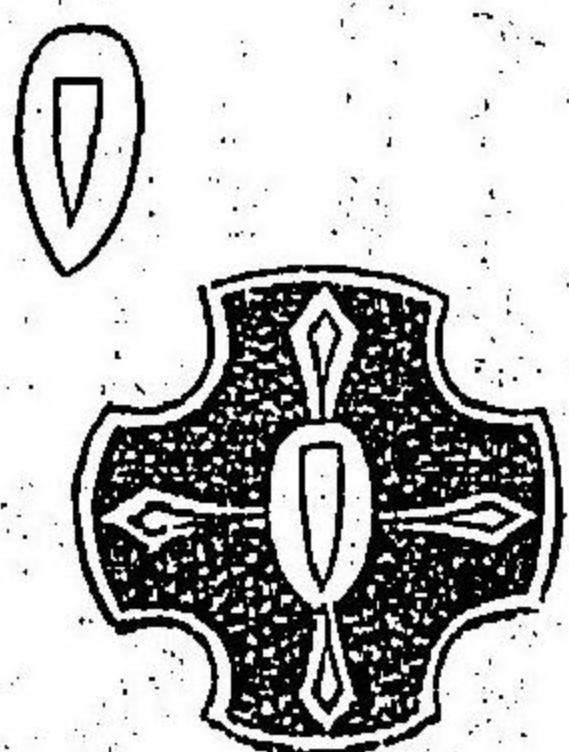
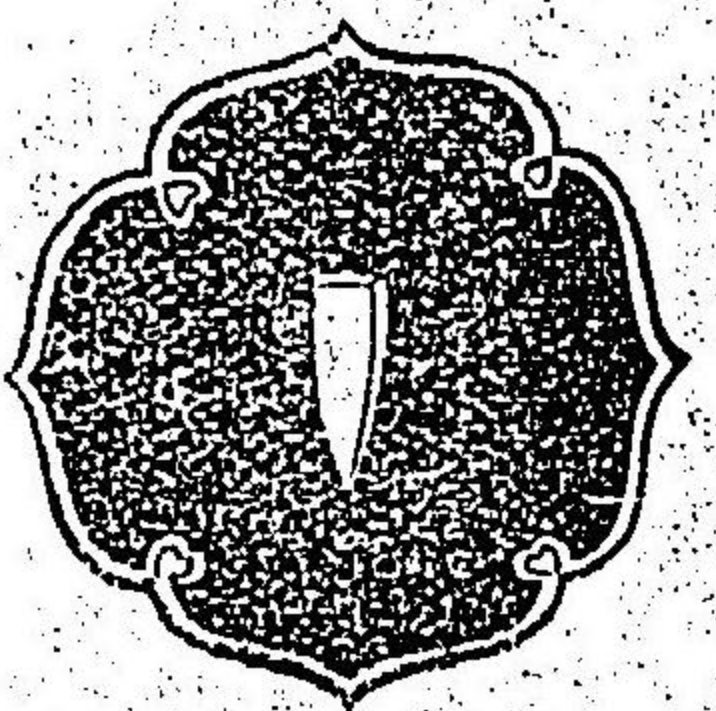
今に目なれていにしへを疑ふはいと少量也むかし京島原の遊女が色よき紅梅の枝に(古今集紀友則の歌)「君ならて誰にか見せん梅の花色をも香をもしる人を知る」と書たる短冊を結びつけて禿にもたせ非藏人ヒサカサ口より烏丸大納言の卿に奉りしかばたゞに筆とり給ひて其短冊のうらに「君ならて誰かはみせん梅の花色をも香をも知る人」と書てかへし給ひしよし聞及べり今の御代に非藏人口まで遊所の禿など行べきにあらずされば御評定所へ遊女の御給仕に出たるもむげに偽とはいひがたし其短冊は表裏二枚とし一對の表具となりて光廣卿鸚鵡返と號して或國守の御藏となれり
○天明の頃或國守新吉原を見物し給はんとて御願ひありて御父子御同伴にて御家紋の先狭箱對の二本鎧袋入長刀爪折傘あまたの御供奉りて大門を入仲の町より東西廓中巡見して歸り給ひし事あり其後は絶てさる事なし
○佃島の隣の石川島といふはもと石川八左衛門殿御住居とて舟にて出行し給ひ年始には鐵砲洲川岸に假小屋を造りて取次の侍出居たり其後御屋敷替ありて

今半は人足島となり半は町人の物置場となれり
○京橋弓町はさら也其外にも弓師矢師鞆師弦師鞆師など所々にありしを今は弦師のみは絶てなくなりたり今は弓射の人みづから弦造る事となりし故也ふる職人歌合にも弦師あり今はみづから矢を作る人もあれば後々は矢師も絶やせん弓打つ人はいまだなし弓師といへども始よりうつ事あたはず日本橋壘表屋より買取て繕ひ直すのみなりいにしへ丸木弓の頃は武士みづから造りたる也夫木集に「けふみれば弓さる程になりけり植し岡への楓の片えた「關守か弓にきてふ楓の木につきせぬ戀に我おどろへぬ又竹木を合せたるは的弓也是も同集に「梓弓末まで通るふせ竹にはなれかたくも契る中かな(頼政家集、思はずや手ならず弓にふす竹の一夜も君にはなるへしとは)
○泰平の御代に馴て怠りの心より武士も武をわすれ花車風流増長して放蕩に流れ刀脇差うはべのみ美麗に大小一對短くやはらびたる躰を好める故にたまたま田舎武士がゆきたけみじかき衣著て長劔短刀を十文字にさし肩肘張ありくを野暮人と嘲りしを今はや

や昔にかへりて此頃はこゝにもかしこにも太刀造とかいひて古風の合口の短刀さす人多しさる故に今は

鏝

大切羽二枚



葵鏝(大切羽あり俗に太刀鏝とも三枚鏝ともいふ)はやれり夫木集に「かつはまたさす鞘口にあふひ鏝心ありける金たくみかな
○靈岸島は近き頃築立新地間なき故に踏ありければ大地うごく故に俗に藪蕪島といひし也こゝに倡家ありて賑はしかりしが今は商家となれり
○南町奉行所にて小野田氏の犯せる罪糺明し給ふ折の調役與力ば中村又藏直峰なりしに評席に於て歌の贈答ありそれによりて罪白狀に及びしよしこよなき功なり其歌は小野田氏「かれぬともいかでなき名

に朽ぬへき何をたすの森の下草かへし中村氏「かれぬとも根をあらはして朽よかし罪を糺の森の下草このかへしを感じて白状に及びりとなん直峰は加藤千蔭翁の門人にて我じる人なり

○天明六年丙午の年は初春より季春まで日々火災打ついで夏は日々の大雨晴間なく秋は洪水ありて家を流し人馬をおぼらし田島を潰したる故に翌七年丁未のとし世上一統飢饉に及びいづくより集り来ることもなく畿群といふ限りもしれず町々の家々を打崩しありけり一人もそこねず物一品奪ひ取らず五月廿日未の時より丑の時頃迄わづかに六時七時の間に御府内むねくしき家は残るくまなく打崩し小商人の家をば除きたり明日朝見しに米穀は大道に雪の如くつもり酒醬油は洪水の如く流れ呉服物は引破りちらして紅葉の如く紙類書籍の類は家々の棟にも軒にも散亂して淺ましき世の成行と思ふ程もなく松平越州侯御役にて伊奈攝州侯によさし給ふ事ありて時の間に泰平にかへり萬民御恩頼をあふぐ事なれり後にきけば京大坂長崎なども同月同日さる事ありしと也いかなる神のあらびならん一朝一夕の事にはあらざ

黒はの中へ入たるにて黒き事しらるこは源平盛衰記にあり

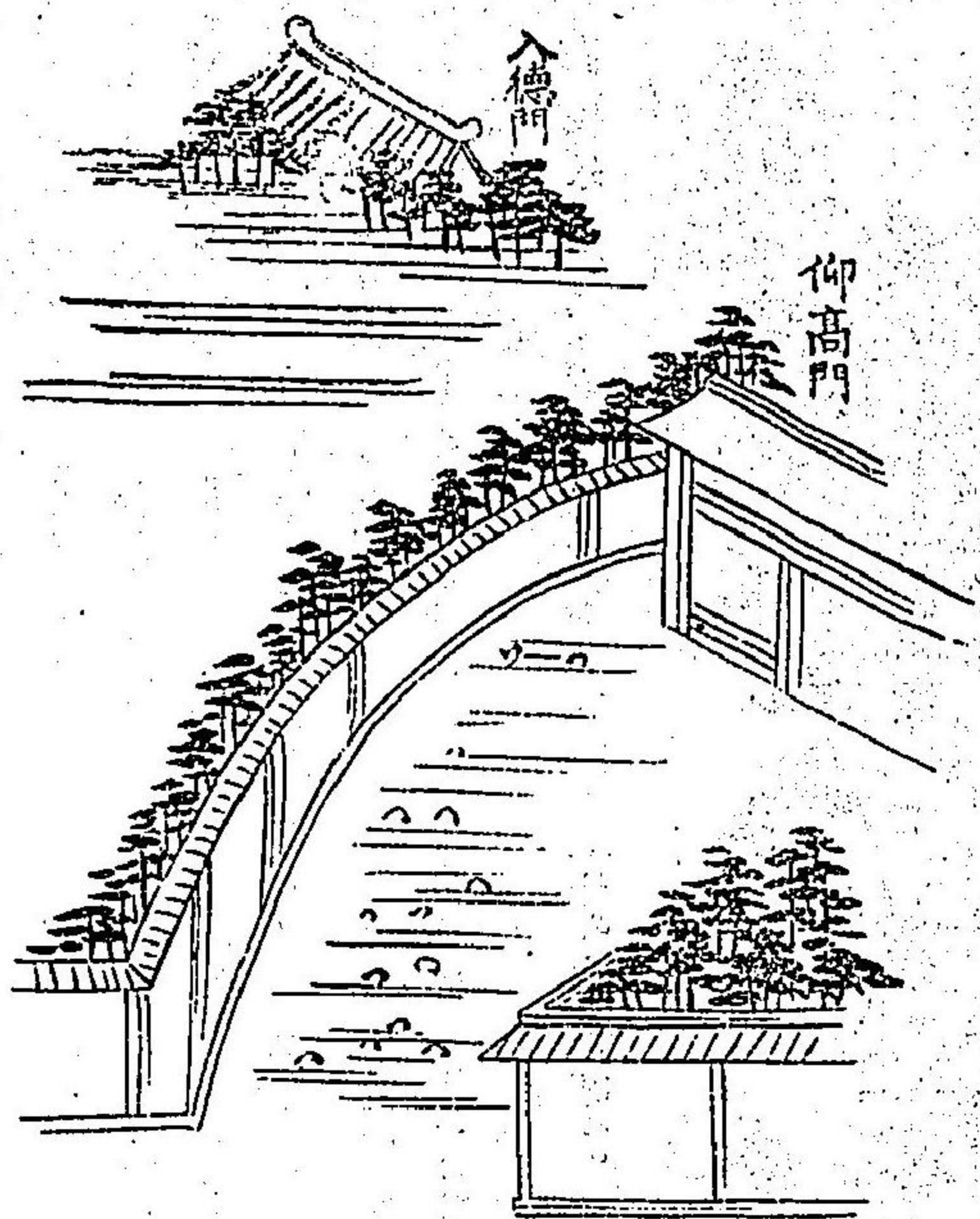
○芝金杉橋のこなた左の方橋臺の余地に經二尺ばかりのすいき一株ありいにしへの武藏野のなごり也といひ傳へたりしを文化の火の災に焼し故に其後は右の方余地に移したるを又後の火災に焼て絶果たり今武藏野の名ごりごとて入間郡にあるをのみ人しれごさるちひさき事にはあらず更級日記に菅菰高生茂りたる中を分行さまなるは今の尾張町芝口などのほごりごおもはる夫木集に「けふも又菰の末葉を空に見て露分くらす武藏野の原下總の小金が原下野の奈須野の原陸奥の安達が原など其所々にてこそ國は異なれ菰薄生茂りたる武藏野の一ついさなりし也太平記に四方八百里にあまれる武藏野に人馬共にみちみちと云々是六丁一里にしても百三十里余也續古今集に「あふ人にさへはかはらぬ同し名のいくかになりぬ武藏野の原太田道灌侯の「露おかぬ方も有けり夕立の空より廣きむさし野の原

神代餘波上卷

りけらし（正月元日日蝕皆かゝり眞のやみ也諸侯大半御登城なし早く出仕の御方は退出延刻也）中橋米屋を崩す時に四十餘の大法師剛力なると十二三の美童飛鳥の如く家棟をはしり崩しまわれり

○御納戸染といへるは花色の黒みある色なりしを近き頃は空色と淺黄との間色にて匂へるをいへりうつりかはるもあまりなる違ひなり
○かち色といふも極上紺の濃く黒くなりたる色也さるは近年は空色と淺黄との間にて匂ひやかならぬをいへりさる物にあらず紺に染て白にてつき又そめて春きいくたびもくしかすれば黒くなりて赤き光り出る物也かの夫木集に「播磨なる飾摩に作る藍島いつあなかちの濃染をかみん「飾摩なる市女が持る襦布の色深くのみ人を戀ひつゝなごこぞめども色深くともあるにてこき色なる事論に及ばずむかしは黒染のうへに赤みをそめて紛へたるもありしを今はその紛へ物をかちん染といひ空色と淺黄との間色をから染といひて二色とするはをかしき事（筒井淨明が黒糸の鎧にぬり弓に黒篋黒羽の矢にぬり絃はげ黒馬に黒鞍をおきて眞黒なる出立の中に飾摩の襦の直垂と

樹木茂りて小ぐらく上の方右へ斜に上りて御門あり



いと籠略にして寂寥なりしを寛政十一年美麗にいかめしく成しは榮行御代のしるしなるべし
○本所獲江摩利支天は佛鉢にて背に手あまたありて弓矢劍鉾など持たる像にて修験者安置したるを後に神職の持となりて手は左右二本残して外は皆取拂ひ

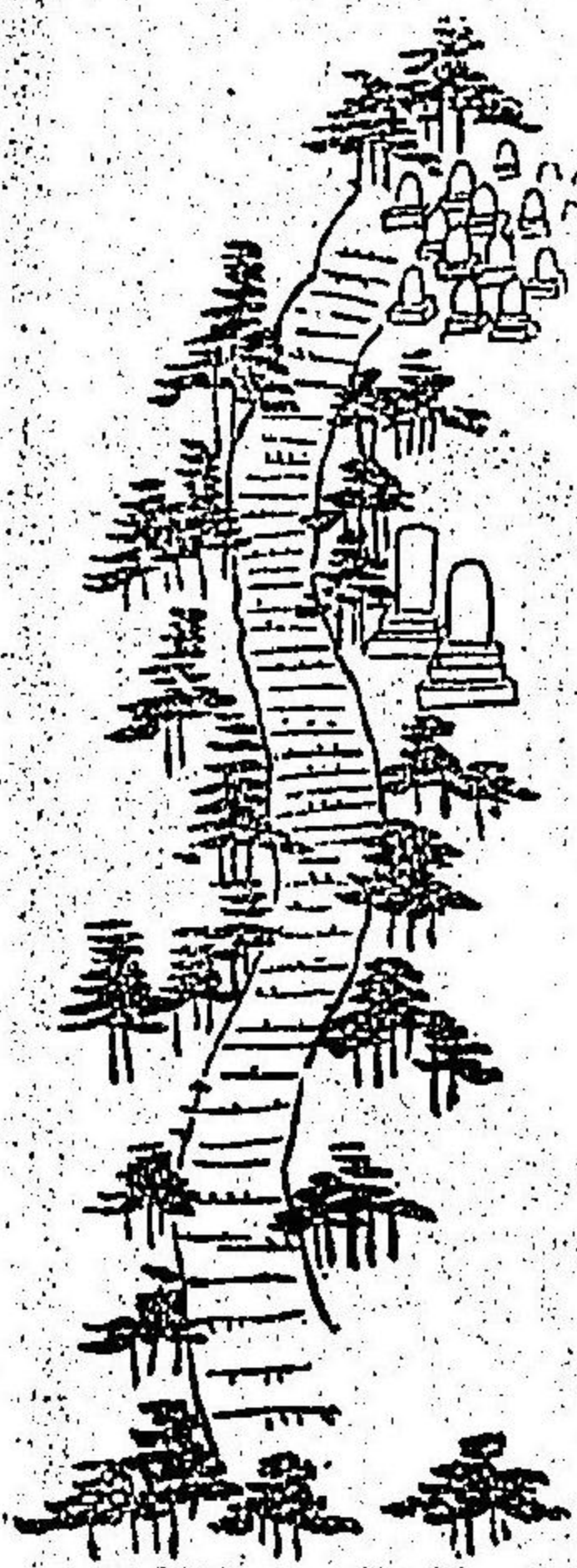
日先大神宮と號し紀伊國名草郡日前天照大神と同神也といへり摩利支天は陽炎ともいひて日の前にあるよし名義集にも義楚にもあれど紀伊國のとは異也これ日は日前かれは日前字は同じけれも異也(摩利支天の神主吉田兵庫總義は船橋御殿なる宮上總介直利朝臣の門人にて我孫弟子なり)

○木母寺梅若塚はむかしわらぶきの小寺なりかたはらに塚ありてうへにちひさき祠あり山王權現といふ其側に古き柳の朽残りたる株のかたへに新に柳あり常に行人稀也其ほとりに酒食商ふ農家もわづかにあれどいと淋し祭日なる三月十五日にも菜飯田樂の外はなかりき今は都會におさらぬ茶屋など出來て絃哥の聲たえず中々に鄙俗の地となりて古雅を失へり○荏原郡蒲田村農家の邊田畑のめぐりに梅の木あまたありて花の頃は見に行人あればこしかけだつ物出し置て瀝き茶はあれど酒食はなし花を乞へば好む所の枝を切取ていさゝかなる價にかへてあたへぬ後には梅木あまた大森の和中散を商ふ家の庭にうつしのかめしく繕ひ立て四阿だつ家所々につくり毛むしろ敷て筆硯短冊など並べ中々に風流を失ひ上べをかざ

山にそひて行傍に小き古井あり吉良上野介義英朝臣の御首を洗ひし水なるよし建札あり坂をのぼりゆけば右の方に平地ありて冷光院殿(淺野内匠頭長矩朝臣)陽泉院殿(御室)ふたつの御廟あり猶のぼりて横に石壇を上げば平地にて義士中の墓あり今は山坂とも平均して道廣くなし却て賤しく成たり○幼遊びの草双紙といへる物ははかなき子供すかし物にて或は頼光大江山入桃太郎が猿犬雉など隨へぬるさま或は朝夷島めぐり又は狐の嫁入舌切雀妖物盡しなどしげなき物どものみなりしをいさゝか好事になりてよき作者つき〜に出來て近き頃は戀川春町芝全交など世にめだれつれごさばかり才力はなかりしを岩瀬齋齋別號山東京傳といひしは古今の一人にて和漢の學びにたけ雅俗の人情をよく辨へ老少に通達して奇々妙々の作者也その門弟に曲亭馬琴といへるは元武家の浪人にて京傳の門人となり町醫となりて瀧澤宗伯と名のり後に家主となり伊勢屋清左衛門と變名し終に戯作の名海内に聞えしは全く京傳の恩顧也其後の式亭三馬柳亭種彦など皆京傳の糟粕也中には古言をなま嘴にして通しがたく吞込が

る山師の賤しくきたなきころさあらはすくさはひとなれり

○葛飾郡新梅屋敷といへるは龜戸の梅屋敷に對したる名にて鞠塙がまだ北野屋平八といひし時弘きたるにていさゝか梅木植たる頃花見がてらに村田並樹(後に春門と改む)片岡の寛光おのれと三たりにて立よりしに北平いへらく人あまたとひくべきは櫻などちりての後はそのかひなし梅は後に實を結べば活計の爲に三百六十株うゑて一日一株の料にあてんとすといへり北平には似つかはしき慮也後々は數百株に及び秋草さへおほしたて、一家をおこせり(北野屋平八といへる故北平と稱し後に菊屋宇兵衛と改て菊宇と云しを鞠塙とせり)



たき事あまたあり(京傳は古今の一人なる事世人しる所にて論なしされど和漢の學にたけたる人には非ず切抜き學文なり此人のみに限らず戯作者は皆しか也○宗伯は馬琴が男にして松前侯の醫師也○三馬種彦共に京傳の糟粕ながら下手ならず戯作者にて古言を漸しり初めたるは此二人也京傳迄は却てなまがみか多し猶いふ事あれど紙上せまく且うるさければやみつ)

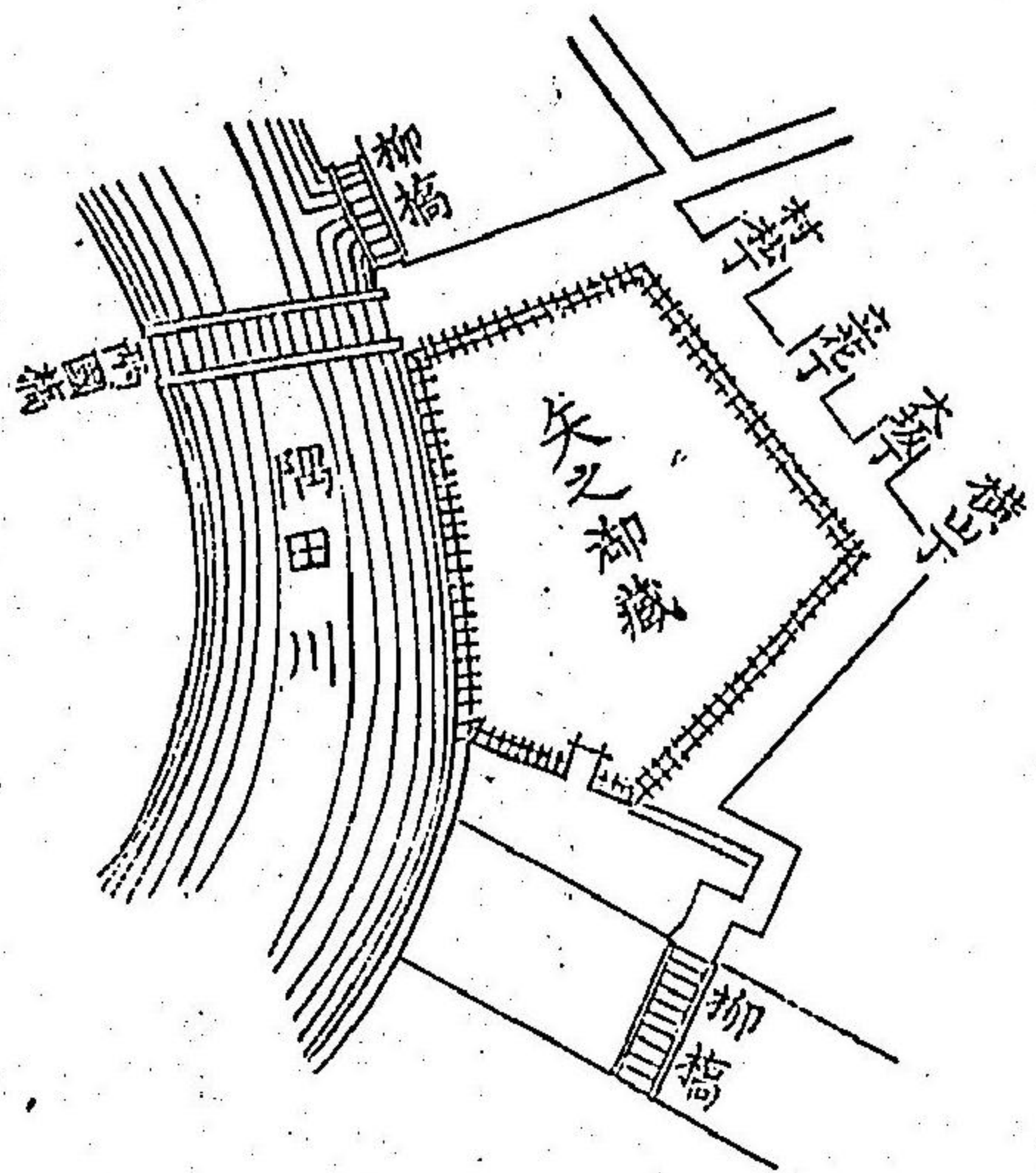
○懷中鼻紙入は天明のころは多く井といひて太織棧留などにてかますの如く縫たるを其後三徳といひて羅紗純子にて小菊紙二折のまゝにて入べく巾廣くぬひたるを當世は小菊紙四ツ折にして入べく幅狭くぬふ事となれり○堺町中村勘三郎一たび都傳内とかはり又元にかはりたり葺町市村羽左衛門一たび桐長桐とかはりて又元にかへり木挽町森田勘彌一たび河原崎權之助とかはりて再び元にもとらず木挽町山村長太夫斷絶の後再興なし外三座今は淺草聖天町に地所を給ひてかの方へ引移れり京大坂の戲場とは異にて諸藝の最上は荒事といふ是江戸に限りたる事也其根元は下總の

成田郷市川村堀越重藏と云者江戸へ出て男子をもふく是初代團十郎也延寶三年五月木挽町山村長太夫にて曾我五郎時致をして始て荒事を弘めたり上古より剛強勇猛の國風也萬葉集に「鷲か啼東男は出向ひ顧もせず勇たる武き軍士とねきたまひ云々續日本紀にも敵に對し難に臨て生命を惜まず戦を習勇をふるひて必先鋒を争ふ云々又宣命にも東人は常にいへらく額には箭は立ども背には箭は立ずといひて君を一心に守るものぞ云々市川五代目までは家風を守りて荒事を旨とせれど七代目にて家風を亂せり

○尾張町二丁目西側北角より南中程過るまでは龜屋七左衛門夷屋八郎左衛門といへる吳服商人の家只二軒なりしをその中間にわづかに九尺間口なる研石商人の家ありしを兩家より價高く地所を買て家を廣くせんとはかるにかの研石屋の主開かれず兩家ともにさばかり廣きを猶あかず狭しと愁ひ給はゞ外に廣き地所あるべければ引移り給へ兩家のあきたる地所は我買受んといひし程の根強き研石屋も今はいづくへか行けん知れず龜屋も今は跡方もなくなりてたゞ夷屋のみ残りける

に従ひて讀頭は狂歌がましきもありしかど各一家をなしてより後にはよきは一首もなし○なれども知らぬ也先の戯作者の評の如しおかしくもあらず國學者にて狂歌師戯作者等を論ずるはをさなく不見識なりさりながら文才の及ばずしてそねむが如し

○兩國矢の倉は今名のみなれどむかしはこゝに御柳橋二所あるは矢倉の表裏門前なるべければ矢の倉橋なるべけんを矢の倉橋と云ひしを又柳を植て柳橋と稱へたるなるべし



神代餘波上卷

○我幼き頃より鯉を好みて今も猶やますむかしは今如く所々にあまたはなかりき尾張町の大和田小船町の山利湯島の穴などなり其後尾張町の鈴木浮世小路の大金麻布の狐などつぎに出來て今は町毎に所せからず成しのみはいにしへに増れりいかさまにも天下無双の美味なるが上に諸病を治し腎精を補ひ氣力を益す和漢百藥の長たり

○むかしの狂歌は眞の歌よみ人の折にふれての戯れなれば曲節戲言は交れど歌にかはる事なし其後別種の如くなりしよりいひかけ兼用の假名も違ひてにをはもどくのはぬ事となりての後四方赤良(蜀山人)と云しは人情の實をうがちて古今の一人也其門弟に宿屋飯盛(六樹園)鹿津部眞顔(狂歌堂)此二人は小ざかしく師老人の本意にたがひて別に俳諧歌と云名目を立て弘めんとしつるはいみじき心得たがへ也俳諧歌は眞の歌よみ人の折にふれての戯言也歌よめぬ人の及ぶべき所にあらずさるけにや飯盛眞顔がよめる俳諧歌といへるは此の歌の未熟なるを狂歌の作意なきと混じたる如くにておかしくもなくをかしくもあらず(飯盛は門人にあらず○飯盛眞顔も蜀山人

倉ありて御矢を藏め置給ひし也元祿三年の大繪圖に御倉とあり今の横山町二丁目中程より大坂町立花町村松町折曲りて橋際までにあり今は御旗本方御屋敷又町家などになれり

○二代目市川團十郎が日記だつ老の樂といふ隨筆の中に我幼年の頃始て吉原を見たる時黒羽二重の三升の紋の單物振袖を著て右の手を英一蝶にひかれ左の手を晋其角にひかれて日本堤を行し事今に忘れずこの二人は世に名をひかせたれど今はなき人也我は幸に世にありて名も又頗る聞えたり云々とあり是正徳享保元文寛保の間なるべし我幼き頃は黒縮緬黒羽二重などの單物著る事は武家一統の常也今は綿入袴にはあれど單物にはなしたまへ田舎武士が著れば三枚におろして塩辛にしたりと笑ふ事となれり時代のうつろひ神代のなごり也

○むかし谷中の感應寺三田の中道寺碑文谷の法華寺四谷の自證寺千駄ヶ谷の寂光寺の五箇寺とも邪義によりて元祿四年四月廿八日各遠流に處せられ五ヶ寺共に天台に改宗し上野の配下となれりさるを其五ヶ寺の内感應寺には御朱印と富の興行ある故にもとへ

取もどさんと願ひしを寺をばゆるし給はず寺號のみかへし給ひて感應寺をば天應寺と改め給へりさる故に鼠山の邊に地所を給ひたれば新に感應寺造營して莊嚴の結構言語道斷たりしを程もなくいまだ山門出來ざる程に破却すべき台命くだりて時の間に取はらひあまたもなくはべりしは夢の内なる夢のごとくにてさめても猶うつゝとちにはかへらぬさま也

神代のなごり中卷

齋藤 彦磨

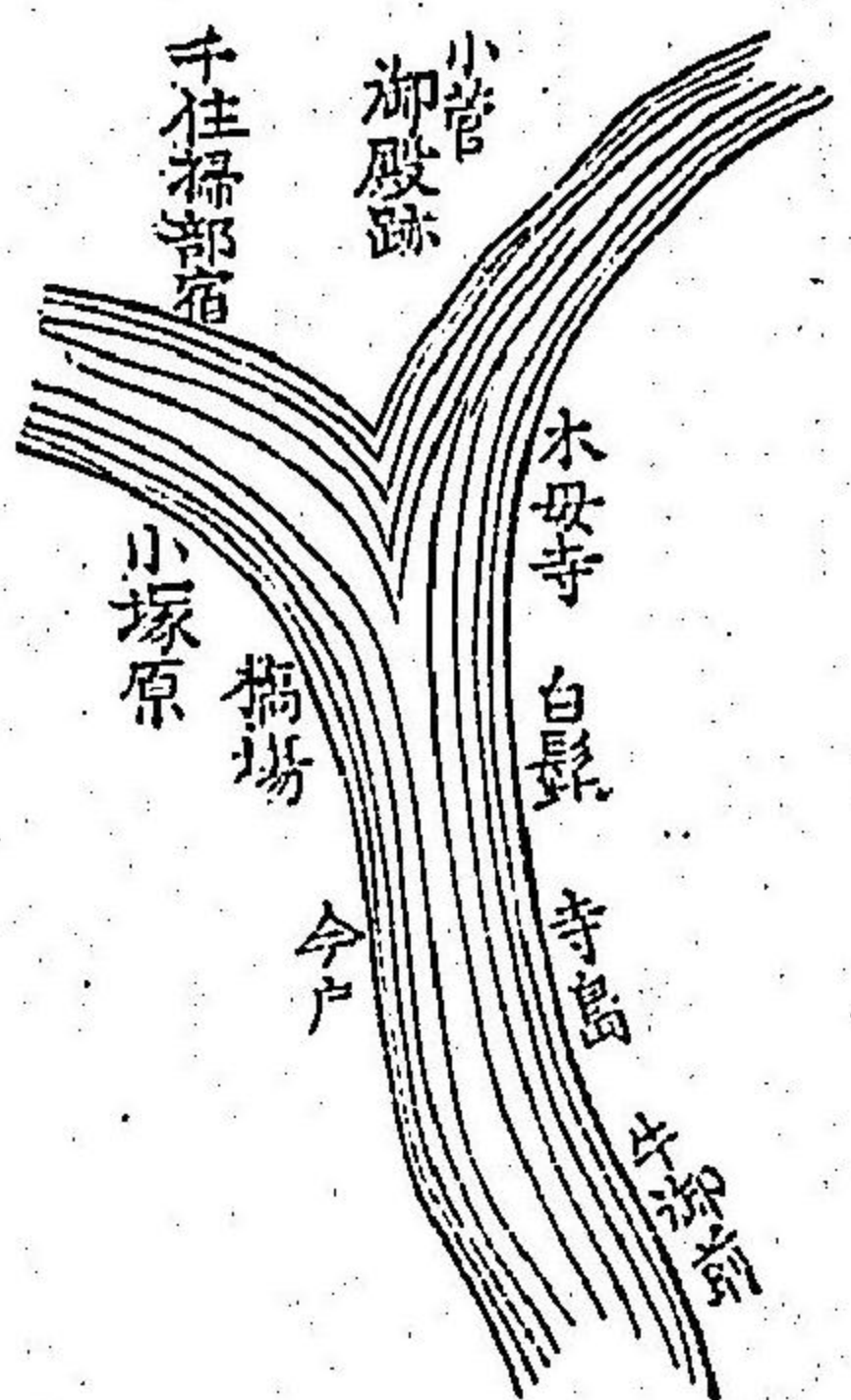
年月の來經のまに／＼物皆のうつろひかはれるはいつくの誰がしいづるわざともなくこゝもかしこもおのづからなるいきほひにて人のちからもてこゝむべきかぎりにはあらずいとも奇々妙なる神代のなごりぞかし

○小菅御殿跡は今は百姓地となりて御代官支配所となりて田畑のみなり構の内に一筋の川ありて兩岸に櫻あまた植られし故に花の頃にはめもあや也聞傳へて見に行人も稀にはあり後々は繁花の地とやなりなまし隅田川と綾瀬川と落合ふ所なればむかしは廣らかにて海邊のごとくにやありつらん萬葉集の東歌に古須氣呂乃宇良布久可是能安騰須酒香歌奈之家古呂平於毛比須吾左牟これは東語なれば聞取がたし小菅の浦吹風の何とせは愛しく思ふ妹を思ひ過さんこ也浦といひしにてひろかりしなり思ひやらる(又思ふにいにしへは牛島邊はなくて廣く海よりつゞき今の

神代のなごり上卷終

沙入里までは沙の差引ありし也海苔を淺草にてとりしもその頃なるべし

○東語のついでにいふ萬葉集の頃の東語に不解不逢不在などをばとけなへあはなへあらなへなどいへり今時はとけねへあはねへあらねへなどいへり又寄よ寐よ附よなどいふべきをよしろねるつけるなどいへるは萬葉集の頃も今も同じ事なり何とてといふべきをむかしはあせといひしを今はなせといへり



○日ぐらしの里はもとにひほりといひて新堀の字をかけり元祿二年北條家分限帳に新堀里遠山彌九郎知行所とあり後々はにひほりを入聲につぼりといひし故に元祿三年繪圖には傍假にてニッポリとあり寛

延年中の江戸名所繪圖卷十四に始て字を改めて日暮里とかけれど猶につぼりとよみし也近き頃にいたりて日暮里の訓によりてひぐらしのさといへり上野國新田はにひたなるを和名抄の頃は音便ににふたといひしを今は入聲にてにつたといへると同日の談なり

○安永八年十月(十二才の頃)伊豆八島やけて駿遠三まで灰ふりし事あり
○天明三年七月我十六歳の頃江戸中家々の戸障子響き一天かきくもりて灰砂ふりたるは只事にあらずと人々驚きあやしみけるに五六日経て聞けば信濃國淺間山硫黄硝の氣發して山燒となり萬座山崩れ利根川へ泥水吹出し大巖小石悉く輕石となり家屋人馬おびたしく亡びたり其時の石をもて來つる人ありて見しに徑一尺計りの圓石輕き事綿の如くなりし也ことし弘化四年三月同國同山燒たれどさる響もなく灰砂もふらざれど信濃越後の兩州は希代の大地震にて城廓神社寺院民屋悉くゆり崩し山を平地とし川を岡となし人馬の亡ひたる事天明には數百倍也思ふに天明の頃は上へ發しこたびは横に土中を貫き發したる

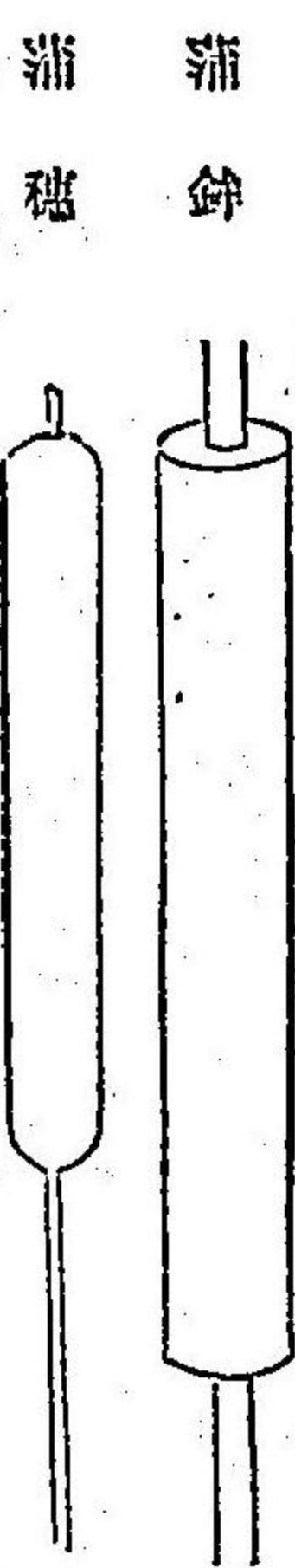
なるべし同じ山焼にても天明と今年とは大に異也其頃十六歳の壯士今は八十の翁となるも古今のうつろひ也ついでにいふ或は大地震にて山を低くし平地を高くし或は洪水にて川を岡とし野を池とするなどのくすしくあやしきは神慮のみしわざにて人力の及ばぬ所也そが中にも伊豆國三島の伊古名姫の神はさる事司り給へり

日本書紀天武天皇十三年十月己卯朔壬辰連千人定大地震擧國男女叫唱不知東西則山崩河涌諸國郡官舍及百姓倉屋寺塔神社破壞之類不可勝數由是人及六畜多死傷之時伊豫温泉沒而不出土左國田苑五十餘萬頃沒爲海古老曰若是地動未曾有也是夕有鳴聲如鼓聞于東方有人曰伊豆西北二面自然増益三百餘丈更爲一島則如鼓音者神造是島響也又續日本紀孝謙天皇天平寶字八年(十二月西方有聲似雷非雷時大隅薩摩兩國之堺煙雲晦冥奔雷去七日之後乃天晴於鹿兒島倍兩村之海砂自聚化成三島炎氣露見有治鑄爲形勢相連望似四河之屋爲島被埋者民家六十口八十余云々)にも薩摩大隅の界に三島涌出し重祚稱徳天皇神護二年にも大隅新

島出來たり日本後紀淳和天皇天長九年にも伊豆の三島の伊古名姫神の奇く妙なる御しわざあり此姫神の御ちからの遠國まで響く事かくの如しさてまた古今の一大奇事あり光孝天皇の御代仁和三年丁未七月三十日大地震にて仁壽殿紫宸殿大藏省諸司舍屋等悉く崩れ天皇は大庭にたせ給ひよし扶桑略記にあり攝津國殊に強かりしとなりその時も信濃國大山嶺崩巨河溢流六郡城廬拂地漂流牛馬男女流死成丘とあり丁未の歳といひ信濃國六郡といひ全く今年地震の災と同じきもあやしき事なり

任之職原抄に五位時任之執柄息外不可然云々(いにしへ郡縣の頃は位田あり四品は四十丁にて現米千石也正四位は二十四丁にて六百石從四位は二十丁にて五百石也法堯となりては知行定まりて位田はなし故に從四位下を四品と稱するは大なる非也)

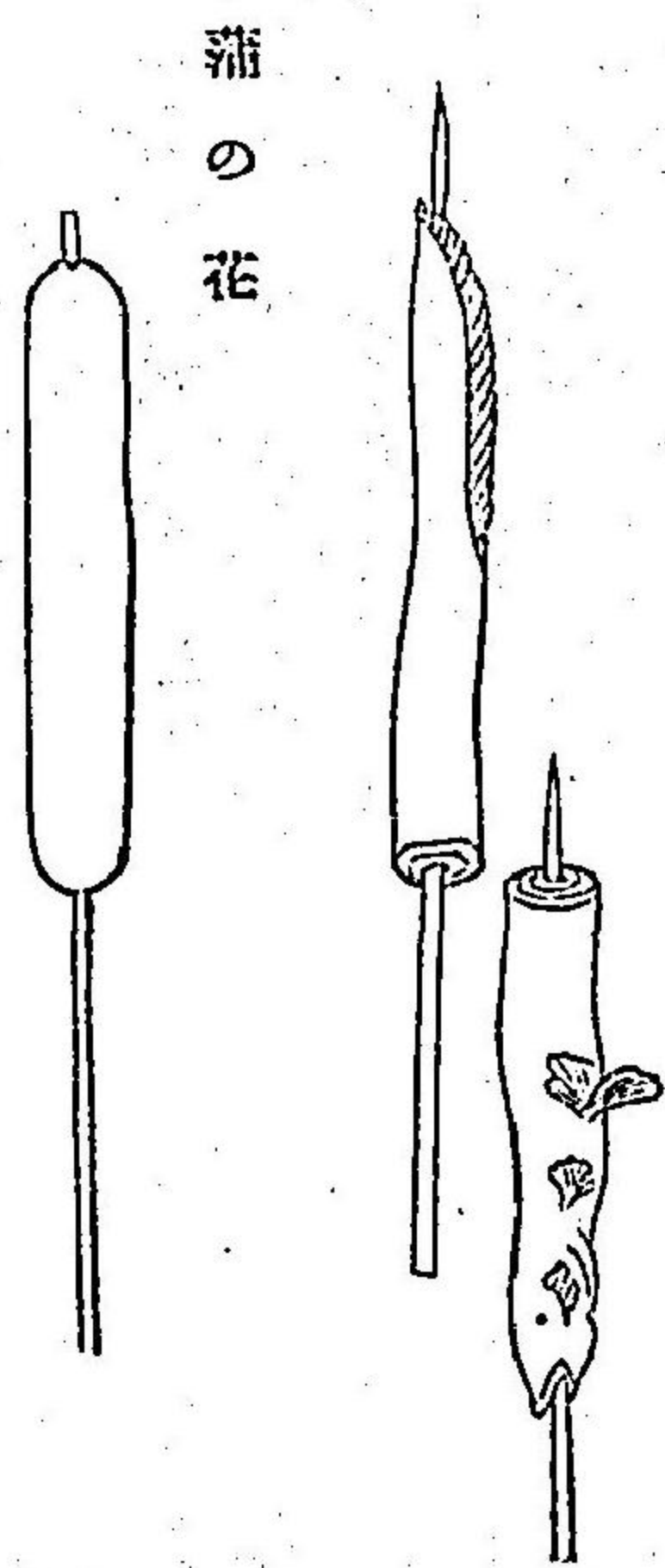
○武家の下男を今は中間といへるがならはしとなれど堂上家にては侍と下部との間に中間といふあり布衣記に若黨中間は上下著を召具すとありて折烏帽子に小結して直衣に大帷をかさね袴に大口をかさねて著るが中間にて下男の事にはあらず又下男を俗におしなべて折助といへれどもとは一人の名にてむかし武家雇はれの下男の中に赤坂邊住居の折助といへる者稀なる容顏美麗にて世にめでられし故に折助とも赤坂奴ともいひてもてはやされしが今は通稱になりし也



神代餘波中卷

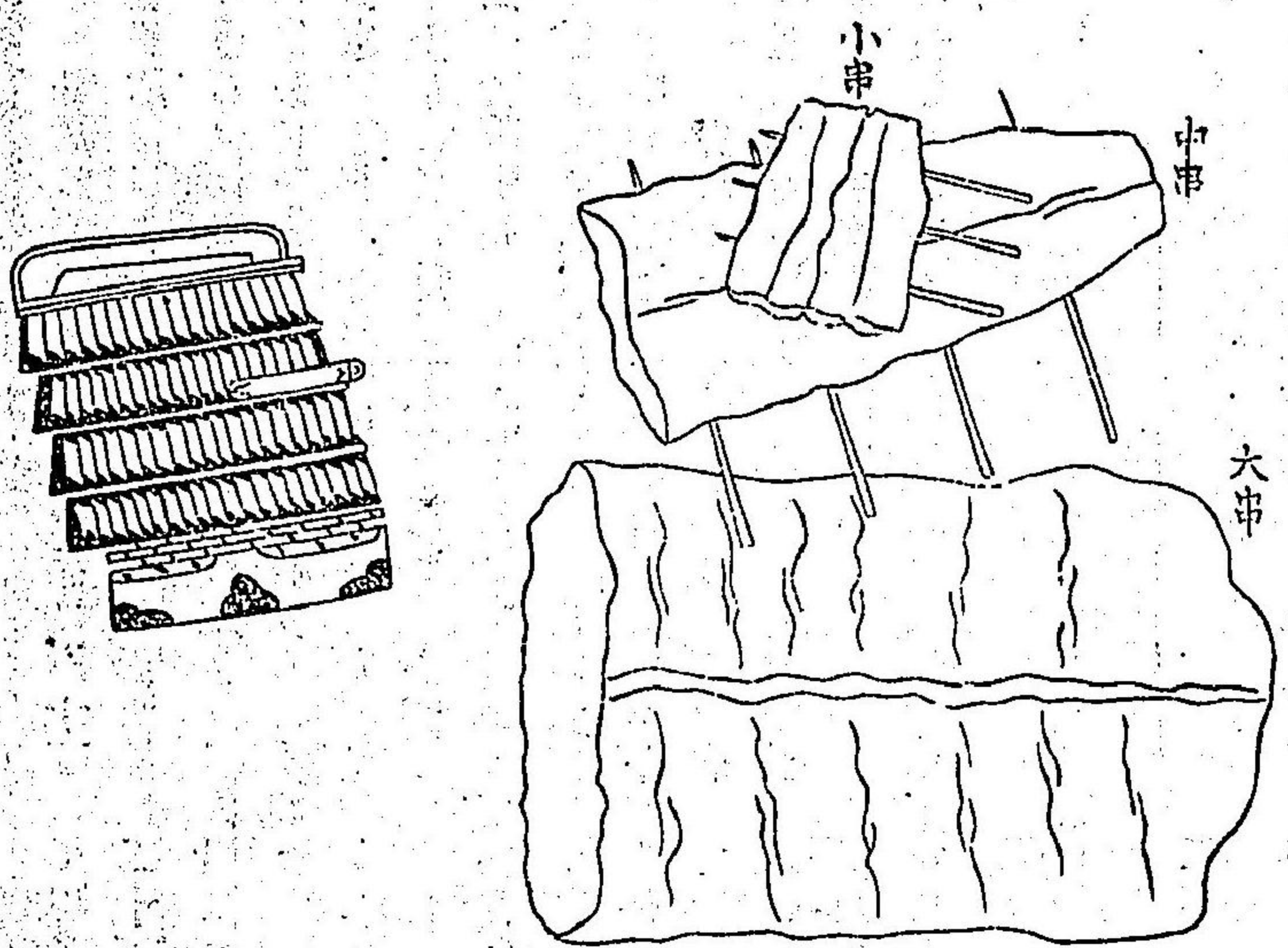
のみ蒲鉾といへるは本鉢を失ひたる稱なり今の竹輪といへるがむかしの蒲鉾也そは蒲の穂に似たる故也

○蒲焼もむかしは鱧の口より尾の方へ竹串を通して丸焼にしたる事今のいなこのしろなどの魚田樂の如くにしたるよし聞及べり今もさるたぐひ片田舎にてするよし聞及べど大江戸にては早くより天下無双の美味となりしは水土よろしき故に最上の鱧出來て三大都會に勝れたる調理人群居すれば一天四海に比類いにしへのうばやき



あるべからず我六七歳の頃より好み喰て八十歳までも無病なるはこの靈験の功驗にて草根木皮の及ぶ所

當世の蒲燒



にあらずざるをむかし蒲燒といひしは魚の口より尾まで竹串を貫きて焼たるが蒲の穂に似たる故に號けたる也當世のは蒲の穂には似もつかず鐵の袖に似たり

○むかしは大の字はおほにて太字はふとなれば誤る事もなかりしを今は天照皇大神を太神と書たる故に外宮にても豊受大神を太神と書んとするに内宮よりさまたげて大字の點をうたせず外宮には點うたまほしくひそかにかくして太神とつこををかしけれ點なきこそよけれ又氏の大田を太田とかき劔刀の大刀を太刀とかくが今のならはしなり

○前栽といへるは庭の植物の惣名なるを今園菜をさして前栽物といへるは名の似たる故の誤なるべし又園菜類と野菜といへるも非也園菜は畑におほしたてたるにて野菜といへるは野山におのづから出たる也和名抄に青菜大根苜蓿などを園菜の部に入れ菰菌莧蕨などを野菜の部にのせられたり

○東叡山はいにしへ忍が岡といひしを藤堂侯の藩ありし故に上野といへり其山下にある池をいにしへ篠輪津といひしよし風土記にありそは篠生茂りて輪の

如く池をめぐりし故なるべし今は不忍の池といへりわつとばすといはいたくたがへり山城國乙訓郡高皇產靈神社を羽束師の森といへる故にそのほとりの小社の森を不耻知の森といひふらせりいかなる神ならん恐るべき事也これも又不忍池と同日の談ならん
○兩國橋の東なる國豊山回向院は八宗兼學也とて諸宗の人々遺骸を藏め回向するがそのならはしとなれりもとは明曆三丁酉年正月十八日十九日兩日の大火にて死亡の人十萬七千餘人に及び去故に公の命によりて回向院草創あり芝の増上寺二十三世森蓮社遵譽貴屋上人第二世中興樂運社信譽上人自心真存和尚也淨土宗にて八宗兼學にはあらずこの上人佛像彫刻の妙手にて彌陀釋迦大日の三佛堂を建られしは萬治年中也町奉行所にて刑死の者又牢死の者どものため御憐愍也さる故に八宗兼學といふなるべし
○むかしは兩國橋大橋永代橋を三大橋といひしを安永三年淺草大川橋出來しより四大橋といへり其中にも兩國橋のみは本普請にて外三橋は假橋にて兩方の詰に假小屋ありて往來人武家の外は錢二文づゝ取しを文化四年九月深川八幡祭禮の日に橋落て千餘人溺

死せしより四橋皆が本普請となりて武家の外も橋錢に及ばず永代橋の落たる日には我も橋をわたらんとしつれどあまりにこみあひてわたりがたければ橋のこなたにあひしれる人の家に立よりて舟をかりて川の半まで出たる頃はし落てあまたの人の水中に落入を見れば目くるめき胸先をどりて身の毛だちこゝろぎもゝきえうするこゝちせり黒川清足は我より先に橋の半過る迄わたりておぼれ死たりと後にきいていと便なき事にぞ思ひけるさいふ我もほととあやふかりき

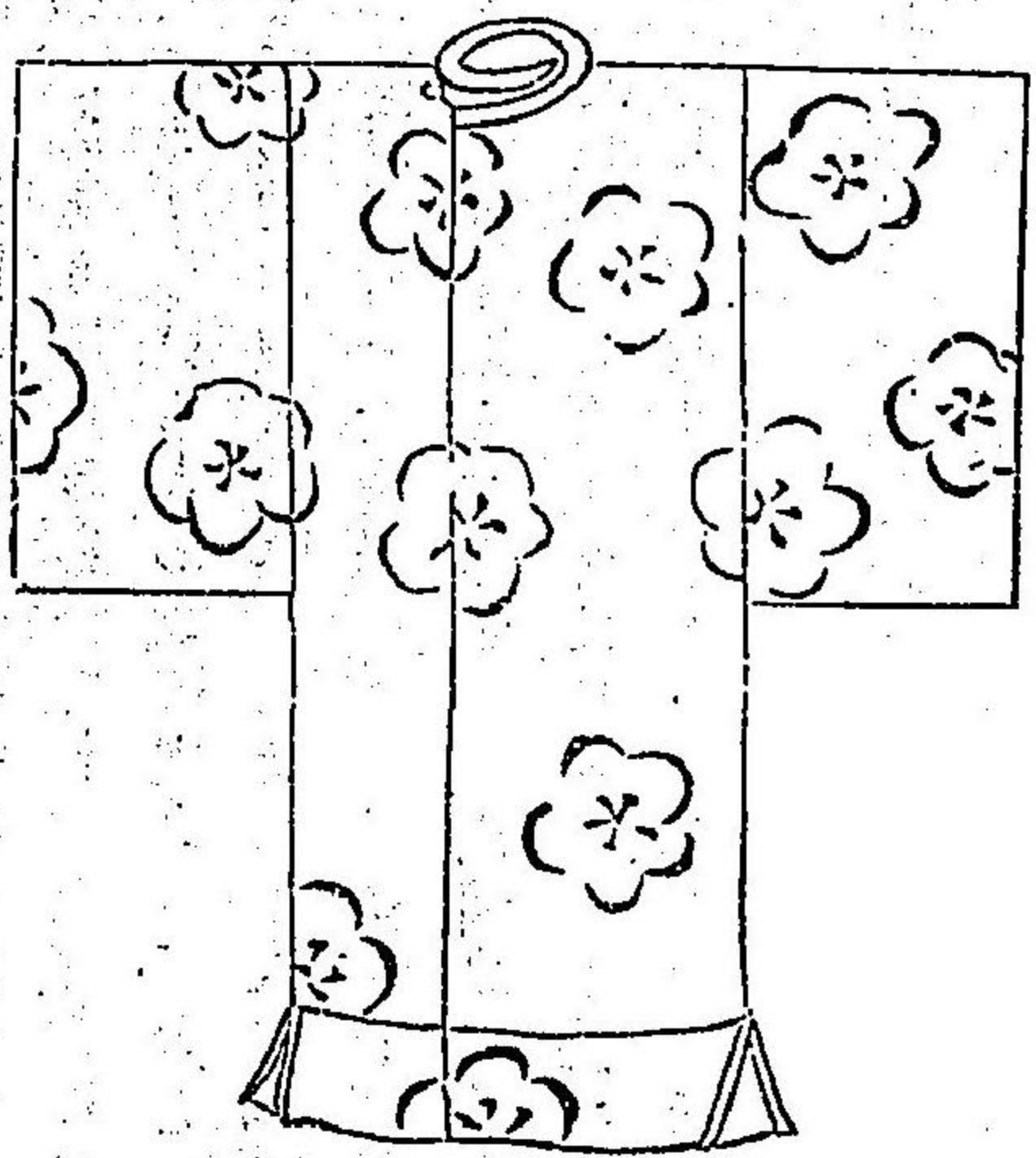
○正月五月九月は年の三長月といひて佛説なればむかしは寺院のみにて用ひて諸神社に用る事はをさをさなかりしを今は所々の神社にて用るは活計の爲のみにて神慮には憚るべき事を知らぬうつけ神主ぞ多かりける長齋經に若有善男女等修三年之齋戒忽脫諸難等護殊勝福利云々又云天帝以正月五月九月巡向南州註記衆生作業云々琅耶代醉編釋氏智度論云々此月(所謂正五九月)照南瞻部州唐人以此不行死刑云々
○むかしより男女の婚嫁養子の縁談其外奉公人の媒

酌するを慶安といひてこゝにもかしこにもあまたありし事今も同じ事ながら今は多くは下男下女の口入のみにて高貴の方々の縁談富裕の者の取結びは多分こゝかしこに出入する醫師のするわざとなれり寛文五年木挽町邊に町醫大和慶安といふ者同志の謀計をなりはひとする伊達三郎兵衛長谷川助右衛門とはかりて酒井家の御息女の縁談口入して持參金五千兩の内二千兩三人してかすめ配分せんとはかりしに露顯に及び同年九月廿四日三人ながら追放に行はれたり慶安といへる悪名は口入商人の方に残りて中々醫師の方にのこらぬもあやし

○浮世繪師といふは菱川師宣といふもさら也其後鳥居清長勝川春章また其門弟ども今の世の風俗遊女戯場の俳優人相撲人などその者を見るが如くよくかきたり近き頃は豊國が門弟なる岡貞いよくかけり又その門弟並びに門弟ならぬ書だくみの此頃かけるを見れば男女どもに肩をすくめ肘を膚につけたるさまにて寒げにちやみあがりたる姿にかけるはいかなる故ならん時世のさまとは云ひながらいやしげに見ゆる也さるすさびにたま〜衣冠の官人甲冑の武士な

ども猶さるさまにかけりいと寒げに身すばらし
○安永天明の頃は狂歌師俳諧師碁打將棊差賣卜者隠遁者などは偏袒といふ物を著たりそは皆惣髮剃髮のみに限りて月代頭は著ざりしを文化の頃より襟なき合羽のうしろによだれかけの如き物ぬひ付たるを著る事はやり出して遊民隠遁者の外にも醫師書家繪師

披風



小直衣の上帯なきさまなり故に風に披くと云

に一兩にたらざる價は一兩あたへ一兩にあまれるには二兩あたへて釣銭をとらぬを伊達風流とせり今の

尾張の御内人小

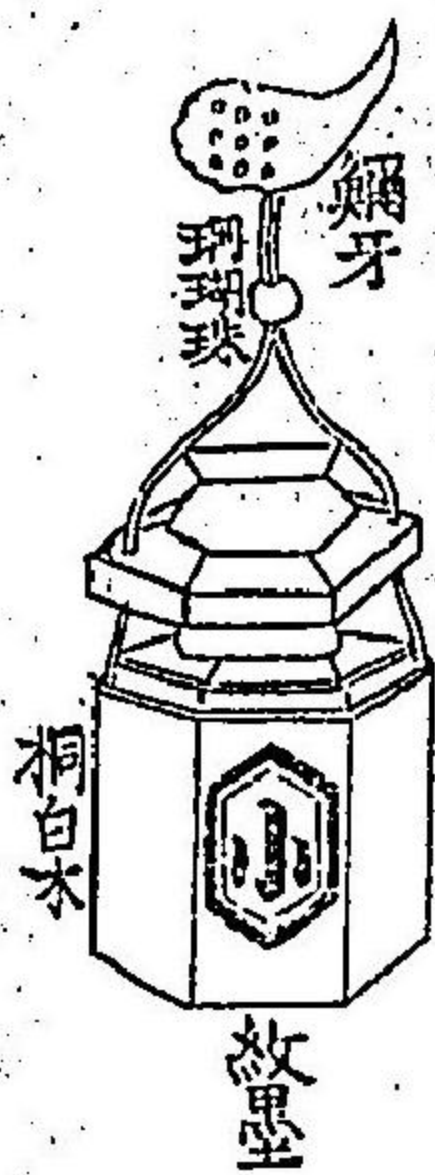
林仲弘は我學友

なりこの家の先

祖の中に俠客有

て持たる器今猶

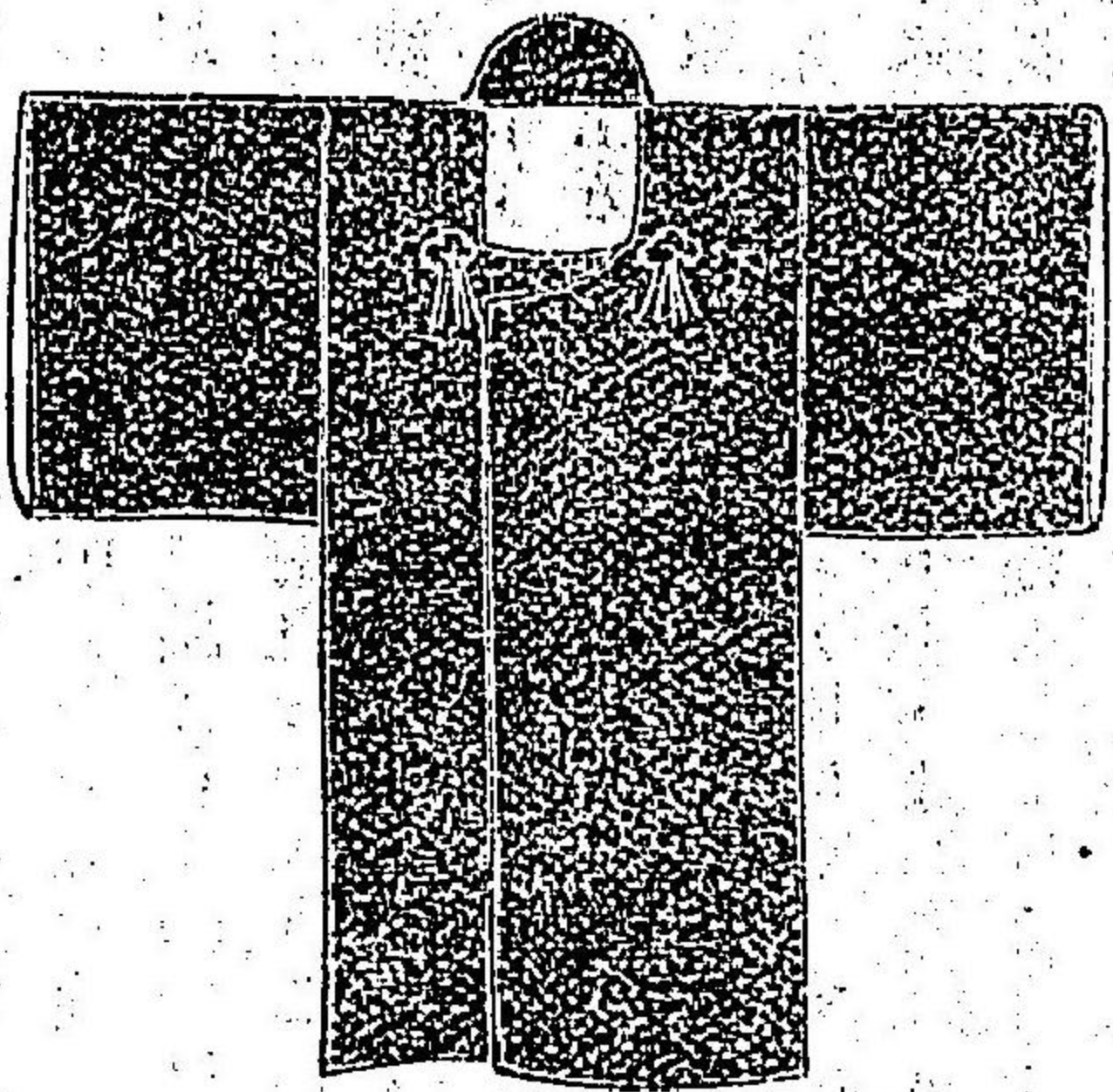
遺れり



俠客は高貴にへつらひて威光をかり富裕におもねりて金銀をもらひて男をたて顔をしらるゝを自慢とすむかしとはうらうへのたがひなり

○天明の頃正月元日葩煎賣扇賣といふ者ありきしを次第に絶てた御城内のみありきしをそれもつぎつぎに絶て今は寶船賣双六賣箱賣のみ多くありけり昔ははせを買て蓬萊臺に積しを今は生米をつめり葩煎は字彙に糠米爆米曰糠經驗方に稻米使爆火食謂之白花米亦米花口等の字をもちけり袁仲郎詩集に爆三糯穀於屋中一名字裏ともありもみをいりてはせさしめたる也喰積の物を掴みて喰ふためなり(干柿から栗栢蜜柑葩煎など客も主もつまみて喰ふ故にくひつみと言しも今は喰はぬ事とせり)

披風に非ず座敷合羽也



など後々は惣髮剃髮ならぬ月代頭の人も著る事となりてつひには婦女少兒も著る事となりしは似げなく異様に見ゆる物也是を披風と號るは物しらぬ故也披風は堂上方の略服なり

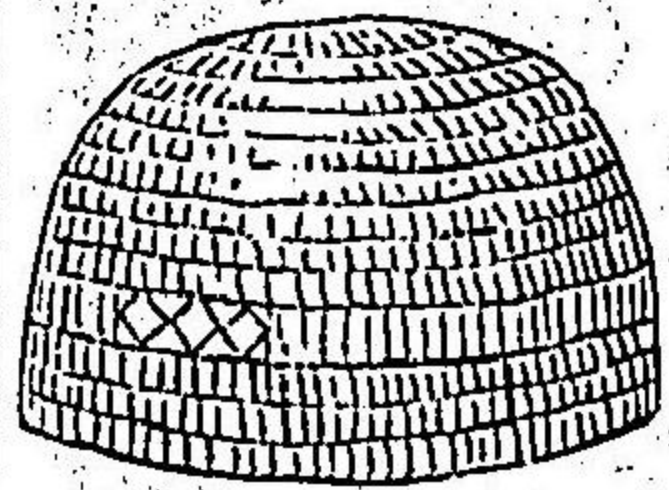
○むかしの俠客どもはこころに異様なる姿にてつよきを挫きよわきを助け金銀を惜まらず腰に白木の印籠だつ物をさげて金百兩つゝ入置て道路にて物買ふ

○安永天明の頃は泥龜を喰ふ人稀也下さまのいやしき人の中にはかくして喰ふ人あれどそれすら人に耻ていはずさる故に身の程のすこし宜しき人いさゝかどめる人などは言にかけてもいはざりしをつぎに喰ふ人出来て今は高貴富裕の食料となりて價貴くなりしより近きほとりの川にこゝにもかしこにもあまた見うけしを今は絶て見る事なし今は奢のひこつなり本草綱目に性冷多食當泄或發水病とあれど外戎の泥龜とは異なるか天保二年に武井周作が著したる魚鑑には甘平毒なし中を温め氣を益し不足を補ひ瘧をのがれ白髪を生せず皺よらず○を強くして百歳に及ぶ實に不老の丹藥也といへりこの説是なるべし（我幼少の頃は川池溝などに泥龜ありしを今は稀にも見る事なし○泥龜川龜亦鼈といふ江戸にてヌツポント云上方にてはトチと云）

○明和安永の頃は猪鹿の類を喰ふ人稀也下さまのいやしき人もひそかに喰ひて人にはいはずかたみに耻あへりき天明寛政の頃よりやゝよろしき人もかつかつくふ事となりて今は白慢としてほこれり是はさも有べし上古には神々御みづから狩したまひ御代の天

皇御みづから猪鹿を狩給ひし事古事記書紀にあり神祭に猪鹿を備へ奉りし事延喜祝詞式にあり論に及ばぬ事なるを今神々の忌み給ふは諸の神社に別當といふ者出来たる故也別當は法師なればさも有べきを神の御心さへさやおぼすらん犯せる人をばどがめ給へり天武天皇紀に莫食三牛馬鶏犬猿之肉次外不在禁一例とあり五畜はもとより食料ならぬを外戎の惡風儀まじりし故にかゝる勅定は有し也以外の猪鹿は禁め給ふかざりにあらずさるは孝謙天皇紀に以猪鹿之類永不得進御とあるは佛を信じ給ふ御世なれば也

○むかしは武士遠乗遠足などに野袴踏込なりしを安永天明の頃は深編笠馬乗袴となれり其後丸羽織バツチ袴はし折たるが今は股引半天淺き竹皮笠亦は藤組れば也



竹組笠となりて深編笠はたま〜賣卜者に見ゆるのみなり昔の遠足姿と今のは同じ武士ながら主従の如くたがへり

○安永天明の頃は賤き戯場の者迄も職業はなほざりならず尾上菊五郎といへるが忠臣藏の大星由良之助の役にて刀のこしらへ金七十兩ばかりかゝりしを兎角あしざまにいふ人もありしと也さるを四段目上使入來の席へ國元より到着の儘にて立出て花道に刀を置たるを見物の中に目の利たる武士其刀をつくとと打守りいかにも一城主の家老の刀相應に見ゆといひて譽たりとなん亦中山文七大星力彌にて文箱を持て欠出る足取諸人目をおどろかしたりそは文箱持て樂屋内をかなたこなたいくかへりも欠ありき欠ながら花道へ出たるさま山科より祇園まで一里半欠つかけたる足つきなりと也昔しは俳優人も見物人もなほざりにはあらざりけらし當世は双方うききのみにて眞實にあらず四代目市川團十郎が景清の役にて大目坊を殺して行んとするを松本幸四郎（五代目の團十郎也）重忠にてよびとめぬれど聞入ざる故に三聲よびしが止らざれば見かねて助高屋高助が景清までと

呼しかば團十郎は思はず尻居に座したり後に聞ば我は其時は團十郎にあらす實の景清なれば幸四郎如きによびとめらるゝ景清にあらすざるを思ひがけなく實の重忠が聲かけし故に止りたりといへり(四代三升は後に柏薙と云五代三升は後に白猿と云高助は初澤村長十郎と云し也)

○あるはなくなきは數そふといひけん如く安永天明以來の事を思へば夢かたごらるゝばかり也世に名知られたる人々本居大人を初め加茂季鷹縣主猪諸成三島自覺加藤千蔭村田春海鹽瀨諸鳥羽倉御風安田躬弦村田春門和泉眞國石川恒之清水濱臣木村定良高田與清伴信友大石千引片岡寛光岸本由豆流關岡野須良原久胤村上眞澄堤朝風などつきゝ身うせにしぞあぢきなきまた高貴の御方々にては我が康定君を初め奉り小笠原長堯朝臣土井利徳朝臣植村家長朝臣横瀬貞臣朝臣巨勢利和朝臣戸澤正令朝臣など御かくれ給ひしかなしはさらにもいはすあたらしく口をしくぞおもほゆる親伯父兄弟いともいふべき齡の人はことわりとも思ふを子孫とも同じ年頃にていそぎあわてゝ黄泉路にまかりぬるはかへすゝもくちを

び八三郎は誅はれて江戸中被衣御停止となれり京都並に田舎にては今に下さまの女迄髪長さ一尺二三



寸もあり江戸にてはとく短くなりて當世は五寸ばかりになりたり被衣を著る時は掃枝長さがよし
○昔しなき事にて近來世上一統になりしは庚申日ある月に生れたる小兒は男女ともに金簪ある字の名を附る事となれりそは庚申は金なる故の義なるべけれど甲乙丙丁戊己干癸などある月に生れたる兒の名に木簪火簪土簪三水などの字を附るにもあらざれば金簪のみ用るもうきたる事也凡一年十二箇月の中に庚

○明和四年五匁銀出來同五年四文錢出來て今迄の十文錢やむ安永元年貳朱銀出來て五匁銀やむその後小判金一步金南鐐四文錢小錢にて居りたるを文政元年貳分金出來同七年一朱金出來同十一年一朱銀出來て一朱金やむ天保三年貳朱金出來同九年一步銀出來て今は小判一步金一朱金一步銀通用四文錢小錢はそのまゝ也亦天保の當百錢も出來たり

○むかしは官服の文をしりたる織物師染物師ははかりしらざるも犯す事なかりしを文政の末の頃より藻四葉草蓑八藤立涌臥蝶雲鳥などはかりもなく浴衣手拭などに染ぬるはおふけなく僭上なる事ども也かつゝ轡輪無等の唐草も見ゆ恐るべき事ならずや時代のうつろひはいひながらよろしからぬ事也

○貴賤ともに女は他人に面みらるゝを耻べき物なれば都も鄙も被衣著たるなり京都は今も町家の賤き妻さへ麻木綿などの被衣著たり大江戸も昔しはおしなべて著たりしを浪士岩間八三郎といふ者被衣を著て女の姿と成て松平豆州侯をうかひしに事露顯に及

申日ある月は六ヶ月也されば千人の内五百人金簪の字を附べきを左もなきは俗説に迷ふ人も欺かれぬ人もまたあるべし
○昔しありて今なき事は年中の靈祭なり一年に六度の中にわきて十二月晦日は貴賤ともに世のなりはひの繁ければおのづからすたれたるなるべし詞歌集後拾遺集などの歌にも清少納言の枕草子にもあり亦是るかの後にいたりて兼好法師の徒然草にもあり報恩經に靈來日二月十五日寅時來次日午時飯五月十五日卯時來次日巳時飯七月十四日卯時來十六日午時飯八月十五日辰時來次日申時飯九月十六日未時來次日申時飯十二月晦日午時來正月朔日卯時飯この兩日はわきて祝ひ清むる月なればいまはしき事はやみたるなるべし

○百日紅また帕痒花また紫微花また俗に猿すべりといふ木あり皮はげて幹をあらはしなめらかにて大樹といへどもなづれば震ひてやまず卑怯木とも恐怖木とも憶病木とも號けまほしき事也さるを天保の末に阿蘭陀よりコロイドシルルルシルルシートといふ草わたれり或人の漢字にあてたるは草如生莫觸手と



いへる名義なるよしいへりいさゝかにても手ふれぬれば忽に葉しほみて枝たれて枯たるが如くなれるを見るくや、おきかへりてもこの如くになれりこも卑怯木とも恐怖木とも臆病木ともいはまほし植木商人はオジギ草ともビツクリ草ともいへりこの草初めの程はいと高價なりしをこなたにて種をまきおほしたつる事をしりたる故に今はめづらしとも思はず

○婦女小兒のはやり小唄はむかしも今もかはる事なく七言七言七言五言の四句なるを事にしたがひ時によりて三句も五句も多く謠ふ事あれど五言の七言かを一句置に加へぬるか亦二三句ついでに加へぬるかいづれにても五言七言の格はあやまつ事なし一言た

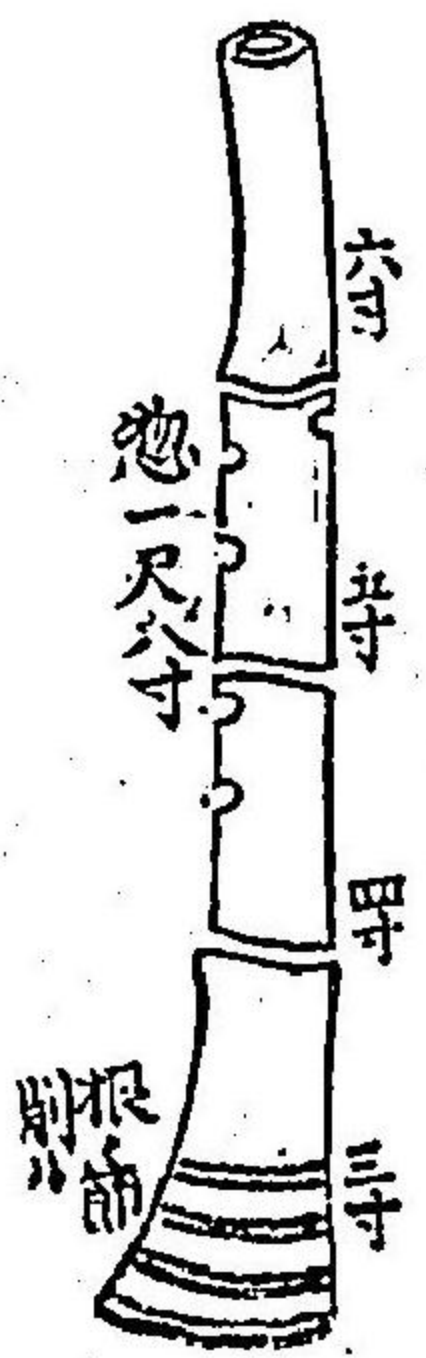
らぬは聲を引一言あまれるは聲をはやめて五言と七言とにしらべとのへ謠ふ是ぞ誠の神代のなごりなる外戎の詩を五言絶句七言律などいへるはいみじき誤也こは五字絶句七字律などいふべき也一字一言なるも二言なるもあるをや但皇朝の音聲正しきと外戎の蒙臘たる言語と等しからねば異なる故あるべし

○むかしは尺八の笛ふく人こゝにもかしこにも有りしをつぎくゝにたえて大尺八のみふく人今も猶あまたありて一月寺鈴法寺などいへる本寺出来て僧の職業となれり往古はさる者にあらず樂器也源氏末摘花に大筆葉尺八の笛杯の大聲を吹あげつゝ云々どありこれいにしへの尺八にて長さは尺八分中の一節ある故に一節切ともいふこの笛を我幼き頃本郷邊の年老たる工人よく吹たる故に門人もかづゝありしを今は絶てきくことなしむかし難波の俠客雁が音文七といへる者尺八の妙手にて世にめでられし故に世の俠客どもそれを學びたりしが後々は吹こはさし置ていさかひの爲に用に立んとて太き竹を長さ一尺八寸にして節多くして短笛の名も一節切のねも失へり今

樂器尺八笛 一名短切



後世一尺八寸 純鉢器噺笛也



の本寺の職となりしはこの噺道具の尺八也

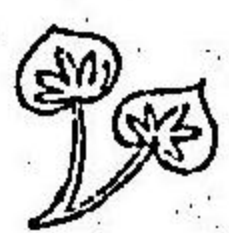
○大神君數度の御合戦に必死の御危難をのがれ給ひし事十八度なりし故に關東に十八ヶ院の檀林を造營し給ひし中に上野國新田郡大光院の境内に新田大炊助義重朝臣の御墓印の松の切株おのづから一葉の葵の如し亦鴻ノ巢勝願寺境内大神君の御神木杉の切株も一葉の葵の如し御先祖は新田なれば八幡太郎義家朝臣の御舍弟なり加茂次郎義綱より傳はりて故ありて大神君の家に傳はりしなるべし太郎義家朝臣は

八幡にて元服有て



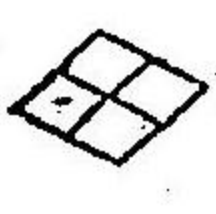
紋也次郎義綱は加茂にて

元服ありて



の紋也三郎義光は新羅明神にて

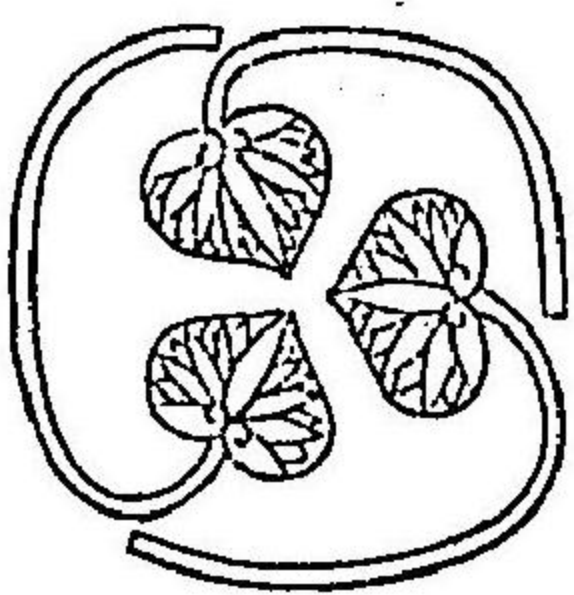
元服ありて



の紋也これ所謂武田源氏とも甲

葵巴

巴は柄繪なり大輦
別天皇御腕肉の形
也後にこの壺一
つゞきになりて丸
となりしなり



大光院 松

勝願寺 杉



各堅五六寸横二尺餘

州源氏ともいふこの木切たる時に切口を紙に摺て大光院よりも勝願寺よりも献上の後我方へもおこせたり三河國加茂郡にて親氏君加茂朝臣と稱し給ひ巴と葵と合せて葵巴を我紋とし給へり其よしは徳川世記慶長十六年三月の條にありと或人物に記せり

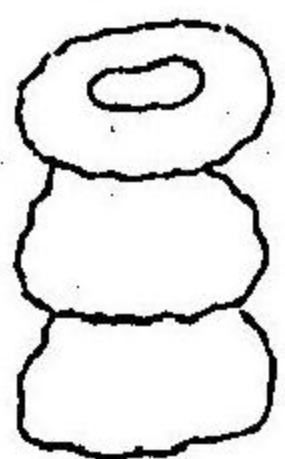
神代のなごり下卷

齋藤 彦麿

目にわたり耳にふれぬる事も心にしるさねば覺えぬを人のいふをきゝてげにさる事もありしなど思ひうることもなきにあらずおほよそはふつにわすればはて思ひ出さぬが多きは鈍き性のゆるならんとぞおもふ

○寛政十一年品川へ鯨よりし事ありわざく見に行しに品川洲崎海岸より十間ばかり放れて渚に有長十間ばかりもやあらん背に汐吹穴三ありその後亦行て

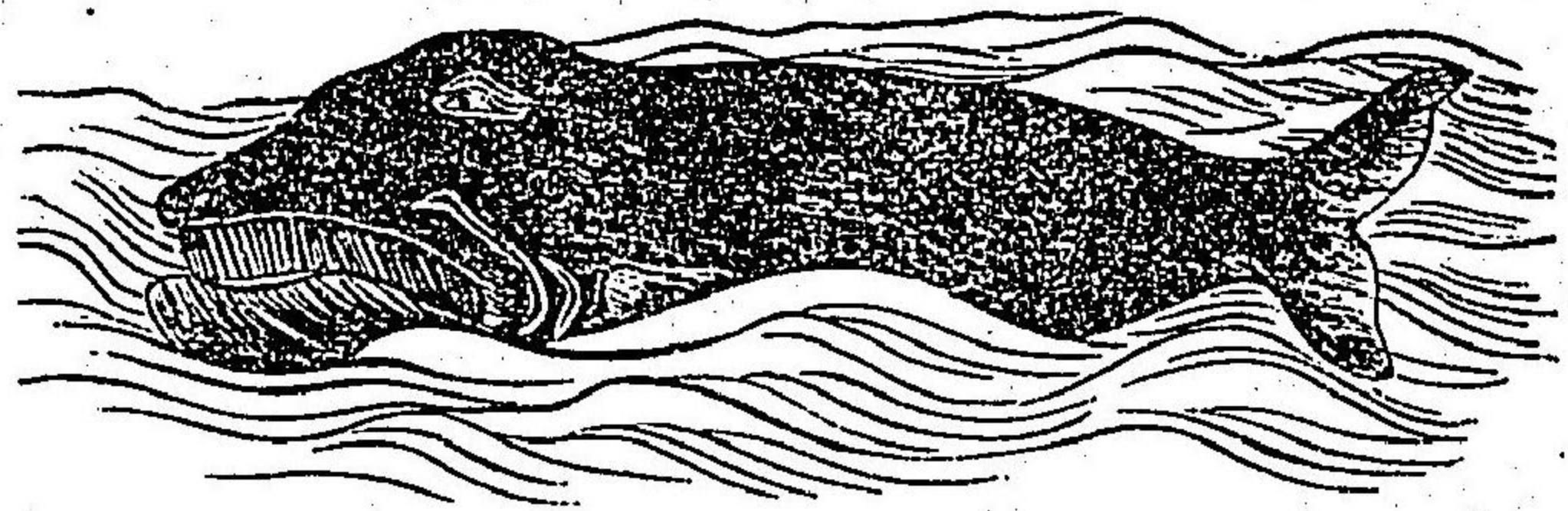
經一尺ばかり
もやあらん



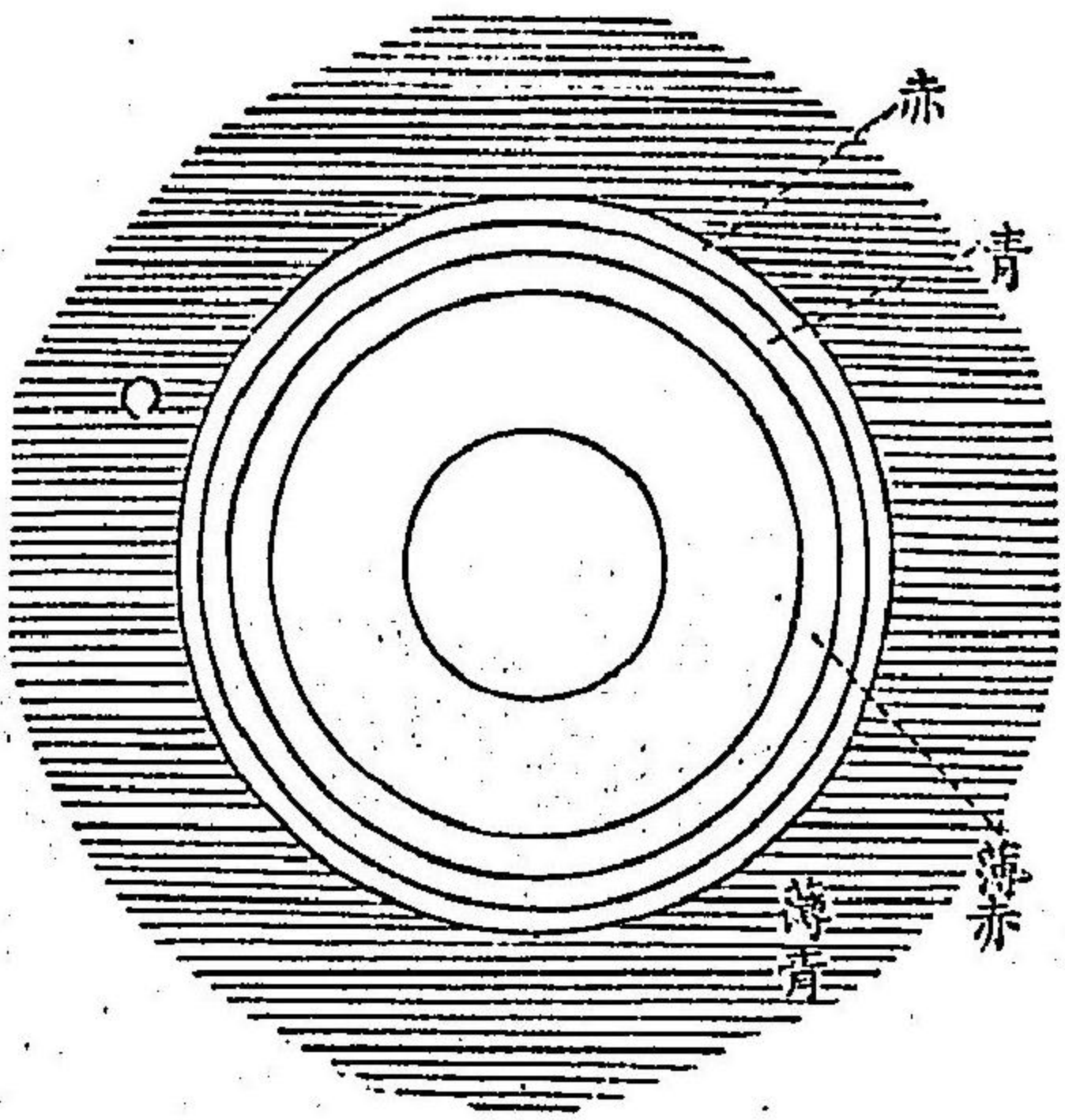
見しに悉く切て桶に入れて持運ぶさま也皆油となすのみにて食料にはならずとなん家々の前に胴骨の切たるが白の如くあり皆手水鉢の臺などになすよし也

神代餘波中卷終

鼻より尾の先まで十一間餘有いまた子鯨なるよし人々いへり



其後文政三年三月品川へ鯨ふたつよりたり天保三年下總船橋へ鯨よりたり是等まのあたり見たり
○山王社はもと入間郡川越仙波にありしを文明の頃今の御城内紅葉山の邊にうつされ其後延徳年中今の半藏御門外の貝塚へうつされたり今の元山王也其後承應の頃永田馬場今の社地に移されたり
○神田明神社を今の御城内神田橋内はむかし芝崎村といひし也天平二年の鎮座にて祭神は素盞鳴神大己貴神二神也さるを將門の靈を祭りたりといふは非也將門は天慶三年官軍の矢先に伐せられて其靈魂あらびて人民を惱す故に延文の頃眞教坊といふ法師將門が靈を祭り本社より百歩隔て小社を造營せり是將門が靈社なり眞教坊は其小社の傍に草庵を立て芝崎道場と號く元和二年本社は今の社地にうつされ芝崎道場は當時淺草にて神田山日輪寺といふ
○天保三年八月十六日夜成時はかり月暈あり五色に彩たるが如く月の右に一星あり和名抄に暈氣繞日月也加佐月浣也また漢書に商帝七年月暈圍參畢七重云云畢昂間天街也街北街南中國後果有平城之圍七日胃頓乃解とありこの度は四重の圍也



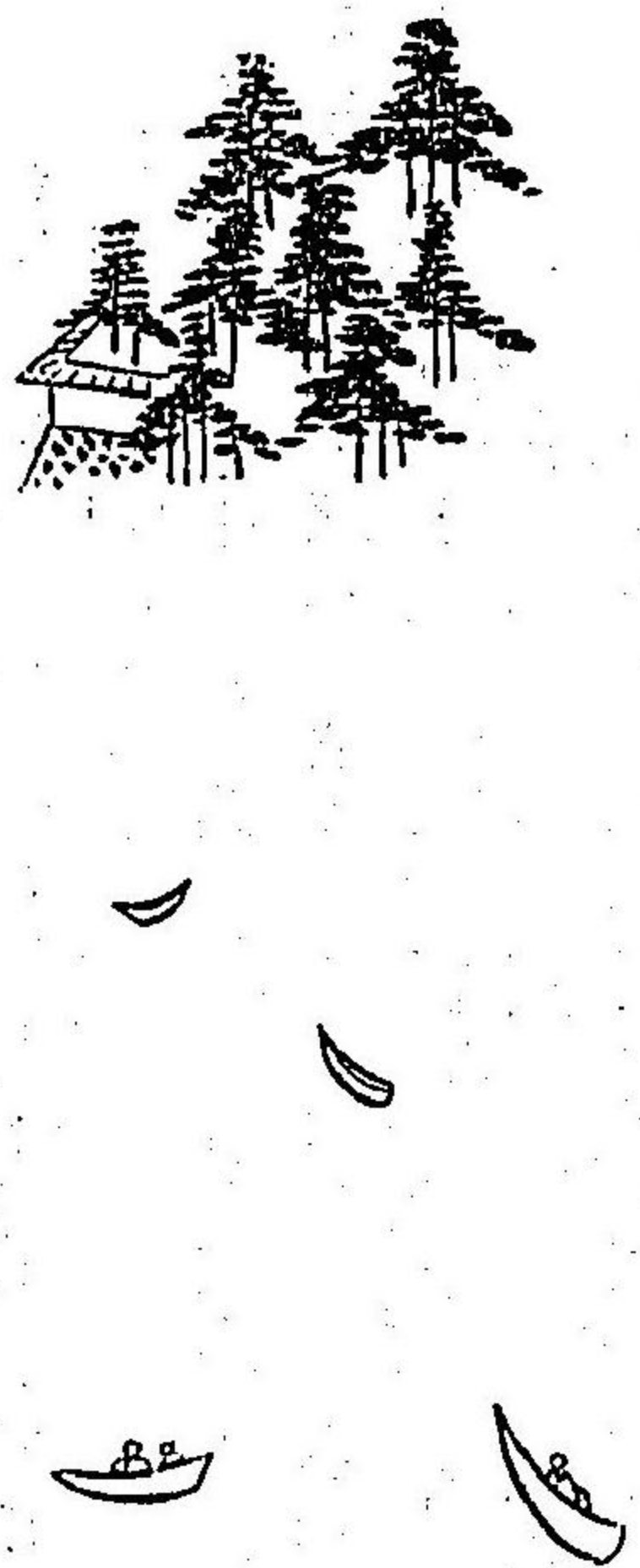
○天明のころ芝神明町村松太郎兵衛といへる人の家に行たるに折ふし大なる東浦薬瓜を正中よりふたつに割たる中に大なる蛇ありて寸々に斬れたるを目前に見たり是を思へばむかし御堂關白道長公物忌にこもり給ひしに大和國より瓜を奉りしを其時御伽に阿部晴明醫師重雅僧勘修三人傍に居たる中より晴明曰くこの瓜には毒あり嘔吐給ふべからず公の曰くあまたの瓜中いづれか毒ある時に勘修咒を誦するに數瓜

の中より一瓜飛出て騰躍す其時重雅一針をもて瓜をさすに其動き即やむ割て見て見れば中に毒ありて兩眼針にて貫れたり三人其家々の業術に妙を得たる事世の美談とせり是を言にあらぬよしをしれりこは花の中に小蛇入たるか實も蛇もつぎに大きくなりしならん
○享和元年師翁宣長大入京にのほり四條の旅宿にて講釋せられしに公卿殿上人あまた入來聽聞し給へる中にわきて富小路新三位貞直卿深く學び給へるにや師翁國にかへらるゝ時の御はなむけの御詠京家に稀なる古調の長歌也四條舎ノ記にあれば爰には略けり今の山城平安の京以來堂上方にはこれ始てなり古今集は代々の撰集の最第一にて不双の名歌の集にはあれど長歌のみは拙く賤げにて貫之躬恒杯の大人たちの歌とも思はれぬさま也近來契沖長流といへども長歌はいまだ得ざりしを眞淵翁より古の風調に立かへりたり
○いにしへなき事にて近來のならばしとなりしは無位無官より以下下民にいたるまでの字に何右衛門何左衛門何兵衛何之助何之丞何之進何と號にはもと官

名なれば勅許なくてはみだりに犯すべからぬ事なるを近來のならばしとなれば今は答る人もなし亦左門右門左膳右膳一學平學頼母數馬要人伊織などいへるを相馬將門が立し東百官也といひて下民の憚るも非也將門は天位にのほりたる心にてみづから親皇と名のり左右の大臣以下文武の百官を置くに曆博士のみかけたるよし古事談にあり東百官といふはなき事也松尾神主に頼母と古今著聞集にあるは實名の頼母にて俗の字の頼母にはあらず
○寛政元年我二十二歳の時花歌合百番の催ししける催主は安田躬弦石川恒之也左方十人右方十人我いまだ萩野彦六郎源智明といひし頃にて右方に加れり判者は從四位下甲斐權守加茂季應縣主也其歌合一卷廿年昔しの火の災の時うせしをことし商人の手よりかへりしはめづらしき事也さるにてもその判者季鷹あがたぬし催主躬弦恒之をはじめ左方十人皆がら右方は我一人のこりて九人皆うせたりその一卷を見て其時の事を思へばたい夢にやとたごらるゝばかり也

が元鼎五年秋ありしよし事文後集にあり皇朝にても神護景雲二年秋と延暦三年夏とありしよし續日本紀にありうきたる空言とのみ思ひしを六七月の頃築地屋敷より大名小路上屋敷へ朝とく出行に輕子橋の西の原にて蛙五六いさかひぬるをめぐらしと見るに往來の人も四五人立留り見居たるにいつくより集り來ぬらんつぎに蛙の數まさりてこかしこにあまた群立ていさかふさまよのつねならず武くあらぶるいきほひいとするごとく見ゆかゝる程に山田惣兵衛吉澤鶴右衛門松坂茂右衛門杯上屋敷へ行んとて來かゝり共に見居たりさる程に其蛙は敵身方の差別亂れずいごみたゝかひて死たるも手おひたるも口にくはへ背に打あげて相引に引て川邊の草むらに入て行方しれずなりにけり共に見し山田吉澤松坂も死失せて今其子の山田惣右衛門吉澤勇右衛門松坂登の代となり我ひとり残りたれと思ひ出てかたらふべき友もなく同じ時に立留り見し往來の人の中には我如く今にながらへて物の折には思ひ出て人にかたりきかす事もあらん
○屢氣樓といふは(本草五雜俎文苑集雋)漢籍にあ

りて大蛤の氣（介蟲蛟之屬）なりといへどいぶかし
く思ひ居しを文化八九年の頃の秋魚釣に行んとて佃
島住吉の神社の神主平岡日向守好弘同舍人ノ助好祖
は父子共に門人なれば供に打つれて船にのりて未明
に漕出たるに海づら一面に霧立渡りておくれ先だつ
舟ども見えぬばかりなるに朝日はのぼりと出る頃



霧に映じて五色に彩たるが如くなる中にいかめしき
宮殿樓閣あらはれたり人々あはやおどろきて口々
に物いふ聲聞ゆれど霧にてあまたの船共は見えず船
人の云くこは蛤の息吹たるにてむかしもかゝる事あ
りしと也と語れりとかくするほどに霧もや、晴ゆく
にしたがひてかの樓閣もうすれくと見えすなりに
けり能見れば蛤の氣にはあらず大江戸の大御城に朝

日のうつろひたるが海面にうつりやがて霧に映じた
る也今の箱目鏡向の穴より山海の景地をうつし中な
る鏡にうけて上なる玉板を移す工夫はかゝる事より
や思ひよりて造り初めけん其時不斗思ひし也好弘
は六十余りにて身うせ好祖は三十にたらず身まかり
ぬ我は今にながらへて當主讃岐守好貞もついで門
弟なれば我ぞ好貞にはかたりきかせぬ

○文化十三年の八月多紀安長法眼の家人と薩摩侍醫
物産家會昌啓門人と打つれて永代橋を渡るに川上よ
り水烟立て泳ぎ來る物ありあやしみて立とまり見る
に橋の下をくさりて川下に出るを見れば白髮の老翁
烏帽子に白き直垂著て白馬にのりたるが水上三四尺
放れて南の方にはしりつぎに高くなりて二三間
も放れしと思ふ頃見えすなりにけりとなり其日我も
昌啓の方に行て物語杯しつる折節かの二人かへり來
りめづらしき事とてかたれりあるじを始む人々奇異
の思ひをなせり其日村上新左衛門眞澄麻布邊に行た
るに往來に人あまたつごへるを何事ならんと問しに
烏帽子直垂の老人馬上にて宙を飛び行きたりとて人
人さわけりとかへり來りていへり眞澄は偽杯いふ

き人にはあらず同年閏八月四日世に稀なる大風にて
草木は皆枯しぼみ家は吹倒し潮水は高くのぼりて暫
は往來絶たり明和八年八月朔日法師一人小法師一人
虚空を飛行せしよし師翁貞丈大人の隨筆にあり正史
實錄といへ共誤を正す師翁の學風なれば偽いはれぬ
事は天下の學者皆しれり昔し齋明天皇の御代に唐人
の如き人青油笠著て龍にのりて飛行せしよしあり外
戎にも龍にのりて天へのぼりし事易にも史記にも
あり

○文化二年御留守番與力金田甚兵衛御先手與力鈴木
久兵衛御作事奉行小林惣右衛門三人品川なる舟長方
へ朝ぞく行て釣舟を催しけるに船長云く今日午時過
にはあしき風ありとまり給へといへど三人きかず
強て船を出さしめつるにいかにも午時過る頃西北の
風吹出て忽に烈しくなり既に船もくつがへらんとす
るにあまたの船ども品川に向ひておせごこげど船う
ごかずよくせずばくつかへるべきさまなるを彼三人
の船は船長むしる帆をあげて安房の方へはしり行を
酒びたしなる三人も酔はとくに醒果て人ごちなき
に舟長は歌杯謠ひてこちよげにはしらせ江戸の方

は見えず安房上總近くなりし頃船の舳先したて直し
ければ西北の大風に逆ひて東南より一筋の細風おこ
りてまたくほどに舟長が家の裏に船著たるにあま
たの船どもは沖にありていつくべくも見えざりける
と也甚兵衛は我妻の兄也久兵衛は叔父也うきたる事
にはあらず源氏物語明石ノ巻なる播磨入道よりの使
が船粧ひして時の間に須磨へつきたるも大風に向ひ
て一筋の奇き風吹しよしありこの物語にはあやしき
事はなきをこの一事のみいぶかしく思ひしにうきた
る事にはあらずなべての船人のしる事にはあらずあ
また年鍛鍊したる船長はいさをしき物也さるにても
紫式部は内裏女房の身にいかでかかゝる事しりつら
んかの細き逆風よりも式部の博識ぞ奇しく妙なりけ
る

○文政十二年三月廿三日神田佐久間町より火の災お
こりて大火となりし後火除の爲に紺屋町に堤築れた
り是は近き事なれば若人もしりたれば其後の人はも
とよりかゝりと思ふもあるべければかくはいへる
也

○これはむげに近き事ながら人のしらぬ事なればか

くはいへる也弘化二年の秋松平長門守定保朝臣の御母榮子君我宿の大和罌麥の種を乞はせ給ひし故に奉りしをやがて御内人萩野幸輔季則におほせ給ひてふたつの鉢に蒔植させ給ひしを次の年の春生出たるをみれば悉く芽萱となりてこゝちよげに茂れりいかでかくはなりつらんといふかる人多けれどあやしき事にはあらず和泉式部集になでしこのすゝきに成たるよしのはし詞ありて「おひかはるこやなてしこの花すゝきまねかば人もよみてみつへしとよめればおひかはれるは變化したる也さる事しらぬ人は或は罌麥のかれたる跡に薄を植たる成共あるひは罌麥の繁茂したる成共私にきはめいへるは實をしらぬ故也長壽してまのあたり見るこそたしかなれさる人々は萬葉集なる松反稚と云意も辨へざるべし本朝文粹なる松變柏賦もいふかしかるべしかの榮子君も季則もながらへ給へればいつはりをいへるにはあらず（おのれその時によめる歌「ながらへて我を見にけるなてしこの薄となりし昔かたりを）（いまだいはぬさきからいへると有いかにいふとすべし前條に三馬種彦等をそしりてなまがみにしてなごいへる口つきにも似

ずたごへば佛書の發語に如是我聞とあるをカクノゴトクワレキクと訓てキケルとはいはず天爾波をしらぬ天竺流の僧たちすらかくの如しましてや皇國學する人のこゝらの年月何をして身のいたづらに老にけむ）
 ○當世僧にて卜筮し病を治る者祈禱するものあまたあり亦それを信じてたのみ思ふ人もありいぶかしき事也僧は死たる人を葬る職なれば病を治る事あたらざる事なりさるわざの僧には堅く禁止め加へ給ひしこと續日本紀にありさる法師をば或は罪科に行ふとも還俗させよとも令の御掟にあり令條を犯す僧もたのみ思ふ俗もともに御掟にそむけり
 ○年月は覺えねど近き頃熊本侯の藩士野口氏妻の胎内の子右腰に下街たるにより醫師股を割生しめ疵を療治して母子共に恙なかりしと昔しもから國にて魏黃初五年汝南屈雍が妻王氏右胎下より男子を産し事亦老子は八十一年母の胎内にありて左腋を割て生たるよしなど玄妙内篇にあり亦天竺にても摩耶夫人が右手を擧て花の枝を折んとして右脇より釋迦佛生れたるよし因果經にありこれらも神代のなごりなる

べし

○安永天明などの頃はすべて商家は何屋といへる家號にてたま〜は製藥屋筆墨屋などには何堂何園などいへるもあり亦茶漬屋蕎麥屋などには雅名もまればありしを今は料理屋蕎麥屋の類は悉く何亭何樓何庵何堂何軒など儒學者か醫師かと思はるゝ號ぞはやりける
 ○我本居翁の號を鈴の屋といへる故に門弟中は更にもいはず他人までも何の屋と號る者いと多くそれに引れてもとのおこりをしらす狂歌師俳諧師などいへる者迄も何の屋と號がいとあまたあるはいかにをかしからずやようせずば商人見世の家號と紛つべし（此こと玉勝間八卷十八丁を見て差出たるならむ彼説有用なれどこれは無用辨也○此すしらすと云ひては語下へつつかずしらすぬとかしらすしてとかすべし
 ○商人の家號と紛るゝからにのゝ字をそへてとなふる也○某の屋といふは本居がはじめたるやうに記せれどそれより古くありしとなへなり本居がはじめたらば先づ鈴の屋をこそ笑ふべきに本をいはで末を評するは又をかしからずや）

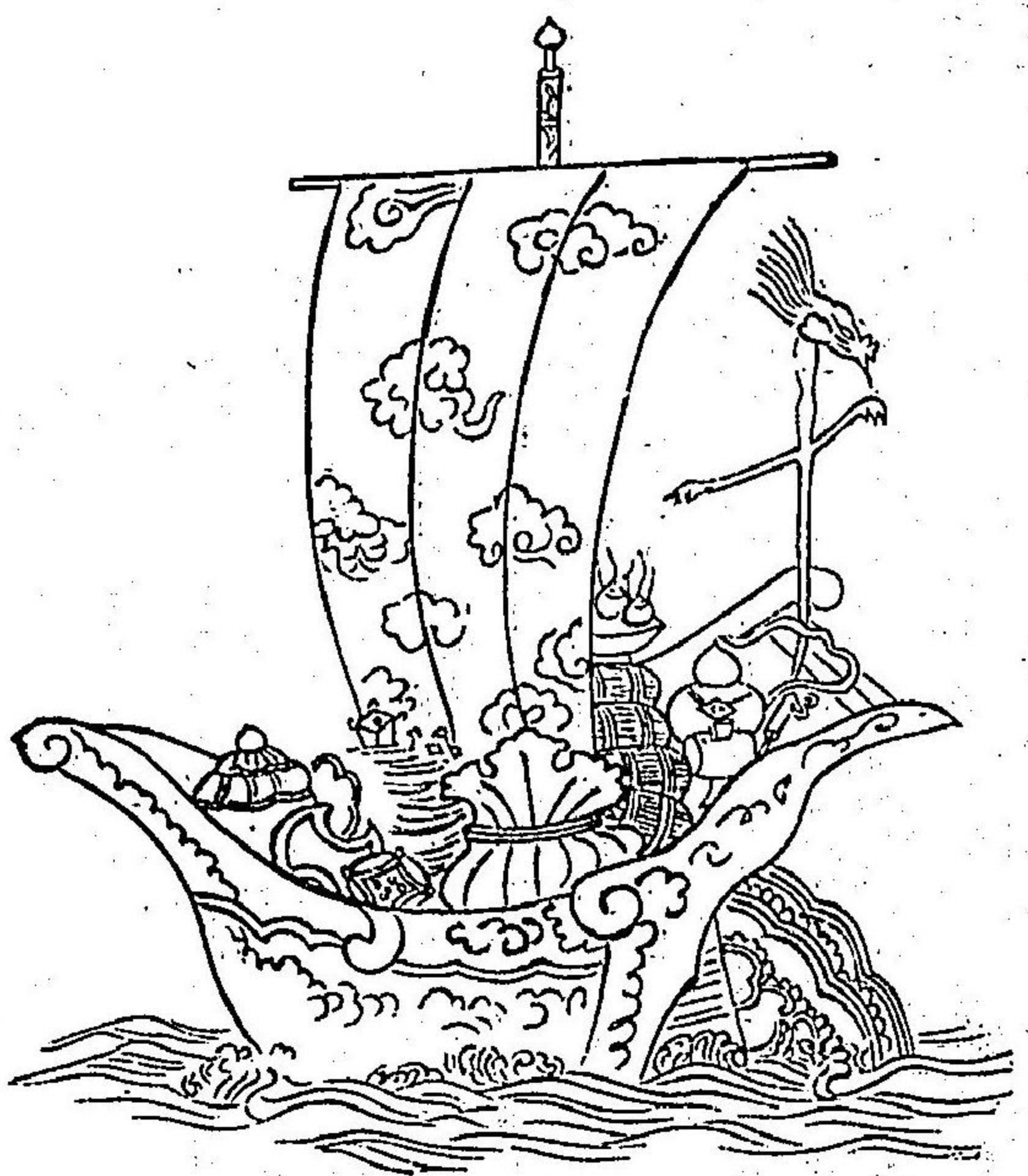
○近き頃は法師はさら也醫師茶道下者俳人すべて剃髮の者はおしなべて坊主といへるがならはしととなりし故に御刑罰の捨札にも無宿坊主杯あり昔し坊主といひしは寺院の住持の事也一坊の主なる故に坊主といひ弟子衆僧等をば同宿といへり東鑑文治元年の條に南院の内藤實其坊主號十字坊之惡坊也これ藤實の主といふ義也亦同二年の條に自其所似山臥之姿稱可入大峯也由入山伴坊主僧送之とありこれ住持みづから義經を送りたる也弟子に送らしめば令衆徒送之とあるべき也
 ○當時工人商人杯は各其家の主人を親方といへり人足などいへる者のたぐひは其頭たる者を親方といへり源氏總角の卷に親方になりて聞え給ふとあるは句兵部卿の宮のあだ〜しき御心なれば中の君の爲といとほしく思ひて黨の中納言の親の如き心に成てのたまふ也亦會我物語に親方のいふ事也とあるは三浦の別當が妻は會我十郎祐成が姨也別當が召仕なる片貝といふ女を祐成がもとへやらんとて其女の親の如く成りていへるなればこれらは親の心に成てといふ儀也當世とは大に異也亦琉球國にてもいにしへ皇

朝の船かの國につきたる時に船人共が其船頭をさして親方といへるを聞いて敬ふべき人を親方といふと思ひて上官をさして親方と言ひしを後には官名の如くに成りて上官の者自ら何親方と名のる事とは成にたり

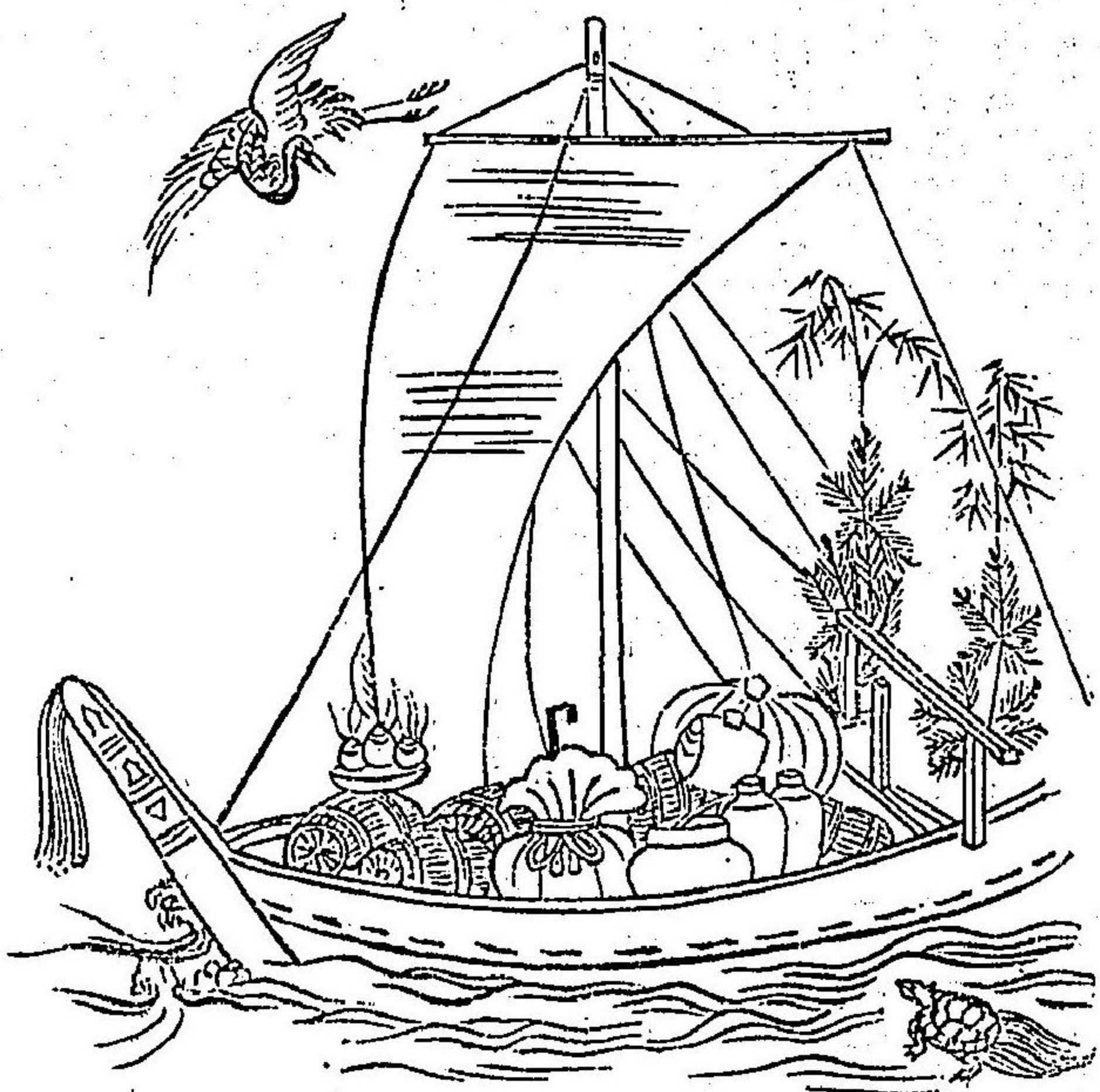
○昔しは人の厄年といふ事なき事也たましくありても陰陽師修驗者などが活計の爲にいひ出せし也靈樞陰陽經記に七歳 十六歳 三十四歳 四十三歳 五十二歳 六十一歳これを大忌として不可不自安也感時則病行矢見憂矢當此時無爲姦事今は男は二十五歳 四十二歳女は十九歳 三十三歳を厄年とせり亦祝年は男女ともに四十歳以上十年目毎に祝ひしなりそは代々の撰集の歌並はし詞にありさるを近來の年賀は四十二歳 五十歳 六十一歳を本卦返りといひ七十七歳を喜字といひ八十八歳を米といひて祝年とせり中には厄年と等しきもあればいと紛はしそが中に八十八を米とするは後世の事にていにしへ米の祝は八十歳也橋窓自語云四條隆蔭蔭權大納言正二位依勅書米字請人貴賤八千七十五人とあるは延交年中の事も運歩色葉集に米年八十歳也幸庵對話に八十八歳に

て俗家にて米字かくは誤也堂上には九十が米也米は八十(拾乎當作十)の人とありされど今の世はならはしに随ふぞよろしき

○當世正月元日朝とく寶船の繪うりありくを買て元日の夜枕の下に敷て初夢に吉事を見るよし也今は二日の曉なるを心得たがへて二日の初夢と思ふ人もあれば二日にもうる人ありかふ人ありをかしき事也澤撰阿の覺書に曰く(大永天文永祿の頃)貞孝と調進節分の御船繪所は當所上京小川扇屋にて被書之候亦其後狩野法眼弟子に時右近と申仁に書せらる其後亦公方光源院殿代に某福山新五郎御船繪の事公方様と御臺所は大引合御船二つ亦御造子御所にて小引合上臈中臈采女迄は杉原に入次第凡調進或時節分伺候而御入候へば御所々々の船不足にて俄に福山繪筆持て參れとて二條春日房様にて御船書き申彼節分御船圖相阿彌昔繪圖にて調申候云々とありかゝれど節分にて元日の物にはあらざりけらし



永仁年中の古畫 縮圖
高居丹波守忠舉朝臣所藏



松平長門守定保朝臣所藏
筆者并附代しらす

右の兩圖は當時のとはいたく異也永仁より大永迄二百三十年大永より今年まで三百二十餘年永仁より今年迄都合五百五十餘年也

○唐茄子を東浦築國にてボウブラトいふ瓜也安永の頃世にめづらしき物に思ひて悦びてくひたり貞丈翁の云く我幼少より若冠の頃享保年中迄は市にて賣らずなきが故也毒物ならんとてくはざりしを元文の頃より所々に植て多くなりたり今は人々好みくへりわきて若き女の好むもの也

○さつまいもとは琉球國の物にて皇國にはなかりしを享保の頃渡りしを台命にて下總國葛飾郡馬配村百姓善藏といふ者初て植生して國益となせりよりて其善藏を後に御旗本の列に加へられて當時青木善藏殿といふ米穀の助けとなるうへに製して葛となし菓子となし酒となす誠に國益の物也これも若き女の身にかへて欲するものなり(此百姓善藏といへる青木文藏ぬしならむさらばシジバの魚問屋也後召出されて御儒者となれりし人にて世にいふイモ先生なるを老ぼけて聞たがへせしならむ)

○上卷小菅御殿跡の事いへる所に萬葉集を引てむか

しは川邊廣かりし故に浦とよみつらんといへれど猶よく考ればそのかみは本所邊は島の如くにて深川邊はいまだなかりし頃ならんされば小菅の岸即入江の海岸にてぞありけんさる故に紫海苔を今に淺草海苔といへるもこゝにて取しならん今に海苔の製所淺草にありて中々に品川にあらず沙入といふ地方もそのかみはそこまで潮のさし引ありつらんみめぐり稻荷と牛御前との間を洲崎といへるもその島めきたり本所の洲のさし出たる崎にてやありけん

○昔し物を買て直に價の金をやるを現金といひしを後には看板暖簾などに現金無掛直とよりて今は世上一統商人見世は皆然り後々は普く天下にひろがりて難波の町家にては現銀無掛直とかきしもありとかや我門人菅原草臣(軍談講師伊東陵舎)ある國主の御供にて筑紫に行たるに豊後徳山にやどりしに其家の障子現銀酒肴の四字ありとなん現銀だにめづらしきを現銀とは其所に似つかはしきかきぶり也

○正月元日朝嚏すれば傍より常萬歳といふ事ありみづからは糞食といふ人あり常萬歳は天竺にて長壽といへるよし四分律にありから國にては沿襲離(萬歳

と云義也)といへりまた糞食は籠中抄塩糞抄拾芥抄等にある休息萬命とよき字をえらびて假たるを字のままに休息萬命とよみたるをあやまりて糞食となりしならんかゝる事はあまた記して神代のなごりに似つかはしからねど既に清少納言もしたりがほなるものといへるくだりにむつきのついたちの早朝に最初に嚏たる人と枕草紙にいへり亦下つ卷のこぢめにしあれば祝辭戲言まじへてかくはいへる也かゝるも猶神代のなごりぞかし

年老たる人のむかしがたりを聞ば今の世のさまとはこよのうかはりにたればさる事ありしやと父翁にこへばしかりこれを見よとてこの三卷を見せ給へるをくりかへしみれば今の世にあるべきこともおもほえず虚談妄説にやと思ふばかりに夢に夢見ることちせらるゝは是や神代のなごりなるらん

嘉永三庚戌年六月

豊口

神代餘波下卷終

俗耳鼓吹序

鼓吹
からうたのくすい俗耳のいしはりとうちすしつゝさ
かななりける小柑子をとりてみきたうべばやは開や
しけんもろこし人の鶯にはあらぬだみたる聲に鳥が
なくあづまなまりにいひつたへたるみやこのてぶり
かいつけぬればかの大なる聲の里人の耳にいりがた
うするくすいにはあらじとてなん俗耳鼓吹といひ侍
るもかたはらいたしや
天明八のとし水無月 香花園

いふ句を高點にして出せしを宗匠仲間衆議して禁忌
の句なりとて大に恐れ金羅を破門せしといふ

○戲場の切落の天井は竹の格子也名づけて葡萄棚

○信濃善光寺如來回向院にて開帳ありし時(安永七
年戌秋なり)川柳點の前句に

うしろからゆるひ髪だど如來いゝ

(本多まげの事をかくせり)

二菩薩はあるかつしやいと本田いゝ

よしみつも初手は河童と思つて居

○枕繪に女の孔門を畫かざるは西川祐信よりこのか
た也と山岡明阿の話なり

○宴席の戲に衆人頭をさげてドグハンスウといふて
一度に頭をあげいろゝの顔つきをなすをドグハ
ンスといふ是は藤屋伊左衛門夕霧がもとにて初てせ
し戲なるよし平賀鳩溪の話なり

新町細見落標には藤屋伊左衛門と云ものは作りも
のなりといへり

○古今の事を附會して時代違ひのはなしをなすを青
持といふ是は龜成といへる俳諧の宗匠の始たる事也
とぞ青持は龜成が號なり(龜成が墓在牛島弘福寺)

○俄と茶番とは似て非なるもの也俄は大坂より始る
今會我祭に役者のする是俄なりナンダ〜と問はれ
て思ひ付の事をいふ是なり茶番は江戸の戲場より起
るもと樂屋の三階にて茶番にあたりし役者はいろ
いろの工夫を思ひ付景物をいだせしを茶番〜とい
ひしよりいつとなく今の戲場になれり獨狂言の身ぶ
りありてその思ひ付によりて景物を出すを茶番とい
ふなり今専ら都下に盛也(大坂板に古今俄選といふ
ものあり俄の事を記す)

○元祿の頃の板にて月次の遊といへる繪本あり菱川
吉兵衛畫也中に芝居の顔みせの事をしるしてつら見
世といへり

○歌舞伎の役者の異名ある事も少ししが近頃
にいたりて甚多し二朱判吉兵衛などこそ人よくしり
たり其外にもありしや聞もわたらず

親玉 市川海老藏 小玉 市川團十郎
二代目 藤塚團右衛門 さまよ 松本大五郎
松栢 山下次郎三

猶あるべし是もまた伏柴加賀禎僧正の類ならん
○塚越菜陽(三三次)は狂言の作に老たるもの也一と

俗耳鼓吹

惰農子著

○地口變じて語路となる語路とはことばつゞきによりてさもなき事のそれときこゆる也たとへば

九月朔日のちはおし、

(ふぐはくひたしいのちはおし、と響

のきこゆるなり)

市川團藏よびにはこねへか

(うちからだれかよびにはこねへかと

きこゆるなり)

一とせ淺草正直蕎麥の亭にて語路萬句ありその時宗匠の句語路萬たま子也のろまのたまこといふ事なるべし此頃の佳句とて人の物がたりせしをきけば

いなかさむらひ茶みせにあぐら

(じなごやむまひ三線まくらなり)

ぶざな客には藝者がこまる

(芝の浦には名所がこまるなり)

金羅(俳諧宗匠)が點はいひかけの句を好む故に巻中

の秀逸にいひかけの句多しおもひ出して一二をしるす

お目にかゝるはお初徳兵衛

あはれ柳の下へうめ若

姉女郎が顔に二町目

夕べの一人きりしたん坂

朝(粥をくふや上人

猿寺の下は赤城の組屋敷

鍋島の尻は黒田の表門

組やしき通ぬけ有べからず

市川團十郎三升市川八百藏の後家(名はおるや)密通の沙汰ありし時

八百藏が後家へさんじやうつかまつり

鬼娘のみせものありし時

きぬをめぐりの鬼のみせもの

してやんじてさうしたといふ歌はやりし時

かけおちをしてやんじたかどうしたへ

この金羅は「首をさられたにきたの御番所」にくだりやう

でも川井次郎兵衛(其頃御勘定奉行にて高名なり)と

せ森田座の顔見世の名題に

柏木の衣紋坂 茸替月吉原

梅津の掃部宿

といへる柏木の梅津の對聯狂詩の名對といふべし此年(明和八辛卯)吉原火災ありて普請出來し頃なれば茸替てといへるなるべし(茸替てといふも狂言の詞なり)榮陽かつて作れる狂言の名題に其名も月の色人といふありこの狂言よりして榮陽が作おとろへたりといふ其名も盡ぬるといへる識語にや今月も吉原といへるは祝ひ直せし意なるべし

○通鑑玄宗紀民間歌之曰生男勿喜女勿悲居々者女作

門楣(門以楣而障狂言女能障門戸也)今の人はいじめ

て女子を生るを賀して門下開キといふに似たり

○予かつて風雪の朝爐邊にありて最明寺雪の段を誦

讀する事一過左太沖が招隱の詩にかふるにたへたり

○淨瑠璃作者紀海音は狂歌師油煙齋鯛屋真柳が弟な

りと稻毛屋東作の話なり

按油煙齋狂歌集置土産の序に愚弟紀海音堂貞峨と

あり

紀海音が作に青梅撰食盛といふありおちよ半兵衛の元祖なるべしおちよ半兵衛の名を忌しにやお長半平

とありて板行の本にうめ木したる様に見ゆ故に末の方ごころ(く)におちよとありてお長と直さぬ所も間

間見え侍る

第二段目に半平が濱松へ行たりし留守に女房お長を

姑がさりしをお長がおはは半兵衛も同意と心得途中

にて半平にあひうらむことば妙也

しうごめこのさりなふみどりなくひ御きけんにし

んぼうするは何ゆへぞ男の顔をたのしみにくらす

女房の口出してひいきこそあるまいけれ影ひなた

になるほどのきばねは折てやられてもさのみ人は

しかるまひいふではないがかはいそに物も見んご

ごぬいませる書出し一つする程の目は親達があけ

ておこうみつむぎなら人あいならきりやうはこな

たの覺ておりちつとのおちめははでなれどわかい

時は二度はないさのみむりにもあらぬ筈(下略)

手を書事をかきたし一つとは老婆の弊色奇妙

奇妙末に七郎兵衛がことば見合べし

きりやうはいはぬ處も又妙也

此はでの字始終に照應あり此所に高原のかけお

ちものにまぎれて追手のかゝる所ありこれも此

はでの字に眼をつくべし此次に姑のことばを書ぬき置見合べし

同所お長が詞

此世の縁はうすくとも未来はながくそふべしと
たのしみにした我身をばむごとく斗半平をじつ
と見やりし目の内に恨と戀の二瀬川みちくるし
ほを涙なる

深情妙語多言するに及ばず妙々

第三段姑のことば

ア、太郎兵衛様よいすいりやう半右衛門殿(半
兵衛父なり)は佛様めうごの中はちんくいな
したは此母お前の様なよい衆の嫁子にしては似
合ふが此方づれの内にてまゝをもたかにやなら
ぬ身ではだには小袖はながみはのべでなければ
手にふれずわじらはお寺の奉加さへ百目の銀は
太儀なり五兩とやらのくしをさし鳥かぶと程つ
と出して太夫の遺中する様にせばい所を八文字
そこらあたりの青物はふみつぶされてあくたに
なる(下略)

此姑がいふことばを半分はかけねと見てもよ

ほどはでとはみへたりはじめのおばの目から
もおちめはちつとはでなれどいへる位なれ
ばしうごめの丸で無理ともいひがたし

七兵衛にじりより(中略)ごを聞ても其様によ
い事はそろはぬ物で身共が嫁は随分と世体は
ようするあるくにも八文字はふまねども一文字
をえひかいて是も又きのごとく(下略)

一字文を符かぬごは始の書出し一つかく程
の目は明いてゐるといふお長が手をかく事に
對していへり細か

右之通のこまがき文章の照應一々かぞふるに違あ
らず後世の作者もかゝる文段ありや如何

道行のうちにお長半平が辭世をのせたり
はるく濱松風にもまれきて 半平

涙にしづむざんざの聲
古へを捨てばや義理も思ふまじ 於長

朽ても消ぬ名こそおしけれ
○松葉屋瀬川を鳥山檢校がうけ出せしより後天明二
年寅四月朔日つき出し瀬川出来たり

竹村蒸籠自分明 松葉屋中第一名

檢校昔時金已没 瀬川今日水猶清

松ばやのちりうせぬ名をつき出しや

瀬川の水にせいろうの山

となん口ささみ侍りし

同三卯年秋瀬川越後屋手代のものうけ出せしよし千

五百兩をもて賸しといふ

同四辰年四月朔日瀬川出来る(このもといふ禿也つ

たひめが禿なり)

天明八申年三月瀬川うけ出さる主は松前公子文喬也

五百兩也と云

同四月朔日より瀬川といへる出来る

○すまひ谷風棍之助(興四郎)身のたけ

力つよくしてひさたびもまくる事なく淺草藏前八幡

の社内にてすまひありし時小野川榮藏にはじめてま

けたり天明二年寅三月二十八日の日なり

手練せし手をどうろうがおの川や 菅江

かつと車のわつといふ聲

谷風はまけたく小野川が 赤良

がつをよりねの高いとり沙汰

○同し年やよひいつかの日祝阿彌文竿五凌など洲崎

俗耳鼓吹

のほごりを逍遙し侍りしに秋葉のみやの内に猿を

つなぎおきたりめぐりに垣ゆひまはして札をたてり

よみてみれば「猿の近所へよるべからずとありわら

はなごのたちよりていろひなごして怪我あやまらも

やありし時親のむづかりいひけんこりてかゝる札

をや書きて置けんいごをかしかりき

ひごひ洲崎の望陀欄にて酒にゑひて物かくとて硯の

左にありけんをしらすかきはてぬればあるじ祝阿彌

いごをかしがりてざれいごをかきて見せ侍りき

白雲が柄袋は旅にあらず

赤良が硯は右にあらず

○いつぞや四谷邊にて三國志を講じける講師のある

日門に札をはれり今日より孔明出る 出合

藏前八幡の普請小屋に(天明四年)でやい無用とい

へる札はりてありし

○小便無用車無用等の札は見なれたれどひとせ牛

の御前の堂の上におかしき札をたておけり堂の上に

て晝寐無用とありそのさびしさ是にておしはかるべ

し 又半込改代町の路次にがらくおくべからずもおか

しがらくとは骨董也

寛政二年八月朔日より築土明神八百五拾年忌平親王將門御玉首也といふ札もをかし

○浪花の一本亭芙蓉花は狂歌に名ありことし(壬寅)あづまに下りて淺草觀世音の堂に一つの繪馬をさぐ自ら寶珠をゑがきてかたはらに狂詠をそへたり

みがいたらみがいたけはひかるなり

せうね玉でも何の玉でも

ある日何ものかしたりけん一首の落首をなしおけり

みがいてもみがいたけはひかるまじ

こんな狂歌の性根玉では

京都にても落書あり

ひかろかのこんにやく玉も藍玉も

たごん玉でもふぐり玉でも

○小祿の事を稱してはつち坊主の報謝米はごいふ名言は訥子が由良之介となりし時いへるごいへごそれより前に近松作の大經師昔曆中の卷に梅龍といへる講釋師のことばに見へたり

○ひさ日今戸橋のかたへの船宿にいこふ壁にかゝれる帳あり題して曰く客人大入帳

○現金かけねなしのかけ賣不仕候のといへるはき、たれご髪結床の定書はごをかききはなし懸職一切不仕候又青山の菓子屋の見世に居喰不仕候もをかし

落書

狂言に能なし猿があつまりて

見ざるきかざるいりがあらざる

○竹本住太夫俗稱は田中文藏(表徳文起)石町に住居す

○局若藤上鏡山舊錦繪(容楊傑作)天明二年寅正月より中芝居(名代薩摩屋小平太座元豊竹新太夫)座にて

大あたり也此時竹本八重太夫下りて堀川の段をかたる中に猿の場大あたり也その唱歌

猿廻しおしゆん傳兵衛近頃河原の立引に見ゆ

おさるはめでたやなむこいりすがたののつしりご

いなるさんなまたあろかいな 合の手コレ

たぐくものじやさかづきをさんなまたあろかいな

合そこでおはつがいたやく物じやコレいたやくの

まがないくちすうあひだにあけむかひのかごの

しゆがやかましようゆふやかましい

いのめい物茶きん餅

「しやうなら」けんくわしやうならあめざや新

介かりがね文七五人組ぬれがみ長五郎はなれご

ま長吉黒舟の忠右衛門にぎせんの庄兵衛

兵衛のさへもん薄雪さ

○この頃酒宴にもてはやせる歌

「そも」われらは西の宮のゑびす三郎左衛門の

尉色の黒いが大黒でん顔の長いがふくろく壽頭

巾」かぶつておひこみ姿のおやちごのいはね

ごしれし壽老人」布袋はごぶつその中に合う

つくしひのは辨才天女ごほめたればそこで毘沙

門はらをたて」なせほめた」七ふくじんそ

の中で辨天ばかりをなせほめたごいふたもやば

かいなわらふ門には福來る

「そよ」風にさそはれてはぎもあらはにねみだ

れてヨイヨイヨイヤサアリアサヤットセイ(此

歌をうたひて手拍子をうつなり)

○薬研堀藝者(歌妓)かくしことばに房事の事をはて

ふ盃をさんなまたあろかいなコレよめ子のひるね

はこりごせ」ナアコレノホンホヨホ」あろ

かいなエコリヤ」ヤイコリヤさりとば」ノホ

ンホヨホ」あろかいな合おきたらたがいにだき

つきやれオ、それできげんがなをつたぞエ、

あろかいなさんなまたあろかいな合くるりごかへ

つてたつたりなたつてくれコレ」た、しや

ませついでにひよりを見てたもれよい女房ぢやの

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

またあろかいな合ひより見たらばおきてたも」

そうじや」おさるめでたや」

この猿廻しのうた竹本八重太夫かたれり大に流

行せり八重太夫俗稱泉屋平兵衛人みないづ平と

稱す

文化五年戊辰中村歌右衛門(芝翫)中村座に下り

てこの猿廻し大あたりなりき

○去年(辛丑)あたりより京都にてはやりし歌とて文

竿の見せ侍りし

しといふもをかし畢竟是陰

近松戲文評(情農子著)

△會根崎心中(徳兵衛おはつ)上卷(徳兵衛縁の下に忍び居おはつ足にて喉をばつる所妙なり可斷腸)

「此よのなごりよもなごりしに、行身をたどふればあだしが原の道の霜一あしづゝにきへて行く夢のゆめこそあはれなれあれかぞふれば曉の七つのおきが六つなりてのころ一つがこんじやうのがねのひいきのきいおさめ寂滅爲樂とひやく也」

徂來先生云近松が妙處此中にあり外は是にて推はかるべしと宇佐美惠助(名は惠字は子廸)の話也

摩訶十夜に云

一會根崎心中の道行の中に何くとして何くと死に行身の道の霜一足づゝに消て行と云所迄作りしが言葉盡て心たらずいかにと案じはけたる其頃伊勢の菟涼攝に來合れるを悦びいかがして取續けんや御助言し給へと投かけたり菟叟聞ながら外の咄して酒のみ物云て笑ひ遊び

門左衛門ひたすらにすゝめてたのめるにぞ叟何やかや雑談しながら夢のゆめこそはかなければ成ともやり給へと云しに近松大に悦びやがて作り入しと也まことに詞情の盡たらんにいと佳く轉じたる文體すらくとして行跡のいかやうにも取つづけやときえ彼決前生後の文法なり涼菟は妾異の作者 明和二乙酉年八月板 右は古湊堂五十周忌追善之俳書 右小石川紅の東自書

△嫗山姥(五百番之内)全篇は頼光の逡巡退避を以て文をなす

第一段 惜らくは敵をうつ事早し

第二段 姫の奥へ入ところ散しの妙を得たり不如此則山姥なる事あたはず

第三段 美女御前以怯制愛讀警中書而始識其志 一哀深於一哀

第四段 山姥必ず奥を見まいぞと云是安達原の怪胎也

第五段 無味

△百合若大臣野守鏡 後世儀太夫本の名に似た

第一段 第二段 さして評すべきなし

第三段 有馬湯處此老本色子竊父刀使人感泣別符殆死於浴室忽如脫兎奇々怪々

第四段 島中事妙々應化爲女妙一層母子情態宛然如睹俊寛島物語及道滿大内鑑子別等不能出於此範圍中

第五段 偽盲女餘波可笑

△没鯉出世瀧徳(小言詹々たる者) 上卷

「こゝぞうき世のたての大木戸あけぬは銀のどがしの關それつらくおもんみれば 狂文 大じん客衆の秋の月は小判の雲にひかりを傳よひましや長へんじおごろかすべきよはもなし

滑稽 新町橋のはしのうへはし辨慶が長刀のさや落したるごごくにてうろくとして立たりしが

下卷 妓東殺客藤五郎の條下 詞「ヤアこりやなんでころさう刃物がなない帯を

といつしめころさうかいやゆるりとする間は 有まいたば粉でふすべころさうか酔ふてさきへこちがしなう

評云痴態妙々

○本庄押上村長行山大雲寺に古き石塔あり

寛文二十二年

寶安林清信士 中村長十郎 十七歳

十月二十五日

如此紋ほりてあり

今の七三郎が紋也

その先祖歟

寛政十一年己未九月一日大雲寺へ立寄みるに

この墓あり

此寺に役者の墓多し瀬川菊之丞代々の墓あり

委くは瀬名氏の役者墓詣に見へたり

寛延二九月二日

圓學院即譽源阿是空居士

初代菊之丞なり

齊曆六閏十一月十三日

功德院淵譽水阿仙魚居士

菊次郎なり

寛永二閏三月十三日

正覺院譽十阿方順居士

王子路考なり

○原富五郎(後稱武太夫)表徳は原富三線に堪能なる人なりけりいつの年にてやありけん市谷長流寺にて原富の三線に白獅(市谷袋寺町一向宗淨榮寺先住)が尺八にあはせて道成寺の曲をなせしに頃しも秋の末なりしが空にはかにくもりて雨ふりけるとなん此座にありあふ人々その妙を感嘆しければ原富笑ふてかかる三線は淫聲にて雅樂にあらず道成寺の淨瑠璃また古の曲にあらず何ぞ天の感じ給ふ事あらんほどよく雨のふりたるは己が幸ひなりと申き此時先新九郎(鼓の名人)先山彦源四郎(三線の名人)歌舞伎役者尾上菊五郎(梅幸)市村龜藏(五代目羽左衛門)も此座に居て感じけるぞ

置しにある日秋風ふきて其の竹に入しにおもしろ音の出たるを聞てその竹を吹き見るによき音出たりそれより二なく秘藏せしが鈴寶寺の普淨といへる僧尺八に堪能なりけるものこれをかりて吹て返すとき甚是を惜しみ放下着となづけて返しけり山僧其志の切なるにめですなはち是に似たふ普淨是を白獅につたふ白獅死にいたるまでは是を秘藏しある門生某に傳へしがそのうち門生死して又淨榮寺(白獅子の住寺)に藏めけるぞ

寛政三年己亥上巳同近郊庵主人觀放下着於市谷淨榮寺

○坂東と吾妻との二の名字は市村家の名字なりと市村五代目家橋のはなしなり

○市村家橋狂名を橋太夫元橋といふ天明五年二月十八日より堺町へすけに出て三ッ人形の所作事大入也此時狂歌連中三枚の摺物各二百枚つゝおくるこれ芝居狂歌すり物のはじめ歟

碓の辨

○月の前のチへまきぬたはア、夜さむをつづるウ雲井のチへかりかねは琴ちにまがへて面しうやアへ

此間に手あり

夜半の砧は時雨かあめかうちつれだちて通ふ賤が屋是古代本手のきぬたなり碓は秋氣にして平調のてうし行におひては金をつかさどる律はかなしむ弊に坐すされば其心をもつて彈すべきをはなやかに手をひく事になりゆききく人もさまゝ手のある事とのみ覺へしは大なるあやまりなり名づけてきぬたとあるに心をつくべし唐大和にもにきぬたの弊は感情のものなれば也

又いはく近世おしなべて長唄といふは意味有ことなるに其わけもわきまへずして長唄といかなる事ぞや

古歌に

月前搦衣

兵部卿長綱

小夜きぬたうつ音さひし秋風に

更行袖に霜やおくらん

哀さへ種ゆへ長き秋の夜に

爲家

月に恨みて衣うつらん

よを寒みしづか衣をかりかねの

爲遠

聞ゆる空の月にうつ哉

右碓彈方并七段獅子秘曲傳授せし名曲

長井谷助

金子氏世野女 勝原悦女

多田氏たち女

西川徳藏

にしきや惣次

佐々木市藏

杵屋佐次郎

此外懇望に付自筆して送り遣候名曲

觀世吉新九郎

市村羽左衛門 尾上菊五郎

山彦源四郎

山彦百次

高橋孫左衛門

小松屋三左衛門

安永元辰十二月

原武太夫盛和 印

○松江老侯(出羽の隠居也)葬送は天明二年十月十三日也芝天徳寺に葬る高名の諸侯也(辻々見物多し館うり坏出たり)

幕の石扉に十六羅漢有榮川典信の下畫也めぐりに櫻をうゆ又退筆塚あり

○すべて京都士太夫の家慶吊の事ある毎に盲人多く來て施物をうくる也朝四つ時前に來りて四つ時にうけとるといふその盲人鞆町組傳馬町組とて二組あり○手れんいつはりなしと挑灯に書しはいにしへの遊

女奥州するけなしと張札せしは今の講釋師馬谷なり
みれんなしは芝居三階の餅の名かけねなしは現金正
札なり

○友泉染といふあり友泉は繪師也かれが書所をうつ
して染たるなり尤墨繪にて書たるも有友泉は祇園町
に住すと沾涼が世事談に見へたり按するに貞享板友
禪ひながた(四卷有)序に宮崎氏友禪といふ人有て繪
にたくみなる事いふ計なく古風のいやしからぬをふ
くみて今様の香車なる物數寄にかなひとあり

○此頃獅の名とて人の見せけるをみれば

一まい黒 一まい白 白黒ぶち

目黒 鼻黒 赤ぶち 栗ぶち

かぶり むじな毛 耳は大耳べつたりだれ

毛なが 毛づまり

當世は (地ひくの毛長流行申候)

上田すじ こくすじ 治郎すじ

小田すじ 大島すじ

○天明五年己八月二十五日

(六代目)市村羽左衛門家橋死

致興院讓譽保壽居士

(寺は本庄押上大雲寺)
○同年顔見世より中村仲藏(六代目)中山小十郎と名
を改む是は仲藏養親にてこの外世話になりし者の
名也といふ歌うたひの家也古歌に

中村のツキ師はきねや江戸げいしや

ふりは志賀山顔は中山

志賀山の江戸一流は兩座にて

中村生島ふりの三ヶ所

これは(古)市村家橋吾妻藤藏(園枝)に傳へしといふ
志賀山の家は身ぶりの家也元祿二年の板にて舞子式
正稽古本といへるものあり予は家に藏め置り志賀山
萬作(まゝ子の師匠)が弟子の名并唱歌をのせたり

寛政二庚戌年夏中村仲藏死

○天明五のとし七月十四日頃御旗本藤枝外記といへ
る人新吉原大びじやあや衣といへる遊女と田圃にす
める餌まきの家にて心中せしに藤枝氏五千石を領す
る家なればその頃吉原にての歌に

君とねやるか五千石とるか

なんの五千石君とねよう

といへるを三味線にあはせてうたひ興じけり予は

ふれに古樂府のからうたをうつす

羽林衛藤枝氏與北里菱家倡綾衣狎親戚諫之將幽

藤枝氏于一室藤枝氏走至菱家携妓入所識農家共

死里人哀之作斯歌

寧與君同寢將守五千石徒見五千石不如一歡夕

鳥亭焉馬云夫より前にある歌なりとも聞けり

予按計府簿

知行上り候書留

寶曆元年未年

一高五千石(下總下野安房) 三浦肥後

天明五年己年

一高四千石(武藏相模) 藤枝帶刀

然らば此うた三浦氏の時のうたなり焉馬老

人の語徴あり

文化十一年甲戌七夕後日記

○文彌といへる節は文賀といひし座頭の三味線に彌
太夫といへるもの、淨瑠璃をあはせてかたりし聲な
りよつて文彌とは名つけゝるご名見崎喜惣次(剃髮
して大喜都)の物かたり也

此説文字太夫の方にて傳ふる所と異也

○しのばすの池の蓮天明六年丙子七月中旬の大水よ
りして断たり近頃菱の多くなりたるも蓮のため害
ありしやそのとしの七月九日頃津田胡蝶子植木氏并
上氏など、蓮見侍りしが又寛政二年庚戌六月七日朝
徐徳卿鈴木一貫井上子存など、蓮見にいき侍りに去
年頃よりして蓮やうやく處々に生たりといふ

○河東節の文句のうちおもしろき所を左に抄出す

神樂獅子

○扱も其頃女にあまんの布あり男にあまんの粟有
(以下きりんそのそのにいたるといへる迄文選賦
の語也) 起し得てよしひとつ星をみつけたら長者
にならふな(以下俗語のうつりよろし)

神樂獅子忍の段

○じつは九けんにかくれなきとげも花さくいばらき
やなにはなれどもあづまごてかのやうきひがはへ
ぎはにわうしやうくんがおひさがりまたりふじん
がひごつまへせいしがはけるうはぞうり花のはな
をふみしたく鶴のあゆみのゆたやかによめりく
るはのすがきや

有馬筆

○か倚れば雨ごちぎりにしうき世の人のそらごとを
あつめてむめて見るならばあさくなりなむ天の
川星もあま夜のなぞく／＼にそれは見へねどく
く／＼とぎれのきの玉水おちやすき身よりながる
川竹や

○こぬ夜つもりしうらみには我さへ身をもわすれつ
つ心づからやかれぬらん萩やきやうを其まゝに
つくらぬかほのさびしさはゑんざんの暮秋の色は
らく／＼とふきちる人もあらしの音ばかり
○く／＼枕のあいおひもまつとはしらぬ君ゆへに枕
ひとつでよいものを残るひとつのおもかげはかや
のおさへとなりけり(結得妙)

鶺鴒のうら小袖

○男をみがく玉くしげ心のおくのひきだしもはや秋
風のふくさぎぬぬぐふあぶらのしみ付しひよくの
けぬきとりいだしかぎはよくこそ

○さゝにひとよのゆかり有たなば様とかきちらす
禿か筆のかさゝぎのはしたないやら戀しいやら
水上蝶の羽番

○なるもならぬもながし目のながれにそよく川竹の

あふさきるさにさはく／＼とさわるその夜はもらふ
てあふてどんとねじめの一二三(曲調如流)

○みつとやみつありとてふ／＼ぞてふはおぬし
のかへ紋とつねにぬはせて染させてひよくのほね
をうちかけのうへにみだるゝあらひがみしやんど
あげはのもろつばさ

帯曳おとこ結

○これはてごしの少將のよるはくれどもひる見せぬ
忍びすがたはおほろよのつき出し女郎はつまくら
いほりの内にふたり寐は風情なりける次第也

唐團扇(此文琵琶行を模擬す意をとりて文

をとりぬあり文をとりて意をとりぬあり
其文の妙所は下に抄出す○を印とす錯綜
の妙言外にあり)

「じんやうのほごりこう上の秋秋風客を送つて一葉
かろくあしまをわくる船のうち酒をすめて白居
易は月にうそぶくあまの原八重のしほぢの末遠く
千さとの外もくまなくて水の上もみもふかき江や
みぎはの霧のたえまよりなほ下もゆるいざり火の
ほの見えそめし苦のうち浦ふきかよふ秋風のか
すかにそれと琵琶のねかおぼつかかなみのしらべか
も「四絃一撥すればごもにうらみを語るまれにだ
にみぬめの浦のあまを舟いかなる風によるべ定め
ん「船ごぞり居て聞もなほ秋の哀も身にしれて袖
に涙のおもほへすたぞやと問ふも浪の上「こたふ
る人もなくかもめびわやんでおおるせす「なほ
しき浪のうつ／＼なく千こゑよびも「聲よばふ船の
内「忍ぶとすれごあり明のさやけき月に色もれて
苦ふくかげの花す／＼きはのめく袖に露かゝる「時
に樂天こと葉をやはらげいかでかく波にうきねの

船よせて妙なるびわのいさゝなほおぼつかなしや
さるにても御身はいかなる御事を「あまのかる磯
の玉藻の下みだれうき言の葉もしらゝいごのびわ
をいだきておもはゆるくなばかくせしかほばせは
卯月に残る葉ざくらや木の間の花の露おもく打た
れがみをそのまゝのすがたもよしやにくからす

「樂天いごいあやしくてたれかひよくの浪枕かたね
の夢をうらみてやいふかしさよといひければ「く
ちなしの色にそむてふ山吹の花もあだなる身のむ
かし「かたるもさすがはづかしのもりてうき世の
定めなきいく宵々のかり枕かはすちぎりも河竹の
ながれのすへご御らんせよ「扱はあだなる河竹の
ながれ水の末ごをくごてや爰にすむ月の行衛を
かたりましますと「なほさしよする船のうちつな
でかはして「花ご見し昔のはるは夢なれや芙蓉帳
のうちせし手枕のかすゆるく「ひしのたまきは
てしなき思ひにやせてごふ盤ながるゝ水の影うす
きあやのうちはおひ風はかふるが袖の香にほ
ふけしきもよしや里わけて片日夕だつ空もすいし
き小村雨かさの長柄をさしかけて伽羅のあしだに

こぼるゝ露のつゆにぬれぬれほすきくの盃
 ゆらぐ手もはでな心かくれなるのもすそにすそに
 したみ酒「また待宵にふけて廓のもゝ羽がき」ま
 ぶな男のかすり歌聞くに心のまゝならぬつとめの
 きやくに下ひもをどくしほる露泪「そよや浮
 身をふざんの雲の行術ははれてぬるよい」にた
 れか身うけのかねごもかしこはまゝよ此人の泪
 ほくろもうるさし「おごころらみに今年もすぎ
 つまたくるはるもあだにちるすがたのはなもう
 つろひていまはねびきの待人もたれにすがん
 よるべも浪に身をうき草の根をたえてさそふ水
 とて行ふねのともこがれてこゝに茶をめせ
 小うり茶うりて世をわたるその人にさへわす
 られてやがてといふて出船の片をなみ間のよすが
 なくこと浦かせのおとづれをいそ山松のよそにし
 て心にくくる有明のつれなく残る身はひとりなみ
 だの外にさふ人もなくねをびわのもろこゑにふし
 しつみてぞいたりける「げにや商人は利をおもん
 じて別離をかるんす今樂天が身のうへも都を出て
 はるゝとがゝる邊土に謫居して古郷の秋のなつ

かしくしちくのこゑもまねなるにいと珍らしきび
 わのねのひなにはあらぬ思ひでに今またかゝるう
 きなみだむかしにかへす花の袖都の春もあだ夢と
 おもひくらべてげにまことこゑもに天涯淪落の「あ
 ひ合ひたりし身の上と其たんそくのこゑのはにな
 ほぬれまさるくれなるのなごりの袖にびわとりて
 いとかきならしさう「むら雨つとふこする
 よりくだけて落る玉水の岩にせかる瀧川やなが
 れもあへずせきとめてたちまちさく銀瓶の水ほ
 とはしる一きよくも是迄なりと夕しほのさしてわ
 かれのこゑもをざかり行く船のあと月ぞた
 ゆたふなみだの袖しほらぬ者こそなかりけれ
 此文まことに一唱三嘆と云べし因て全文を載す
 白氏が琵琶行をうつつして斧鑿の痕なし本文と離
 れて合ひ合て離る何等の筆力ぞや意は琵琶行の
 詩を主として調は謠曲の趣を得たり
 狂女草枕
 おきまよふ身はあさちが原人をおもひの草かれて
 よめなつくしは有ながらつばなほうげしおもかけ
 はくしせぬかみのかたよりによりもあはねばおや

と子のおもがはりせばいかならん

角田川船の内

○くわうが千年過て後一たびすめる角田川うら田に
 よする水の玉かゝるためしはあらかねの土どり船
 のわれら迄ゆたかにすめるみよのはる君にすゝむ
 とかくとやかや(謠に似たり)
 ○あの念佛について日本に一つのあはれの候をかた
 つてきかせ申さんに紙したくして開給へ泪がやが
 て出まじやうとさほのしづくぞはじめける
 ○ひでりの櫻色さめて心ばかりはしめれども口には
 わたのくつわをはめさけべご聲の出ばこそふびん
 なりともあさまし

はつね聲

○梅でなければねぬうぐひすの梅でなければこしさ
 へかけぬ(春情可唱)

山かつら

○ふたりが中にあくるよはむすびもわけぬひとへ帯
 かけししまだのかみかけていつはりならぬこの
 やま

待宵

俗耳鼓吹

○すだれもしめるよるの露きゆるおもひのけぶり草
 かほりはよそへもらさじとさせるあいてに待つよ
 いの月はながれへやどかりてぬれてひるまもなき
 盃をさして障りの雲もなき月見小袖のすそもやう
 ○ほんにおもへばかりのやごとの木はぬしへやごる
 身のつとめといふは名のみぞとすゝむことばのい
 みじさはなほも思ひのます鏡

袖若葉

○あけぼのむらさきだてるつくばねやけさしらじ
 らとふじのかほ袖のにはひもわかやかにそろふす
 がたぞにくからぬ

○わか草もかぶとぬけりどての霜(發句歎)

雪間

○くるわはひとへふたへ帯ひむくのつばき白むくの
 むめがかほりをあそびつれたがためぬらす衣での
 つむてもしろしわかなにはきのふもけふもゆきの
 間をかよふがじつか待つもまたになふてみせん田
 子のうらよきはいり江の波うちよせて枕のふさの
 いそなつみごさへほそめに月かげも道たごゝし
 土手のむまくはんをむげにくさの花

○よひふる雨をけさみればしたはくもらぬ袖のいろ
なむきをあます山おろし

袖かきみ

○かさせば柳は袖のふりはじめ

そらはかすみの人はおしろい

とくくどはるの行衛のすたれにて

一寸よぶにもかいてやりけり

さすさほはすいみにきはめくれの月

かはかぬはだにきて夏衣

見よかしの見るやみるかしみよかしの

身は身上りの夜をそとに立

さひとつののれんをないておしたまり

鶯も惜むかさはらせぬたふ

戀すれば人はわか木にかへり花

とくもむすぶもおなじ雪

此曲俳諧の句を以て一曲とす妙々

助六後日道行

○つまぐるじゆすのたもと川水さかづきはるひもせ

す京のよし田の神帳にかほだしもせぬうぶがみは

やばけ神かうつちんかけしんのわらい神さまと

うらみかこちしとがめにて今また今の身のはぢを
さらしなはてのみこしより松の位とそやされしそ
もまあわしはぬし様のつまといはれしはつこは
七十五日過もせでかくなるやうなよめ入はずぐせ
いかなる因果ぞとるりにつゝみしたきつせのほだ
もふちにやしづむらん

此曲俠客の氣象今みるがごとし其比の當世文

なるへし

景清道行

○みのならば花もさきなんくんせ川クヒセ也(發句なる歌)

蟬丸道行

○やゝありてまれよの卿かやうの御すがたにては盜
賊のおそれあり御衣を給つてみのをまゐらせ候べ
し「是は雨にきる田みのゝ鳥と詠せしみのか」「又
雨露の御ためなれば同じく笠を參らする」「是はみ
さふらひみかさよみし物よなふ」「又この杖は御
道するべ御手にもたせ給ふべし」「げに〜これも
つくからに千とせの坂もこへなんとかのへんせう
がよみしつゑかそれは千とせのさかゆくつゑ爰は
所も逢坂山

同笠の段

○第一第二のけんはさく〜として秋の風松をはら
つてそゑんおつ第三第四の宮はわれ彈丸がしらべ
も四つのおりからなりけるしぐれかな

かぶろ萬歳

○ふみに宿かすふり袖のあけぼの染もやう〜とむ
らさきだちし初空にはるもおさなき鶯のりやくを
おのがよすがにて心にならふごりなりはいさみあ
るみのさへかへる朝おそげなる雲の帯

○ちよの敷ある御代ながら枝もならさぬうちきはい
やよ世心しらぬ姫小松はつねをしえんたまくら
の聲見おぼえていたづらやおとな心の春もさてつと
めせぬ間にさく梅の雪だまされしふせいあり

○よるもすがらにたきすて〜けさは霞もにきはしき
かうき〜ならふはじめよりきやくといふ名のいと
しきはごふともこふともいへばえにいはいねにおふ
る懸草のふた葉に物や思ふらん

此曲全文ともよろし一二の警句を抄出す

狂女あらしよたい

○さかりなる男ふたりをせいしやうや二つまぐらの

俗耳鼓吹

さうしにも過こしかたの戀しきはかれたるあふひ
ひな遊びてうご品ある姫ごせの十ウより内のたは
ぶれを二九や十九のやよひまでめをともてなすう
らやましこゑもおします野良猫の心のまゝに妻こ
ふるからも大和もつながらるゝ是ぼんなうの犬はり
こひいな祭のさきはらひうきをのせたるのり物
はさりし夕のあひかごやそれより後のおとづれば
なくねをそふる色鳥のゆかし〜のつもりきて身
のかひをけは外になきほういこうばこ玉くしげか
かけのはこにゆするつき二つべつ〜い火吹竹れん
木すりばちわれからとやつす今年のあらじよたい
さんごみづしの黒棚やすいり香ぼん高つきやかけ
ばんかうし蛤のさら盃もびいごろを置まごはせる
しごけなや

○くいのやちたびふりしきるのきのてんてきとひだ
けを二つにわりてみせたまもちかくはあらで遠ひ
うごしようらの契り引かへすはきやうのわかれつ
きなくもほごきをた〜くうれい有り

巡簷點滴似琴筑三体詩また箏曲にみへたり松羅
の契毛詩にいづ破鏡の別古詩破鏡飛上天の故事

鼓竹は易に云ふ

京わらんべ

○此曲全文ともよろしされどこれぞといふべき佳句もみへず

とひへ帯

○ほかのつとめのさはりさて内との者にせかれては文も通はずぬしもこすまつちの嵐みのわの雨いづれおもひのつまごこのうさねにたつや名取川

松の内

○新玉の空青みたるあけぼのはつね聞とりも若く若水はやき車井のめぐりくるく年の朝こそまゝなるみだれ髪こぼれかゝれるさし櫛はたれむすべどかしどけなやしどけなりふり品さだめしつげぞ残る戀衣どの袖ひかんうつりがの峯にひとはけ夕霞二日は茶屋にゐの日にて手さきさへざるはと板に軒よりつとふつくばねの笹にからまり裳へ縋がく袖くゝる手もとに一つ袂へ二つ笹にからまりもすそへまりがく袖くゝる手取に一つ袂へ二つ戀ぞつもりていつの間にもちよつと百ついたまりの敷とんと落ては名はたゝんとこの女郎衆の

さきわけあいの山

○君とわれとはもじ障子はてはうき名のたて付ケに身をひそめてもかげやどすゆみはり月にいとかけとするやこさうの忍びねにきかせまほしきまへ渡り

おせんものぐるひ

○人めの關を忍ぶが岡よししのはすが池の面げにいさぎよき清水村弓張月や入さの山谷中の木立しげり合花の盛りはみよしのよしのより猶上野山(清水村とは清水門のあたりを云歟是は考證のため抄出す)

○霞の間よりほのかにも見てし人には逢ひたらぬ淺黄ちりめん茶ちりめんうこんべにかば薄風色ある人に見せばやなをしまの海士の濡衣もしを角袖一つまへしゆすやからあや白ごんす縫すり箔のはばひろにゆかりの色やむらさきのちりめん手ほぞ結びさげたれ白菅のか笠をまへ深々ときなしつゝ(此頃の衣装の風俗おもひやるべし)

きよつら道行

○諸行無常のかねのこゑけふをかぎりどひいけども

俗耳鼓吹

下ひもを結ぶの神の下心かねてしりたし問はまほし三日は客のきそはじめ抱てねの日のひとたきのかほりほのめく奥ざしき君がちびきのうしの日やうしどやいはんわがおもひ五日やみなんこりすもかよふ土手にあけたる身ぞつらき大いそのかねは七つなゝもざりどらにあをさてすそにつゆ小づまは嵐松風實に君が代のはんるいは虎もすみなんちもこの竹梅はづかしきるりの香にまだ青陽の夕くれ寒くかりぎのたもどちはやふるかみもおもひのあればにやいつしかけふはきぬくのけんしやう日夜ひがしにはあま戸もはやくあくる日のしめてねならん七くさはごぎやうたびらこ佛の座鈴菜すずしろせりなづな君がためとて若菜摘ちたねの色こそ久しけれ

此文北里初春の景をつくせり

松の後(此文松の内の甚しきをこねり)

○ながれ久しき夕しほのさしぐしさわるけつりかけかねてきのへとねてまつ枕せうじまばゆきあさあけにみえろすよもうらうらとほたけくのしづがわさ

身の夕くれをしらかしの杖を力にたごとくと一あしゆけば娑婆とをく二あしゆけばさきさちかし(實に太夫の道行なるべし)

とら少將道行

○戀はくせもの皆人の戀はくせものみな人のまよひの淵やきのごくの山より落つるながれの身

袖とち會我かみ結の段

○ふたみが浦の玉くしげちすぢのかみの敷くになたのむちかひの末かけてすかれのきやうのけぶりともきへなばともにわれとてもながらふべきかけふ有てあすをばたれかしらかみのうすきちぎりと思ふにぞくしのはごにもる涙袖より傳ふ五月雨おもひくらべてあはれなり

○いふてはなげきくごきては又ひとむすびふたりねにむすぶちぎりの元ゆひをくり返してはまきもどしまき返してはくるくごめぐりあふ夜のたまくらにもつれあひたるみだれがみゆひがひもなきい

もせぞないつかこちつとら御前わりなく、みをぞけづらるゝ

髪を結体今見るがごとし妙々

しのだつま

○又飛出てほそ道の一もと柳かいめぐりしやんとた
だすむ姿みの池水さむきうたかたのうたてやかほ
るやきねづみさはるとはねんねぢ返しあらおそろ
しや

紋盡しかご蒲團

○六つをうき世のほかげごは此里ふりもごもしそめ
歸るあみがさくるづきんおくるなごりごまつ人と
みちは二つにかはれごも同じつゝみのかよひぢに
いたゞくほしのてうちんはくぎぬき松皮木村ごう
木村ごうご中は三浦のたれごしら茶亭の下着に物
をおもへごや

○やみごふる夜もかよひ来て三本からかさ雪折の竹
町にての九つはごての四つかや三つへいご大すな
がしの長がたなはをりはふじのこしをまきはかま
のすその清見がた浪の字をなすゞごもる左ごも
るにくるゝごくるふや戀のつなぎ馬まぶのたづ

なにからまれてやはづのちがふその夜半はまがき
にひとり立ゑばし大一大萬大吉の首尾を干とせと
羽をのしてまふたる鶴の松高きすだちかぶろのし
きせもの

灸すえ岩ほのたゝみ夜着

○ふたりねの夢ばかりなる春のよのみじかき年をう
らやみてせわになるをば姉といひうきをかたるを
いもうごゝ名をよびかはす世界なりけふしも聞ば
虎御前いごし男ごかくろひの淋しさごはん心さし
ごきはの色の松のはにつゝむ事をもかくさぬは中
にひとりたれかれと手づから持しくだ物もな
にたぢばなのふところは母ある人の誠ごや是は姉
へのみやげ物茶やあつらへはふるめかし思ひ付な
る品々はけふのわらひご夕まぐれ「風のふすまを
さしもごささしもならはぬ竹ばしのかみにかゝれ
ば取直しふしのないのは我ふたりすえてやるのは
おんならずすえさするのをおんにして男心のにく
いのも嬉しきほごのやほとなりひんの病は昔にな
らす外の病のなかれかし左より先すえをめて右に
とめるもふうふひさうによい日ご定むるも曆に

まかす世のならひだましすかしてさながらにおと
なげないご恥しむるあつさごらゆる「たはむれに
一かたに思し召すかや深きかや人をおもふかした
ふかやあへば別れをそのまゝかこちさせる取手に
横雲渡りさをなぐる間もやるせなや「禿はそばに
ゐねふりの顔にあたごの山を見よ今ふた火との何
倫も男思ひのかり詞ね切は切のまじなひのあつゆ
にひたす手ぬぐひのぬれてかはかぬ「勤ながらの
浮身にももれてや人の戀衣うらみられてはまたう
らみ心のそこのたまり水すまずにごらす出す入ぬ
其しごなしもけはひ坂しる人ぞしる物おもひさは
る雲なき夕月夜てりそふ中のたはれかな

此文曲節の妙を得たり因て全文を出す結語餘情
あり

○ひとせ市村座大入にて申村座さびしかりし時

潮みちて隣の潮干なかりけり 何江

春の蛤ふんでふみつけ (市村羽左衛門) 柏筵

市村家橋かたりき (市川海老藏)

○戊申とし(天明八年也)のはるの頃名見崎大喜(始
名喜三治)予が先のごし書置ける狂歌のごごばが
きごうたごをあはせてめりやすとせりとてもて來
てみせしかば名をつけ遣はしぬ

晦日の月

まごとはうその皮うそはまごこのほねまよへばう
そもまごごごとなりさごればまごごもうごとなるま
よふもよし原さごるもよし原うごごまごこの中の
町(合スカキ)けいせいごのまごごもうごも有ぞ海
のはまごのまごごの客の敷

○此はご三又のほとりに北里焼てのちかり宅あれば
書て遣しぬ

かりまくら

身はひとつ思ひはふたつみつまたのながれによご
ひうたかたのごけてむすんでむすんでごけてぬる
もあだなるかりまくらうはぎをぬひでしたじめの
あかつき頃の雲の帯なくやなかつのほとゝぎす
○鶴澤蟻鳳(初三村蟻鳳養子)鎌倉三代記といへる淨
瑠璃のうち姫君の水仕するごとの文妙なりごぞ口
づからつたへし

おけにひしやくとさま／＼に名も聞はじめ天人
のおりるの清水むすばうれくめどもなれぬ水し
の用品かへりかねたるつるべ繩懸路に思ひまい
らせの筆より外はもたぬ手にごうかしぐやらし
らげのよねに心ばかりのはてしなき

享和元年辛酉浪花千日寺にて蟻鳳墓を見て此
事を思ひ出せしがことし文化十五年戊寅二月
八日堺町にて芝甞三升路考がわざをきに鎌倉
三代記をなすを見て又此事を思ふも三十年前
の昔なるべし

戊寅二月望春雨中 七十翁 蜀山人書
○芝居の破風口に穴ありトヒョ／＼にて鳥の下る所
へ樂屋の方よりみれば階子かけてありひおほひと云
とみへたり

ひおほひへ上る事かたくなり不申候
といふ張札あり
○市川三升(五代目)狂歌を好む名を花道のつらねと
いふ未のとし十月晦日曹司谷へまうでたりとて歸路
にたちより暫といへる大字をかきかたへに
いまがさいごかねん佛といふうちに

しばらくありてたちかへる春

と書したり
○天明四辰年十一月顔見世ふきや町市村羽左衛門座
やぐら幕をおろし桐長桐座にかしてよりことし(天
明八年也)申年まで五年なり市村(當)羽左衛門(龜
藏)より到來書

(天明五年己十月十七日 家督相續羽左衛門とな
る)

今日御番所様御内寄合え被召出羽左衛門芝居再
興被仰付難有仕合奉存候興行之儀者來る霜月朔
日より顔見世興行仕候様に是亦被仰付候右爲御
知申上度如此御座候以上

申五月十八日 市村羽左衛門

善兵衛

同 茂兵衛

○曲舞揃(二冊)のうちおもしろき文句

初瀬六代

○かりにみゆる親子の夢幻の時のまどかねてはかく
とおもへども誠わかれになる時は思ひし心もうち
失て唯くれ／＼とたへかぬる云々

花車(全文)

○濡つゝも鵜なくなる深草やたれをしのおのあさぢ
原實住捨し故郷の野となりてしも露しげき草のは
つかにくれのこる伏見に深田水しろく薄ざり迷ふ
夕べかな

露(全文)

○つゆほごもかけしと思ふ盃にむかへばかはる官人
の立はの花にははふれて十五つ數わりて其まゝ心
亂歌の春の日はなごきもわきまへず秋の夜しばしめ
ぐるなどおもふも友の心なり何までもはなれぬ此
度ぞうれしかりける

隠岐物狂

○綺羅の御姿を引かへて袷衣を御身に奉り御似せ繪
(今のにがほの畫也)をかへせ給ひて七條の女院に
參らせらる(前後略)

由良物狂

○いにしへ人にあひなれて借老同穴淺からず同じ契
とおもひしに人の心の花かこよ葛城山の額の雲よ
そにかよふとさし／＼しりひごり心はすみよしのね
たくも人を つといはれしとおもひしに(云々略)

俗耳鼓吹

横山

○在原の中將二條の后にまわりしをいかなる人か大
君に／＼のをぐしの鬚の髻さしたる科にふせられ
遠島の身となるには當國に下りて入間の郡みよし
のや今の川越の山家の郷に在しに云々(中略)それ
は秋 鹿の聲妻戀の歌にや又夏かりの玉江の蘆
あしく出なは當坐の耻辱家の耻よし／＼いはし唯
酒のふてあそばん

反魂香

○立さりて跡もなく形ちも消て跡は唯烟ばかりぞ反
魂の孝行の子ならばなごやしはしもとこいさらぬ
(下略)

歌占

○命は水上の淡風に消て江めぐるがごとし魂は籠中
の鳥の開くを待て去におなじきゆるものは二度
へず去ものは重て來らず(中略)しばらく目をふさ
いで往事を思へば舊遊皆亡す指を折て故人をかぞ
ふれば親疎おほくかくれぬ時うつり事去て今何ぞ
渺茫たるや人といまり我行誰が又常ならん(下略)
地獄の苦をとり月の夕の浮雲は後の世の迷ひなる

べし

那須

○有時張良母にむかひて申やう我戰場に望み密謀をなす隙に後につい味方の勢艦にさせる箭をぬぎて敵を射る事ありいかはせと申しに母是を聞付上衣をぬいて縫つかけ籠の矢にかけしかば八百萬の軍神母衣の縫目にうつりつとしゃうすいの名をかがやかすそれより母衣とは濯衣と書たり扱又母の衣とかきしも今の謂也(下略)

經山寺

○糸をみだせる柳は緑なる色をそのまゝに錦をおるてふ花は又紅の色の外ぞなき(下畧)

玉取

○邪見偷盜は貧困の因縁慈悲惻隱は富貴榮花の基とかや(下畧)

○市村羽左衛門(家橋)かたりけるは家に三ぶく對の掛物あり千歳翁三番叟の畫なり顔見世の朝ごごにかけゝるが過し焼亡に失ひたりとてその發句計を覺てかたる

何文(善兵衛)

千歳 顔見世 なる瀧の水鳥遊ふ日の出哉

九口亭

翁 顔見世 この所久しかれきも花の雪

玉淵亭

三番叟 顔見世 水仙のはなぶさふつて鈴の段

何亮(茂兵衛)

千歳 元日 若水やたへす我等に懸鳥帽子

何文(善兵衛)

翁 元日 千早振る神も最負の春きたり

何江(羽左衛門)

三番叟 元日 元日や喜びあるを親ぞまつ

何亮(茂兵衛)

○五代日市川三升との子海老藏柏筵(七歳)の時かけ

る達摩の畫に贊して曰

如何是祖父西來意庭前柏筵子

○天明元年辛丑小石川布施氏(狂歌の名山手白人)の

宅え洲崎望陀欄の主祝阿彌を招請献立(客萬年氏

祝阿彌 文竿 予)

十月十七日

たばこ盆 暖色火入宣徳 手あぶり

茶 肥後ほしつ出し茶 茶のん南京染付

盃 二つ組

地まき

盞臺

銘月すり出しまき 尾州す方

牡丹らしき

吸物 鯛切身白みそ

箸あく木五角

古渡南京青地中皿

銘々口取 朝日ほう 二色せうが 鹽梅酢

南京染付

同断

車あびあはび鹽もみ

球 こんぶり

大丸盆 唐がらしみそ

古渡南京染付

平鉢

つめな

よめな

みつば

こまげ

くろみせうゆ

古肥前小皿 銘々

八幡木地繪色いつかけ

大視蓋 大かまぼこ二色

赤繪南京

大鉢 鯉平作り黒くわぬ

古渡南京

銘々ふたあり

土器 白魚玉子

水地らういるまき繪

硯ぶた

おにむらさき

白魚やき

白からういやく

茶わんくすかけわさび

瀧の上

膳 膳

なさん出南京

向 鯛 白うな

汁 かいわりな

めし

引て

丸ふ

薄くす

背地

焼物 鯛

色かほり南京

香の物 一口なす

花丸 古つけ

新つけ

水

吸物 松風くわぬ

硯蓋 小く

湯仙だいあられ

吸物 小く

湯 さいりだひ

春殿小角

木具足なし木地吸物わん

辻やき 赤みそれりもの 吸物 せんかへなめ溜
 ふた茶わん 赤貝 赤みそ
 南菓鉢 酢肴 みるがひ
 後段 猪口 やくみ打込
 坪すまし しひたけ 菊手白南菓
 引て はんべん 猪口
 香の物 あさづけ 口取 品々
 吸もの すまし たひらげ抽
 わん小形 まきぶくし
 菓子 山吹まんぢう 薄茶 銚こくそ
 八重なりようかん
 茶碗 黒らく 古唐津 古瀬戸
 古瀬戸よりませ
 あくるとし壬寅正月十六日望陀欄へ布施氏夫婦子息
 予招請料理付 孟春十六日 望陀欄

御物 鯛切め 文座 御視蓋 せん也
 めうご 御視蓋 せん也
 御小皿 たるし大こん 御吸物 安こう
 田作ほうづき せんぶしん
 御膳部 御汁 米つみ入
 たら子付 御汁 米つみ入
 御向 米つみ入
 わさび 御飯
 小猪口 御飯
 御煮物 御焼物 ほうろく
 御手箱 御菓子 さわらび
 御吸物 岩たけ 御肴 濱あゆ
 岩たけ 御肴 濱あゆ
 御鉢 大ふな 御茶碗 ちよき
 山せう 御茶碗 ちよき

御肴 色白あへ 一 みそづけ
 山川酒 一 ちよるき
 一 花かつけ 一 昔す
 一 花かつけ 一 みるかひ
 一 花かつけ 一 ぼう風
 一 花かつけ 一 ひじき
 一 花かつけ 一 くり
 一 ばが 一 イモハ
 ちんび サトイモ也
 御吸物 同目 御肴 竹の子 白うを
 めうがたけ
 御吸物 もろこ 御夜永
 ねぎ
 御坪 今出川 御茶わん いけなし
 みそかけ
 枕もり ほうく 若め
 御香の物 御菓子
 御湯 あしのほかれい
 長いしせん
 御乾肴 背のり ハリく トスル
 こんぶ 味也
 のり

此時あるじ思ひつきにて先に布施氏にて南京の器を
 用ひしゆへ器物に唐物を一つも用ひず和物のみ也酒
 關にしてあるし出挨拶あり布施氏去年の調理はいか
 がと問侍りければあるじ答て器物といひ調味といひ
 のこる所も侍らす唯うらむらくは一色申上たき事あ
 りと申せしに布施氏うなづきてとはすやみにき今は
 なき人なれば去年の暦をみ昔時の献立紙にむかふが
 ことし
 予問祝阿彌以此事祝云白人料理佳則佳矣但恨美味
 累々腹中飽滿故料理以不飽腹中不厭口中爲要
 ○江戸の人一日黒砂糖百六十樽を嘗るといふ是は新
 川大島といふ家の藏より付出す故大敷しれ侍る也杭
 州の人日に三十丈の摺小木をくふといひしも同日の
 談なるべし
 ○さぼし油一年に二萬樽づゝ京より下す也
 天明のはじめより八年文月の二日にいたる

竹本淨瑠璃譜序

享和とあらたまりぬるとし蘆がちる難波にありて此書ふたまきを得たり竹本豊竹ふたつの園にかたりものせし戯れ文の名を書つらねて笠翁傳奇の種より優師舞木の態にいたるまで見あつめ聞あつめて諸事聞書往來としるせり今その名の雅ならざるを惜みてあらためて竹本豊竹淨瑠璃譜と題す世に淨瑠璃年代記なといふものあれど擇びて精からず語りて詳ならざりけらし

甲子仲春幾望

杏花園主人牛門のやどりにしるす

諸事聞書往來上

竹本芝居之部

名人の作者近松門左衛門出生は近江國高觀音近松寺御坊の尊にて出家をきらひ京都にくらし居られしを竹本筑後掾はじめ儀太夫と申攝州天王寺村の出生井上播磨淨瑠璃を好み處々を修行し貞享二年乙丑二月始て道頓堀西の芝居にて座元竹本儀太夫といふ淨瑠璃操りを興行あり

始ての淨瑠璃

五段續

○世繼曾我

貞享三年乙丑二月朔日初日
是京宇治加賀掾古淨瑠璃也夫より同二年丙寅二月四日初日にて

○出世景清

五段續

是近松門左衛門竹本儀太夫之新淨瑠璃の作はじめ也此節近松氏京都に住居なし後元祿三年庚午の正月京都より下り大坂住宅となる夫より元祿十年丁丑十月十三日初日

○百日曾我

五段續

ワキ 竹本浪花

三絃 竹澤權右衛門

おやま 人形 辰松八良兵衛

是出語り出づかひのはじめ也

夫より時代淨瑠璃世話淨瑠璃さまぐ新物を作せられしに丹波興作といふ淨るり寶永四年丁亥六月二十四日初日にて大入せしをまたく正徳二年壬辰のとし三月四日二度くり返し

前淨るり

二段目迄

○けいせい掛物揃

切淨るり

上中下

○丹波興作 待夜の小屋節

此度若竹政太夫道頓堀芝居へはじめて出座右丹波興作大序道中雙六出語りにて相勤む是より竹本政太夫と改名す然るに竹本筑後之掾事正徳四年甲午八月中旬より病氣にて終に九月十日行年六十四歳にて死去したり法名は釋道喜(天王寺南門のほとりに石碑あり)此人道頓堀にて芝居興行貞享二年乙丑のとしより正徳迄年數三十ヶ年が間淨瑠璃九十四番を操りにかけて語られたり作者は大半近松門左衛門也筑後掾死後にも引續て芝居繁昌にて淨瑠璃太夫

右淨瑠璃は京宇治加賀掾芝居にて近松氏作りて團扇會我と申す外題なりしが大入にて百日餘りも勤めし故ゑんぎを以て團扇を百日會我と改む義太夫操り興行より近松が新淨瑠璃凡三十番にて又是よりの新淨瑠璃數々ありしかし此砌操り芝居ははづか五六十日目にて狂言を替しとの事也元祿十六年癸未の五月七月初日にて

前淨るり

○日本王代記

切淨るり

○會根崎の心中

近松門左衛門始て世話淨瑠璃の作意古今の大あたりに也當四月改元ありて寶永と相改る竹本儀太夫は此より先元祿十四年辛巳の歳受領あつて是竹本筑後之掾藤原傳教五十一歳勅許をかふむり直淨瑠璃を出精なし寶永元年甲申の秋其身座元をひき是より竹田出雲掾竹本芝居の座元となり人形衣裝道具までりつばになりし也此時近松氏新淨瑠璃出語り出づかひといふ事をはじめて思ひ付けける右新淨瑠璃

○用明天皇職人鑑

五段續

大切鐘入の段

太夫 竹本筑後掾

陸奥茂太夫 竹本政太夫 同頼母 内匠理太夫
竹本浪花 同彦太夫 田川源太夫 長島重太夫
右太夫入替に相勤ける同筑後掾死去後大當り浄瑠璃

○父は唐土 母は日本國姓爺合戦 五段續

初正徳五年乙未のとし十一月朔日より三年越十
七ヶ月勤る是昔より稀なる大入なり (番附古板
に十一月十五日よりとあり)

此よりはるか後寶曆の比道頓堀東芝居にて豊竹越前
座祇園祭禮信仰記の浄瑠璃三年越に勤候得共年數は
るかにおとれり

右國姓爺役割を爰に出す

座元	竹田 出雲掾
作者	近松門左衛門
大序	竹本頼母
中段	竹本浪花
初段	竹本文太夫
切	竹本頼母
貝盡し	ツレ 豊竹 萬太夫

二段目 口 竹本頼母
切 竹本浪花

三段目 口 内匠理太夫
切 竹本政太夫

四段目 道行 竹本文太夫
口 竹本浪花
切 豊竹萬太夫
久仙山景事ワキ 竹本頼母
ウキ 内匠理太夫

五段目 竹本政太夫

おやま人形辰松八良兵衛立役人形津山助十郎同金七
是等名人なれども此砌多くさし込手として一人してつ
かふが定りなり此國姓爺續き

○種は日本國姓爺後日合戦 五段續

享保二年丁酉二月十五月初日

此時舞臺大幕の上に小幕をはじめて引三代前吉田文
三郎若年にてはじめて出勤此新浄瑠璃國姓爺合戦と

はちがひはなはだ不繁昌にて切に曾根崎心中を附る
だん／＼浄瑠璃相勤來り享保九年甲辰正月十五月初
日にて

○將軍太郎關八州繫馬 五段續

右淨るり一枚かんばん京大文字山のてい四段目道具
奥をひらけば一面の山大文字の道具建見事也しかし
大坂中大の字の焼るは多んぎ悪しと申せしがはたし
て當三月二十三日南堀江橋通りより出火にて大坂殘
らず焼亡是を大坂享保の大火事といふ此年四月間あ
り同十一月二十二日近松門左衛門病死す惜哉々々是
より竹田出雲掾近松門左衛門に傳授請られしを以て
浄瑠璃二三番作せられし内

○大内裏大友眞鳥 五段續

享保十年乙巳九月初日
是四段目兼道の身替り古今の趣向とて大當り也つ
いて享保十九甲寅二月朔日初日

○應神天皇八百幡 五段續

松田和吉事 文 耕 堂
作者 三 好 松 洛

此時竹本政太夫儀太夫と改名す是より新浄瑠璃業平

河内通ひ蘆屋道滿大内鑑杯は人形遣ひはなはだ上手
となり與勘平彌勘平の人形は左足を外人につかはせ
人形の腹働くやうに拵始めし也是を操り三人懸の始
と云ふ

享保二十一年丙辰二月朔日初日

○赤松圓心縁陣幕 五段續

右四段目本間入道の人形三代前吉田文三郎つかひは
じめて眉の働く事を細工す此年儀太夫事受領をなし
竹本上總掾と勅許

○天神記冥加の松 竹本上總掾

右祝儀として 出語り 三絃 鶴澤友次郎

元文二年丁巳正月廿八日初日

○御所櫻堀川夜討 五段續

此時竹本上總掾播磨少掾と改名す同十月十日初日

○大政入道兵庫岬 五段續

此淨るりより合羽伊太夫事竹本美濃太夫と名乗道頓
堀芝居へはじめて出勤

同元文三年戊午正月二十五日初日

○行平磯馴の松 五段續

此節名人と呼ばれし竹本出水太夫死す

同年八月十九日初日

○小栗判官車街道

五段續

作者 松田和吉 竹田出雲

此時竹本美濃太夫事此太夫と改名す
同元文四年己未四月十一日初日

○ひらがな盛衰記

五段續

(此時吉田文三郎巴御前船頭松右衛門梅が枝
の人形に長さし金と云ふ事始る後菅原四代
目千代にも是を遣ふ)

此時芋屋平右衛門事竹本島太夫と改名して始て出座
右淨るり役割爰に識す

大序

竹 本播磨少掾

初段

中

竹 本 文太夫

切

竹 本 此太夫

道行

ツレ

竹 本内匠太夫

口

竹 本 文太夫

二段目

中

竹 本百合太夫

切

竹 本播磨少掾

三段目

中

竹 本 島太夫

切

竹 本 此太夫

四段目

口

竹 本百合太夫

切

竹 本内匠太夫

五段目

口

竹 本播磨少掾

五段目

竹 本 文太夫

右の通の役割にて是よりだん／＼出雲掾の作にて新
淨るりつゞき

延享元年甲子三月六日初日

○兒源氏道中軍記

五段續

此淨るり三段目を竹本播磨床の内にて勤ながら中場
にて死す時に七月二十五日行年五十四歳惜哉播磨少
掾實名紅屋長四郎今に心齋橋清水町補元丹煉薬店の
南隣紅屋といふ家名乗れり
寛保三年癸亥三度目

○大内裏大友真鳥

五段續

右淨るりをくり返し相勤る

爰にざこば魚棚に十兵衛といふ商人あり此もの素人
にて淨るりを好み聲柄杯も播磨少掾に似たるとの評
判ゆる播磨是を養子となし竹本政太夫と改名させ右
大友真鳥二段目を始て操りにかけ勤めさせしにわか
い播磨少掾なりと大坂中こそつて評ばんす後西口政
太夫と云ふは是なり斯て播磨少掾死去の後よりどこ
ろを失ふといへども猶一騎當千若手の太夫あまたあ
る故續て十一月十六日より二度目

○ひらがな盛衰記

五段續

○八曲篋掛繪

節事

出語り太夫

竹 本 此太夫

竹 本 島太夫

竹 本 政太夫

竹 本 百合太夫

竹 本 紋太夫

竹 本 其太夫

三絃

鶴澤友次郎

同平五郎

右相勤此時錦太夫袖太夫出座し是も出語り相勤はな
はだ大入り也播磨少掾死去の後淨るりのれつを定め
初段の切錦太夫二の切政太夫三の切此太夫四の切島
太夫其外紋太夫百合太夫袖太夫其太夫いづれも淨る
りの高下にて役場を割三絃は鶴澤友次郎同平五郎人
形は吉田文三郎同才次桐竹助三郎同門三郎山本伊平
次是らにて相勤たり
延享二年乙丑二月十三日初日

○軍法富士見西行

五段續

此新淨瑠璃も繁昌にて同七月十六日より

○關七郎兵衛一寸夏祭浪花鑑

九冊物

是當芝居はじまりてより世話もの九段續のはじめ也
比しも暑氣の氣をとり四ツ目より八ツ目迄始て人形
衣裳帷子を着せたり是三代前吉田文三郎趣向にて七
冊目長町裏の段本どろにて人形水をかゝる事を思ひ
付しは吉田文三郎なり此人あやつりにかけては人形
を持出れば人の如く右狂言にては役團七九郎兵衛
一寸女房おたつを使ひおたつ姿は今に歌舞妓にても
桔梗の帷子黒縹子の前帶淺黄のわたぼふしより外を
着ればおたつのやうに見へぬもふしぎまた團七九郎

兵衛人形のわけ爰にしるす

筑後はじまりてより人形頭を打事名人にて笹尾八兵衛と云ふ者あり今も操りにてくろう人とも能きかしらに八兵衛といふが樂屋のふちやふ也此八兵衛一生の内國姓爺のかしら安体神のかしら日本振袖の始りそさのをの命の頭其外新淨るりに寄てあたまかしらを作りし故其狂言の名を以てしるす大塔宮齋藤頭鼎軍談にて孔明かしら用明天皇けんびいし頭其外人形頭の異名数しれず右夏祭團七の頭國姓爺といふ敵役のかしらを糸鬚となし薄にくにぬらし花色のざん付の綿入やげんの紋三ツ目床の内より大鳥左賀右衛門の手をねじ出る所新らしく甚妙也六ツ目より茶のざばんじまを着せ徳兵衛頭はそさのをのかしらを白ぬり厚びんにて紺のざばんじまを着せしゆへ今に團七の狂言此通の姿でなければ歌舞妓操りにても團七徳兵衛と見へず旅芝居津々浦々唐土迄も外の衣裳はやり付けになれど此團七嶋徳兵衛嶋のうごかざるは三代前吉田文三郎名人といふべし釣船の三ぶは安体神の頭を白髪となし赤小豆色にぬり照柿のかたびら龍の爪にて玉をつかみたる紋所しうと儀平次は齋

夏祭團七頭始笹尾八兵衛國姓爺合戦ノ和藤内ニ打シヨリ後調法シテ三代前ノ文三郎團七ニツカハレシヨリ是ヲ名ニヨビ大團七小團七ニ通リアリ近江源氏和田兵衛妹背山鑿七ナゾニツカフ頭是ナリ



同釣船三ぶ頭細工人笹尾八兵衛始國姓爺安体神ノ頭ナリひらがな盛衰記ノ船頭權四郎杯ニモツカヒ白クヌレハ布袋市右衛門ニモ遣ハル、ナリ桐竹勘十郎遣フ



同三河屋儀兵衛次頭細工人笹尾八兵衛是大塔宮齋藤太郎左衛門ヨリ薄雲伊賀守菅原ハツノ兵衛忠臣藏九太夫杯ニ遣フハ是ナリ三河屋儀平治桐竹門三郎遣フ



同一寸徳兵衛細工
人篠尾八兵衛是日
本振袖ノ始リソサ
ノチノ尊ノ頭ナリ
雁金文七千本櫻の
忠信武部源藏ニツ
朋梶原杯ニモツカ
フ古吉田才次道フ



藤のかしらきひらの帷子今に於て替らざるは定規を
版に押たる如く也
右團七の淨るり役割左の通り

○夏祭浪花鑑 九冊物 作者 竹田出雲掾

一冊目 竹本此太夫
竹本百合太夫 道行 竹本紋太夫
竹本柚太夫 五冊目 竹本柚太夫
竹本其太夫 跡竹本百合太夫

二冊目 竹本紋太夫 六冊目 竹本島太夫

三冊目 竹本錦太夫 七冊目 竹本島太夫
合 竹本錦太夫

四冊目 竹本政太夫 八冊目 竹本此太夫

九冊目 竹本島太夫
跡竹本柚太夫

操り段々流行して歌舞妓は無が如し芝居表は數百本の
のぼり進物等數をしらず東豊竹西竹本と相撲の如

く東西に別れ町中近國ひいきをなし操りのはんじや
ういはんかたなし

延享三年丙寅八月二十一日初日

○菅原傳授手習鑑 五段續

此浄瑠璃古今の大入別て吉田文三郎役菅丞相白太夫
千代三役なり菅丞相の装束に梅鉢若松の縫今に歌舞
妓にも替らす梅王丸松王丸櫻九三子とも惣髪にて黄
色大郡内縞八掛紅なれば大坂を始國々にても三ツ
子と見ず是吉田文三郎が仕初なり今歌舞妓芝居にて
松王を勤る役者三段目時平公の諸太夫じやと云ふ姿
で出れども甚悪し右菅原の役割爰に出す

○菅原傳授手習鑑 五段續 作者 竹田出雲
三好松樂

大序 竹本 此太夫
中 竹本 百合太夫
切 竹本 錦太夫
道行 竹本 紋太夫
竹本 柚太夫

二段目 中 口 竹本 紋太夫
切 竹本 島太夫
竹本 政太夫

三段目 切 口 竹本 百合太夫
竹本 此太夫

四段目 切 口 竹本 政太夫
竹本 錦太夫
竹本 島太夫

五段目 合 ケ カ 竹本 紋太夫
竹本 其太夫
竹本 柚太夫

右淨るり五段目時平の人形桐竹助三郎花王丸桐竹門
三郎女房八重山本伊平次相勤道具を左右へ引明れ
は天満宮の宮居正面に飾り鳥居玉垣石燈籠も細工美
を盡し社の内には菅丞相の人形をかざり竹本此太夫
竹本島太夫竹本政太夫其外の太夫神主の姿にてはい

をなす故あまたの見物ありがたく思ひ賽銭山の如く
 上しとなり此砌の人物はなほ正直なり
 吉田文三郎菅丞相の人形遣ふには毎朝別火を食し水
 をあびて是を勤む樂屋にて右人形は荒薦をしき御酒
 をさいけ神の如くに拜するかれいなり大序勤むる太
 夫も初日より七日は吉田文三郎とおなじく慎む故お
 のづと早朝より舞臺嚴重なり此砌はあやつり役者上
 下五十人餘も一座にありし故物事自由なり我天明の
 頃竹本芝居かれゝなるを漸再建なし姫小松子の日
 遊の淨瑠璃を立春姫小松と増補し今の鹽町政太夫
 三段目にて勤しが操り好きの我なれば朝より見物に
 参りしに甚不入とは云ながら大序の人形ふしやふつ
 と人形立の短かひのにさし足は折わけ掛臺と云ふ物
 にのせ人形の首の働きはせんにて留め舞臺に人形遣
 ひ一人も不出人形詞の時は十二三の前髪是をかいし
 やくにんと云ふ後よりゆすぶる故もの言ふやふに
 少しの見物思ふかは知らねどもやはりからくりの方
 がまし也右大序を勤る太夫二代目の駒太夫弟子生駒
 太夫はじめ信太夫といふ此者ひじゆつを盡し大序
 語りけるに場には少々見物もあれど舞臺には一人も

人なしみすの合より是を見て役場仕廻へば大にいか
 り樂屋にて大音に頭取にいふやういかに我々がや
 うな太夫じや迎心を盡し節を附勤居るに大序の人形
 一人も樂屋より出す皆々竹のつゝにさし詞の時は後
 よりかいしやく人きてゆすぶり廻るあれでも事が濟
 歎ぐわつたりびしよりはおとりなりと大に怒りけれ
 ども尤なれば詞を出す者もなし頭取は豊松彌三郎と
 て大のすいなり生駒太夫をなだめてなる程／＼皆々
 尤なれば明日よりはていねいにいたすべししかし後
 よりゆすぶるを立ものゝ人形遣ひが持て居ると思ふ
 たが能といへば生駒太夫なせにとゝ彌三郎はて東
 のたてもの若竹ゆみぶるじやと若竹伊三郎の事を思
 ひ出し大わらひにて濟しが夫より二十年計り立しに
 いや／＼操りじだらくとなり不景氣なるも右菅原の
 大序のまへと同事なれど立春の大序とは雲泥萬里
 の相違なりおそるべし／＼是は掛置菅原傳授大入
 りにてつゝ延享四年丁卯八月二十三日初日
 ○けいせい枕軍談 五段續
 此時竹本文字太夫同信濃太夫出勤する竹本紋太夫對
 座にて豊竹へ出る此新淨瑠璃不入にて同年十一月十

六日より（此時吉田文三郎島野甚左衛門の人形出遣
 ひにて門を越す操りを思ひ付はなほだ宜し）

○義經千本櫻

五段續

作者 竹田出雲
 三好松樂

此新淨るり古今の大當りにて大入なり（此時二代目
 文三十八歳にて三段目の惟盛彌助を遣ふはなほだ宜
 しく吉田冠藏は漸猪熊大之進の役なり）

右役割左之通

初段	大序	竹本	此太夫
切	中	竹本	本信濃太夫
切	口	竹本	本百合太夫
二段目	中	竹本	本文字太夫
切	口	竹本	政太夫
三段目	口	竹本	島太夫
切	口	竹本	此太夫

道行 竹本 柚太夫
 奥 竹 本信濃太夫
 口 同 同 錦太夫
 中 同 同 政太夫
 切 同 同 嶋太夫

五段目 竹本 柚太夫
 同 文字太夫

此時吉田文三郎役渡海屋銀平鮮屋彌左衛門佐藤忠信
 三役なり源九郎狐の人形廣袖にて是に源氏車の模様
 だんだらの丸解人形頭そさのをにて此時はじめて耳
 の働く仕掛を思ひ付し也源九郎故源氏車の模様を付
 しにはあらず此趣向最初より狐と見せざる事故玉も
 つけられずいろ／＼に工夫をなし右狐場をつとむる
 政太夫の紋所源氏車故源氏のゆかりにて源氏車の摸
 様付し故今も歌舞妓杯には長上下にてすれどもど
 こぞのはづみにては此姿にならねば源九郎狐めかす
 是も三代前吉田文三郎始て何國にては此姿でなければ
 ば源九郎狐は出来ぬなり年號改元あつて寛保元年戊

酉八月十四日初日

(是古人近松門左衛門作之碁盤太平記より
出せし浄瑠璃なり)

○假名手本忠臣藏

十一冊物

作者 竹田出雲
三好松洛

役 割(此時竹本友太夫出座)

- 初段 竹本 此太夫
- 二冊目 竹本 百合太夫
- 三冊目 口 竹本 信濃太夫
- 四冊目 口 同 錦太夫
- 五冊目 竹本 政太夫
- 六冊目 竹本 百合太夫
- 七冊目 竹本 友太夫
- 七冊目 切 同 島太夫
- 七冊目 惣 竹本 文太夫
- 八冊目 竹本 信濃太夫
- 九冊目 道行 竹本 此太夫

- 十冊目 口 竹本 錦太夫
- 切 同 政太夫
- 十一冊目 口 竹本 文太夫
- 切 同 政太夫

新浄瑠璃の折から古今の大入なれど少し大もめありて當十月より此太夫島太夫百合太夫友太夫對座なし東豊竹越前の芝居へ相住し故立物の太夫多く出座せし事なれば是非に不及替り役にて政太夫錦太夫東より入替りし千賀太夫長門太夫紋太夫事上總太夫と改名内匠太夫事此冬大隅掾と受領し此人數にて矢張忠臣藏を同年十一月迄相勤十月に間有てやは替り役にて繁昌せしはどだいの狂言が能故也斷りなるかな此忠臣藏歌舞妓にては大銀のどだいに三ヶの津立物の役者も由良之助身上定也近在國々までも忠臣藏は幾度しても見あかすしやう根坏といふ事はじまり後には浄るりの文句を打消し大序より大切まで幕引ず坏といろくすれども古いといひく見物も見ると忠臣藏なり是より後忠臣藏の増補數々新浄るり出れども古元の假名手本にまさりしはなし扱々奇妙なる浄るりなり同十一月廿二日初日

○源平布引瀧

五段續

序切錦太夫二切上總太夫此時病死す三段目政太夫四段目大隅掾にて實盛の人形吉田文三郎人の如く見ゆる吉田才次瀬尾十郎木曾よしかたの役勤られしに二段目にてよしかたの人形に舞臺にてるぼしすほうを着せる趣向是は昔澤村宗十郎が油斗の伊勢新九郎の仕打を寫されたれど歌舞妓にては其人一人操りにては大勢懸り黒き手をいだす故はなはだ見にくし吉田才次名人なれども文三郎にははるかにおとれり

同三年午七月國姓爺合戰四度目二段目の虎本皮にて張り眼杯も働きをなし久仙山大隅掾ワキ千賀太夫三味せん野澤喜八也同年十一月廿四日初日にて

○文武世繼梅

五段續

はなはだ不入此時二代目の紋太夫始て出座
寛延四年未二月朔日初日

○戀女房染分手綱

十一冊物

右浄るり五ツ目吉田文三郎道成寺の所作ワキ吉田甚五郎太鼓桐竹助三郎笛吉田彦三郎太鼓吉田才次小鼓桐竹門三郎是近年の大入也(此時後の文三役與作に

にて蘆屋道満大内鑑二番目くり返しにて相應に入はあれど忠臣藏にはいつかなかなはず是も相休め寛延二年己巳四月十八日初日

○粟島譜嫁入雛形

五段續

- 作者 竹田出雲
- 三好松樂
- 大切出語り 竹本大隅掾
- ワキ 同千賀太夫
- 三絃 鶴澤友次郎

此浄瑠璃はなはだ不入にて同年六月にて相休み(此時はけ太事竹本組太夫と改名初て出る是今道頓堀榎家先祖なり)七月廿四日より初日

○雙蝶々曲輪日記

九冊物

作者 竹田出雲
三好松樂

此浄るり趣向は能けれど夏祭りと同事團七に徳兵衛を前髪にせしやうな狂言とはなはだ不入なり此趣向歌舞妓にては長吉長五郎とて大入をなし今も歌舞妓の狂言となり操りには餘りいたさず此時三味線鶴澤友次郎死す同寛延二年十一月廿八日初日

けい政を遣吉田冠藏役鶯塚八平治也

右戀女房に古吉田文三郎の役定之進重の井二役を遣ひ詮議場は樂屋に休息して居られけるに舞臺に人形多くならび鶯塚左内は平治を庭へなげ落すところにより人形をとる者なき故文三郎見兼我此人形をとらんと初日に思はず下へ落たる處は平治の人形に袴の上をかづけるく舞ふてうづくまる思ひ入をせられしに見物一やうにわつと云ふてほめにける文三郎つひてんがうにせられし事さへ今に歌舞妓にては平治をする敵役此思ひ入をせぬはなしいかさま文三郎は名人なり右戀女房の浄瑠璃昔近松が作丹波與作の古浄るりを増補なし吉田文三郎冠子あらかた作をせられしとの事何かに付て名人也同年十月十七日

○役行者大峯櫻

此時大隅掾大和掾と改名す夫より浄るり二三番不入年號改元寶曆といふ此三年酉年東より竹本春太夫同陸太夫來り同年五月五日

○愛護雅名歌勝鬨

初段中段後段 此浄瑠璃道行山の段春太夫大當りにて是等名をあら

げる舞臺一面水の船にて道具はなほだ宜し夫より古浄るり新浄るり二三番あれ共宜からず(此時吉田文三郎の役にはてる姫たそがれ御前二條の藏人三役を遣ひ大あたり)

寶曆四年甲戌十月十三日初日

○小野道風青柳祝

五段續

(此浄るり二の口近松半二始て作者となり是を書く) 此時傳法屋源七事竹本染太夫同家太夫はじめて出座三の中染太夫四の口家太夫斯初床なれど新物にて役場を取は浄るり稽古が能故今の太夫にない事也右三の中染太夫の三味線鶴澤長藏と云しは近比はてし市山助五郎是也又古浄るり新浄るり十番餘の内平惟茂凱陣紅葉姫小松子日の遊蛭ヶ小島武勇問答操りの相撲あり此浄るり三番餘大入りにて跡は不入也此砌少々もめあつて大和掾吉田文三郎芝居を相休む 寶曆六年丙午二月朔日初日

此時堺中濱會所理兵衛竹本中太夫と改名出座す 寶曆己卯二月朔日初日

○崇徳院讀岐傳記

○日高川入相花王

五段續

評判能大入せしに同五月四日芝居類焼して直さま假り家を立五月廿一日よりやはり日高川四段目の切まで

大切 用明天皇鐘入之段

出語り 太夫 竹本政太夫

ワキ 同 染太夫

人形 吉田 文吾

右文吾とは二代目の吉田文三郎也是連も親に續く名人なり此時操り繁昌なるは親吉田文三郎伴文吾其外の太夫をかたらひ大西芝居にて操り興行せんとたくみありし連座元より是をはびく段々挨拶人ありて覺なき事と申せし故吉田文三郎暫く京都の芝居を勤悴文吾祖父の名をつぎ吉田三郎兵衛と改名す同年九月十六日初日

○太平記菊水巻

五段續

(住吉新家九屋文藏竹本住太夫と改名此時始て中場より出)

此時竹本春太夫尼ヶ崎より岬太夫始て出座此浄るり大入りにて兎角春太夫の評判だんく宜しく寶曆十年庚辰五月六日より五十日間播磨掾十七回忌追善ひ

らかな盛衰記相勤る同年七月廿一日初日極彩色娘扇帷子衣裳にて水狂言續て大入也是より新浄るり古浄るり入替へ出せ共不入にて曾根崎新地芝居へ行堺へ引越奈良へも行此間綱太夫(平野屋嘉助事)咲太夫(堺屋三右衛門事)出勤(是安達原の浄るり二ノ口か初床なり)寶曆十一年辛巳十月二十一日より冬籠浪花の梅人形顔見世吉田三郎兵衛吉田文三郎と改め江戸へ行暇乞夜の十日勤候處是も大入り此砌芝居は近比死去せられし竹田近江大掾芝居銀主にて竹田出羽中の芝居竹本と四軒の仕分け也此人段々ゑやふに長じ大坂中銀持貴人杯にも付合同年十二月年忘れとて我下家敷にて貴人を寄せ一夜に四季の体を庭に置て人々に見せはなほだおごりに長せし故御公儀より御捕方にて近江大掾鐵屋何某田中氏など入牢となる此時竹本浄るりは古戰場鐘懸松五段續此節大坂町人へ御上より五千圓の用金を家々へ申付られし故はなほだ物さはがしく古戰場鐘懸松を五千兩金借待と誰いふとなく申せしもをかし夫より程なく相濟皆々出牢すまたく古浄るりをいだし漸寶曆十二年壬午九月十日初日奥州安達原五段續同十三年癸未正月九

日竹田芝居失火に付竹本芝居にて淨るり操り子供狂言一切十文にて打込追出しはなはだ大入りなり同年四月十三日初日近江大塚趣向にて

○初山城國畜生塚

五段續
近松半二
作者 竹本三郎兵衛

○後天竺德兵衛郷鏡

五段續
竹田出雲
三好松樂

右毎日入替一日替り此時竹本生駒太夫始て出座此淨るりはなはだ不入りにて同八月三日初日

前淨瑠璃

○諸葛孔明鼎軍談

二段目迄

○御前懸り淨瑠璃相撲

右は竹本豊竹の淨るりを毎日々々三段つゝ組合勝負を見る事相撲の趣向也舞臺の上やぐらを出し土俵を傍り行司の人形出て操りの古實をいふ是より道具左右へ開けば東西の操り始るとして云はゞ西は國姓爺東は信仰記と能き場を一段つゝ合毎日替りなり此時竹本大和掾一世一代にて三味線野澤喜八毎日替りを勤る翌年中座中殘らず江戸表へ引越留守中京都

一座來る

寶曆十四年甲申五月廿八日初日

○京羽二重娘形氣

九冊物

此時竹本岡太夫はじめて大坂へ來る此淨るり不入にて暫芝居休同年十一月皆々一座江戸表より歸り十一月十七日より江戸花王愛敬會我顔見世狂言夜五日晝暫相勤(岡之屋敷中衆又兵衛京都竹本芝居にて修行し名人になり此時初下りなり)同十二月廿五日三度目

○假名手本忠臣藏

十二冊物

竹本岡太夫九段目を始て勤る
明和と改元ありて二年乙酉二月九日初日蘭奢待新田系圖序切音太夫二の口岡太夫二の切染太夫三の切染太夫四の口綱太夫二代吉田文三郎浮れ座頭を遣ふ四の中音太夫三の口四の切錦太夫也同年六月十五日初日御祭禮棚開車操は大坂宮々の祭を淨るりの寄物になし或は難波祭は御所櫻骨接場稻荷祭は千本狐場天神祭は菅原三段目といふ趣向也當七月十日政太夫死す夫より芝居段々不繁昌にて新淨るり古淨るりも當りめなく竹本仲太夫出勤すれども芝居所々

○石川五右衛門一代噺

九冊物

是歌舞妓作者並木正三の作也評判はなはだあしく京一座にげ歸る程の事也是より皆々京都より歸り同年十二月十四日初日

○泉州小田居茶屋 三日太平記

九冊物

此時竹本中太夫政太夫と改名し江戸より歸る木々太夫野太夫出座住太夫江戸へ行終に竹本儀太夫より筑後掾となり貞享二年より明和四年迄八十三年目に竹本芝居退轉せし事世の盛衰とは云ながら是非もなや

當十月より座本山下八百藏といふ名前を上ケ是より歌舞妓芝居となりし事一兩年なれども追々太夫がすくなくなり操り再建すれども中芝居となりまた歌舞妓となり今では筑後芝居共大西芝居ともまぎらはしきは是非もなや

へ行故同年十二月仲太夫江戸へ行明和三年丙戌正月十四日初日新に太夫を抱束より島太夫鐘太夫出座にて住太夫も京より歸出勤本朝廿四孝五段續序切住太夫二の口綱太夫二の切染太夫三の口鐘太夫三の中染太夫三の切島太夫四の口咲太夫四の切鐘太夫にて四段目見物場をはずに切割御殿をせり上げ古今の大道具大入也夫より古淨るり新淨るりには小夜中山鐘由來扱神崎屋作五郎竹本組太夫と改名始て出座此淨るりも不入り同十月十六日初日

○太平記忠臣講釋

九冊物

竹本三郎兵衛 杉田ぼく
作者 近松半二 三好松洛
八民平七

是忠臣藏にまさりしと大評判大入り也同四年丁亥五月五月初日四天王寺稚木像五段續はなはだ不入り同年六月十五日三度目夏祭浪花鑑是もはなはだ不入りにて同八月四日初日前花軍壽永之春二段目迄後關取千兩幟相勤候處新淨るりながらはなはだ不入是非なく京都竹本儀太夫座と入替り同年十月十四日京都一座錦太夫岡太夫春太夫千賀太夫にて

諸事聞書往來下

豊竹芝居之部

當流名人と呼ばれし豊竹越前少掾出生は堂島豊後の家敷中衆にて河内屋勘右衛門と云ふ貞享の頃より井上播磨宇治加賀竹本筑後先師達の浄るりを能覺悟し豊竹若太夫と改名し國々を修行し京都堺南都紀州にては自身芝居を興行せしが其後元祿十五年壬午より道頓堀立慶町にて始て操り浄るりを興行初め二三番は竹本井上宇治杯の古物口爰に紀の海音といふ作者和州柿本寺の所化僧にて俗となり大坂に住居す是人はじめて豊竹座にて新浄るりの作意をなす壬午三月十一日初日

○けいせい懐子

五段續

作者 紀海音

同五月廿八日初日

前浄るり

○源氏烏帽子折

三段目迄

切浄るり

○金屋金五郎浮名額

是より新浄るり數々差出すといへ共竹本芝居作意宜

敷浄るり外題も今に残りし正本ありといふは皆近松門左衛門が作意也豊竹は新物多しといへども外題なじみなく本杯をも見あたらす漸大入せしは井筒屋源六戀の寒晒の世話浄るり元祿十六年癸未正月七日初日はより奈良紀州堺其外近國を多く廻り享保三年迄凡十七八年が間漸く當り浄るりは新百人一首増補佐々木大鏡泉州枕物語身替問答増補日向景清浄るり古今序男色加茂待富仁親王嵯峨錦小夜中山夜泣石油屋おそめ袂白綾わけてめづらしきは

○けいせい國姓爺

五段續

作者 西澤一鳳

此浄るりは竹本芝居國姓爺合戦をせわ物に取組狂言筋は同じ事にて近松氏が作をなじりたる思ひ付也是も不入りにて京四條へ一座引越す是よりおもはしき新浄るりもなく數々出し内

○鎌倉三代記

五段續

作者 紀海音

享保三年戊戌正月二日初日此時に座元若太夫事受領あつて豊竹上總少掾藤原重勝となる此節喜代太夫万太夫文太夫出勤す同年八月朔日初日傾城吉原雀義經

新高館神功皇后三韓襲伏見常盤昔物語大友王子玉坐靴心中ニッ腹帯建仁寺供養是等の新浄るり相應に大入外不入の新浄るりあまたあれど爰に略す
享保九年甲辰二月朔日初日

○頼政追善の柴

五段續

此年四月間あり源太夫鶴澤左内出勤す當三月廿一日南堀江橋通より出火大坂中残らず焼亡す是を享保大坂の大火事と云豊竹芝居も類焼に付堺南都の芝居へ行亦曾根崎新地へ行此秋伊勢古市の芝居へ引越九月下旬大坂へ歸り候内今の東芝居屋敷地を求め芝居新に建新造芝居にて享保九年甲辰十月十六日初日

○女蟬丸

五段續

此砌より芝居大入いたし作者紀海音西澤一鳳安田蛙文並木宗輔若手の面々出て作意をなす故今も残れる浄るりの外題あり昔米萬石通南北軍問答身替弓張月大佛殿萬代礎此新浄るり相應に大入享保十一年丙午四月八日初日

○北條時頼記

五段續

右浄るりは竹本にて近松門左衛門作最明寺殿百人上崩増補にて五段目雪の段は其儘なり右役割爰に出す

初段 大序 豊竹 上總少掾
中 同 新太夫
切 同 源太夫

二段目 口 豊竹 喜代太夫
切 同 出水太夫

三段目 道 行ヲキ 豊竹 上野少掾
同 源太夫
與 豊竹 喜代太夫
切 同 上野少掾

四段目 口 豊竹 品太夫
しつと段 同 出水太夫
中ツレ 同 新太夫
切 同 出水太夫

五段目 雪の段太夫 豊竹 上野少掾
出語りヲキ 同 出水太夫
出遣ひ三味線野 澤 喜 八

人形出づかひ藤井小八郎同小三郎豊松藤五郎中村彦三郎也此浄るり古今の大入りにて同十二年丁未二月十五日初日

○清和源氏十五段

五段續

五段目出語り

太夫 豊竹上野少掾
ワキ 同 出水太夫
ツレ 同 品太夫
三味線 野澤喜八

出遣ひ人形藤井小八郎同小三郎近本九八郎中村彦三郎也同年八月十五日初日

○攝津國長柄人柱

五段續

大切あしかりの段

出語り出遣ひ

太夫 豊竹上野少掾
ワキ 同 出水太夫
三味線 野澤喜八

出遣ひ人形藤井小三郎此新浄るり大入りにて(此時入鹿大臣の人形口を明く細工を仕出す八王丸の人形つかみ手連五本の指動くを細工す)○岩治の人形眼を

ふさぐ事を細工す是等豊竹の工夫也)同十三年戊申二月朔日初日

○尊氏將軍二代鑑

○南都十三鐘

是不入にて奈良兵庫へ行享保十四年己酉正月二日初日

○後三年奥州軍記

是大入りにて同九月間ありて十日初日

○藤原秀郷田原系圖

切出語り

太夫 豊竹上野少掾
ワキ 同 出水太夫
三絃 竹澤藤四郎

享保十五年庚戌正月廿日初日

○蒲冠者藤戸合戦

切に出語り前に同じ

○本朝檀特山

同年八月朔日初日

○楠正成軍法寶録

此時近元九八和田七の人形に眼の動く事を始る夫より

○和泉國浮名溜池 ○酒吞童子枕言葉
同年十月十六日初日

○赤澤山伊藤傳記

右新浄るりに天満橋床三右衛門と云者始て芝居の表へ幟進上す當九月廿日太夫元上野少掾事豊竹越前少掾藤原重泰と改名す祝儀出語り蓬萊山をつとむ是より

○八百屋お七戀緋花王 ○於初天神記

右世話物二三番大入りにて享保十九年甲寅正月二日初日二度目

○北條時頼記

此時迄床は正面にありしを横へ直す今に其如くなり
同年八月十三日初日

○那須與市西海祝

五段目

此新浄るり大入りにて享保二十年乙卯二月七日初日と書出せしに外題御上より御差留あり

○南登鐵後藤目貫

直様かんばんを引同二月十二日初日二度目

○清和源氏十五段

切出語り

太夫 越前少掾
ワキ 河内太夫
ツレ 湊太夫
三味線 竹澤藤四郎

是より八月十五日初日

五段續

此時播磨屋彌三郎豊竹駒太夫と改名はじめて出座同二十一年丙辰三月四日初日

○和田合戦女舞鶴

此浄瑠璃大入りにて(此時はんがくの人形藤井小八郎遣ふ常のをやま人形よりは二さうばい大く別に作る)此年々號改元あつて元文元年となる同二年己七月二十一日初日

○釜淵雙級巴

上中下

此時錦武事佐太夫始て出座す(釜入五右衛門の人形段々色赤くなるやう數四番に拵る人形役近竹九八郎是を遣ふ)後錦太夫となる此新浄るり大入りにて元文三年戊午四月八日初日

○丹生山田青海劔

右浄るり五月六日迄相勤候處芝居大破に付是を建直

し普請成就まで曾根崎芝居へ一座引こし和田合戦に戀の緋花王を勤芝居普請成就に付同七月十五日より新造芝居にて亦丹生山田を相勤る砌新宅祝儀淨るり古今序大夫越前少掾ワキ湊大夫駒太夫三絃竹澤藤四郎同十月八日初日

○茜染野中隠井戸 ○狭夜衣鴛鴦劍羽

此時若竹東二郎はじめて出座此者出生は田島町はし子枕といふ入齒齧藥を商ふ松井藤右衛門といふ者の俸にて幼時より操り人形を好三代前吉田文三郎をしんかうにて風俗を見ならひ終に後人形大達者と成是より新淨るりには

○鷗山姫捨松 ○本田義光日本鑑

○武烈天皇 艦 ○播州皿屋鋪

河内太夫事駿河太夫と改名同年九月十日初日

○田村麿鈴鹿合戦

此時内匠大夫出勤當冬より大夫元越前少掾駒太夫暫く江戸豊竹肥前芝居へ行同九月寛保と改元同二年壬戌三月四日初日

○百合稚高麗軍記

切に宮島八景出語り

太夫 豊竹 内匠太夫
ツレ 同 文字太夫
三絃 野澤喜八郎

同年八月十一日初日

○道成寺現在鱗

五段續

此時越前少掾駒太夫江戸より歸る此淨るり不入にて此間南都へ引越同三年癸亥八月朔日初日

○久米仙人吉野櫻

五段續

是は甚だ大入にて年號改元あつて延享元年甲子四月二日迄相勤る右久米仙人五段目は市川海老藏鳴神上人にて尾上菊五郎雲のたへま相勤はなはだ大入なせし故右狂言操りに直し○久米の王子花増と増補なし大夫元越前少掾内匠大夫駒太夫和佐大夫懸合にて相勤候故古今の大あたり也續て四月十九日初日○潤色江戸紫是は戀の緋櫻の増補にて並木宗輔が作大入なり同九月十日初日○柿本紀僧正旭車五段續此時春太夫出座是より新淨るり四五番あれどもはなはだ不入り延享二年乙丑十一月三日初日(三度目)

○北條時頼記

五段續

早朝二三番出遣ひ豊松藤五郎同彌三郎若竹東二郎也

此時座本豊竹越前少掾行年六十五歳にて一世一代相勤る此時内匠大夫事改名上野掾雪の段のワキを語り三味線野澤喜八人形出遣ひ藤井小八郎同小三郎若竹東二郎中村勘四郎出遣ひ也同三年十一月三日京都にて越前少掾一世一代相勤候淨るりは○久米仙人吉野櫻也同年十二月九日新淨るり○花袋巖流島同四年二月十三日初日○裾重紅梅服此時上總大夫出勤同年三月四日初日○萬戸將軍唐土日記此時豊竹鐘太夫はじめて出座

○惡源太平治合戦

五段續

(此時作者紀の海音死す石碑法壽寺として上町紅葉のある法花寺にあり)

此淨るり四の切上總大夫相勤操り人形にておやまおどり雀踊あり是若竹東二郎工夫にて立役人形に屏風手といふ事をはじめ右屏風手とは五本のゆびをならべてをり皮にてつなぎてふつがひの如くす是を屏風手といふ竹本豊竹ともにおやま人形には多くつかへども立役には此度始て也甚だふつかふなものにて是を指先似たるとして數の子手といふ其外人形どぶく

し西は引せん東は小猿連遣ひかた板突上ケ丸どぶ片腹みなく東西の流ありつかみ手連ゆび五本動くのもあり是も東はうで首動く西はうでくび動かす其外人形遣ひの口がふ西は前のるりやはり打合せ也東は半合羽の如く左右の方にて懸る頭巾も西にては耳ををれど東は耳たてたる儘也亦手袋連ゆびにはめるめりやすの如きもの舞臺下駄みなく東西にて替る也人形かしらは竹本座笹尾八兵衛よりいろく名あるを細工し昔より傳はれども豊竹は元祿年中よりはじまりし故人形頭とも名細工あれども何の淨るりの何頭といふ事を聞ず若竹東二郎出精より西の頭を寫し少々違ひ寫されし故此砌よりは人形の頭の名當り淨るりにしたがりひしやうくは申せし是は扱置延享五年戊辰正月二日初日此時榊太夫出座

○昔歌舞妓の男達容脱出入の湊 九冊物

作者 並 木 丈 助

是大入りにて歌舞妓黒船の狂言を寫せし新淨瑠璃也

同年七月十五日初日

○東鑑御狩卷

五段續

此年太夫元泉州堺にて一世一代相勤る○北條時頼記

雪の段當年々號改元有て寛延元年戊辰十一月十四日
初日

○攝州渡邊橋供養

五段續

此時竹本芝居より此太夫島太夫百合太夫出勤駒太夫
江戸へ行上總太夫道太夫元太夫竹本へ出勤右新淨瑠
璃役割

初段	大序	豊竹	島太夫
切	中	同	鐘太夫
切	同	同	伊勢太夫
二段目	口	豊竹	友太夫
切	中	同	榊太夫
切	同	同	百合太夫
三段目	口	豊竹	阿曾太夫
切	同	同	此太夫
四段目	奥	道行 <small>ツレ</small>	豊竹 鐘太夫 榊太夫
同	同	同	百合太夫

口	同	伊勢太夫
切	同	島太夫

五段目

豊竹 狩太夫

同二年三月迄大入爰に北の新地白人かしくといふせ
んせいの女郎ありしが去家敷方の客に根引せられ
八重と名を替へ天満老松町邊に住居す此八重酒を吞
ば前後を忘れしやうたいなきが病也兄に絞りを結
て渡世とする吉兵衛といふ者あり此者正直ものにて
折々妹にだじやくなる酒の事を異見せしに或時言ひ
察り兄弟喧嘩にて刃物ざんまいをなし兄吉兵衛に
手を負す直さま入牢あつて言譯立がたく寛延二年己
巳三月十八日大坂中引廻し千日寺にて獄門となる此
時南新屋敷福島屋清兵衛といふ方の女郎園といふ者
大寶寺町大工の丁稚上り六といふ者と西横堀にて心
中をなす此間中山無縁經とて神崎に於て御駕籠の十
右衛門といふ者多くの馬士と口論なし手を負せる
是三月十八日十九日の事也同二十日に外題看板を
出

前淨瑠璃
○攝州渡邊橋供養 大序より二段目迄

切淨瑠璃

○八重霞浪花濱萩

七冊物

右新淨瑠璃かしくの趣向は三月十八日十九日の事な
りしを二十日にかんばんいだし廿六日初日古今稀な
る早き事と大坂中こぞつての評判なり是作者並木惣
助および惣太夫操り中夜を日についての出精前代未
聞の事共也と大坂は言ふに及ばず近國よりも大入を
なせしとぞ右かしくの役割斯の通り

○八重霞浪花濱萩

七冊物

壹冊目	口	かし坐敷の段	豊竹	榊太夫
切	同	同	同	百合太夫
貳冊目	若林屋の段	豊竹	此太夫	
參冊目	口	登壇の段	豊竹	阿曾太夫
切	同	同	同	伊勢太夫
四冊目	道行豊	竹	鐘太夫	
同	同	同	同	狩太夫

五冊目

千里寺の段 同 友太夫

六冊目

新やしきの段 同 島太夫

神崎の段

同 此太夫

同 百合太夫

同 友太夫

七冊目

カケ合 同 阿曾太夫

同 狩太夫

是近年の大入りにて七月十五日より切に操り大踊り
雀黒羽おやま踊り伊勢おんど新作にて道頓堀島の内
茶屋懸あんどろろひ甚だ宜しく同十一月十四日
初日

○十帖物ぐさ太郎

五段續

此時鞍屋佐吉八重太夫と改名はじめて出座駒太夫江
戸より歸る伊勢太夫江戸へ行常九月此太夫事勅許に
て豊竹筑前少掾藤原爲政と受領有大切り祝儀出語り

座中残らず此時並木宗助死す寛延三年庚午六月朔日
初日○夏楓連理の枕九冊物同年八月七日二度目○和
田合戦女舞鶴此時豊竹嶋太夫若太夫と改名同四年正
月十五日初日○玉藻前賤袂此淨瑠璃不入りにて○浪
花文章夕霧塚○頼政扇の柴二度目切に操り大踊り
同年十月十日初日○日蓮聖人御法海五段續此時百合
太夫京へ行是迄淨瑠璃二三番不入にて年號改元あり
寶曆元年辛未十二月十二日初日

○一谷嫩軍記

五段續

此時豊竹八重太夫時太夫と改名後の此太夫是也此新
淨るり古人並木宗輔三段目迄作置しを四段目をつい
り出す

初段	中	口	豊竹	筑前少掾
切	同	同	信濃太夫	鐘太夫
大序	同	同	時太夫	若太夫
中	同	同	友太夫	駒太夫
口	同	同	駒太夫	
與	同	同		
中	同	同		
切	同	同		

三段目

口	豊竹	阿曾太夫
中	同	友太夫
切	同	鐘太夫
同	同	筑前少掾

道行

同	鐘太夫
同	信濃太夫

四段目

口	同	駒太夫
中	同	阿曾太夫
切	同	若太夫

五段目

同	時太夫
---	-----

此淨瑠璃古今の大入にて翌年壬申の盆より大切に操
り踊りを附る寶曆三年十二月七日初日○倭假名在原
系圖五段續此時若竹東二郎蘭平の人形を遣ひ頭思ひ
付打せ候得共はなはだ悪しく古淨るり大入りにて同
三年癸酉七月廿八日初日○男結勘助島是不入にて同
十月朔日より二度目○菊萱桑門筑紫轅此時豊竹十

りを勤る

山伏攝待の段

忠臣幡そるひ

太夫	豊竹筑前少掾
ワキ	同 鐘太夫
ツレ	同 時太夫
三味線	鶴澤寛次

人形出遣ひ藤井小八郎同小三郎豊松彌三郎中村勘四
郎也此時時太夫事豊竹此太夫と改名此砌人形遣立者
は若竹東二郎豊松東五郎同彌三郎藤井小八郎同小
三郎若竹伊三郎同新十郎中村勘四郎是等出精なしみ
なく名人の部也同年十二月五日初日にて中村阿
慶といふ人新淨るりの作意

○祇園祭禮信仰記

五段續

大序	豊竹	若太夫
中	同	伊豆太夫
口	同	鐘太夫
切	同	此太夫
口	同	新太夫

七太夫始て出座同四年戊二月廿一日初日○相馬太
郎季文語序切鐘太夫二の切駒太夫三の切筑前少掾四
の切若太夫これ大入にて同七月廿九日初日

○義經腰越狀

三段目迄

○釜淵雙級巴

二度目

右腰越狀の新淨るりは享保の頃御上より差留られし
南蠻鐵後藤目貫を頼朝時代に増補し是を出す同十
二月十五日初日○天智天皇崩御この時伊勢太夫江
戸より歸り新太夫と改名阿曾太夫江戸へ行寶曆五年
乙亥四月廿一日初日○三國小女郎曙櫻同七月七日
初日○雙扇長柄松此淨るり不入にて一座界へ引越す
同年十一月朔日二度目○後三年奥州軍記是たいがい
の大入にて寶曆六年丙子三月十八日初日

○義仲勳功記

五段續

序切鐘太夫二の切駒太夫三の切筑前少掾四の切若太
夫大切は亂菊枕慈童藤井小八郎出づかい座中残らず
出語り同年閏十一月朔日初日○甲斐源氏櫻軍記○寫
儘足利染○前九年奥州合戦
右新淨るり大かたの入りにて同年八月朔日初日○清
和源氏十五段二度目此時豊竹筑前少掾一世一代出語

貳段目 中 豊竹 十七太夫
切 同 鐘太夫

道行

同 同 新太夫
常太夫

三段目

口 奥 伊豆太夫
同 同 駒太夫
同 同 鐘太夫
同 同 若太夫

四段目

口 中 此太夫
同 同 十七太夫
同 同 駒太夫

五段目

同 麓太夫

右淨るり丁丑十二月五日より寅卯三年越に勤る此
時若竹東二郎織田信長此下藤吉の役を遣ふ右藤吉の
人形頭京高臺寺太閤様の木像を細工人に寫させ此
頭にてつかふ若竹伊三郎松永大膳の役思のやうなる

大内裏大友眞鳥五
郎亦ノ頭細工人篠
尾八兵衛是行平此
兵衛御所櫻藤羽太
夏祭傳八ナゾニツ
カヒハナハダ宜シ
戀女房八平次モ是
ナリ



川明天皇ケンペイ
シ勝船頭
細工人篠尾八兵衛
是薄雲平菅原梅
王千木銀平布引實
盛近江源氏佐々木
妹脊山芝六スベテ
世話時代ツカヒカ
々澤山ナル頭ナリ



船軍談諸葛孔明ノ
頭ナリ
細工人龜屋平助此
頭薄雲葛木民部近
江源氏御酒ノ守關
者義貞ナゾニ遣
フ
此外親交頭ニハ勤
作實王白太夫政宗
實盛定之進鬼一敵
役ニハ稀代樋口平
海坊佐兵衛同光勘
平大場カクハン五
郎頭立役ニテハ若
男トテイロノ有
由良之助六部其外
サマノ有ト紙
不足故斯ニ畧ス



祇園祭禮信仰記
此下東吉ノ頭
若竹東二郎思附ニ
テ是ヲ打ス
細工人龜屋利助是
都高峯寺太閤様ノ
木像ヲ寫セシトト
リ目ハ玉眼ヲ入ル



同松永大膳ノ頭細
工人龜屋利助是二
代前若竹伊三郎モ
ノミニテ打セツカ
フ今ハ松永ヲ白ク
メリテ遣ヘトモ四
段目ハ宜シケレト
モ序ノ切ハ是ニテ
ナクレハ敵役ノヤ
ウニナシ伊三郎モ
ヘタデハナカリシ



頭を打せつかへども竹本人形の頭とは違ひさしてた
る事もなし此浄るりの時鍋屋宗兵衛豊竹麓太夫と改

倭假名在原系圖
奴關平ノ頭細工人
龜屋利助是若竹東
二郎ノ思附ニテ打
セ竹本座團七頭ヲ
少シ遣テ打ケレト
モハナハダ悪シマ
ダク豊竹座ニ名
アル頭アレド取
ナキ故爰ニ出サス



名にて漸五段目を相勤候得共段々出精なし今は麓太
夫にまさりしはなしといふも能き太夫がなくなり

わるき太夫がふへる故麓太夫の目に立は修行のかう
にて尤也寶曆九年己卯三月三月初日

○兒源氏鶯塚

五段續

四ツ目駒太夫場金時が遣ふ熊びろうと張にて見事な
れども甚だ不入り此節久米太夫君太夫はじめて出座
豊竹十七太夫人形ふじ井小八郎江戸肥前芝居へ行同
年五月十四日初日○浪花丸金鶏世話浄るりにて帷子
衣裳表かんばん絹張のついでにて花やかなれと
も中入にて當秋筑前少掾堺にて一世一代一座引越同
年十二月七月初日○先陣浮洲巖此時豊竹十七太夫江
戸より歸る○櫻姫賤姫櫻寶曆十年庚辰三月十一日
初日也同年八月十五日○攝津國長柄人柱二度目同年
十二月十一日○祇園女御九重錦五段續此新浄るり横
曾根平太郎の熊野物語に取組し新浄るり也三段目
柳の大森車に乗せ線丸の小人形花道をひくからくり
にてはなはだ宜敷是若太夫場なり殊の外大入せし
に寶曆十一年辛巳二月太夫出語り同次高砂の能人形
出遣ひ是趣向にて狂言の大序となる寶曆十二年壬午
二月廿四日初日○三好長慶礎軍記五段續同年閏四月
十八日初日○岸姫松轡鑑五段續此時泉屋平兵衛事

八重太夫と改名し始て出座又枝芝居此太夫加賀太夫佐渡太夫豊松豊五郎同彌三郎藤井小三郎京石垣芝居にて○洛陽ひさご念佛といふ新浄るりを相勤る鐘太夫跡より上る寶曆十三年癸未正月四日初日○藤原秀郷田原系圖當正月九日出羽の芝居より火出芝居残らず類焼普請の間一座を二ツにわかち京堺へ行同年四月芝居普請十四日芝居類焼にて曾根崎新地芝居にて一之谷三段目まで切八重霞にて豊竹筑後掾暫く助に出る殊の外大入也此間道頓堀豊竹芝居の表普請進物の書付敷しれず大坂中を板行にて賣ある程の事也同所にて四月十九日より○祇園女御九重錦（作者中村阿慶豊竹笛舳）同年五月十八日初日○曾根崎模様此浄るりはお初徳兵衛をどだいにて此頃京都桂川にて帶屋長右衛門三十八歳信濃屋おはん十四歳そごはぬ心中ありしを右浄るりに取組新浄るりとなす同年九月新芝居普請成就し道頓堀へ歸り九月十日より初日○人丸萬歳臺五段續朝式三番叟○千歳豊松元五郎○翁豊松藤五郎○三番叟若竹東二郎成就し二三番浄るりをませ出遣ひ三十石夜船の始り丸山の段御殿の段右歌舞妓狂言を浄るりとなし切古浄るり身

取にて語る同年十二月八日初日○番場忠太紅梅籠五段續此時駒太夫江戸へ行同十四年甲申四月十日初日○官軍一統志五段續當九月十三日豊竹越前少掾死す行年八十四歳惜哉々々元祿の頃より芝居興行なし爰に於て段々芝居不繁昌となる事偏に柱を失ひしゆへ也豊竹越前掾（八十四歳）法名一音院本覺隆信日壽居士中寺町本經寺といふ法花寺に石碑あり年號改元あつて明和元年十月廿一日初日越前掾追善として○娘景清八島日記是は大佛殿萬代礎といふ浄るり増補也序切麓太夫二の切十七太夫三の口此太夫三の切鐘太夫四の切此太夫也大切豊竹筑前少掾○曾我かたみ送り出語り若太夫島太夫となり西芝居へ出座同年閏十二月十七日初日○いろは歌義臣兜此時駒太夫江戸より歸る若竹東二郎此太夫江戸へ行同二年乙酉三月十六日初日○しきしま操軍記五段續同七月廿五月初日○内助手柄淵當八月晦日限りにて芝居相續なりがたく豊竹越前少掾若太夫の昔より相續せしも終には退轉せり

平賀實記序

古人曰夢は五臟の煩にして虚實見想喜怒哀樂の胸中に動くより起り實に正夢の沙汰は稀也孔夫子の夢に周公を見ずと宣ひしは周徳の末に成れるを愁給ひし嘆辭也予或夜夢中に一人の異人を夢る事分明也異人曰我は是平賀國倫也汝が奇才を慕ふて夢に我生涯の趣を知らしむ汝是を一冊子として才子の戒にすべし總て才智勝れたるは人の玩弄にして國益に疎きもの也又其才を頼んで身を果す媒介也と云予夢覺て茫々然として其所を知らず几上に向て夢中の趣を記して一冊子となして帳中に置事年あり友人何某來て曰我足下の夢物語を聞りと云予耻て答へず何某切に筆を染て強て責て云才の秀たるものゝ能戒めならんと云にいなみがたくかの莊周が夢に蝶と化し覺て蝶の心を知らぬが如く蝸牛の角振分て跡先揃はぬ夢物語を竹叢の閑居に書する事しかり

天明八年阜月

乾坤無住 竹窓

樂齋老人

平賀實記卷之一

平賀源内名は國倫字は士彝號を鳩溪といふ讚州の人也父を平賀定右衛門と云て讚州侯の足輕也源内幼年の時より同家中眞田宇右衛門と云物頭役の方へ茶坊主に奉公して十歳の時は休意と云才智賢くして發明なる生れ故宇右衛門も不便をかけて召仕ひけり或時宇右衛門椽側に出て夕飯を喰れし時折節夏の夕暮れなれば大なる蛇出て庭前を這廻る宇右衛門遙に見やりて珍敷蛇なる哉是こそ漢の張仲景が論せし金蛇成べし今庭前の蛇金色の光有るは和漢と土地は隔つとも功能に於ては違ふまじ誰ぞ打殺べしと下知せらる休意は纒に十歳の小坊主なれば恐るべきを自若として詠居たり家來ども大勢驅集り方々と追廻し已に打殺さんとする時休意走り寄て聲をかけ打殺事なけれ惣して生るものを打殺せば殺氣集りて毒氣を生ずると承りたり去によりて紅毛の薬は生るまゝにて油へひたし生たる時の生氣を油へ取て自然に殺す故怒氣なく毒氣を生せずしかれば此蛇器へ入れて

油を以て殺べしと云ければ小兒の一言ながら發才の言葉也と感じ早速油壺へ入べしと胡麻の油を壺に入れて持來れば人々恐れて棒の先にて追入んとするを休意大に笑ひ樂となれば一人の益に非ず國の調實なり然るに何ぞや一人の怪我を恐んやとて蛇の真中をむづと掴み何の苦もなく油へ打込蓋をして主人宇右衛門の前へ持來る聊なる事と言ながら幼少の働亦是國益を思ふ一言實に恐るべき小兒也と皆々感じける主人宇右衛門も感じ入油壺の蓋を取りて見んとせられしを休意押し止めて申けるは蛇未だ死切るまじ御覽は御無用なり惣じて生あるものも情として生を喜び死を愁るは天性自然の生質なり和漢其例多し死に臨んで其氣を受恨を果せし輩もあり眉間尺とやらは首計りにて楚王の命を取しと聞く小虫なりとも侮るべからずと制しければ宇右衛門始驚入り扱々發明なる小僧哉と或は驚き或は感じ彌不便を加へて仕れけりそれよりして一家中評判して天狗小僧と異名を附しとぞ十五歳の時惣髮となり主人宇右衛門へ申けるは私儀幼少より御厚恩を蒙りし段父母よりも深く何卒一度は此御恩謝し奉り度存る也乍去私親は輕

き者にて御恩を報すべき寄處なし私儀は惣領ながら父の家督に望なし弟万五郎へ跡式を遺し私儀は他を稼ぐべし是もまた身を立る一助なれば孝道にも叶ふべし夫に付恐れ多候得共何卒御暇下され候様にと一向に願ければ宇右衛門は殊の外に惜まれければ容易に返答もなかりしが或時殿中にて家老職へ物語り申されけるは拙者方に召仕ひ候毛坊主平賀休意と申者御座候甚だ發才なる生立にて御役にも可立者なり當年十五才に罷成候何卒御手醫師方へ預置醫學を爲致申たしと申されければ家老職の面々申けるはかれは一家中評判いたす天狗小僧の事成やと問れければ成程秀才故一家中の面々天狗小僧と申由承及候夫なれば聞及たる者なり御手醫師の内植村徳菴こそ本草にも達したる醫師なれば彼へ預申へしと家老職の差圖に任せ宇右衛門休意へ被申けるは其方事度々暇を願ふといへども我等合點不致事は其方が才を惜で也しかれども我方へ留るも却て其方が出世の障りなりその方常々學文を好むこそ幸ひなれ御手醫師植村徳菴こそ上手なるよし風聞あり其上學才も有由なれば彼に隨身して名醫となり父母の名をも顯すべ

し已に汝が事を家老中へも披露したりと申しければ休意申けるは段々御厚恩なし下され有難き次第なり去ながら醫者は長袖にして僧侶に等し私輕き身分なれども親は御供先をも相勤候て武役の數にも加る事に候しかるに私儀は僧徒同然の長袖と相成候事誠に言甲斐なきやうにぞんずるなり此上の御情に此儀は偏に御免を蒙りたしと一向に申ければ宇右衛門も理の當然に詮方なく然らば別に工夫有べしと又々家老へ申けるは休意事兎角侍になりたき望なり如何いたし申べきやといひければさてく奇特なるもの哉左あらばとて足輕の侍分には取立難し先々しばらくは藥苑掛りの足輕に申付べしとそれよりして宇右衛門へ表向より奉書來て申渡されけるは其方かに幼少より勤し休意事秀才の段一家中評判なり此上とも學問出精油斷なく致さすべし又其内に藥艸等をも見習はしむべき爲藥苑を預け置足輕組に申付るなりと申來れば宇右衛門此段を休意に申聞ければ有難しと御請いたし平賀源内と改名して當分宇右衛門屋敷より奉公を勤めしとかや誠に源内が生立古今の秀才といふべき歟

評に曰休意十五歳の時元服して源内と改名して和漢の書に眼を曝しける事主人宇右衛門方に同居して勤し事は不審親定右衛門方同居にて勤し事疑ひなし如何といふに十六歳の時父没して喪を勤しといふ是を見れば父と同居分明也

平賀源内讃州退去の事

源内は主命據なく樂苑を預りて光陰を送る事五年に及んで源内はや二十歳也或時源内思案しけるはかく樂苑を預りて光陰を送るといへども我が高名を揚る事能はず人の下に附て腰を屈せん事淵明が耻し所也志を立ん者は下に屈すとも將軍の御膝元にて功を天下に顯さば不朽の大功なるべしと丁簡して先病氣と申立勤番所を引込書籍に枕して一年計過しける久々病氣の事なれば眞田宇右衛門も心許なく或時見廻として源内が宅へ趣きしに源内長髪にて案上に書物を置誠に起居不自由の躰なり宇右衛門は如何に源内關羽は毒矢を拔せるに春秋を讀しと聞く其方病中の苦痛何を以て助るやと問ければ源内申けるは私儀苦敷を助候には管子を友といたすなりと云ければ宇右衛門はものをもちはず居たりける暫あつて

源内宇右衛門へ申けるは私儀永々の病氣誠に奉公仕候間もなく引籠候事甚以て残念なり病苦據なしといへど主君へ對し奉り不忠なりとても早速の全快は難計弟萬五郎へ跡式をゆづり私儀は引込申べくと言ければ宇右衛門も學才の達したる者なれば中々小諸侯の幕下に居べき器量に非ずと心付ける故成程尤の事也長病の事右の願尤也と同意して役人まで弟萬五郎に家督相續仕らせ度よし願書を出しけりこれによりて役人どもうちより評議しけるは惜き人物なれども永々の病氣止事なしといふ者もあり源内か内存を察したる者は惜きものゝいたし方と評議まち／＼也けれども奉公の役に立ぬ者無益の論也と評議一決して弟萬五郎へ家督被申渡けり夫よりして源内養生といひふらし肥前の國長崎へ遊行し小通辭役彭城東吉といふ者の方へ便りて唐人屋敷へ入込ける近年唐人持來の樂種に偽物多く有て京大坂の樂種屋ども大きに損毛せし事ありと聞て右の賣買の席へ通辭と同道して萬端批判し偽物を見出して戻しければ南京北京の商唐人共源内が樂種にくはしきを感じ偽物を持渡る事其年より止ければ長崎御奉行に

も大に感じ長崎の醫師ども通官の者ども源内へ便りて本草等に熟すべしと申渡されける爰に長崎出生の儒者に渡邊忠藏といへる者あり古學に長じて博識なるものなり源内が此度長崎にて評判の能きを聞何とも合點のゆかぬ事哉此源内讃州の生なるよし官を退て浪人し今長崎へ來て樂種の眞偽を沙汰する事何ともふしん也如何となれば何故に源内が樂種の眞偽を改に來るべきこれ全く樂物をせぐり出し己が功にはほこらんとする利欲の爲なり愛すべき人物にあらずと常々物語りしたりける或時源内が著述せし王霸論といふ書物を見て大にわらひ申けるは源内は韓非子を好んで讀と見へたり文章は古文辭を學びしときしに中々古文辭にてはさらになし四六の切抜文章なりと笑ひしより忠藏の弟子ども源内を信仰せず評判宜しからざれば紅毛の通辭へ便りて蠻語を學び或は蠻國の珍器を求得て己が工夫をこらし才に任せて工し故細工に於ては紅毛人も舌を巻けると也忠藏も右の細工には感心し學問は兎も角も誠に奇才の人物なりと評判しける故再び評判直りしとなり此以後は源内も學問沙汰を止め一向紅毛の細工へのみ心を

よせければ種々の珍寶集りて歸國の節は諸道具等實に夥しき事也夫よりして國元へ戻り宇右衛門并弟萬五郎へも暇乞して行んと江戸堀竹屋町五郎兵衛といふものゝ座敷をかり逗留の内紅毛の細工を人に見物させ富貴なる町家と心易くなりけるとかや

平賀源内大坂にて評判の事

源内は大坂へ出張して富貴の町人へ心易出會せしが或時中島屋喜四郎といへるものへ申けるは我等事讃州出生にて若年にて所々遍歴して國數は見ずといへども西國の地理は盡せり然るに備後國の土地を見るに砂糖には最上の土地なり貴殿には砂糖商賣の事なれば定て土地の善悪は御存知なるべしと風と物語りしければ喜四郎申けるは尤砂糖の上品は兎角漢土でなければ宜しからず日本製の砂糖は甘味薄くして上白の色なし甚だ下品也と云源内申けるは左もあるべし尤ながら砂糖の土地は砂場が上品なり然るに南京の土地は砂場少ししかれども砂糖に於ては至極上品なり左すれば土地計にてもなし養ひ方第一なり土地の宜しき方を見立砂糖を植付養ひ方を法の通りにいたさば日本にても上品の砂糖出來すべきは必

定なり其許其志しあらば備後國にて田地を求め砂糖を植付給ふべし我等製法すべし上品の砂糖出来なば大なる利益なりと申ける喜四郎富る人なれば夫は安き事なり幸ひ備後の國には我等遠縁のものあり早速畑をもとむべしと飛脚を以て申遣しける備後にては様子は知らねども急き能畑地を求て喜四郎方へ知らせければ喜四郎は源内へしかくの物語りして旅用意して源内と同道して備後の國へ赴き砂糖を植付ける源内は喜四郎へ砂糖の養ひ方を傳授して所々一見して又大坂へ戻りけるこれ全く喜四郎へ利徳を付て金銀を自由に爲すべき階梯なり砂糖の製法左に記す

鳩の糞 (蜜を交四五日置日に干て細末にして砂糖を植べき砂へ交て栽るなり)

甘艸 (砂糖の木二三寸も延たる時分水にとき根に懸る事毎日に二三度三十日計如此すればよし)

右の如く製法して能々小石を拾ひ出し其上にて毎日夕方水少しつゝ根へ懸る也扱喜四郎は源内が砂糖の傳授を得て程なく砂糖成就したり其味實に蜜の如

く色は太白にして渡り砂糖に少も相違なし喜四郎は大きに悦び大坂表へ戻りて源内へしかくの物語りして謝禮として金子百兩源内へ贈りける源内大きに立腹して扱々貴殿は不埒なる人なり此傳授を金にせん

と存るならば何ぞ人へ教へ申さん貴殿と心易きに任せて傳授せし事なりしかるに金銀を以て謝禮とは人を馬鹿にいたしたる仕方なり早々持歸るべしと大きに立腹しける故喜四郎も耻入りてしからば仰に任すべし末々何ぞ御用あらば必く仰付らるべしと彌源内と念頭にして他事なく交りけるとなり十年餘も過て甲州金山願の節此喜四郎金主と成しは此謝禮と見へたり

源内京都にて白人しら糸へ馴染事
源内は大坂の評判能ければ富める町人どもと心易く出會して夫より京都へ立越へて四條近邊に坐敷を借り大坂町人どもより金銀數多儀別しければ少しも差支る事なく富貴にくらして居たりけるが未だ京都にてはさせる馴染もなく様々工夫を廻らし或日祇園町へ遊山に出ける折から白糸といへる白人三井が馴染の白人也と所の風聞有ければ源内は扱々京都

は狭き所なり三井縦ひ何ほどの大人なりといふとも評判すべきやうなし未江戸の様子は知らねども斯る京中の評判を見れば少しの金銀を遣ふならば京都にて名を揚る事安かるべしと井筒屋といへる料理茶屋へ立よつて申けるは我等は四國邊のものなり當所不案内なれば白人を買ふにより所なし何卒名高き白人を買たしと念頭に頼ければ亭主は取るものも取あへず安き事なり先々座敷へ御通り遊し候へと酒肴のみふけ丁寧にして仲居の女申けるは當所第一の白人しら糸は三井さまか揚詰にて中々他人の手に及ばず其次は吳服太夫こそ能き人品なり何れ成と致さんと云へば源内申けるは白糸は兼て聞及たる國色の遊女なり何とぞ渠を呼び度もの也乍去揚詰ならば左右なく成がたかるべし金銀にて呼るゝ物ならば金銀は何程も出すべし其方はたらし吳よと金子一兩仲居へ遣し是は輕少ながら萬端頼み入るしるしなりと言ければ元來つよしき京都ものなれば一兩もやるものはなし仲居も大きに驚き能客なりと奔走してしらいとさまを是非にかり申べしと亭主へ斯といひければ四國方の侍衆は金銀は澤山なり能く馳走申べしと

自身座敷を取持て殊の外の馳走なりしばらく過て仲居は勇み進んで驅歸り幸ひ今晚は三井大人の御出な候間今晚は借り切たり押付御出なされますと云ふ所へ白糸は三井大人の馴染なれば衣服等も常ならず誠に美々敷有さまにて源内が側へ居ならびける源内もさる者なれば臆したる顔色もなく盃事杯終りて源内白糸に向て申やうは三井とやらんは其許の客なるよし京都にては第一の長者なり然るに斯る客を持ながら河竹の勤をして諸人へ顔をさらす事何とも其意得がたし何ぞ早く身請して苦界をのがれざるやといたくしく申ければ白糸も耻入りたる氣色にて座敷もしらけて見へにけり白糸は座敷を立て不快なりとて其夜は座敷を斷りける源内は心の内左こそあらんと舌打して翌日歸て早速井筒屋へ使を遣し白人白糸を身請したし早々私宅へ參られよと申遣しければ井筒屋も白糸も扱々不思議なる客人哉深き子細こそあらんと井筒屋は源内が旅宿へ赴きける源内は井筒屋が来るを今やと待居たりし所へ祇園町の井筒屋也と案内しければ源内は是へと招き酒肴の設け念比にして申出けるは昨夜呼し白人白糸は

三井が馴染の白人なるよし夫ゆへ風と座敷にて咄出せし一言が氣に障りけるや病氣と云なし座敷を下る事何とも遺恨止事なし我々が言し言葉は違ふまじ金子何程入ばとて此意地立ずしては置がたし其方も能了簡して返答せよと申ける非簡屋も十方にくれ御尤なる仰去ながら彼白糸は奉公人にして召抱へ候者は外に有り此ものに相談いたさず候ては御返事申がたし一兩日御待下されかしと違て願ひければ源内も道理に服し左候は、明後日まで待べし必々外の相談は致すべからずと急度申含めて非簡屋は宿所へ戻しけり

三井八郎右衛門源内へ對面の事

非簡屋は宿へ戻り早速しら糸が主人嘉助へ申けるは扱々不思議なる事の候四國方浪人平賀源内といへる人白糸へ唯一度面會をせしが氣に入けるにや身請すべきよし我々へ申越たり其許も仕合我々も仕合也金子何程にて其方のかたは濟べきやと談しければ嘉助も大に悦び有名の白人安全にては遣し難し先金子七八百兩も取候へと兩人相談の上白糸を呼出し其方事不思議に四國方の衆に請出さるゝなり扱々仕合

へ三井八郎右衛門が手代利兵衛といふもの非簡屋へ來りて言けるは此度四國方の御客白糸を身請なさるる由目出度事也然るに彼の白糸事は主人揚詰の白人也其上に主人家法にて一度座敷にて酒の相手せし遊妓是非請出し相應に片付遣はす事三井家の家法也然るに此白糸事一體淫色深き女なれば唯此儘に浮れ暮すを好みて主人へ内々頼候事ゆへ揚詰にいたし置也是全く身請いたす代り也と委細に物語り右の如くなる譯故外へ身請ありて此方の外聞を失ふ事也何れ其許取計給へかしと申しければ非簡やは心に笑を含み片々の相手は名にあふ三井也一方は四國方の金持也と大に悦び兎も角も計ひ申すべしと手代利兵衛を一問へ通し扱て源内が方へ來り身請の相談最中也源内は喜助を頼みせひ、身請今日中に濟すべしと思ひければ二千兩の金子取出し喜助へ申けるは白糸が身請金、百兩と聞及べり則七百兩相渡す也又此外に金二百兩其方へ預け置身請の式法もあるべし亦衣服等の手當にもいたすべしと渡ければ喜助は早々主人かたへ申遣し白糸が年季證文等取よせて源内へ相渡し先白糸を呼よせてしかくの事を語る白

なる事かな我々迄も浮み上る事なりと大に悦んで物語ければ白糸は物をもいはずさしうつむいて居けるが暫有て申様は何とも心得がたき事共也座敷計唯一度勤候て何程執心あるべきや是には子細有べし何にもせよ三井どのも揚詰の事なれば無沙汰には仕難しと早速三井へ申遣しければ三井此山を聞と否我等が名の耻辱也番頭共へ申付身請さすべしと評議専ら也源内は非簡屋を戻してより早速大坂へ飛脚を遣し中島屋喜四郎方へ申遣しけるは我々此度京都に於て金儲の事あり金子二千兩計十日の内借用申たし約束の期限には早々返濟すべしと申送りければ喜四郎も先達て砂糖の謝禮等の事心にあれば何卒御用達し遣したしと所々取集め金貳千兩手代に持せ京都へ送りける源内は早速右の金子を馬に付させ祇園町非簡屋喜助方へゆき亭主喜助へ申けるは白糸身請の事今以て何之沙汰もなく侍りし申懸りの相談可止やうなし金子今日持参したれば唯今のうち相談いたし直に宅へ可召連と殊の外立腹して申ければ喜助嘉助も仰天して殊さら金子二千兩も持参しければ實に身の上の仕合到來と白糸を呼に遣さんとひしめく所

糸は不審はれず物をも言ず居たりける利兵衛此よしを聞て仰天し此白糸を請出されては三井家の耻辱なりと案内を乞ふて源内が座敷へ行段々と始終の物語りして何卒白糸を給はれと云此時源内申けるは是三井家は誠に日本一の金持にして鴻池などよりも名譽の家筋也然るに此白糸事は其元の主人の馴染なる由此程承り及んだり我々事は四國邊の卑賤の者也乍去一度酒の相手に成たる遊妓を他人のなぐさみ物とする事富貴なる者の耻る所也況や三井家などにては左様の事拾置べき謂れなし無益なる金銀を遣ひ捨るは不智の到りなれど此身請は左にあらず世上の評判近頃氣の毒千萬也凡富貴人と申は泉州岸和田に住居いたす飯の彌三郎と三井計と存る也富める者は澤山あれど町家にて貴きと申人は此兩家より外有べからず中華にても陶朱公は中國の富貴なる者也日本の兩家も陶朱に劣るまじしかればケ様の事も日本の耻辱となる事故拙者身請して山崎邊にて成とも別莊をかまへ白糸を遣し置生涯他人の慰者になすまじと思慮せしは全く三井が耻を思ふにあらず日本の耻を思ふ故也と辨舌流るゝ如くに云ければ利兵衛も道

理に伏し何れ主人へ申聞せ兎角此方へ申請べしと宿所へ歸り早速八郎右衛門へ此よし物語ければ八郎右衛門も驚入り扱々あじな人物も有もの哉如何にもせよ面白き人なり我等面談すべしと直に井筒屋方へ赴けり此三井八郎右衛門は艸廬先生の門弟にて學才も有る者なれば源内が大器にして其上聞及し才子なれば悦びて先井筒屋へ案内させ四方山の咄終て三井源内へ向て言様は扱々貴殿には驚入たる思召也白糸が身請の事段々御深切なる事ども忝し迎もの儀に右白糸事拙者へ御任せ下さるべし貴殿の仰の通り白糸を他人へ請出されては拙者も洛中の耻辱也とくより身請致し可遣なれども子細あつて捨置し也貴殿の思召も耻敷候と念頭に言ければ源内は何氣なく必竟貴殿の耻を思ひ亦富貴なる名家の世上の詞に懸らん事日本の耻と思ひ候故如此計ひし也貴殿方にて御世話あらば一段の事也早々御同道有べしと心易く請合ければ三井も大に悦び白糸を同道して別荘を構へさし置けり是全く源内が才を以て計りし事にて井筒屋も主人嘉助も源内が智略を感じ身請も事故なく濟しゆへ何れも源内と入魂に成て出合しとなり

平賀實記卷之一終

評に曰源内は一度は志を立んと思ふ故金銀澤山に持たる者共へはケ様なる邪計を以て取入りまさかの時の相談相手に爲べしと心懸しと也夫故に源内江戸におゐて火洗布エレキテル杯を拵し時金主は大かた右の輩也夫故に少も差支なかりしと也

平賀實記卷之二

平賀源内富士山へ登り一見の事

源内は京都にて夫々の懇意をこしらへ夫よりして江戸へ趣かんと東海道筋を下りけるが駿州岩淵の邊に心易き者あり彼が所へ一宿して暫く足を休めけり亭主五郎兵衛といへるは貧しき百姓也源内は五郎兵衛へ申けるは抑不二山は實に三國一の高山也六月ならでは雪深くして登山成難しと承る乍去此程つく／＼一見するに東にあたる尾崎より木樵などの登る様子見へたり如何さま木樵道よりは常にも登ると見へたり其方我を案内すべし登山して一見せんといふ五郎兵衛申けるは成程仰の如く木樵どもの登る事あり乍去九月頃迄に限るなりと云源内しからば當月限り成べし直に用意して案内すべしと云ければ然ば御案内致さんと源内と同道して東尾崎の木樵道より押登る頃は九月下旬なれば最早雪所々に降りて寒氣誠に凌がたし源内は兼て心懸たる事なれば紅毛松明を持參して白晝に持せけり去によつて火氣炎／＼

として實に寒氣を拂ふ此紅毛松明といふは篠竹を能程に切り緒繩にて常に用ゆる松明の如くこしらへ右の竹を麻油にてよくあらひ其上へ紅毛の藥種へメソといふ藥をぬり付て乾し夫へ火を燈す時は更に消す雪中大雨大風又は水中に入ると雖も消る事なし火を消さんと思ふ時は土へ摺り付ると忽ち消る事妙也紅毛人船中にて用る要具なり此松明一本燈す時は百歩が中は白晝の如しその上寒氣を拂ふ事妙也ければ寒さの煩ひもなく絶頂へ登りける源内四方を一見して手を打て申けるは誠や中華にて日本國は君子國なりと淮南子にいひし事も宜なる哉高頂より四方を一見するに朝霧八方にみちて東西分らず冥々の中に入る如し然るに日の出の方に當て煙氣蒙々として實に勇猛盛んなる人氣顯る是全く日本は義心の強き國風故也其中にも東國は日出の國にして一入人氣盛んなり四季に取ては春の氣候萬物を生育する厚相あり殊更神君慶長の頃より東國に御在城まし／＼て武備文藝ともに備りたる國は武藏國に留めたり志を立國益を考へても勢ひなくば成就し難し勢を得るは御城下の住居せずば成りがたし古に云る如く高名

の下に居らずんば志は立がたしと云殊に地理天文を考ふるに武州の分野に當て青雲の星色あり今青雲に登りて高名を立給ひしは田沼主殿頭殿也此人へ取り入て志を立べしと初て江戸へ出て主殿頭殿へ取入らんといふ心魂起りしは此時也とかや夫より所々の難所切所を一見して岩淵へ戻り此時より無二に江戸へ下り高家へ取入るべき工夫をぞこらしける

源内駿河へ泊る事

夫より源内は岩淵を立出て駿河本町二丁目菱屋與右衛門といふ旅籠屋へ泊る源内も長途の旅行故勞れければ暫く駿河に逗留して足を養ひ江戸表へ赴くべしと思ひ亭主與右衛門を呼出し申しけるは我等事は四國邊の浪人也此度江戸表へ稼ぎに下る所長途の旅行路銀等にも差支へ難儀に及ぶなり當所は江戸表より御旗本方御在番の事なれば何卒暫く當所に足を休路用の助をも拵へ度存る也其許何ぞ當所にて流行る事定めて存知あるべし差圖請申たし我等分相應なる事にて候はゞ取掛り申たしと云ければ與右衛門申けるは御城内の儀は出入等むつかしく候故巨細に知りがたし町家の有徳なる者は近來學問をのみ取懸り

遊藝とては一切いたし不申と咄しける源内元より得手たる道なれば夫は一段の事也しからば貴殿御世話になし給るべし乍去遠國の獨旅心許なく被存候はば我學才の甲乙を見られ候上にて兎も角も頼み入る也といひければ與右衛門も源内が人品と云ひ言語といひ一方ならぬ者と思ひ心易き有徳の者へ咄しければ定て田舎儒者の器量何程の事か有べきと四五人言合て何にせよ面談して試むへしと與右衛門が宅へ赴ける

平賀源内儒學講釋の事

五人の者共は源内が學才を試んとて與右衛門が宅へ赴き先與右衛門へ案内申入けるは御旅人様には四國邊より江戸へ御通行のよし當所に御逗留も有るべきよし大悦の事也殊更儒道御指南のよし當所にも少少學び候者も御座候へども田舎學文にて甚以て狭き事に候先生御逗留申御教授可被下哉乍御見舞推參致候也と申入ければ源内是へ御越し候へと答ければ五人の者どもは座敷へ通り源内へ一禮終て中にも惣左衛門と申者發才なる出過ぎもの故先生には古學を御學び被成候哉と尋ければ源内答けるは拙者儀は周

南縣次公の社中に暫の間遊學致し申候新古の學文何れも宜敷所は取用ひ申候何にもせよ足下方には御試に御出と存る也我等探題を出すべし各御詩作可被成と源内は元より詩文章に達したれば五人のものども未一首も出來ぬ内に七言絶句三首同律二首五言古詩長篇一首作りて文臺におきたり各膽を消し前方より作意したる詩歎と見れば庭前の氣色景物まで委しく句中に言入たれば五人の者舌を巻扱々達者成る詩人哉詩の風は盛唐の格調なり殊に氣象も高く經義も定て委かるべしと各々さゝやき合けり源内は彼等が機先を挫かんと筆を取て今日の雅會の段五百字計に文章を認め尤古文辭の句法見事に作り五人の前へ出しければ田舎學文の狭き上に源内が達者におそれをなし五人一同にかしらを下げて拙者共は當所本町深草邊のものども也獨學固陋耻入り候事ども也何卒暫く當所に御逗留あるべきや拙者ども打よりて能に計ひ申すべしと念比に申ければ源内も他事なき様子見受ければ安堵の思ひをなし夫よりして日々經義の講談にくらしけり御城内にても此様子を傳へ聞て志の輩は會日に出席して實に繁昌したりける源内は

日々に門弟はふへ名は高くなり殊更採樂などに出るには本草に委しき故近國の醫師聞傳へて二三百人も弟子付ければ暫時金銀も出來差支もなかりける門弟中相談して何卒此先生を當所に留置べき者也と工夫し各申合せて稽古所普請を取立んと相談一決しければ源内此由を聞扱々難儀なる事哉たとひ門弟何百人出來るとも此所へ足を留られては本意を失ふ仕合なり何卒僞つて此所を退くべしと亭主與右衛門へ密に申けるは我々儀四國より江戸表へ奉公稼といふ事は偽りなり實は江戸表に親類有て所用に付罷下る道すがら病氣にて路銀をなくし止事を得ず貴殿を欺て當所に暫く留りたり然るに光陰矢の如く假初にも半年に及べり依て先々江戸表へ罷越し十日も懸り候はゞ所用を足し早速に立歸るべし此段門弟中へ能々申吳られよと餘儀なく申ければ與右衛門も氣の毒に思ひてそれは如何様御難儀なり左候はゞ御供を申付べし御用相濟候はゞ御歸り有べしと門弟中へは二十日の休日と申立源内は旅用意す門弟中も餞別として金銀衣服等夫々に送りければ路用金も四五拾兩暫時に集りけり源内夫より出立して供一人召連て江

戸表へ赴きけり

源内江戸表へ赴く事

夫より源内は道中をゆる／＼と來りしが程なく品川の驛に着し源内心に思ひけるは實に京大坂江戸とて三ヶの津と評判程有て品川の様子美々敷有さま芝口御門の嚴重なる固め夫より日本橋へ掛て西の方を詠れば御本丸西の御丸並松の中に亭々たり白壁は日に映じて偏に花の散るかと思れ櫓々の峻嶒たるは大山の巖の如く打續たる長廊引連たる瑤瑤の有さま實に將軍家の御在城の勢日本廣しと雖も斯る嚴重なる亦は人氣の集りたる勝地有べからず山丘の固めは箱根碓氷を咫尺の門掖として大河東にみなぎりて入海の程能き趣繁華の都會實に四神相應の地とは是なりと茶店へ腰打かけ暫く足を休め居たりしが江戸表に知る人はなし先々馬喰町とやらは泊家も有よし是へ宿して其上にて江戸に留るべしと家來召つれ馬喰町の旅籠屋綿屋新兵衛といへるもの、方へ行て宿を求めて休けり折節皐月の頃なれば空かき曇りて淋雨頻りに降りければ宿へ四五日逗留しける家來は與右衛門申付しにより源内へ申けるはケ様に旅宿に

御逗留は無益なる事に御座候御一類の御方は何方にて候哉其御方にて御逗留しかるべしと申ければ源内心に思ひけるは駿河にて與右衛門を欺き出府せし故心底の趣家來へも咄し難く如何せんと思案しけるが一つの妙計を思ひ出し家來に向て申けるは成程尤なる事也我等事は元來酒非家の家士にして故有て國元を立退しもの也その譯故容易に地頭屋敷へは行難し此譯駿河にて與右衛門へも物語る可と思へども不審立らるゝを耻て申さる也實は人を殺して立退たりと委しく物語しければ元來下郎の癖として物に恐れ安き者なれば大に驚天し扱は人殺の欠落ものを我等心付ず人殺と一所に居ては身の上危し然れども供に連たる事なれば容易には逃すまじ所詮引はづして我一人駿河へ歸り與右衛門へ此よし物語せんと其夜密に宿を抜出駿河へ逃歸りける源内は心のままに家來を追拂ひ心中大に悦び是よりは心易し何卒手寄を拵へて江戸表に住居すべしと先宿の亭主新兵衛を呼出し申けるは四五日逗留いたし段々御世話忝し家來は所用有て本郷邊へ遣したり我等事明日晝頃は出立すべし駒込邊の町家に心易き者あり何れに

も江戸表へ居住可致心底なり若又右の心あたりのもの知れかね候はゞ又々旅宿頼入と念頭に云ければ新兵衛は謀計とは夢にも知らず安き事也又々御出なさるべしと丁寧に申ければ源内は旅宿代等勘定の上金子百疋取出し是は輕少ながら御内かたへ進上致すなり是を御縁と致し以來とも頼入と申ければ夫婦共に悦て支度などして翌日馬喰町を出立しけり

平賀源内三浦平三郎方へ尋行事

源内は馬喰町を立出て心中に思ふ様彼新兵衛は町人ながらも利口者也旅人の逗留は三日限りとは公法の御定也我等三日を越して逗留すれど斷りも不申は我等が人品による故に斯致すと見えたり我等先より斷いはれぬ内に立去りし事なれば明日参りても十日や二十日は置べし乍去いつ迄斯て有べくもあらざれば兎や角と心を痛て先第一の繁花の地淺草上野邊へ赴き一思案廻らすべしと寛々と見歩行うち風と心付長門の儒者三浦平三郎は近年加賀の御分地松平出雲守殿へ召出され志を得たりと聞き彼が方へ尋行先先面談すべし其上にて仕方も有べしと上野より根津へ懸り出雲侯の屋敷へ到りける三浦平三郎は長門の

産にして徂徠派の一人也知行五百石を領し出雲守殿の儒官也世に用ひられし學者にて老先生と敬はれ尤詩文章經義にくはしき人なり出雲守殿屋敷内に居て日々講釋暇なし此日も會讀の最中にて有之取次を以て申入けるは讃州九龜平賀源内と申者也先生へ御目に掛り度趣懇懃に申入たり取次のもの平三郎へしかくの人御目に掛り度山上下着用にて被參たり如何返答可仕哉と申ける平三郎是を聞て暫く思案し一向不覺人なり乍去我等を尋來るは大方諸生なるべし何にもせよ座敷へ通すべしとて案内しければ源内は大に悦び座敷へ通りける平三郎は小袖上下改めて座敷へ立出て初對面の禮義終つて平三郎申けるは遠路の所江戸表へ御出府の儀深き御望にて御出府の事に候哉又は御一家にても御座候哉當時の御住居は何方にて候哉と念比に尋ねければ源内は耻しげに頭を下げ段々御尋の事包べき譯なし拙者儀は元來讃州侯の足輕の悴にして病身故に弟に跡をつがせ出府仕候也幼少より學問を好み候得ども貧者の儀故中々學ぶへき手段もなし是非なく國々を廻り歩行少々は見覺申候何卒生涯貧にくらし候共道を樂んで世

を送り度存る也江戸表へ出候へども一向に知る人とは無御座遠國者の不案内如何共すべきやうなし夫故御高名を承り候故接見の上又身の上をも御助言願ひたしと念比に申ける其形相實に餘儀なく眼中に涙をうかめ眞實に物語れば平三郎も感心しさてく感じ入候御心底察入る也先々拙者方へ御逗留候べし江戸表に御知音なき事に候はゞさぞく御難儀察入候也諸生の事に候へば一兩日は請合なくとも苦かるまじと申ければ忝仕合也と夫よりして源内は瓶山先生の宅へ寄宿して日々講義にも不怠高名の人を尋けるとかや

朝鮮人來朝之事

寶曆十四年酉三月十日朝鮮の三使來朝して東本願寺へ旅宿被仰付宗對馬守殿よりして萬端御取計實に美を盡して饗應し江戸近在の諸儒醫の面々學才ある者は争ひ應對に出る者多し中にも秀たる面々には

- 其時分浪人後尾藩儒臣號如來 細井甚三郎
- 浪人號金峨 井上文平
- 浪人號太室 澁井彦右衛門
- 浪人號海鴻 植村善藏

- 浪人號金峯 山鹿庄左衛門
- 將軍家之下吏號藤岡 篠崎與左衛門
- 浪人號仲山 服部眞藏
- 林家學頭號松窓 關 惠市
- 御旗本山村四平藩中 小澤庄藏
- 浪人號雲關 千葉茂右衛門
- 將軍家之下吏號鏡湖 高田六郎
- 浪人號兼山 片山左仲
- 浪人 菅谷勘平
- 浪人 平賀源内
- 藝州之産 名波十郎兵衛

右以上拾五人東本願寺の本堂に居並んで筆談時を移しける源内は平三郎の情にて三浦が宅へ寄食して此度の筆談にも瓶山が媒介にて出席したる事なれば何卒人々よりは手際よく筆談せんと兼て心掛ける故筆談の席にても容易に書す或日源内が筆談に及びける時朝鮮人は詩を賦して書仕舞と紙を取直して源内が前へ置けるを源内和韻して逆しまに詩を認て其儘に朝鮮人へ贈りければ朝鮮の者は勿論一座の面々も源内が即座の働き滑稽風雅の者哉と詩作の達者を譽

るもあり或は即座の才を感心して是より源内が才朝鮮日本一同に舌を卷て恐しとかや此筆談を見聞せし人々は言に不及傳へくして平三郎が方へ出入る者源内を稱美せざる者なし平三郎も發才を感じけるが流石に瓶山は古老の儒故此源内が發才又本帥に委しき事申々常林の者ならず去惜むべきは彼が生質中篤實の經學者にあらず如何といふに第一才の秀たるに任せて人々に取入る事妙也其上身を立る事を第一として實儀に薄し乍去絶交すべき人にもあらず源内に住居を定むべしと常々言ける故源内も是よりして居所の工夫を廻らしけるとかや

平賀源内初て居所を求る事

并醫師兒島圓達が事

源内は發才なる者故瓶山が心底を薄々さつし其上御大名御旗本の衆中迄源内が器量に伏せしを知りたる故今ははや心易しと心に悦びを含み去る御旗本へ参り拙者事假初に瓶山先生に寄食仕候事はや二年越しに及べりいつ迄もケ様にては不相濟もの也夫故此度住居をしつらはんと存るなり然る處御府内は御膝元の事なれば店請なくては店を借す者なし尤町家にも

弟子なども御座候へども別段にケ様の事を頼候へば親分とやらに成候由甚だ心底に落す何卒御屋敷御出入の者へ仰付られ下町邊にて店一軒御かり下さるべし尤も學館同前の心掛に候得ば造作等は入り不申と金子拾兩持参しければ師匠といひ殊に源内が行狀たしかなるものなれば安き事也と出入の町人へ申付屋敷より稽古所に借置留守居を遣はす分にして新石町二丁目へ店をこしらへ引移りけり瓶山も悦として相應なる音信杯して表向は懇意なれども内心は相解ぬおもむき也源内は標札を出し儒醫の書籍ども會讀講釋の看板を出し其上本草會を催したり其比は神田佐久間町の醫學館初りし時分故醫學繁昌の時也爰に中橋邊に兒島圓達といへる本道醫師あり源内が本草會を聞て珍敷會也今まで所々本草の會有といへども會讀等にて書籍の沙汰計也然るに此度平賀源内といへる者藥草會取立しは幸なる哉我等も年來藥草には苦んだり出席して器量の程を試んと同志の醫師十五六輩各異草或ひは鳥獸の異なるを持参して案内し入來れば源内は上席に客座を設け門下の諸生左右に居並び和漢山海の異物を集め衆議判をいたしけり

圓達は應對終つて藥物を取出し衆議判に及ぶ所大勢にて名を付られぬ異物はいづれも源内は委しく知り、和漢の名目明らかに付て論定りまた源内が所持の物は、大勢集るといへども一つとして知るものなし、數日の會何にても右の如くなりければ圓達は、はじめ江戸中に本草家と稱する醫師源内に屈服せざるは一人もなき是よりして源内が名は高く成て儒醫ともに信仰せり、圓達は宿へ歸り成程源内は博物なり中々及べきにあらずと云て社中の者へも兎角本草に於ては平賀程なる者はなしと感心して夫より心易く出會せり、源内は此本草會を催せし故に高名を取り弟子杯も多くなりて不自由なる事もなく中華蠻國の名産共に集れり諸大名へも出入すれば召抱べき沙汰あれど仕官の存知寄なくして御直參にも成たき心と人々評判しける夫よりして藥種屋書物屋共源内へ近付て和漢の藥種製法など或は書籍新渡の直段付日々寸暇なく其間には會讀講釋諸家へ出入ける故に殊の外手廣になり近國は扱置中華までも名を揚しは先本草が初めなりしと也住居杯も手狭になれば神田白壁町へ轉居して鳩溪先生と號して儒書醫書の解義に光陰を送りける

平賀實記卷之二終

平賀實記卷之二

金峨先生に初て應對之事

爰に日本橋平松町に井上文平といふ儒者有金峨先生と號して有名なる者なり源内は先年朝鮮人應對の時本願寺にて面談しけれどもしみくと應對せずつらく世間の有さまを考るに金峨先生は今御府内の豪傑秀才の者也そのうへ諸大名より扶持をとりて手寄多き人傑なり又細井甚三郎は經義もよく詩文も達者なれど輕薄成人柄と見へたり亦老先生と稱して重んずるは雲藩の宇佐美惠助也徠翁の社中にして上總に白水といふ者あり惠助も徠翁の社中にして白水惠助計り故に二老先生と稱美す乍去二老は德行を磨き篤實の君子也當るべからず然らば今我を破すべき者は金峨一人と思案して或時風と金峨の宅へ訪ひける金峨も先年朝鮮人來朝の時分島渡面談したれども染々とは出合はず互に久來の面話を賀し奥底もなく物語して金峨源内に申けるは人にはなくて七癖と申候事御座候俗語ながらさる事なりわれくも一のく

せ候兎角人に後る、事大嫌なりと云ければ源内も成ほど尤も也人に後る、事は誰々も好ぬもの也乍去制せらる、時は屈伏して人を制する時は大鵬の翼を震ふが如く勢を自在にせん事人間の肝要なるかと思はる、と云ければ金峨も左様ありたきものと返答し酒肴の設け念比にして奥に入りける比は正月十八日なり然るに鯉のさしみを澤山に出しければ源内申けるは是は珍敷御肴也走りの初鯉は生涯初て也と譽ければ金峨は物をもいはず互に詩を賦して贈答し四方山の咄して源内は歸宿しけり跡にて金峨申けるは源内は憎き奴成と計にて其後源内來れども更に逢ざりしと也此事誰も知る事なし

平賀源内工夫之事

源内は金峨に面談して宿所に戻り金峨か一言を能々考へ我を容れぬ事を早くも悟りければ其後は出會せず常々工夫を廻らし世の中の趣を考へけるに當時世

上の様子風俗甚た惰弱にして萬事手薄く心易き事に
て人の耳目を驚かす世の中也其上武家町人共に芝居
藝者の身ぶり移りてうはきなる風俗なり第一に志
を立んとする者は世の中の好む所を以て餌を興へず
んば成就しがたく是鬼谷子の術にして蘇張が學びし
術なり何にもせよ世上にて用ひられずんば金銀にさ
し支ん事必定なり金銀さへ澤山ある時は人をなづ
くる事自在なりと工夫して神靈矢口渡といふ淨瑠理
本を作りて出しければ此本殊の外世上に流布して
自分も金銀を集め源氏大双紙或は金毘羅利生記など
其外浮世に合たる讀本しやれ本草紙の類夥く作り出
し福内鬼外と假名して作者同前に汚名をも耻す雅俗
の差別もなく金銀さへ有ものをば皆知己同前の出
會して世の中を欺けり乍去本草は委しき故に本草會
はやめず風流第一の人と成て世の中へ合せける故世
人の習なれば即座に面白き事に目が付東西南北平賀
が事を感じざる者なかりしとかや

評に曰源内は誠に學問の邪魔をなせし當世俗學
の元祖なり如何といふに己が才に任せて假名書
をして雅言を用ひ或は國字解などの書物を拵へ

掘よしなり彼源内が秀才をもつて何條仕損する事有
べからずと金銀に富たる町人は手入して金主に附け
れば金銀の差支はさらになし又そのとし京都三井八
郎右衛門江戸表へ出府しければ源内は心の内色々
と工夫したりけるが或時八郎右衛門手代の面々に申
けるは此間逗留中風聞を承るに當所に平賀源内と申
者殊の外秀才なるものよし和漢の書に委しく其上
義太夫本其外色々なる作をして世上専ら評判なり元
來何人なるやと聞ければ手代ども申けるは彼もの
は四國浪人なり委しき事は不存といふ三井心中に思
ふやう扱は彼白糸を請出して我耻辱をいとひし平賀
源内成べし器量といひ才といひ驚入たる人物也乍
去金銀を澤山に不可持今我金銀を以て彼に先年の謝
禮を述るものならば彼もさるものなれば忝く思ふべ
し幸此度甲州銅山の願人となる由金子入用必定な
り能時節なりと工夫して手代へ何氣なく源内方へ訪
ふべし彼は本艸に委しく經義等も富たりと聞及ぶ名
物なる人に逢は能學文なりと云ければ手代共も同心
して源内方へ赴けり

三井八郎右衛門源内宿所へ赴く事

て學文は師匠入らずに出来るもの也と世人一統
に存る故篤實に學文して聖門へ入る者は一人も
なし唯狂歌狂詩狂文の新作を是として聖經は無
用の長物と成れり是全く源内が邪智に和せられ
正理を取失ひたる世人の粗相也是を以て考るに
瓶山金峨はさすがに古老の儒家なり源内が才に
落入らず絶交したるは源内が上を行く秀才とい
ふべき也惜ひかな身を立るを急にするは邪道の
初也といふ如く源内が秀才を以て實學に入るな
らば敵するもの不可有悲むべき事なり

源内甲州銅山を願ふ事

源内は世上を思ひの儘に欺しが篤實なるものは少も
なびく者なければ我が存付も終には事破るべしケ様
に高名に及びし上は金銀を拵る工夫第一也と甲州
銅山を願ひけり此銅山は御園山にて容易に手入すべ
き山にあらずされば御代官取上給はざりしを色々
工夫しやうく手代見分を請る様に拵へたり金主
には去る金持の書林并大坂にて世話したる砂糖造喜
四郎を抱き込めて白壁町の居宅を立派に構へ銅山御用
の表札等を打し故扱は源内が願人にて甲州の銅山を

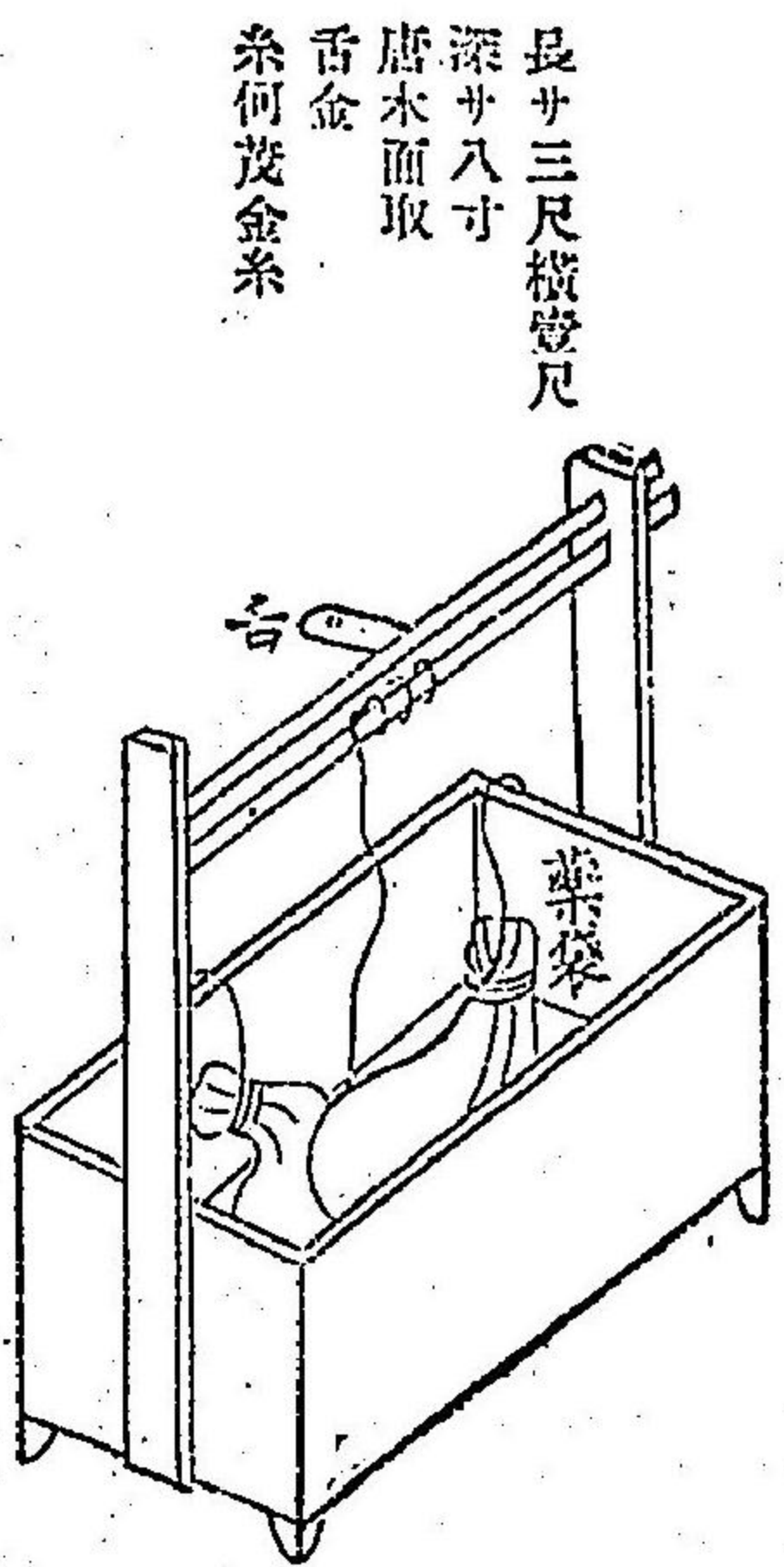
去程に三井は供人大勢召運て白壁町平賀源内が宅へ
案内申入けるは拙者儀は京都より此度御當地へ致出
府候ものにて候先生の御高名及承候へば何卒御目
に掛り候て何角の御物語をも承りたく又京都へのよ
き土産なれば態々伺公仕候なり御透にも候はし何卒
御逢被下べしと念比に云入ければ源内此由を聞何に
ても座敷へ通せと申付その身も衣服を改めて出向
へば三井も威儀を正して互にどこやら知るもの様
なれど六七年も以前一度ならでは面談せぬ者なれば
先座に付て三井懇懃に手をこまぬぎ拙者儀は京都
に住居仕候三井八郎右衛門と申者なり先生の御高名
を承り在所への土産旁伺公仕候處早速御逢被下忝し
と述ける源内は三井が名を聞扱は先年上京の時分
取入るべき謀に白人白糸を請出せしにそのまゝ拾
置し謝禮に來る成べし乍去彼も歴々の町人なり白糸
が事申出さば面目なかるべしと思案して何となく申
しけるは思召よせられたる御來駕先々是へ御出あれ
と一間の閑所へ通しけり

源内三井を饗應の事

源内は三井を一問へ通し山海の珍味を盡して饗應し

その上に申けるは我々此間閑居の時分紅毛のエレキテルと申奇妙なる道具を求候也御なぐさみに御覽に入るべしと大なる箱を取出し長持の如くなるものを出す三井も珍敷道具也何れの用に立候やと問ければ源内申けるは是は人間の體より火を取候道具なり頭痛又は熱氣つよき者は火を取候得ば即座に全快致すなりと語りければ三井も驚入扱々珍敷器財也折を見合火の出づる所を拜見すべしといふ源内申けるは押付仕かけて御覽に入るべしと段々とエレキテルを組立て座上へ次第に直しけり

エレキノ圖



圖の如くエレキテルを席上へ直し下へ土氣をさくる

以て源内方へ送り其以後は一向に通路とはなかりける源内は何卒懇意と成て三井を我尻押とせば金銀は自在なりと謀計せし事案に相違して是よりは三井と心の不和となりけり

源内櫛の事

源内は種々心を配りて兎角世上へ流行事を工夫しけるが風と思ひ付て伽羅を長崎より多く持参しけるを取出して是を櫛に挽せて銀にてむねを一分通りに覆輪を懸是を世上へ弘めんと當時吉原にて名高き遊女丁子屋の雛鶴こそ歴々も御出なさるゝ名あるものなれば何卒彼にさゝせんと便をもとめけるにこゝに一瓢といへる牽頭持あつて淺草茅町に住居しけるが彼を密に招き申しけるは其方へ密かに頼むべき事あり頼れて可被吳やといふ一瓢申けるは是は先生には改たる御頼かな定めて何ぞ密事なるべし何事によらず他言一切仕まじ御心置なく被仰聞べしと云ければ源内は大に悦びその方の一言は士の金打なり何を隠さん我等事先日淺草へ参詣せし時丁子やの雛鶴といふ遊女を見たり彼が器量實に李夫人楊貴妃も及まじき國色也一度笑めば國をかたむけるの面ざし乍

粉藥を蒔ちらして家來を呼出し肌を脱せ竹筒を肩先に當てろくろの木を廻すに随つて金糸金舌と互に摺合暫くして竹筒のさきより火出る事蠟燭の火の如し尤青火なり人々はじめ三井は勿論實に奇妙の道具也と各感心したりける三井は種々馳走に預り一禮を述べて宿所へ戻り手代惣七と申者へ申けるは扱々源内は實に天下の秀才なり彼が才を以て謀らば何事なりとも成就せざる事はなし先々此間の謝禮ながら手前へ請待して一禮も云ふべしと申しければ惣七は小首かたむけて誠に驚入たる才子なりしかし此方へ呼候事は無用なり其上彼が方へ御出の事も以來は決て相成まじ如何と云ふに此方の家の儀は太閤時代より由緒ある商人なり殊更無益の器物を好候者は己が才智を人に賣りて金銀を求むる媒介也尤金銀の事は送られ候ても苦しかるまじけれど高名なる源内殊に手前家業の益にならざる人物を愛候事支配の者承り候はば以ての外立腹なるべし又珍器杯を集め樂しむ候事奢の沙汰にて不宜也三井の身上にて珍器を求め候は、彼が所持の位は一時に集る道理也以來は御出會御無用也と申ければ三井も理に服し金貳千疋使を

耻眼中に絶す依之何卒彼に一夜の契りをこめたく今我自身吉原へ行ならば大勢入込の場所なれば他へもれん事決せり我等も出世を好む身分なれば大事の前の小事也何卒其方が宅へ招き我等が胸中をはらさせよと餘儀なき体に申けり一瓢は驚けども色情はたれも同じ事なり有まじき事にもなく殊更平賀は有名なる者なれば金銀に差支なし金で買ふ傾城なれば金さへあれば自由也と早速承引して夫より直に吉原へ走り行茶屋を以て丁子屋へ申入けるは淺草より一瓢が参り候也雛鶴さまに去る御方より内々に御傳言あり人傳にて申難し是へ御出被成候や又は夫へ可参やと云入けるに雛鶴も兼て一瓢とは心易き事なれば此方へ御出あれと云やれば一瓢は雛鶴が座敷へ行四方山の物語して申しけるは雛鶴さまへ近頃餘儀なき御無心御座候御叶ひ可被下やと改めて頼ければ雛鶴は早くもさとり扱は差合ある客人を我かたへ引付ると心得て相應の事ならば承知致さんと申ける時に一瓢申けるは明日御障りなく候は、私宅へ御出被下べし去る御方より無據頼まれたり此方へ御出は甚だ遠慮多ければ私宅に於て唯々御逢被下よと眞顔に

成て申ければ雛鶴思ふ様是は大名の若殿か又は大身の町家か何にもせよ商賣なれば早速親方へ一件のやうす物語しければ親方も承知して早速一瓢かたへ行く用意をぞなしにけり一瓢は大きに悦び直に源内が宅へ行ってしかくの趣を語りければ源内は大きに悦び明るをまつて一瓢が宅へおもむきけり

源内雛鶴へ初て對面の事

斯て源内は約束の日限にも及ければ供人召連れ一瓢が方へ越きけるが未だ雛鶴は來らず一瓢も酒肴の設念比にして今や遅しと待居たり程なく雛鶴は駕籠にうち乗一瓢が表口へ這入ければ待まふけたる一瓢やがて座敷へ案内して源内へ引合せけり源内も興に入て酒數献に及んで已に日も西山に傾きたれば源内雛鶴へ申けるは先もつて今日は日比の存念晴候て此上もなき大慶なり今日の悦何ぞ進上申たけれど指したる土産もなし是は近比庵末ながら先年我等長崎表より持參せし伽羅を以て能々此度挽せし櫛也用立てくれられなば大悦至極と述べければ雛鶴も嬉しげに金銀のかゝりしはさして賞翫もなき物なれど唐土より長崎へ來る伽羅のまた江戸迄持參し給ひしを私

に給り候御志と申遠來の名器實に匂ひゆかし候也以來は他の櫛を用ゆまじと源内に暇乞して淺草さして歸りける源内も立別れ一瓢に一禮述て我家をさして歸りけり此櫛世上にて源内櫛と名付江戸一統今以て流行すされども其始る所を不知なり

評に曰此櫛を贈らんとかゝる計略を用ひし譯は唯贈る時は流行せんとて拵たりと評を受べし故に遊興に乗じて雛鶴へ遣はしける故に其評をするものなし雛鶴も高名の遊女なれば約束の一言金銭にして生涯此櫛をさすべしと年季明ても此源内櫛を用ひしとかや

平賀實記卷之三終

平賀實記卷之四

源内神田橋邊の屋敷へ取入る事

源内雛鶴へ贈りし櫛大に世上へ流行し田沼殿奥向にて殊の外流行し傳をもつて源内かたへ申來りければ源内も心ある者なれば念を入て拵らへあげ早速もたせ遣しけり是を縁として心易く出入し也其後は紫檀黒檀等を以てし或は鼈甲木櫛の差別なく銀むねを懸たる櫛をば源内櫛と名付し也或時源内兩國邊を遊行せし折群集の女ども大かた銀むねの源内櫛をさしたり源内は心中大に悦喜して我なす事皆當世へ能能あへりこれならば甲州銅山の願も未成就せざれども終には成就疑ひなしと大に勇んで宿所へ歸り是よりして一藝に名を得し者は源内がかたへ出入せざるはなかりしと也實に天下の奇才にして人の心を動す事神妙也と世上皆評しける

平賀源内再長崎へ赴く事

源内は思ふ儘に世上の氣を取猶此上は金銀を集めんと江戸の町人利欲ふかき者どもをかたらひ申けるは

我等事此度又候長崎へ立越鯨或は唐物類思ふ様に來るべし各も入銀し給ふべし持來りなば大なる利益なりとすゝめける是を聞ものどもは源内が申事なれば何事なりとも出來ぬ事は有るべからずと各利欲ふかき者どもは合體して入銀せんといふもの多く出來て凡金四五兩暫時の内に集りける源内は旅用意殘る所なくして吉日を撰出立せんと工夫を廻らし去御大名の繪符をかりて道中自由に通行しける也

平賀源内道中奢之事

源内は旅用意して供人四五人召連れ其身は乗物にうちのりて悠々と鹿島立して道中さして急ぐべきにもあらざれば所々の名所舊跡を尋ね箱根へ懸り四五日程逗留して夫より駿州へ這入ければ人足など大勢雇鎗持等美々敷具足にも平賀源内と掛札して脇本陣へ宿札うたせ大勢の者ども泊りければ宿内には評判して此平賀源内といふ人は本町の興左衛門方にて世話いたし先年居られし人也此様子は立身せられしと見へたり夫とも同名も數多あれば計られずと各唄きけり源内與左衛門方へ使を立申けるは久々御左右も不承御別條無之や拙者儀も此度所用に付長崎表へ

罷越し候夫に付當所へ態々泊候は先年御世話に預かりし一禮をも申度且は門弟中の安否を聞申たく罷越候也乍輕少金二十兩酒肴の土産に候間門弟中初御近所の方へも御振舞可被下候拙者儀早速罷越筈なれど此度の道中は少々譯合御座候間公私の多用止事を得ず御面談は致し難し其内可懸御目と使者を以て申送りける與左衛門は宿内の評判といひ今又目錄並使者の趣誠に立身に相違なし先達て此方より召連し家來返歸て物語りせしとは大に相違し如何したる事やらんと不審晴されども金子贈りし事殊更社中一統の事なれば念頃に返答して使者を戻し門弟中を呼集め評議せんと先第一の門弟深草の惣左衛門と云を呼に遣し右の趣語りければ惣左衛門も驚入一向不審はれず追々門弟中既集り如何謝禮いたすべし此方より江戸表へ音信もせず家來が戻りて物語を聞人殺のさた有し故以の外驚きしが扱は源内此方を退べき謀事なるやと智惠賢きものは心付又了簡淺き者は左は有べからず人殺の譯不知して出世したるなるべしと打よりて各評議區々なり然ども打捨置べきにあらざれば一兩人惣名代として源内が旅宿へ案内し

音信の謝禮を申入たり源内は兩人來りしと聞深草の惣左衛門にも參られしやと尋ねければ取次の者成程惣左衛門といふ人の由にて候と申ければ兩人を取次の座敷へ通し暫く過て出迎ひし形相誠に威儀を備へたるにぞ兩人も平伏して居たりける源内は温順に言葉をやはらげ扱々御兩所とも久々にての對面なり御家内にも御別條無之やと四方山の咄も終りて申けるは先年我等江戸表へ罷下りし節召連し奴は如何いたし居候やと尋ければ彼者唯今は商人と成て本町邊に住居仕候也と申ければ源内につこと笑ひ彼は甚正直者也我等事は大望ある身の上なれば駿河などに留られては叶はじと彼を偽りて物語せしを誠と心得貴殿方も嗚々驚き申されつらん一旦偽りを以て當所の門弟衆を欺しやうなれども我等唯今にては志を得べき時節也此時に至ては貴殿方も先年の謝禮をも述らるゝ物也今迄駿河に止り候はゞ今以て貴殿方の御世話のみなり惣じて豪傑の振舞と大丈夫の行と似たるやうなれども始末少々替り有也順逆の論は文王武王の行狀にて事分りたる也以來能く學文して男子の氣象磨かるべしと申ければ兩人も耻入て師弟

の間の義を忘れ下郎の詞を信仰し源内かたへ音信もせざる誤り今更何とも言譯なく赤面したる計り也又源内は金五兩取出し此金子は彼召連し奴へ被遣給るべしと念比に酒肴を設ゆるゝと御休息有べし重て御對面申べしと暇乞して入ければ兩人は耻入て早々宿所へ歸り與左衛門へしかぐの事咄しければ與左衛門も耻しく何とも言よるべき方便なく評議のみにて決せざりし源内は旅用意して美々敷本町邊を急きけり

評に曰源内が駿河にての振舞實に大丈夫とは言ひ難し所々經歷の内駿河は根城也然るに舊知の者へ金銀をもつて威勢を振ひしは本を忘るゝに當れるか實に大丈夫の沙汰に及はず

源内長崎へ到着之事

日數無程源内は長崎へ着けるが先年段々世話に成し彭城東吉といふ通辭の方へ案内させ土産の品々持參して先年世話に成し段々謝禮念比に述て面談せり東吉も懇意なれば先々私宅へ落付給へと東吉が方を旅宿にして心易き友へは相應に土産など持參して實情ある取計ひ誠に駿河にての振舞とは表裏の違ひ也

夫より吉尾何某へ案内して紅毛屋敷に取入り諸道具等夥しく買取暫時の内に荷物にして大坂津出しを申付たり長崎の儒家渡邊忠藏は又候源内が來りし事を聞扱は彼此度來りしは利欲の爲に來りしに決定せり彼も才子也若金銀多く持參して拔荷にても買とらば其風俗にならひて長崎の風儀あしく成べし元來利欲にふけりし長崎の氣象の上又候風俗亂るゝ時は以の外の大事也何卒して源内を追拂べしと秀才なる渡邊が工夫を廻らしけるは急度存付たる事有て紅毛通辭の吉尾何某を招き密に談じけるは此度平賀源内又候此地へ立越何か利欲の沙汰に及ぶよし元來かれは才子也若拔荷にても工夫せば長崎の大事也彼を防ぐべきは貴殿の心に有といひければ元來吉尾も才子なれば此一言に心づき成程貴殿の仰の如く大切なる事也以來源内が長崎へ念を殘さぬ様にすべしと暇乞して別れけり

吉尾源内を欺く事

源内はかくとも知らず吉尾が方へ心易く出入して何卒拔荷を買はんと手段しけるが或時吉尾へ申けるは我ら事何卒拔荷を調たき者也拔荷の事は天下の御法

度にて容易には成まじ併し抜荷同前の事にて申分の
 濟方有由承り及たり貴殿などは數年の勤定てケ様の
 事は委しからんと申ければ吉尾申けるは成程抜荷の
 事は拙者ども随分念入て吟味仕也夫故抜荷の仕様前
 前召捕候者へ委細尋置たり御慰に物語り申さん先抜
 荷と申は天下の法度にて殊の外大切なる事也此抜荷
 買んと存する奴は西濱邊にて獵師へ金子を取らせ四
 五人も雇ひ朝の内夜の引明る迄の働きて御座候由
 獵船を五島沖へ四五里も乗出し朝ぎり深き内は五島
 の役所よりも見へ兼候故唐船の來る時節を考へ毎晩
 毎晩如此いたし候扱唐船沖へ見へ候て海上へかゝり
 候を見濟し夜の内に乗り付唐船の向ふの方へ廻り候
 て荷物を買とり扱唐船の向ふの方へ船をもやひ段々
 磯へ漕寄て朝ぎりの暗き内陸へ上り候事也尤甚敷御
 法度所々より遠目鏡にて見居り候故殊の外手廻を致
 さざれば得て捕はれ候由召捕候ものゝ物語なりと語
 ける扱吉尾心の内に思ひけるは扱々憎き奴哉渡邊が
 明察の通り相違なし此節源内を欺きて才の自慢なる
 鼻をひしがんと工夫しけり邪智深き源内故心に思ひ
 けるは朝霧の内に買取事は吉尾が我を欺く也夜の内に

に船中荷物を買取に何條手間の不入事也と心中に悦
 喜して誰彼なしに船頭共を語りひ我一人にて買取べ
 し吉尾も大切の事なれば中々承引する躰なしと思ひ
 何となく申けるは扱は殿敷御法度なり左も有べした
 とひ自由になればとて天下の法令は破られずと四方
 山の物語して源内は一問へ入にけり吉尾も源内が面
 魂ひ一方ならぬ趣を見て取彼必一人にて買取の志あ
 りされば彼れに一ぱい喰せ長崎の智恵を見せんと濱
 の町へ行船頭の頭へ申けるはその方組下の船頭共へ
 申渡置べし江戸表より平賀源内といふ者來て抜荷を
 買んと思ふ志あり彼は我方へ旅宿せり若此者來て抜
 荷を買ん事を頼候はゞ金子を存分に取て舟を出し沖
 中へ連行て又々金子をゆすり取其上にて繩をかけ天
 下の法令を破りし故奉行所へ引出すべしと嚴しく申
 べし我々方に居候奴なれば我等來りて内々に取計
 ひ其方どもの難儀にならざる様にすべしと言渡しけ
 れば船頭とも承引して源内が左右を待居たり源内は
 吉尾が物語を聞て扱荷買様委しく聞取り一人の利徳
 にせんと先西濱の方へ赴て船頭の家へ立寄り尋ねけ
 るは我らは江戸の者なり此所にて少々尋ねたきもの

あり乍併名を失念せり西濱にて船頭のかしら也と尋
 ければ直に知るゝよし也何方が頭の家なるやと誠し
 やかに尋ければ船頭申しけるは此西濱にて頭は唯一
 人也大方その人なるべしと教ければ源内は大に悦び
 右の頭の方へ行四方山の咄しの上源内密に申けるは
 我等は貴殿に内々頼たき事あつて來りし也と云けれ
 ば船頭はさてこそ吉尾殿申せし事は也としとやか
 にこれは〳〵何御用に御座候や相應なる御用に候は
 ば承知仕候也と答ければ源内は忝しと一禮し懷中よ
 り金拾兩取出し是は近比ながら進上仕候也さて拙者
 頼み入り細決して他言致まじと誓言承りたしと申け
 れば船頭は安き事なりと誓詞の上源内申けるは外の
 ことにてもなし我等事は此度抜荷御改として隠目
 付に参りたり乍去抜荷の場所不案内又は抜荷の致方
 知らずしては江戸表へ歸國の上御尋の時分可申上様
 なしそれ故抜荷のいたし方且其場所を見たとし先船
 を出させて其上にて金子を以て引入んと計りし也然
 るに船頭は膽を消しおどろき入たる御頼也扱荷買取
 る事はきびしき御法度なり元來私などは一向に存不
 申候といひければ源内氣色をかへ人に大事を打明さ

せ包むとてつゝませんや異儀に及ぶと眞二つと顔色
 かわつて云ければ船頭も一言に驚愕し左様ならば今
 晩密かに御出あるべし正九つより船をのり出し候な
 りと約束して源内は歸り船頭は此由を吉尾が方へ
 知せんと急きおはて、駈行けり
 源内長崎を立退く事
 斯て源内は吉尾が許へは態と不歸丸山邊の惡所へ報
 き家來を呼で申けるは其方はさきへ戻りて唯今の
 船頭か又は外の船頭らしき者吉尾が宅へ來るや否や
 をとくと見届早速我等へ知らすべし毛頭怠る事なか
 れと念比に申付其身は小泉といへる茶屋にて酒など
 飲で待居たり船頭は吉尾が方へ欠付てしか〳〵の事
 告知らせば吉尾大きに悦ひさいはいに源内が宿に不
 居早々兩組へ知らせ源内をおびやかさんとて役所へ
 いそぎ行けり源内が家來は始終得と見届丸山へはせ
 行主人源内は莞爾とうち笑ひ長崎の者は實に鼻の先
 の丁簡計也我彼等が胸中を計り若我がなせる事又唐
 物等を買取し事を若や知りたるかと深く丁簡して計
 りしに一向に不知趣にて安堵せり我荷物はもはや一
 昨日出したれば三十里計りも行たべるし早氣遣ふ事

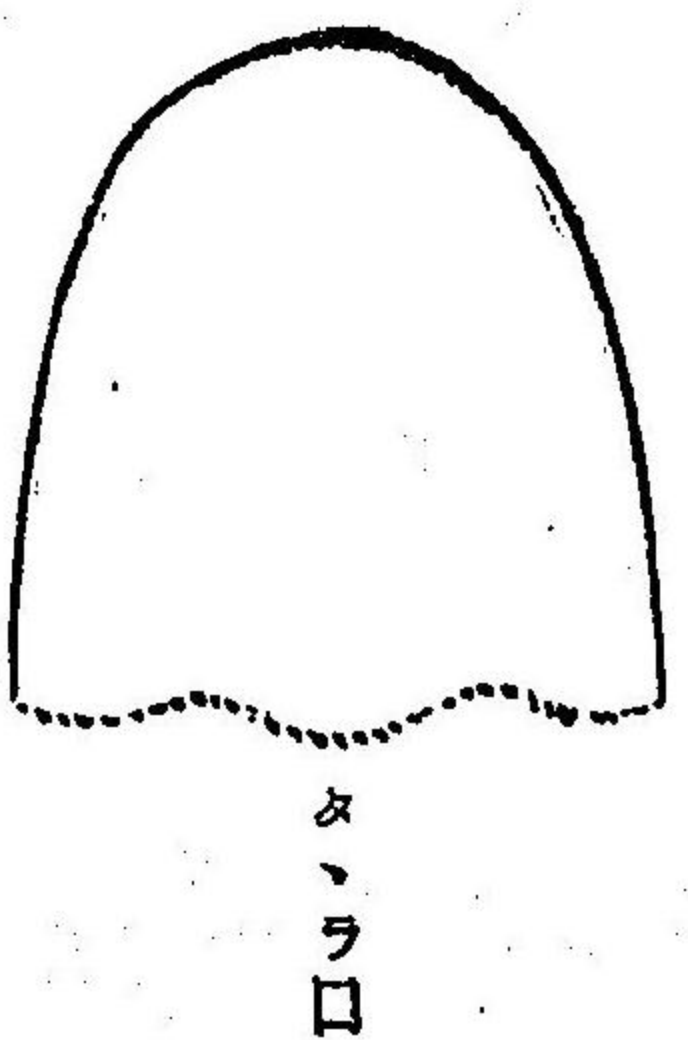
なしと悠々として吉尾が宅へ歸り常の通りにて居たりける吉尾も船頭も今や〜と待ども源内來らざればすご〜と立歸り源内に面談して咄終れば源内吉尾に申けるは拙者事永々御世話に相成り忝し乍去昨夜夢に我弟病死いたし候と見たり尤夢に正ゆめはまれにして證となすべきに非ず乍併國許へも久しく參らず又佛參等も致度明後日出立可申といひければ吉尾も何ともいふ様なく成程御國元は近國也可然と云ければ心の内は本意なけれど仕方なく相應なる饒別して源内を戻しけり吉尾は甚だ恥入り源内邪智おそろしき男也と先づ渡邊忠藏が許へ行段々語りければ忠藏も賢き才を感じて長崎の智恵を見せんとして源内に欺れ抜荷等も存分に買れしを常々遺恨に思ひしとなり

平賀實記卷之四終

器也然るに源内密かに藩人へ便りて此度買取船を疊んで荷物にして江戸表へ持參して神田橋邊の御大名へ土産として遣しけるとなり

評に曰此飛行船の事近來流行せし本の圖を出せり此船の紅毛より來りしは天明元年の頃にて源内が持參せしに相違なしと云説あれど未詳是非此船へ人の乗る事五六人を限る也又雲中にて風止む時は外に風根といふ物を下よりたゝらにて風を吹き上る也風根は皮にて拵へ常には疊んで置くと也

大サ五六尺
風根の圖
深サ八尺

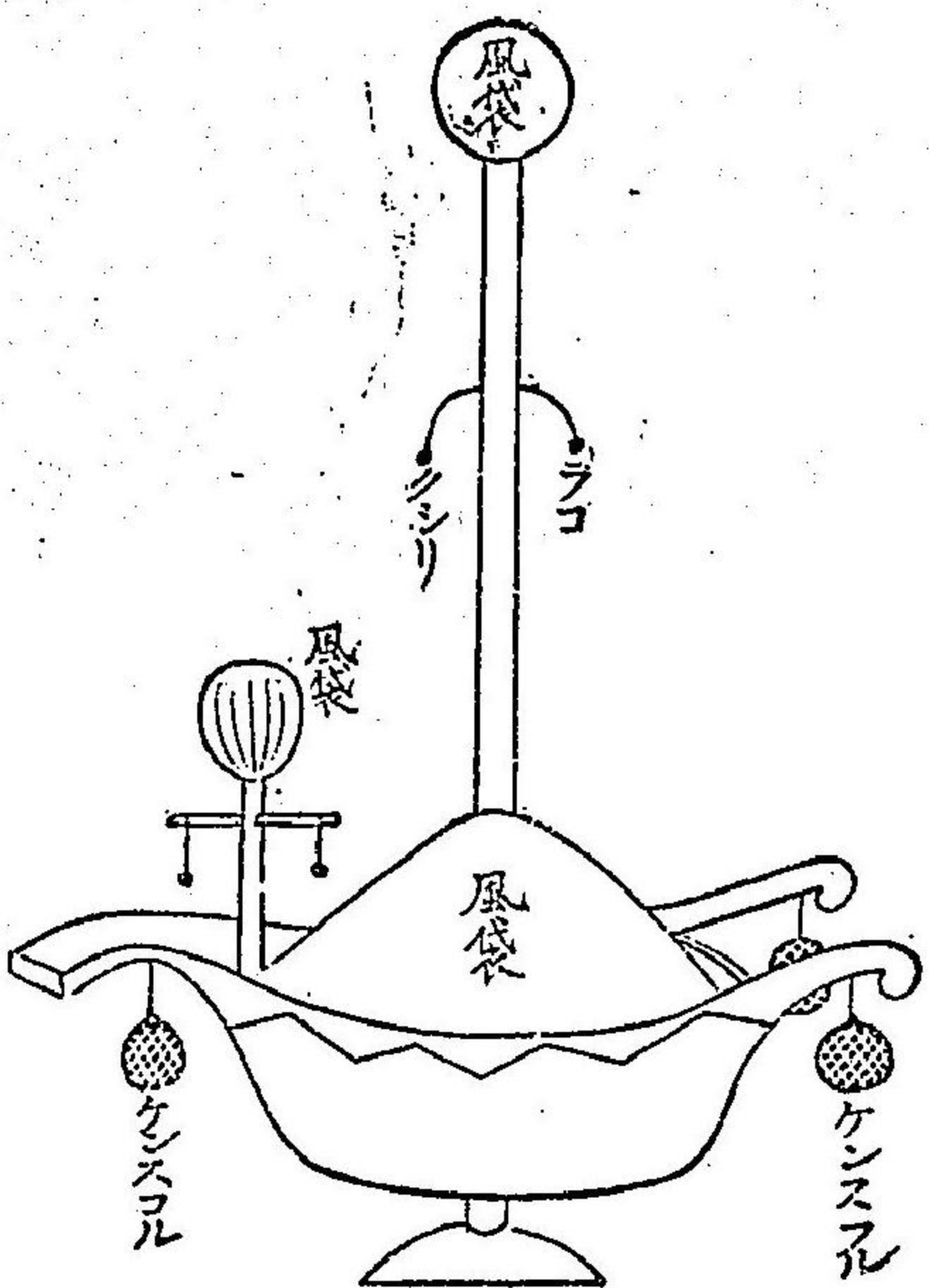


此風根を下より吹き上れば雲中忽ち大風を生じて飛行船を飛す事妙也と紅毛人は是をもつて飛鳥を釣る事有と云右の飛行船去御大名に遣しけるが今に其船彼方にある由也源内いよ〜世上評判よく本草會日々に盛にして大勢群集し又人參を植付んと御醫師方を

平賀實記卷之五

源内江戸表へ立歸る事

源内は程なく江戸表へ着て手を廻して求たる道具どもを知る人へ土産として贈りしその中に雲中を乗る大船あり圖左にしるす
飛行船之圖



此雲中飛行船は紅毛の細工にして長崎へも來らぬ珍

語らひて御用地等を拜借し偏に醫學館の如く和漢の珍器を集めて實に雅會と言はやしけるとなり

源内橋本町卜居之事

源内は志を得るに隨て白壁町の宅手狭なれば橋本町にて賣家を求め美麗を盡くして住居せり見分による世の中なれば雅俗の隔もなく源内が方へ出入けり源内心に思ふ様は物見だかき當地の事なればめづらしき細工人を呼寄せんと何事に寄らず一藝に名を得し者をば私宅へ引寄せひければ細工其外儒者醫師僧侶の輩まで秀たる才のものは集らずといふ事なし實に珠履三千の交とも云つべし其中に信州松本の産にて權七といふものあり秀才なる生質にて火洗布の製作を知れり此火洗布といふは木綿の類にして火中へ入ても不焼若垢付時は火を以て洗濯する奇妙なる布也是を製作して世の中へ廣めんと源内と相談せり此布を織る綿は石綿とて深山の巖石へ生る綿の如くなる者なり是木曾山ならでは無よし源内彼を案内として木曾へ趣き夥しく持來て己が二階を織殿として日々無怠拵らへければ早速成就して火中へ投入れて不焼事妙也依之世上専ら稱して諸大名より求ん

と乞ふもの數を知らず源内は大に貨殖して又々石綿を取寄て大さ四五丈幅五間計に拵らへ立夫より段々流布して公儀にても評判有りけるとなり

源内火浣布を以御藏を覆んと願ふ事

源内火浣布を夥しく作り立此布を風下へ張置ば大火の節といふとも火を防ぐ事疑ふべからず今淺草御藏には大名方御防あり夫よりは此布にて大袋を作り御藏へ懸る時は類焼の氣遣ひなしと丁簡し先火浣布を集めて大なる袋を拵へ段々内々をもつて町奉行へ願ひけるは淺草御藏火消御役の事御大名方の御役とは申ながら數多き事なれば難澁至極の様子也然るに此度拙者儀火浣布の略製を存付細工人へ差圖して申付候處已に出来いたし候也此火浣布と申候は蜀の都にて張賓と申ものが工み出せし布也その製作といふは火鼠の皮を集めて布とし候得ば火に不焼といふ我日本には火鼠なく火鼠に代る石綿といふものあり極て山中ならでは無物也是を漸尋ね求めて火浣布を作り候なり是にて袋をこしらへ御藏へ掛候は、恐らくは焼失の氣遣ひ有べからずと願ければ町奉行土屋越前守殿被申けるは成程面白き工夫なり併ながら

今太平の御代文武共に兼備せし時也かゝる治世の政を執るには人を以て貴しとせずんば政務實に小さくして仁政とは言難し其上所々火防御役の儀は諸大名軍役同前にして定式の御役目也且は一家中の手足を丈夫に致す爲なれば兩様兼たる御役目也然るに火浣布を以て防ぐは各心に油斷して精の入やう違ふ也殊さら水の手の外器物を用る謂れなし此上の心掛水の手に便利なる道具存付候は、早速申出べしと理非分明に申されければ源内も理に伏し御尤千萬也と心中に越前守殿の器量を感じ實に町奉行の器量也とて火浣布の沙汰は止にけり

評に曰越前守には源内が心中を存られける故斯は被申けると也如何といふに火浣布の事若免して御藏の火防に致さば段々手廣くして惣町火消等惣代をも願ふ成べし左候得ば町家の困窮眼前也と被存ける故にや如此被申し也實に其器に應じたる奉行也

源内浮世本を作り述懐之事

斯て源内は種々工夫を廻らしけるといへども更に取上べき人なければ我才よりは人の才の長じたと心

得て最早我望も成就の程計り難し去ながら今我を評判するに兎角滑稽の事に落せり幸ひ哉世上に浮世本流布して輕薄第一の風俗也此時に乗じて人の情を汲取らば亦階梯とも成べしと思案して種々の浮世本を著述して梓行暇なかりしとなり或時源内申けるは世上の學文以外の外に薄く成て國字解など世に流布し萬事甚た手薄き事なりこゝに又寐惚先生と狂名せし者有彼は將軍家御徒士にして太田直次郎といへる者也才智ある者と見へて狂詩狂歌狂文に名あり彼を我術中に入れて俱に事を謀べしと食客の者を媒介とし

を破る事を知り亦狂才ある事を大に感じ一座興に入しとかや

平賀源内嘆辭之事

て念比に出合けり此時分井上慎齋といへる風雅に遊ぶものありける智惠競といへる雅會を催し兩國或は中洲邊繁花の土地にて時々催しけり此慎齋狂畫を書し者にて唐畫師芝蘭石の弟子なり或時源内が宅へ集りし時源内申けるは我等が畫像を認て給はるべし我等は實に齊の管仲に似たりと覺へたりと云ひければ慎齋莞爾とわらひ我等は管仲と從弟同士也管仲を能々知れり常々出合其形相は能く覺へ候が貴殿にはいまだ管仲とは知る人にては有まじ中々管仲と貴殿とは大に相違の人相なりと言ければ源内も彼が我

斯て源内は種々心を碎くといへども一として成就したる事なし熟々世間の有様を考ふるに當時互に才を争ひ利を競ふ風俗なれば實に左道の浮世也我何程才を震ふとも中々志を立る事有べからず今周の末世の如くにして面々稼ぎの世の中也かゝる世に生れ出るは我身の不幸也能事をなせばそねみを請惡事をなせば罪を請中庸の人とならば人の上に立事生涯不可有今世上評判する山師と言る者は世に不逢より起る事也誰にもせよ志を得る時は願はしき事さしてなし日々權勢増長して邪道に成行く事天下皆如此然るに斯區々として世の俗事に制せらるゝ事誠に是非もなき事共なり今よりして世上を離れ聖堂へ出勤して孔門の徒と成べしと思ひしが乍去残念なるは我志願なり人間の性を受て國恩を報せざるは禽獸に等し何卒一事たりとも國益を拵らへて不朽の名を残さずんば死とも忘却すべからず楠正成は末期の魂に念を留めて足利尊氏へ恨をのべし例あればいかでか此

儘に終らんや尺蠖はのびんが爲に屈する事潜龍の地中へ入が如し是より後表は聖賢の門に遊び裏は桓文が覇業を抱き終には天地を震動させんと自ら行跡を改めて常々上下等を着し慢に人に對應せずおもおもしろく暮しけり乍去悪念あれば兎角萬端拵事にのみ取懸りて差て仕上ケたる事なければ自ら我身の終を知らず此儘にては濟まじと新田開發或は又山林竹木の公益を考へ己が欲を心掛しは源内が連の盡る所也終に橋本町にて罪を請て世の言の葉にかゝりけるは惜むべき事也漢の花清婦は山中に入て丹穴を探り貨殖し一家をなせり此平賀源内は世に遇せざる不幸也と世の人其才を惜みしとかや然れども惡を積んで罪に逢しは才の爲なり後の才智ある者慎んで善道に趣き不朽の業を畫すべし

平賀實記卷の五終

周德衰へて齊桓晉文の覇業起り國家亂れて忠臣出と平賀國倫か生前の行狀智と稱せずんば愚と云はん歟然とも天滿る御神のいまそかりける我日本の器才四百餘州と謂とも違べからず今櫟齋か夢物語實に才子の警めならんと跋于西山寓居

閑華老人述

大和繪師浮世繪の考

岩佐又兵衛之傳	菱川師宣之傳
土佐又兵衛浮世又兵衛	英一蝶島一蝶之考
大津又平ノ畧傳并系譜	淺妻船四季之繪跋
四川祐信之傳	鈴木春信之傳
橋守國之傳	懷月堂珉江
難屋立圃并繪師源三郎	川枝豐信阿江
月岡丹下之傳	富川房信一筆齋文調
羽川珍重之傳	柳文調鳥山石燕
下河邊拾水之傳	細田榮之湖龜齋
長谷川長春之傳	寫樂一戀川春町
吉田半兵衛之傳	額俊滿一春湖
近藤清春之傳	珠雀齋一歌舞妓堂
鳥居清長之傳	宮川長春宮川春水
奥村政信金利信政房	勝川春章小松白龜
四村重長之傳	以上
石川豐信之傳	以上上卷

吾妻錦繪の考

勝川春英	同	同	同
同春扇	同	同	同
北尾重政	同	同	同
喜多川歌麿	同	同	同
同豐國	同	同	同
法橋關月	同	同	同
速見春曉齋	同	同	同
同國長	同	同	同
同國直	同	同	同
北泉	同	同	同
柳川重信	同	同	同
長谷川雪旦	同	同	同
以上	同	同	同
下卷	同	同	同
泉守一	同	同	同
堤等	同	同	同
珠	同	同	同

三燕石十種卷第

无名翁隨筆

大和繪師浮世繪の考

浮世繪と稱する事は日本繪より云出たるなればいと古くよりの唱なるべし百濟の川成宇多の朝に仕へし巨勢金岡後堀川院の貞永天福の頃左京權太夫藤原の信實と聞へしは本朝に比類なき倭繪の妙達名を得し人也信實の末裔に土佐刑部大輔藤原の光信は繪所倭畫を中興す是倭繪一派の祖(土佐氏は經隆祖)と云へり明應年中の人也古法眼永仙元信も光信が門に入て日本繪を學び畫法を受狩野土佐各姓氏相分れども皆悉く日本繪なり畫家の傳記は諸書に委敷出たれば云は事舊にたれども亦云はざれば其意解がたきこといと多かり畫道を學ぶ初心の爲めに爰に略抄す往古は姑く云す後小松院の御時應永年中明國より如雪といふ僧來朝して相國寺に住す蘭芳軒と云ふ漢畫の妙手なり名を當世に播(又如拙は九州の人なり)其頃豆州の産にて東山殿に仕へし狩野四郎次郎伯信と云者畫を善す後大炊之助藤原正信と改む叙法眼狩野祐勢正信と云(友清祐清とも書けり其元は遠州刺史永享中の人也狩野祖)如雪を師として

畫法を學ぶ亦薩州の人に春旨周文といふ人漢畫の妙手にて畫法を如雪に授て相國寺に住す(越仙又越溪とも云出藍の稱あり明國より秀文といふ人來朝して畫を善す飛彈國に住して曾我氏をつぐ唐人秀文と云ふ后蛇足に畫法を傳ふ周文と混同すべからず)祐勢正信この人に畫法を學ぶ僧雪舟(雲谷軒等楊と云ふ備中の入丹青の妙世にしる處なり)小栗宗丹俱に周文を師とす(小栗宗丹は周文の高弟なり一に宗單に作る室町家に仕へ後に相國寺に入て僧となり自牧と稱す)正信は宗丹にも教を受けたり祐勢は如斯名人に隨て畫法を學得て後に狩野一家の畫法を立たり然れども漢畫を改す故に雪舟正信宗丹は各學ぶ處一つなれば筆勢皆相似たり然れども其後明應文龜に至て祐勢の長子狩野四郎次郎藤原元信父正信が畫法本意を嗣ぐ其後異朝にまで震ふ明の鄧澤は元信が筆法を見て師とせん事を望しとぞ越前守に任す玉川と號す法眼永仙後世古法眼と稱す(足利家に仕へて永祿年中没す)元信畫道に熱心にして大日本繪を學ん事を欲して土佐光信の女は倭畫に妙手なりければ元信是を妻に娶て猶畫法筆格を學びけり茲において

自ら日本繪の風意を學ぶ人多く元信も半ば漢畫を廢すと云とも日本に産れて何ぞ異國の畫法風骨を事とすべき倭畫の筆格を建つるにはしかずといよ狩野流一家をなさんとすまかれども此ころは諸國亂れて戰鬪しばしば止時なく世の中安穩ならざりければ治世を待て世に出んと大和和泉或は紀州に身をひそめ難を避て終に畫家一流をなし商船に畫を附してかたじけなくも明帝の詔書を給り子孫に傳ふ一世の苦心を思ふべし雪舟は諸國に通れて治世を待り後明に渡り張有聲を師として草筆の畫法を學び歸朝して日本に草畫の筆を傳へたり或説に雪舟は眞畫を改めて草筆の唐畫を以て一家をなす故に漢畫といふ古法眼藤原の元信は本朝一派の畫法を立てしより本繪と呼びならせしにより狩野流の惣名となりしされども筆意凡ならざれば本畫といふ不如を末畫といふと記せしは附會の説にていと受難し疑ふらくは誤りならん按るに本畫の唱へ狩野一家に限るべからず和漢ともに本畫末畫唱へあり事本末有況や畫法に於ておや筆法規則得たるを以て是を本畫といふ是に反する物を末畫と稱す「無墨點」則是なり墨畫なくして

五彩をほどこし分ち畫く蘭畫の細畫の類なり(阿蘭陀畫也硝子に眞を寫しまたは銅板にて眞を寫す)唐米南宮末繪を以て市街の壁に貼して賣る是本畫末畫と分つの謂ならずや街畫と云も是より起れり亦雪舟草筆を傳へしより唐畫と呼と云も受難かり雪舟の畫風は唐より出ざる筆法なり雪舟の風意は唐畫とは異なり漢畫は雪舟のみならず往々皆漢畫の寫眞を畫しならずや又草筆を漢畫といふにはあらず前にも云る如く多くは異邦の畫人より傳へしなれば筆法畫則は唐畫に起りて日本繪に畫法を別に建す草筆は探幽齋に至りて大に開け狩野流一家の骨法墨色の濃淡を顯せり(探幽は右近將監孝信の長子なり小名宰相四郎次郎采女と云宮内卿法印藤原守信寛文二年叙法眼海内第一の名人と稱し多く繪本を残して後世の準的とす狩野流の豪傑丹青の妙世に知るが如し)畫道に志といへども多くは是を辨へず且大和繪と稱する者は浮世繪師の事と思ひて其差別を知らぬも有り續日本紀に靈龜元年乙巳從六位下江見押勝姓を更爲倭畫師と有り俗間の畫師猥に書べからず倭畫師は姓也(井澤長秀俗説辨に出)そは鬼まれ唐の繪容なら

倭國の宮殿樓閣山水人物に至るまで寫しなすは日本繪なり是を倭畫といはずや日本の景容を畫くを以て稱するなれば字義通稱に不拘訓音を以て日本繪を倭畫とし又大和繪を俗に目なれて書改しは大和國に住せし畫工の斯く書始しも有と云とも倭國の風意を寫せしをばやまと畫と一概に唱へ來れるものならずや偏頗の稱と思ふべからず土佐流の祖と稱するは巨勢金岡より起り曾孫公忠弟公茂の孫深江其子弘高常則爲成光其親越中守隆信左京大夫信實伊豫守隆親（其餘數ふるにいとまわらず）從五位下土佐守藤原經隆是土佐氏畫祖と云經隆の長子越前守行光光重（彈正忠）廣周（刑部大輔）光信（左近將監土佐守）光茂（刑部大輔）光持（將監）光高と代々禁裡繪所預として今猶數代連綿として相續（刑部大夫光持は慶長年中の人なり女子あり古右京繪所將監狩野光信妻とす慶長中秀吉公に仕ふ近代に至りては故有りて委敷記する事を憚り將軍家にも住吉具慶を京都より召れて土佐流の繪所となし給ひ如度廣通より數代住吉内記と稱す住吉家より板谷家と稱して分家す粟田口も類族なり）仁和寛平の往古より天保の今に至る迄九百四

十餘年來土佐流とす古土佐に僞れる畫多く東都にては京傳と云下り繪と云極彩色の細密なるものなり今京傳といふは四條繪と云ものにて應舉南岳文鳳などの畫の類にて土佐流にあらざ漢畫に近く土佐に異り狩野流及諸家種々に分れていづれか日本繪ならぬはなし皆丹青の達人海内迄雷鳴すとは言はでもの事なるべし就中土佐流の歌撰源氏等の繪卷物歌の心昔物語四季雜林の繪卷物雲上の束帶官女の五衣着て膺がわしき英雄の軍譚賤の農夫が耕し草刈るさま樵夫のいとなみ漁夫のすなどり或は市中の貴賤老若物見遊山の往交さま市女笠きて衣引まるとりし容今見ては質朴の古風と思はるれど其畫る頃は時世の今様なるべしされば今の世に浮世繪師が流行の光景を寫せども二十年來經たるを見れば其風俗に違あり爰を以て思ふべし星霜はるか押移れば昔繪なりとて其時の時世振にはくらべがたけんされば昔は浮世繪も日本繪にて各畫けり或書に爲成が様漢の抄の屏風に漢畫とやまと畫の浮世の人物を畫きたりけりと有となん土佐狩野流の銘々も先に云へる源氏等の畫容を大和人物と唱へ貴賤質朴の姿を雜人形或は浮世人物と唱

ふされば各得手たるを以て漢畫師倭畫師と倭漢を分ち（又其中に山水畫師花鳥畫師武者畫師源氏畫師浮世畫師など、得手たる人を他より稱するの唱なり唐畫にも梅畫蘭畫竹畫山水畫き人物かき花鳥畫有り各得手たるを云浮世畫はやまとゑに有）畫法筆意備れるは皆俗に言本繪師なり譬畫家の末裔の人なりとも規則骨法備らざれば末畫素人畫と云ふべき也從來畫は眞を寫すを本意とす然りとはいへども筆法畫格倭漢ともに建しより是を亂さず墨の濃淡を以て畫の位を定む是等を辨へ寫す時は畫ならずといふ事なしやゝともすれば古人の彩本に寄らずして畫けるを以て誹謗族もあれど笑ふに絶たり己が畫才に拙くして圖を巧み筆法を立つるの智なくして古人の繪本を寫し溜夫を準的に畫かざれば扇一本書事あたはぬ愚者偏痴と云ふものなり武家に繪師を置くも軍用地理を寫すの爲なりすでに張良が蜀の棧道を燒しも蕭何が地理の圖を奪ひ得て漢中へ入ぬけ道の陳蒼道を知ればなり夏の禹王が洪水を治め徑陸の水衢を丹青を以て分ちしも地理の圖による物ならずや地理風景人類皆眞を寫なり（根本により人の寫しを亦寫し

て間違あらばなんのえきかあらん）繪道を學ぶ者を畫巧と云圖工と稱す人物禽獸蟲魚草木を畫圖に假寫すが故に畫巧と云へる所謂なり或畫家の曰古より似て似ざるを本繪の法なりと云へりと片はら痛く笑ふに絶たり畫法に曰く眞に遠く畫に近かれと云は筆法を失ずして眞を寫すを云に是を思ひ誤りたるもの也畫法に托して斯云んより畫ぬといふが遙に勝也似て其非なるは犬畫なるべし宛も萬物隨て似ざれば其物にあらざ漢畫に寫眞の法有り其性を見て生を寫すぞ專要也見る事の不能ものは古人の圖によりて畫くべきのみその性をしらざればいかで妙を極むべき和漢古人も是を云り虎を畫てならざれば犬に類すと馬援もいわすや巖の屈曲波の瀾文雲の凝り水の流溜（岩木の皺松の茂枝は畫法に書得難しと云り）是等は視者惑す波とし岩とす事を以て其狀ちを寫すのみされども筆法規則にそむくは畫道の詮なきものなるべし能觀察して會得すべき事ならずや且粉本によりて畫るを非とのみ云にはあらざるべし人物古實の類によりては新に其圖を巧なし其意を失ふ事多し是等は粉本を乏しからず貯置をもて其道の達者といふ

往々閑院に大内を遷されて后寄馬の障子并李將軍畫由が障子など沙汰なかりけるを四條院の御時西園寺相國禪門修理せられける時頭の中將資季朝臣申起して立られたりし此障子の繪本ども鴨居殿の御庫にぞ侍るなる建長造内裏の時繪所の頭前加賀守有房繪本を持ちざりければ取出してかゝせられけりとあれば是等をも思ふべし規矩ある事は如斯一偏の論と思ふべからず或畫家又曰古人の筆法備りし圖によらずして新に眞を寫し圖を巧み畫くことなかれ畫法に反すと是又何の謂ぞや琴柱に膠するがごとく畫道を辨へざるの辟論嬰兒のごとし凡畫は仙術に比し目前に人の欲する所を現す風流に至てはそのおのれを樂み人をつたのしましむ如歌如詩古人も詩中の畫畫中の詩とす詩は有聲の畫、畫は無聲の詩心の欲する處に隨て狀ちをなすは畫也古人の粉本を寫すのみならば奚ぞ畫の假寫の德あらんや源氏物語に紫の上が源氏の君の須磨の留守三年の間つれづれなる遊びに畫をかき給ふ今日はけふのありさま裝束御遊びがたきにたれたれ御かたはらにありて日のうちにはかゝる遊びあり夜に入ればからうじて休給ふかたはらにたれづそ

ひふしたるありさま繪に書き言葉書などくはへ給ふとあれば譬畫の正不正はとにかく畫日記にて夫に奥州を知らし給ひ亦鳥羽僧正が供米の糖俵なりしを與畫にるがきて供米の不法を訴へ或は法眼賢慶が弟子法師は師の後家の不行跡を訴へしも畫を以ての功なり和漢かゝる例枚擧すべからず貞永天福の頃後堀河院の御時似せ繪を御好ありける北面の下臈御隨身などの形を左京權太夫藤原信實朝臣を召てかゝせられけるとあり花山法皇の書寫上人を似貌にかゝせ給ひしも百濟の川成が童子の面を寫して其人を得高宗が夢中の人を畫て傳説を得たる漢の武帝が李夫人の畫姿を樂しみ將門の首を寫して實檢に備しも眞を寫すの妙によれり美女の姿畫にあこがれ傾城の畫に私語云じ和漢其類枚擧し難し王照君が賂の潤筆錢の吝嗇により身に禍をかもせしも眞を寫すの事より起り唐も倭も其頃は別に浮世繪師有て美女の容色を寫せしならず皆名人の畫師なるべし佛畫畫像美女遊女其時世の浮世容畫に至るまで委しく畫師の預るところなり其節古人の粉本をたつね古風質素を寫さねば畫に位なし下卑るなんと云ならば何の功あり益あらんや

近頃俳優の面を似せ畫き女兒の弄ものとなせしより一端の興畫大和畫師の永く汚名の基となる歎しきかな今俳優の似畫戲場の繁昌に隨て流行し浮世繪師の名是より汚れ愚俗の爲に廢せられしは彼黨の罪ならずや亦悔るとも六日の菖蒲十日の菊にて朽をしけれ浮世繪師と稱するは昔土佐氏の高弟に岩佐又兵衛土佐又兵衛と云し者故有て土佐流を破門せられ流寓して市中に住めり從來倭畫の妙手なれば雜人物の浮世姿を畫き是を鬻て給食に易て僅に業のたづきとす彼雪舟が兵亂を避て筑前の蘆屋の里に隠れ住み釜の畫を書きて居りしも此又兵衛も相似たりされば大津追分繪は又兵衛より書始しと世に云傳へたれども畫林の風意は異なるものなり浮世人物を畫くの妙手なれば浮世繪又兵衛と渾名せしより後世に浮世繪師の稱を殘せり(又兵衛が傳は別に藏せり追考)俗に是を浮世繪の濫觴と云ふは音曲演戲の浮説に起れり前にも云ふ如く浮世繪として別に畫法あるにあらず畫法委く唐畫に起り規則筆格數種の點法を建てしを山水草木の畫法は古今さまざまの説もつとも多し本朝に傳へしより畫道ひらけて妙手多く一派の筆意畫

體を分ち其家々に規則有り好む所の畫風を師として是を學ぶもの師の法則に従て不改累代是を畫く者は其畫奇なるも己家々に畫の拔あれども反して守らず諸流混同して心の欲するに從て自ら筆意畫體をなして自立すとも畫法正しければ一家をなすべし諸家の分流みなしかり浮世繪師のみ別に在らず倭繪の總名大和畫なれば浮世繪を大和畫師と云は勿論のことなり畫法を守る筆に自在をなす浮世繪師は大和畫のきばなり他の不及ものなり萬治寛文の頃波沙羅畫と呼ぶものありし或書に曰扇團扇のばさら繪にも是を稱して出ぬはなかりしとあるは其頃は流行の事を畫き板行にして墨ばかりにて摺り跡にて彩色計り飽相にしたるなるべし元和寛永の頃はざらと云ふはあぶれもの黨を結び男達をまなびきほひ組と云て市中ゆさんのさまたげをするものを云放言也波沙羅繪は末畫なり街畫と云て(筆意にも畫法にもかゝわらず達者にはか行がするやうに扇うちわの仕入物面白く圖を巧み腕ひて畫きてなりはひとするをばさら畫に比してなづけしなり當時は一廉の畫工是等を畫くことゝなりぬ)渡世の爲に畫法を不學繪馬祭

禮の燈籠繪見世物芝居の看板幟繪提灯の類子供の持遊ものなど書賣の類なり書法を辨へず規則に反して詩書縫笥の下書如く書き或は草双紙併優の似面の板行書を浮世書師に列してかく者あり是古の波沙羅書也今俗混同して皆浮世とのみ唱へ來りし故にばさらゑの名は言ものなく誤りて斯云にや板刻の繪は浮世繪師のみに限らず世に残し後世に傳へんに板刻の外他なし初學の者書道に入の助は尤益あり漢書にも諸家の書譜數百部あり笠翁の書傳などを始本朝の唐書師の筆跡も數本あり倭書に狩野流の諸名家法眼春卜橋守國殊に數百部を發兌す雪舟家に櫻井周山の畫則等其他諸家の書譜放擧するに不遑皆是虛名を貪るにあらず委しく書法規則を傳へる爲なり今浮世書を畫く者小説の繡像讀本或は遊女町の傾城或は流行美人繪を梓に彫刻精巧を盡し錦繪と號し板刻の錦繪は江戸を以て第一とし名産に嚮事となりしは太平の恩澤溢れ餘慶を蒙るの幸ならん爰を以考見れば畫所の各異るとまた樂しみに書くと渡世に畫くとの差別により思ひ誤り別に浮世繪師と俗に呼來るもの也

因に曰世に畫難防とて畫けるを見て是を難し嘲る者ありいと古より云事にや後白河院の御時繪難房と云者ありていかに能書たる畫にても必難を見出すもの也と古き書にも見得たり然れども物の錯誤は時々の器財宮服古實也能く博識に問ふべきものなり知らざるを問は法なり知て問ふは禮なり過て畫きたるはあらため難し俗書法を辨へず手足の長短畫者の意を思ひ誤り一扁の見躰にて嘲る黨あれども儘齟齬の意あるものなり是等は取にもたらず女兒を欺くの論なり必其者の依怙最負ありて云事多く彼所は不書爰に難あり彼所に失あり目が曲り口がいがめりなどと彼が他を寫せしなれば他に此難はもとより有りしと答ふれば夫は門弟が代筆せしならん或は贗物なるべしなど何處が善のか悪のか畫の視どころもしらぬ故に眞偽の賞鑑を差置いて強て最負のあやまちを覆ふ事浮世畫のうへにはいよく多し面體は師匠が畫き繁多に任せて弟子に其餘はかゝせしならん或は人物は師の畫きて草木樓臺は弟子に畫かせしなど愚俗書法をしらざるれば是を云ふもの十人に七人有り畫き難きを弟子

に譲り畫き易きを師の畫くは師より勝れる弟子ならではいかで是を任せつとむべき是等は繪難房にあらず最負を爭ふに無失を以て論するものなり文盲愚痴の僻事謂とて痴呆の呖りを盡すと云年にも恥ぢずして珊瑚珠もほぶづきも松露と思ふ愚鈍度疑問疑惑ふ阿房の半ものしりは秋の落葉を拂ふが如し論にも不及書法は和漢諸書に委しく出たれば會得すべし佩文齋書譜芥子園畫傳は其論たりしといへども見て益多く古き來船の本は人物の部一帙なく新渡の華本は全部す又翻刻の本もあり倭書を學ぶにも漢書の規則はすつべからず往古より畫家の論或は異説を傳ふこと世に多し畫人の業を賞せんとして事を畫に託して書法に反する事あり仙術を施して壁の畫の中に容を隠し龍紙をはなれて空に昇り雁抜出て天に飛ぶ寛平法皇の御所の障子の馬は草を喰ひに夜なく出しは金岡を賞するの説閑院の障子の雞をみて雞の蹴合たりしは成光が筆の妙を傳へん爲の話川成が九相の圖の惡嗅は飛彈の匠工と功の勝劣を比へんの譬なり元信が馬の額は左甚五郎を並云んとして川成匠工の話を附會し

北野の額の郭公の聲を出せしは和泉式部の歌を賞せんのみまきぞへなり金岡又は古法眼の筆捨松なんと呼ぶは松を賞するの謂松島の説は風景をほめんの意也大友宗麟が豊後の丹生島に狩野重信(法眼永徳源四郎宗秀之兄)と樹岩見山(大明の人)畫論は太平の勇氣を勵すの傳なり吳正翁か猫の畫は午時の當推量(猫を畫くに目を丸く書くは法にあらす糸の如くに畫くは法なり虎を畫くに半を以てす辟論なり禽獸虫魚寫眞をみて死したる状なりと云しは死せしを寫したらんと思ふは推量にて云ふ也みな同し)藏戴山松か圃牛の誤りを牛飼の難せし類は黄筌か飛鳥の論に類し夢中に圖を得たりと云傳ふるも神靈を見て狀を得たと云も疑説也畫難房が柚の繪に木屑を書落せしを見出したるは生類を畫くに食物を書添ざれば死畫となるなど書法に反するの異説にして畫を不學者理屈を云て難し謗の一僻なるのみ古今に討論は盡べからず却説ことあり古人の傳神妙手を施したるは筆意畫法墨色備り一微の物にも性に委しく目撃する所宛も生けるが如く人物のはたらき斯くもあらんと感興の趣

きをあらはすは其真に似たるが故なり爰を以て賞鑑の決着自然筆凝々代々眞正の眞偽を視るに書法の八活落墨設色筆意書法亂ざるを看るを旨とす臨摹し謄寫して書くものは書法筆法必亂る是等の説を聞誤りて板刻の書は浮世繪なり取にたらずなると半學貌して本畫師漢畫師など、直の知れぬ米に命を繋ぎ身分の職法も不知して閑暇の助に繪を學ぶとも書法の式の一端を不辨言曰事を知て業に疎ければ不知劣りなんと自誇韃韃繪を明畫と心得て唐晋漢宋元明を混同してわきまへず設色法は五彩を練る加減をも會得せずして市中の者を街畫といやしめ給食の人を素人畫と嘲る我愚を不願して人を誹謗は古人守一も書習子供の譬なりと是を笑へり己瘡を患て人の疾を喚きと云ふの類魚を喰て鮮喫きを嫌ふが如し當世畫工板行繪具の潤色を不假墨一篇の繡繡に粉本臨摹せずして四季雜體に人物生類の光景萌出る草靡臥樹木疎荒亦美麗を盡す臺閣學舎の物凄じき風雨霜雪戰場遊觀其狀を寫して實斯も有けんと風情を調へ假寫事書法を不辨して筆を下すことは難し唯墨色五彩を施ざるのみに

拙きか規則を不知業にのみ長たるものが畫たらんは趣不調大抵は可なりといへども履をへだて、痒を搔如く情を盡さず欠けたる事のみ多く見ゆ況や才無筆動かずして彼是雜交謄寫して是を畫くとも不具にして拙し墨一篇の板刻畫すら如斯謗罵者是を辨へよ近世畫を視に目を貴ばずして耳を貴ぶの人情と也業に勝れたる者をば拙きものはを妬猜さまへに嘲り非を穿鑿して云を譯知と稱し一犬の虛萬犬の實にひとしく是を傳へて同學輩風流の餘情を樂むは稀にして互に勝劣のみ競争いかに職敵の俗語有といふとも主親の敵の如く我同心の族にさへも確執あり我意に慕り依姑を以て業には疎く心誇りて唯高慢大言を吐き己が筆に不及は代筆を頼み自是を廣言し軍中の拾首して高名を争ひ威狀を望むにひとしく畫道の本意を失ひ古人の法に反す夫のみならず自誇に過ぎ古人の名を嗣己が拙きも不願古人の名を以て高名を求めんとて茶器名刀のごとく古きを尊び千辛萬苦の巧を経たりし故人に業を以て耻辱を譲り后世疑惑混同して己が名も發せず古人の名を汚す事其罪

甚し仕官の者累代家名姓氏を嗣相續するは其族先祖を失さずして末裔の勤る所也なんぞ血脉もなく縁家をあなぐりもとめ歴に英名を折こと古人不悅憤に不堪爪はじきして忌嫌惡むべし其愚には及ふべからざるものならんかゝる強情の黨多ければ其猛威に押倒されて愚俗是に惑ふ者多く近世（文化文政を云）畫本の類を梓行して市中に發兌し鬻ぎ板元も是に準的多く古格を失する者出來り價を貪り畫工作者をないがしろにして巧拙を不辨下職と共に扱ひ馬糞と便頭を不分黒きは犬糞と胡麻味噌を同す麝香は牛の糞なりと思ふされども金錢を以て昏じめ我意を震ふものから給食に易て業とする者は是に従ひ止動の間違も馬が聞かねば是非がないと此畜生と心に云ひ心に答て金銀の繩に繋る嗚呼衰へたり廢れる哉畫に業を樂む者はいかでかかる卑劣の黨に近寄らんや匾擔の愚に理論するは一杯の水を以て車薪の火を救ふが如く病犬に禮儀を教ふるに似たりいよゝ憤怒を増て却て患を得べし仇を以て恩に報の類なり愚翁も僅に此業を學びしに得もしらぬ畫人が筆に予が畫名をしるし彫

刻し世に行ふもの數十部あり夫のみならず同名の者諸國に在てなりはいとする事を朋友より告來る事數度浪花京師の書肆より發市の小冊にも偽名あり呆るゝ事や、久し行程隔りし國へは扱人板元の購入を欺き賣たる物にや東都の書賣は畫料を貪り書かけたる畫の半より他へあつらへ偽物を拵へ一應斷わらでもなんの祟りか有べきと多寡を括り慾に薄情を以て疎漏の亂暴を振舞ものならん亦繪行脚の名を同するものは僕よりも業は勝れたるものなりとぞ同名姓氏開合せるものか是等は貪惜せぬ事なれども我食を喰つて他の名を弘むるも一僻のいかもの好ならんか「思ひ入る心の奥の隠家はよしや吉野の山ならずとも」といふ古歌にもとづき只清貧を樂むには不如と今は其業を廢して世の流行はしらすなりにき日本畫の愚考を朋友の需に應じ誌付るの序でよしなき事を書添しになん

無名翁誌